

－ 博士論文 －

Bernard Blochの日本語教育への貢献

金城学院大学大学院 文学研究科
国文学専攻 池田菜採子



金城学院大学

Bernard Bloch の日本語教育への貢献

【目次】

第1章. 本研究の概要

第1節. 本研究の目的と意義	1
第2節. 本研究の方法	1

第2章. Bernard Bloch の *Spoken Japanese* に関する研究：その成立の時代背景

第1節. はじめに	3
第2節. 日本における Bloch の引用	3
第1項. Bloch (1946a) からの引用	3
第2項. Bloch (1946b) からの引用	4
第3項. Bloch (1946c) からの引用	6
第4項. Bloch (1950) からの引用	6
第5項. <i>Spoken Japanese</i> からの引用	7
第3節. <i>Spoken Japanese</i> の概要	8
第4節. Spoken Language Series 成立の背景	18
第5節. Spoken Language Series の構成の類似性	24
第6節. まとめ	38

第3章. Bernard Bloch の *Spoken Japanese* 所収の練習問題

第1節. はじめに	39
第2節. <i>Spoken Japanese</i> 前後の練習方法	39
第3節. ASTP 教授法の練習問題	44
第1項. Bloomfield の <i>Spoken Dutch</i>	45
第2項. Bloch の <i>Spoken Japanese</i>	48
第3項. <i>Beginning Japanese</i> の練習問題	58
第4節. 考察	60
第5節. まとめ	62

第4章. Bernard Bloch の *Spoken Japanese* 付属レコードに関する研究

第1節. はじめに	63
第2節. <i>Spoken Japanese</i> のカセットテープの概要	63
第3節. 日本語吹込者の音声的特徴	75
第4節. インフォーマント	79
第5節. 戦前・戦中の語学教育と音声教材 — SJの周辺 —	81
第6節. おわりに	90

第5章. Bernard Bloch が聞いた日本語：母音の無声化と脱落に焦点をあてて

第1節. はじめに	91
-----------------	----

第2節. 音声表記について	91
第3節. 研究の概要	91
第4節. 結果	92
第5節. 先行研究との比較	92
第1項. 松崎・河野(2010)	92
第2項. 川上夔(1977)	95
第6節. 考察	97
第7節. <i>Spoken Japanese</i> の記述	101
第8節. まとめ	101
第6章. Bernard Bloch の活用論の成立：影響を与えた先駆者たち	
第1節. はじめに	102
第2節. Bloch の動詞の活用論	102
第1項. Bloch (1946a) の動詞分析	102
第2項. 先行研究 – Shibatani Masayoshi –	105
第3節. Bloch の活用論への影響	109
第1項. 馬場辰猪の活用論	110
第2項. 山田孝雄の活用論	112
第3項. Basil Hall Chamberlain の活用論	113
第4項. Joseph Koshimi Yamagiwa の活用論	117
第5項. Peter Marie Suski の活用論	119
第6項. Harold Gould Henderson の活用論	124
第4節. まとめ	129
第7章. 妖怪「だ」の研究：何もないのか、ゼロがあるのか	
第1節. はじめに	130
第2節. 文法諸家の「だ」の記述	131
第1項. 19世紀の日本語教科書の記述	131
第2項. 山田孝雄	133
第3項. 松下大三郎	137
第4項. 橋本進吉	138
第5項. 佐久間鼎	141
第6項. 三尾砂	144
第7項. 時枝誠記	147
第3節. Bloch 以降の「だ」の記述	151
第1項. Bernard Bloch	151
第2項. Eleanor Harz Jorden	157
第4節. 考察	161
第8章. 結語	167

図表一覧

第2章

- 図2-1. *Spoken Japanese* の Armed Forces Edition 版
- 図2-2. *Spoken Chinese* と *Spoken Dutch* の Armed Forces Edition 版
- 図2-3. *Spoken Japanese* と *Spoken Russian* の Public Edition 版
- 表2-1. War Department Education Manual の豊富な教材
- 表2-2. Spoken Language Series のタイトルと著者
- 表2-3. Spoken Language Series 全体の構成
- 表2-4. Spoken Language Series Unit 2 の構成
- 表2-5. Unit 1 Basic Sentences の比較
- 表2-6. 導入順序の比較
- 表2-7. Naganuma (1958a) と SJ、Basic Sentences の比較
- 表2-8. Naganuma (1958a) と SJ、Basic Sentences 初出52文で使われた語の比較

第3章

- 表3-1. *Spoken Japanese* 収録の練習問題一覧表

第5章

- 表5-1. 【母音の脱落】
- 表5-2. 【母音の無声化】
- 表5-3. 【母音の脱落】：先行子音による分類
- 表5-4. 【母音の無声化】：先行子音による分類
- 表5-5. 【母音の脱落】：前後の子音の継続性
- 表5-6. 【母音の無声化】：前後の子音の継続性

第6章

- 表6-1. Inflectional categories of Classical Japanese
- 表6-2. Inflectional categories of Modern Japanese

第7章

- 表7-1. 妖怪「だ」の変遷

秋桜と一生に感謝をこめて

Bernard Bloch の日本語教育への貢献

第1章. 本研究の概要

第1節. 本研究の目的と意義

言語学者Bernard Blochは、太平洋戦争中のアメリカで、日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行い、数々の優れた日本語論及び*Spoken Japanese*（以下SJと略す）という日本語教科書を発表した。そうした諸論文の一部が、後の言語学である生成文法の中で、また国語学の立場からは活用論という観点で取り上げられることはあった。しかし、日本語教育という観点からは、彼の日本語研究が見直されることはこれまで一度もなかった。したがって、日本語教育に従事する者の中で、太平洋戦争後の日本語教育にBlochの日本語研究が多大な影響を与えていることは、ほとんど知られていない。彼の日本語教育への功績は、評価されることがなく今日に至っている。Blochが現代の日本語教育にどのような貢献をしたかを明らかにすることに、本論文の意義は認められるのである。

第2節. 本研究の方法

本研究は8章から成る。各章において、それぞれ次のような観点からの考察を行い、その過程で、Blochの日本語教育への貢献を浮き彫りにしていきたい。

まず、第2章から第4章は、日本語教科書SJを考察する。

第2章では、Blochが作成したSJが、どのような経緯で作られたか詳しく見ていく。SJは、実は単独に企画された教科書ではない。戦時中、アメリカは軍人教育の一環として、*Education Manual*という膨大な教材を作成した。この教材は、文学や数学など幅広い分野を網羅するものであった。このうち、語学教材は言語学者Leonard Bloomfieldを中心とするアメリカの構造主義言語学者集団によって作られた。SJはその中の一つである。

第3章では、SJに収録された練習問題を考察する。SJは、軍人が話し言葉を習得することを目的とし、また独学でも学べるように工夫された教科書であったため、練習問題が数多く収録された。現在でこそ日本語授業の中で話す練習をさせることはごく普通のことである。しかし、SJ以前の日本語教科書には練習問題はほとんど見当たらない。その意味でSJは画期的な教科書であった。Blochが作った練習問題はどのようなものであったのか見ていきたい。

第4章では、SJ付属のレコードについて考察する。SJには、もともと付属レコードがついていたのだが、これは2016年10月現在、国内でその所在を確認することはできない。1972年に出版されたSJの復刻版には付属カセットテープがついていた。このカセットテープが全巻揃っているのは、CiNii及びNDLサーチで調べた限り、国内では国際日本文化研究センター（京都市）だけである。このカセットテープをもとに、レコードにはどのような音声収録されているのか、なぜSJのレコードは作られたのかを検討する。

続いて、第5章から第7章は、Blochの日本語論を取り上げる。

第5章では、Bloch(1950)をもとに、母音の無声化と脱落に関する研究を行う。Bloch(1950)は、「進む」を[sUsumu]、「捨てる」を[s·teru]と表記し、前者の「す」は母音が無声化したもの、

後者の「す」は母音が脱落したものとして書き分けている。Blochにはなぜそのように聞こえるのか、そこには何か規則性があるのかを探っていきたい。第4章でもレコードに収録された音声を考察したが、日本語の全ての音素と異音を書き出したBlochの業績は、ただその一点のみをもってしても十分に高く評価されるべきである。

第6章では、動詞の活用論を考察する。Bloch (1946a) が記述した動詞の活用論は、動詞を母音動詞と子音動詞に分けた点において斬新なものだった。彼の活用論は、その後の日本語教育の基盤となったと言っても過言ではない。第6章では、戦時下のアメリカで出版された日本語研究を検証し、当時のアメリカでの日本語教育についてその一端を明らかにする。

第7章では、繫辞（コピュラ）の「だ」を考察する。現在の日本語教育では、日本語の述語は動詞、形容詞、「名詞＋だ」の3本立てであると教えるのが一般的である。しかし、はじめから3本立てであったわけではない。動詞、形容詞が、以前から述語として安定的地位を保っていたことに比べると、「名詞＋だ」はなかなか述語としての地位を確立することができなかった。3本立てになったのは、Bloch以降である。第7章では「だ」の解釈の変遷を、文法諸家の見解をもとに考察する。

第2章. Bernard Bloch の *Spoken Japanese* に関する研究： その成立の時代的背景

第1節. はじめに

太平洋戦争が開始する1941年の頃、アメリカは外国語教育に関心を持ち始めた。それ以前のアメリカでは、フランス語、ドイツ語などの教育は多少行われていたのだが、語学習得の目的はあくまでも「文学や文化の鑑賞¹」であって、話し言葉を習得するための外国語教育は行われていなかった。まして、中国語や日本語は「奇妙きてれつな記号の集合にすぎ²」ないという程度の認識でしかなかった。しかし、戦争の遂行が、話し言葉習得の必要性を生み出したのである。

当時のアメリカは、構造言語学が興り、それが発展していく最中である。アメリカの外国語教育への関心に呼応して、構造言語学者たちが外国語教育に協力する事業を始めた。このとき、日本語の教科書SJを作成したのがBlochである。SJは対日戦略の一つとして生み出されたのである。同様の経緯で、*Spoken Chinese*、*Spoken Dutch*など多数の外国語教科書が作成された。こうして作成された外国語教科書シリーズのことを、本研究では以下、*Spoken Language Series*と呼ぶこととする。この教科書シリーズはアメリカの軍人教育のために使われた。

第2章の目的は、SJについてその概要を紹介することではなく、SJが成立した時代的背景を詳しく述べることにある。

第2節. 日本におけるBlochの引用

まず、研究に先立って、日本でBlochの日本語論及びSJがどのように引用され、研究されてきたか、主要な論文を簡単に整理しておきたい。

Blochの日本語論のうち、*Readings in Linguistics I* に掲載されているものは次の二つである。

Studies in Colloquial Japanese II: Syntax. (1946) (以下、Bloch (1946b) と表記)

Studies in Colloquial Japanese IV: Phonemics. (1950) (以下、Bloch (1950))

このほかに次の二つの日本語論がある。

Studies in Colloquial Japanese: I. Inflection. (1946) (以下、Bloch (1946a))

Studies in Colloquial Japanese: III. Derivation of Inflected Words. (1946) (以下、Bloch (1946c))

第1項. Bloch (1946a) からの引用

Bloch (1946a) は、日本語の動詞、形容詞、繫辞（コピュラ）の活用を構造主義の方法に則って分析した論文である。このうち、動詞の活用は、これまで何度か研究の対象となってきた。

Blochの活用論を日本で最初に紹介した人物は、英語学者の太田（1956）であると言われている。太田が紹介したBlochの活用を整理し、それを踏まえた上で新式活用表を提案したのが三上（1972）である。

(2-2-1)

『英語教育』（開隆堂）に、太田朗さんが、構造言語学者B.Blochの活用表を紹介しておられる。

1 Darian (1972: 84-85) の‘an appreciation of literature and culture’を筆者が訳した。

2 ロイ・A・ミラー著 林栄一監訳 (1975), p.xiii。

Blochは、変格動詞以外のすべての動詞を母音動詞（例、食ベル）と子音動詞（例、待ツ）との二種類に分ける。そして変化形を次のように並べて整理する。〔中略〕太田さんはBlochの方法を推賞した後で、「このような文法は日本人でも考えた人があるそうであるが、私は知らない」と書き添えておられる。この次には、日本文には主述関係が存在しないことを、アメリカの学者から教わるようになるだろう。

三上（1972:23-24）

Blochにも三上にも師事した経歴を持つ寺村もまた、Blochの活用をもとに自身も新しい活用表を提案した。

(2-2-2)

ブロックの活用表は、戦時下の悪条件の中で、しかも短期間に作り上げられたものとして驚嘆に値する。当時、そしてその後も数多くの日本語学者から出されたどの活用表案に比べても、欠点の少ない見事なまとめ方だと思う。戦後アメリカでの日本語研究、日本語教育に指導的役割を果たしてきたS.マーティン、E.H.ジョーデンなども、活用の体系づけ、活用形の名付けについては、基本的には上のブロックの考えを受け継いでいる。

寺村（1984:36-37）

三上（1970:169）は、「語幹を五、六個の活用形の最大公約数と見なすと、強変化四段活用の動詞の語幹が子音に終わっていることは、ローマ字を見たら誰にも気がつくことである」と述べた。しかし、そのことは誰もが簡単に気がつくことではなかったようである。

「〔筆者注: 動詞をモルフェムにまで分解する〕技法をもっとも早く、しかも組織的に述べたのは、たぶんB.Bloch('46)であろう。確かめてないが、きっとそうだろう」と三上（1970:170）は述べた。池田（2012）は、この三上の記述が確かであるかどうか確認する研究を行った。そのことについては第6章で詳しく述べる。

第2項. Bloch (1946b) からの引用

Bloch（1946b）は構文論である。1946年に発表された後も、その存在は日本国内で取り沙汰されることは長らくなかったが、ようやく佐藤（1966）がBloch（1946b）を取り上げた。

(2-2-3)

Blochの日本語に関する論文のうち、ここで問題にするのはStudies in colloquial Japanese II: Syntaxである。この論文が発表されたのは1946年で、発表以来すでに二十年を経過してゐる。この論文はわが国でもよく知られてをり³、アメリカの言語学もこの二十年間に大きな発展を遂げてゐるのであるから、今更この論文を問題にするのは時代遅れの観があるかと思ふ。しかし、この論文はMartin Joosの編集したReadings in Linguisticsの中にも収められ、構造言語学の発展過程において重要な意義をもつ文献と認められてゐる。かつ、この論文集の中で、編者は、

3 佐藤はよく知られていると書いているが、実際にはほとんど知られていなかったと思われるのだが、詳細はわからない。

これは幾世代にもわたって繰り返し研究されるべきものと思はれる—その世代といふのは、今や次第に短くなりつつあるやうだといふ事実は認めるにしても。

と述べてゐる。編者のこのことばに勇氣を得てこの論文をあへて採り上げようとするのであるが、しかもここで問題にするのは、前から述べてきたところでも明らかなやうに、この論文の所説が妥当かどうかといふことよりも、その基本的立場が正しいかどうか、また、考察の手順が正しいかどうかといふことなのである。構造言語学の立場に立つて日本語を考察した場合に、どのやうな問題が残るかといふことを考へてみようと思ふのである。

佐藤⁴ (1966:3)

Blochの門下生だったMillerは、戦後の日本でBlochの論文がずっと無視され続けている現実を嘆いていたが、佐藤 (1966) の論文が発表されたことを喜び、大きな期待を込めて次のように書いた。

(2-2-4)

注目すべき例外は、佐藤喜代治「日本文法の研究法」(国語学、昭和14、9月)によるブロックの日本語統語論に関する検討であり、ブロックの日本語文構造の分析を熟読吟味の上これを批評してある。もし存命中に日本の学者の間からこうした学問上の注目を受けていたら、おそらくブロックは再び日本語研究に取り掛ける勇氣を得ていたと思う。皮肉にも、佐藤教授の論文は、1965年11月に広島大学で行った公開講演の草稿に基づいており、あるいは、ブロック逝去と同日に、佐藤教授の講演により、おそまきながらもブロックの研究が日本学会の注目するところとなったかも知れない。(ブロックは1965年11月廿六日コネチカット州ニューヘイブンで他界した。)

ミラー著 小黒訳 (1974b:57-58)

しかしMillerの期待も空しく、佐藤 (1966) が発表されてもBlochの研究が学界から注目されることはなかった。なぜか。

寺村 (1975:193) は1970年頃の文法研究について、「学校文法では相変わらず「文は主語と述語から成る」式の説明が広く行われ、そしてそれはまた一般の常識を形成しており、また、文の分解といえはに橋本文法の「文節論」による説明が圧倒的である」と述べている。佐藤 (1966) も橋本文法の立場からBloch (1946b) を考察した。佐藤 (1966) にとって、Bloch (1946b) は受け入れがたいものであったのだろう。

1975年になると、Millerの*Bernard Bloch on Japanese*の日本語訳『ブロック日本語論考』が出版された。このあとがきで、寺村はBlochの構文論を次のように評した。

(2-2-5)

幾つかの欠陥、根本的な限界、また細部についての誤りにもかかわらず、ブロックの構文論全体としての価値は高く評価されるべきものであることは間違いないと思われる。それも単に「歴史的な」価値にそれは決してとどまらない。戦時下の限られた資料を基にこれだけ包括的

4 表記は原文どおり。

な記述を完成したことは驚嘆すべきことであるし、末尾に示したような実際の長文テキストで自らの構造記述を検証しているところは、わが国文法書にもあまり類を見ないものである。更に、何よりもそのIC分析の根底をなしていると考えられる言語の構造についての仮説、すなわち、文はたんなる形態素の線的な連なりでなく層をなしており、その各層において幾つかの形態素が構成要素として互いに関係しているという考え方は重要であり、徹底したいいわゆる表層構造の観察によってその仮説を実際に肉付けしたブロックの仕事は、今後どのような方向に言語の研究が進むにせよ、一つの大きな道標であり続けるであろう。

寺村 (1975:199)

しかし、この後もBloch (1946b) が表舞台で議論されることはなく、ほとんど放置された状態が続いていった。Bloch (1946b) に再び光が当てられたのはやっと2010年のことである。これは藤原 (2010) が初めて日本語教育という観点からBloch (1946b) を考察しようという取り組みであった。それは繫辞 (コピュラ)「の」と助詞の「の」について、記述文法と教育文法の両側面から取り上げたものであった。このことについては第7章で考察する。

第3項. Bloch (1946c) からの引用

Bloch (1946c) から引用が見られる研究は、現在のところ見当たらない。

第4項. Bloch (1950) からの引用

服部 (1960) は、Bloch (1950) から次のように引用している。

(2-2-6)

ブロック博士の「東京土着の教育ある人々の言葉」のアクセントに関する説によると〔中略〕「日本語における観察し得る高さ変動を完全に記述するためには、四つの音素的に異なる水準が必要であり、それで十分である」として、それらの「高さ音素」(pitch phoneme)を表わす記号を次のようにきめている。

/1/ 最高の高さ /2/ 高い中ほどの高さ /3/ 低い中ほどの高さ /4/ 最低の高さ

そして、[kimonoŋayoŋoreta] という phraseが、[ki]が/4/に、[monoŋayoŋore]が/3/に、[ta]が/4/に属し、[aoi]という phraseは、[a]が/4/、[o]が/2/、[i]が/4/に属する、という。

服部 (1960:255-256)

文化庁 (1971:37) は、1970年に『日本語教育指導参考書：音声と音声教育』を作成し、その中でBloch (1950) が示した日本語の全ての異音を表で引用した。また、Blochが示した音素と異音の関係を同前書 (1971:43-52) で検討した。これが現代の日本語教育における音声教育の基礎となっているにも関わらず、Blochの業績は全く認められていないのが実情である。

また、池田 (2014a) は、Bloch (1950) が示した日本語の音声表記をもとに、母音の無声化と脱落に関する研究を行った。これについては第5章で詳しく述べる。

以上が、Blochの日本語論から引用が見られる研究である。Bloch研究は、その業績の大きさに比してまだまだ不十分というのが実情である。

次に、SJに関する研究を挙げてみようと思う。

第5項. *Spoken Japanese* からの引用

関・平高（1997）は、SJの存在については言及しているものの、それが具体的にどのような教科書であったのかということまでは述べていない。

(2-2-7)

〔中略〕 イェール大学でも1943年から大規模な日本語訓練プログラムが設けられた。その時の担当主任はB.ブロック（B. Bloch）で、構造言語学に基づくすぐれた日本語研究論文をつぎつぎに発表し、日本語学習書『*Spoken Japanese*』を編集した。その補佐役に、『*Beginning Japanese*』を著し、戦後の日本語教育界でも「ジョーデン方式」として有名になったジョーデン（E.Jorden）がいたことはよく知られるところである。

関・平高（1997:98）

同書が *Beginning Japanese* のことを「オーディオ・リンガル・アプローチに基づく初めての日本語初級教材で、日本国内の日本語教育にも強い影響を与えた」（関・平高1997:202）と評価していることに比べると、SJの扱いはあまりにも少ない。

高見澤（2005）は次のように述べている。

(2-2-8)

ジョーデンが関与した最初の日本語教育は、1944年ごろの米陸軍特殊訓練計画（ASTP⁵）であったと思われる。そこで使われていたテキストは、当初、戦前に日本で刊行された長沼直兄の『標準日本語読本』であったが、この「漢字仮名混じり文」からなる読本をどのように教えていたかは、明らかではない。ASTPは、本来口頭言語能力の育成を目指していたので、遅ればせながら会話用テキストとして開発されたのが、1945年に米国戦争省から出版されたブロックとジョーデンの共著による *Spoken Japanese I & II* である。

高見澤（2005:7）

高見澤（2005:8）は、また次のようにも述べている。

(2-2-9)

〔中略〕 *Spoken Japanese* は、音声教育を重視した会話用テキストで、SECTION Aで導入を行い、SECTION Bで、その用法練習を行い、SECTION Cで、さらにその用法の範囲を拡大する方法が採られていた。導入のためのSECTION AのBasic Sentencesの教え方は、Audio-Lingual Approachが開発される前の1940年代中ごろの教授法としてはかなり特徴的であった。

まず、①各文章別に発音練習を行うが、これは学習者が「受け入れ可能な正確さ」で話せるようになるまで続けられるが、後のAudio-Lingual Approachのような「母語話者並みの正確さ」

5 ASTP=Army Specialized Training Program。アメリカが日本の戦略上の機密を入手するために始めた日本語研究と、軍人向けに行った日本語教育プログラムのこと。

を求めるものではなかった。それに続き、②発音練習を済ませた文章の内容についての質問を行い、その理解を確認する方法が採られていた。

高見澤（2005:8）

高見澤（2006:83-84）では、SJのガイド⁶のために書かれたマニュアルからの引用も見られる。

(2-2-10)

戦後の1945年12月に戦争省が刊行した*Guide's Manual for Spoken Japanese*に収められている「陸軍特殊訓練計画のテキスト使用の基本方針」では、日系米人の訓練担当官の役割や教授法の原則などが日本語で説明されている。ここからも、当時の陸軍の日本語教授法、いわゆるアーミー・メソッド（Army Method）の一端が窺えると思う。

＜*Guide's Manual for Spoken Japanese*の序文からの引用＞（原文は、縦書き、表記は旧仮名および旧漢字使用であったが、本稿では、横書きとし、新仮名および新漢字表記などに適宜改めた。文構成は原文のままとした。）

＜訓練担当官への指示 1 — 発音矯正の原則＞

これらの米国人達（筆者注：＝語学兵）は日本語で日常の談話が出来るようになるために日本語の会話の勉強を始めようとしているのであります。そのためには貴方に助力していただく必要があります。

貴方の役目は日本語を発音して模範音を示し、彼等にそれを聴き取らせて同じように言わせる事です。彼等の発音には深く注意を払って聞き、間違った発音をした場合には根気よく、又、気持ちよく、何度でも訂正して上げて下さい。

ある言葉を不正確に又、不明瞭に発音した場合はこれを正しく日本語らしく発音する事が出来るようになるまでは何度でも繰り返して言わせて下さい。ここで注意すべき事は幾回、繰り返して言わせるにしても先ず貴方が模範音を示し、その後で学生に言わせるようにしなければなりません。

貴方に何を言っているか分るだけでなく日本人の誰が聞いても分るようになるまで、繰り返して言わせてください。

高見澤（2006:83-84）

以上、SJへの言及が見られる研究を紹介した。このようにSJの研究では、SJの存在、SJがどう使われていたかということへの言及は見られるものの、SJ本文を詳しく考察した研究はいまだ行われていない。

ここまでBlochの日本語論及びSJの先行研究を検討してきた。次に、SJが成立した時代的背景を詳しく見ていこうと思う。

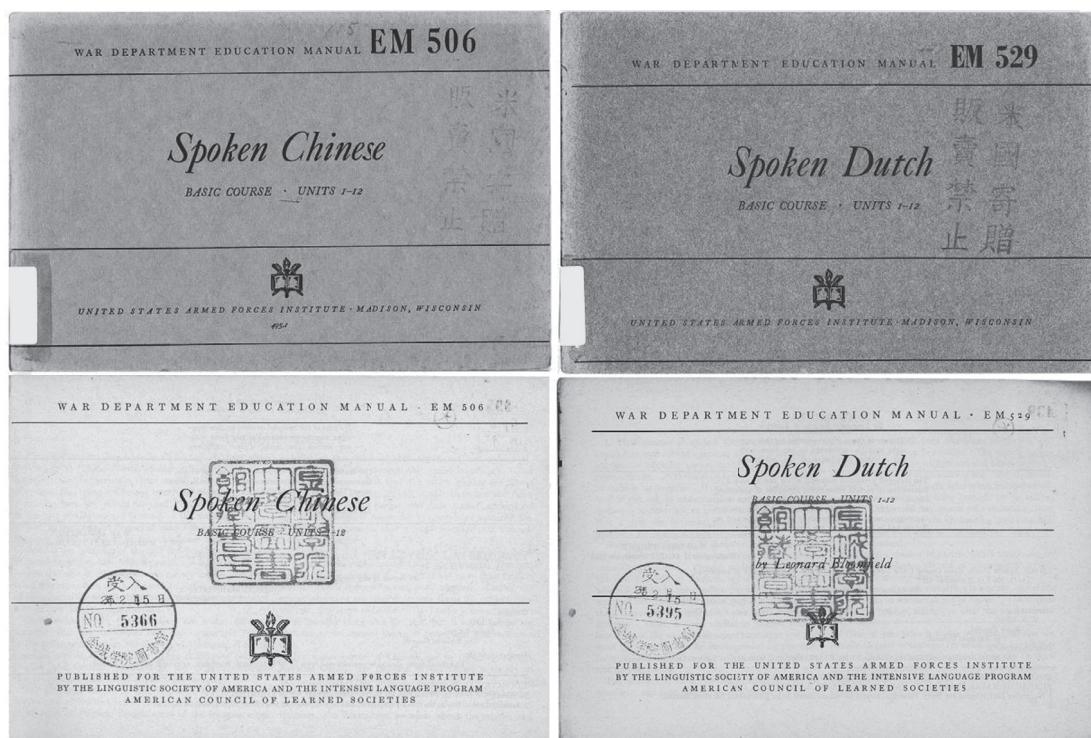
第3節. *Spoken Japanese*の概要

SJは、これまでに少なくとも3回出版されていることがわかっている。

6 SJはネイティブスピーカーの存在を前提として作られた教科書である。授業では、ネイティブスピーカーがガイドとして、正しい発音の手本を示した。*Guide's Manual for Spoken Japanese*はガイドのために作られたマニュアルである。



【図2-1⁷：Spoken JapaneseのArmed Forces Edition版、上の段は表紙、下の段は扉】



【図2-2⁸：Spoken ChineseとSpoken DutchのArmed Forces Edition版、上の段は表紙、下の段は扉】

- 7 図2-1のSJは、京都産業大学図書館に所蔵されている。著作権はLinguistic Society of Americaが保有している。画像はLinguistic Society of AmericaのExecutive DirectorであるAlyson Reed氏の許可を得て、池田（2014b）に掲載したものである。
- 8 図2-2の2冊は金城学院大学図書館に所蔵されている。これらの著作権はLinguistic Society of Americaが保有している。画像はLinguistic Society of AmericaのExecutive DirectorであるAlyson Reed氏の許可を得て、池田（2014b）に掲載したものである。

図2-1はSJのArmed Forces Editionである。これは戦時中、アメリカの軍人に日本語の口語を教える目的で開発された教科書である。BlochとEleanor Harz Jordenの共著で米国戦争省から出版された。著者の下に‘with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others’と書かれているが、彼らはインフォーマントである。Unit1-12の方は‘Mikiso Hane’、Unit13-30の方は‘Kikiso Hane’となっているが、正しくは‘Mikiso Hane’である。この版には教科書が2冊と、蓄音機用のレコードが付いていた。

図2-1のSJには、それぞれ右肩にEM 561, EM 562という数字が書かれているが、このEMとはWar Department Education Manualの略である。EMは、‘The material presented herewith is for use as an aid in instruction in certain educational activities of the armed forces’ (Bloch&Jorden 1945a: ii) (拙訳:この教材は軍隊の教育活動の助けとして使われるためのものである)と説明されているように、軍人の教育のためにアメリカ戦争省が用意した教材シリーズである。このEMには通し番号が付してあり、例えば図2-2のように、*Spoken Chinese*のUnit1-12はEM506、*Spoken Dutch*のUnit1-12はEM529といった具合である。後に詳しく述べるが、この*Spoken Dutch*はLeonard Bloomfieldによって書かれたものである。また、第2章第2節で高見澤が引用した、SJのガイドのためのマニュアル*Guide’s Manual for Spoken Japanese*はEM 563である。そのほか、*Spoken French*のUnit1-12がEM500、Unit13-30がEM501、*Spoken Spanish*のUnit1-12がEM509、*Spoken Portuguese*のUnit1-12がEM512であったことがわかっている。

実は、EMは語学教材ばかりではない。表2-1は金城学院大学図書館、南山大学図書館に所蔵されているEMの一部である。100番台～900番台までであるようだが、300番台は両図書館では見つからなかった。500番台が語学教材だったようである。このようにEMは語学のほか、シェイクスピアなどの文学、数学、歴史、また農場経営に至るまで広い分野をくまなくカバーしていた。

【表2-1:War Department Education Manualの豊富な教材】

EM 125	<i>Principles and Types of Speech</i>
EM 130	<i>Shakespeare Twenty-Three Plays and the Sonnets</i>
EM 219	<i>World History</i>
EM 230	<i>Economic Geography</i>
EM 478	<i>Principles of Abnormal Psychology</i>
EM 500, 501	<i>Spoken French</i>
EM 506	<i>Spoken Chinese</i>
EM 509	<i>Spoken Spanish</i>
EM 512	<i>Spoken Portuguese</i>
EM 529	<i>Spoken Dutch</i>
EM 610	<i>Art Through the Ages</i>
EM 728	<i>Essentials of Business Arithmetic</i>
EM 754	<i>Principles of Business Law</i>
EM 767, 768	<i>Accounting Principles</i>
EM 800	<i>What is Farming?</i>
EM 826	<i>Crops</i>
EM 972	<i>Mathematics Essential to Electricity and Radio (with answers)</i>

EMに関する先行研究は見当たらない。何冊ぐらいのEMがあったのか今後研究してみたい。
ここまではEMとSJのArmed Forces Edition版の話である。

SJのPublic Edition版は1945年にHenry Holt and Companyから出版された。これはEMの語学教材を取り出し、Holt Spoken Language Seriesとして、装い新たに民間人向けに出版されたものである。図2-3はPublic Edition版のSJと*Spoken Russian*である。この*Spoken Russian*のBook TwoもまたLeonard Bloomfieldによって書かれた。

Public Edition版には、教科書が2冊と蓄音機用のレコード、それにHolt社が編集したと思われる*Spoken Japanese : A Manual and Key for Your Spoken Language Course*という薄い冊子が付いていた。



【図2-3⁹：*Spoken Japanese*と*Spoken Russian*のPublic Edition版、上の段は表紙、下の段は扉】

SJのPublic Edition版は、Armed Forces Edition版の誤植が修正され、General ForewordとAuthor's Prefaceが付け加えられたが、そのほかの部分において両者の内容に大きな違いは見られない。

また、1972年にはPublic Edition版の復刻版がSpoken Language Servicesから出版された。この版には、教科書が2冊とカセットテープが付属していた。

SJが作られた時代背景について、SJのGeneral Forewordには次のように書かれている。

(2-3-1)

Early in 1942, within a month of Pearl Harbor, the Joint Army and Navy Committee on Welfare and

9 図2-3の2冊は、南山大学図書館に所蔵されている。著作権はいずれもLinguistic Society of Americaが保有している。画像はLinguistic Society of AmericaのExecutive DirectorであるAlyson Reed氏の許可を得て、池田(2014b)に掲載したものである。

Recreation began consideration of the means whereby large numbers of troop might be instructed in the colloquial forms of the numerous languages spoken in the areas in which they were likely to be employed. [...] Consequently, the first necessity was a program of basic implementation which would provide materials, as nearly uniform throughout the various idioms as practicable, for elementary teaching of spoken language to Americans without special linguistic training or, indeed, aptitude. [...] Prosecution of the war created the need for these materials to teach spoken language.

Bloch&Jorden (1945c: II -A-B¹⁰)

(拙訳) 1942年初頭、真珠湾が攻撃を受けてからほどなく、陸海軍合同委員会は、多くの兵士が雇われることになる地域で話されている数多くの言語の話し言葉で彼等に命令する手段を考え始めた。その結果、特別な訓練も適性もないアメリカ人に話し言葉の初歩が教育可能になるように、さまざまな語法をほぼ同じような構成で教える教材を提供する、基礎的な実行プログラムが第一に求められた。[中略] 戦争の遂行は話し言葉を教える教材の必要性を産み出したのである。

SJの基本的信念として、BlochはAuthor's Prefaceの中で次のように述べている。ネイティブスピーカーの発音を忠実に模倣し、Basic Sentencesを暗記するまで何度も繰り返し発音する練習に重きが置かれた。

(2-3-2)

[...] principles, briefly stated, are the following.

- ① The study of the language itself – that is, of speech – should precede the study of orthography.
- ② The student learns best by imitating the utterances of a native speaker.
- ③ The student should memorize a stock of typical sentences in the foreign language and practice their use before he studies the grammar.
- ④ From the very first day of the course, the student should be encouraged to use the foreign language in actual conversation.

Bloch&Jorden (1945c: ii -E)

(拙訳) この本の信念を簡単に述べると、次のようなことである。

- ① 言語を書く学習よりも、話す学習が優先されるべきである。
- ② 学習者はネイティブスピーカーの発話を真似することが、最もよい学習法である。
- ③ 学習者は外国語の典型的な文のストックを暗記し、文法を勉強する前に、文そのものを練習するべきである。
- ④ コースの初期段階から、学習者は実際の会話で外国語を使うようにするべきである。

SJは、Book OneにPart One, Part Twoが収録され、Book TwoにPart Three, Part Four, Part Fiveが収録されている。各Partは6ユニットから成り、全体で30ユニットから構成されている。以下にBook OneとBook Twoの目次を引用する。

10 この部分はGeneral Forewordからの引用であり、Bloch自身が書いたというわけではない。誰が書いたかは不明である。

(2-3-3)

<Book One>

【Part One】

General Foreword

Author's Preface

Introduction

Unit 1. Getting Around

Unit 2. Meeting People

Unit 3. Trades and Occupations

Unit 4. About The House

Unit 5. The Weather

Unit 6. Review

【Part Two】

Unit 7. Counting

Unit 8. Asking Directions

Unit 9. More Numbers

Unit 10. The Family

Unit 11. Getting Dressed

Unit 12. Review

<Book Two>

【Part Three】

Unit 13. The Theater

Unit 14. The Hospital

Unit 15. The Post Office

Unit 16. Sport

Unit 17. The Bank

Unit 18. Review

【Part Four】

Unit 19. Shopping

Unit 20. Office Work

Unit 21. Farming

Unit 22. Marriage

Unit 23. In Town

Unit 24. Review

【Part Five】

Unit 25. Building a House

Unit 26. Military

Unit 27. Geography

Unit 28. Government

Unit 29. Japanese Customs

Unit 30. Review

Appendix I . Summary of Inflected Forms

Appendix II . Note on The Spelling of Japanese

English-Japanese Glossary

Japanese-English Glossary

Index to The Notes

Bloch&Jorden (1945c, 1946:目次)

このようにSJは、「職業」、「天気」、「家族」の話題のほか、「映画館で」、「病院で」、「郵便局で」というように、いずれも日常会話が想定される場面を考慮して構成されている。同時代にアメ

リカで使われていたNaganuma (1958a) がLesson. 43で「リンカーン」を、Lesson. 50で「馬泥棒の話」を取り上げられているのに比べると、SJははるかに日常会話に即した内容と言えよう。

各Unitの構成は、Unit2. Meeting Peopleを例にとれば、次のようである。

<Unit 2. Meeting People>

[Section A]

1. Basic Sentences
2. Pronunciation Practice
3. Practice on the Basic Sentences
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English
5. Notes
6. Exercise
7. Check-Up on the Exercise
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese

[Section B]

1. Basic Sentences
2. Pronunciation Practice
3. Practice on the Basic Sentences
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English
5. Notes
6. Exercise
7. Check-Up on the Exercise
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese

[Section C]

1. Final Check-Up
2. Listening In
3. Free Conversation

このうち、Section A、Section BのPronunciation Practiceでは、次のような項目が記述され、集中的な発音練習が行われた。

Unit 1	Section A	Comments on the Japanese spelling
	Section B	The Vowels a, e, i, o, u
Unit 2	Section A	Double vowels
	Section B	The consonant ñ
Unit 3	Section A	Other consonants; g, h, r
	Section B	The consonants s, t, z
Unit 4	Section A	Consonant plus y; ry, sy, ty, zy
	Section B	Double consonants
Unit 5	Section A	Loss of i and u
	Section B	The accent

例えば、「ん」は、次のように説明された。

(2-3-4)

A LABIAL consonant is one that is made by touching the two lips together; p and b are labials. Before one of these consonants, ñ is changed to a labial also, being pronounced like the ‘m’ in ‘umpire’ and ‘ambush’, but longer.

A DENTAL consonant is one that is made by touching the inner surface of the upper teeth with the tip of the tongue; Japanese t, d, s, and z are dentals. [...] Before one of these consonants, the ñ is changed to a dental also, being pronounced approximately like the ‘n’ in ‘on time’, ‘undo’, ‘unsafe’, and the like, but longer.

A VELAR consonant is one that is made by touching the back part of the roof of the mouth [...] with the back part of the tongue; k and g are velars. Before one of these consonants, the ñ is changed to a velar also, being pronounced like the ‘n’ in ‘anchor’ and ‘anger’, but longer.

PRACTICE 9.

sáñpuñ three minutes
Koñbañ wa Good evening
gúñtai army
Náñ desu ka? What is it?
señsoo war
beñzyó toilet
géñki health
Páñ ga arimasu ... There is bread.

Bloch&Jorden (1945c:40)

(拙訳) 両唇音は、唇を合わせて作られる音で、pとbは両唇音である。この音の前でñもまた両唇音になり、‘umpire’や‘ambush’の‘m’のように発音されるが、英語より長い。

歯茎音は、上の歯の内側の表面と舌先をつけて出す音であり、日本語のt、d、s、zは歯茎音である。[中略] この音の前でñもまた歯茎音になり、‘on time’や‘undo’、‘unsafe’の‘n’のように発音されるが、英語より長い。

軟口蓋音は、舌の後ろの部分を、口の天井部後方につけて出す音であり、kとgは軟口蓋音である。この音の前でñもまた軟口蓋音になり、‘anchor’や‘anger’の‘n’のように発音されるが、英語より長い。

Bloch&Jorden (1945c: ii -F) が ‘As in all the books of the series, the comments on pronunciation are based on a thorough phonetic and phonemic analysis of the sounds of the foreign language’ (拙訳: ほかのSpoken Language Seriesと同様に、発音の解説は、外国語の音の音声的音素的分析をもとにしている) と書いているように、発音分析は構造言語学の手法を取り入れた分析であった。

ただ、Blochは発音練習がUnit 1からUnit 5にかけて点在していることについては、それがこのテキストの編集方針であったとはいえ、賛成できないという旨を述べている。

(2-3-5)

Two features, which again the book has in common with other members of the series, we deprecate, especially in a public edition. One is the piecemeal treatment of pronunciation, scattered bit by bit through the first five units. [...]but we think it would have been better to describe the pronunciation of Japanese in a connected way at the very beginning of the book, perhaps making this the chief task of the first unit, than to leave the students in evitable questions partly unanswered until Unit 5.

(拙訳) このシリーズのほかのテキスト全てに共通することではあるのだが、特にこのパブリックエディションにおいては、発音練習がはじめの5ユニットに少しずつバラバラに散在していることには賛成できない。〔中略〕日本語の発音をわかりやすい方法で、もっと早い段階で、例えば一番はじめのユニットの主要な課題として説明すべきだったと思う。ユニット5まで学習者の不可避の質問に答えないままにしておくべきではなかった。

Bloch&Jorden (1945c: ii -F)

Blochがわざわざこのように述べていることから、Spoken Language Series作成にあたっては、かなり縛りの強い編集方針があったのだと推測できる。

Notesは文法解説で、例えばUnit 2のNotesでは次のような項目が説明された。

- 2.1. Particle no
- 2.2. Particle ga at the end of a clause
- 2.3. 'I' and 'you' and 'he'
- 2.4. Copula: affirmative and negative
- 2.5. Verbs and copula: no change for person and number
- 2.6. Bound forms: -sañ, -ziñ
- 2.7. Japanese names
- 2.8. Particles kára, máde, e, de
- 2.9. Alternative questions
- 2.10. Arimásu and imásu
- 2.11. Interrogatives
- 2.12. Watakusi nó desu
- 2.13. Particles ga and wa

口語を緊急にマスターする必要性から、SJはかな混じり文ではなく、ローマ字表記を採用した。そのためSJでは平仮名、片仮名、漢字は1度も使われていない。例えば、Basic Sentencesは次のように表記された。

(2-3-6)

Anó hito wa, dáre desu ka?

Ano matí kara, kono matí made kimásita.

Watakusi no tomodati wa, Eikoku kara kimásita.

Bloch&Jorden (1945c:26-27)

ここで使われている表記は、Blochがほかの日本語論で用いたのと同じ表記であるが、これについてBloch (1946:918) は次のように説明している。

(2-3-7)

The Japanese spelling used in this book is a modification of the spelling officially adopted by the Japanese government in 1937 (Kokutei Rōmazi). The official spelling differs from ours in three respects:

1. The double vowels aa, ee, oo, and uu are written ā, ē, ō, and ū; but ii is written ii.
2. The sound ñ is written n.
3. The accent is not marked.

Bloch&Jorden (1946:918)

(拙訳) この本で使われている日本語の綴りは、1937年に日本国政府が公式に採用した綴り(国定ローマ字)を改良したものである。ただし国定ローマ字は、われわれの方式と以下の3点で異なる。

1. 二重母音aa, ee, oo,uuは、国定ローマ字ではā, ē, ō, ūと書かれる。ただしiiはそのままiiである。
2. 鼻音ñは国定ローマ字ではnと書かれる。
3. 国定ローマ字では、アクセントは表されない。

ヘボン式ローマ字ではなく国定ローマ字を選んだ理由として、Blochは、次のように述べている。

(2-3-8)

[...] anyone who tries to use it in an orderly presentation of Japanese grammar will find himself – and the student – in trouble. Teachers of Japanese will see at once that the parallelism between the verb forms *tór-u* ~ *tór-i* ~ *tor-ánai*, *dás-u* ~ *dás-i* ~ *das-ánai*, *mát-u* ~ *mát-i* ~ *mat-ánai* is badly obscured by the spellings *dashi*, *matsu*, and *machi*; other examples that will occur to them are the relations of *nigori* and the formation of words containing numerals.

Bloch&Jorden (1945c: ii -H)

(拙訳) 日本語の文法の規則的な現象を、ヘボン式ローマ字を用いて説明しようとしたら、いささかやっかいなことに気がつくだろう。日本語教師ならすぐに*tór-u* ~ *tór-i* ~ *tor-ánai*, *dás-u* ~ *dás-i* ~ *das-ánai*, *mát-u* ~ *mát-i* ~ *mat-ánai*の動詞形の間に相似的な関係があることに気づくだろうが、そのことは*dashi*, *matsu*, *machi*という綴りを使ってはいささか表すことができないのである。そのほかの例としては、数字を含む語において濁ったり濁らなかったりする現象が挙げられる¹¹。

ここでBlochが用いた表記は、後にJordenが*Beginning Japanese*で使ったため、「Jorden方式のローマ字」と呼ばれることもある¹²が、SJやBlochの日本語論でも使われていることなどから、

11 これは、1本、2本、3本…という音変化についての言及であろう。

12 高見沢 (2005)、p.5。

Blochが考案した表記法であったとみてよいであろう。その後、Jordenが改良を加えたとしても、「Jorden方式」と呼ぶのはあまりにBlochに気の毒である。

さて、SJのPublic Edition版には、*Spoken Japanese: A Manual and Key for Your Spoken Language Course*（以下*A Manual and Key*と略す）という小冊子が付いていたことはさきにも述べた。*A Manual and Key*は、SJだけの付属資料ではない。Spoken Language Series全ての教科書に共通して付いていたもので、著者がだれであるのかは不明である。*A Manual and Key*は戦後民間人が、戦前とは全く違う新しい方法で外国語学習を始めるにあたり、どのように外国語を勉強すべきかを易しく紹介した手引書である。わずか16ページの薄い冊子だが、可愛い挿絵が描かれていて、外国語学習が楽しくなるような工夫が見られる。*A Manual and Key*は、戦前の読解中心の外国語教育から、話すことを目的とした外国語学習への転換の象徴と言ってもよいだろう。

*A Manual and Key*には、外国語学習では実用会話を学ぶことが何より大切だということが次のように書かれている。

(2-3-9)

The language in a Holt SPOKEN LANGUAGE course deals with practical, everyday situations. The U.S. Armed Services, who sponsored its preparation, insisted upon a spoken knowledge that would enable its personnel to talk with foreign civilians on normal, commonplace topics, such as “Getting Around”, “Meeting People”, “Seeing the Sights”, “Shopping”, “Eating”, and “Sprucing Up”.

There is no mention here of “the third cousin of your wife’s stepsister”, or similar nonsense, that used to mark the beginner’s course in a foreign language.

（*A Manual and Key*より引用¹³）

（拙訳）ホルト社の話し言葉コースが扱うのは、実用的な毎日の場面である。このコースのスポンサーである米国軍は、所属する軍人が外国の一般市民と、「近況」「交友」「観光」「買い物」「グルメ」「身なり」のようなごく普通のありふれた話題ができるようになる会話能力を求めた。これまでの外国語の初心者コースによく見られた「あなたの妻の継姉妹の3番目のいとこ」とか、そういった類のナンセンスな話題にはこの本では言及しない。

以上考察してきたように、SJは実用的な話し言葉を習得することを目的に、ネイティブスピーカーや蓄音機レコードの発音を模倣し、Basic Sentencesを完全に暗記するまで繰り返し何度も練習するという手法がとられていた。

第4節. Spoken Language Series成立の背景

SJが作られた頃のアメリカの言語教育理論がどのようなものであったか考察していきたい。大戦前のアメリカの外国語教授法について、高見澤は次のように述べている。

(2-4-1)

米国では、建国以来、移民に対し、英語の習得を米国国民にすることの条件としてきたので、

13 *A Manual and Key*の著者は不明であり、ページ番号も記されていない。参考文献ではUnknown（1945）と記した。

米国人が外国語を学習することにはあまり熱心ではなく、また、米国内に在住している米国人が外国語を使う必要性も大きくはなかったため、外国語学習に努力するのは一部の人々に限られていた。

このような事情から、19世紀にヨーロッパの影響で実施されるようになってきた直接法は、その効果に疑問をもたれ、20世紀に入ると、エクлекティック・メソッド (Eclectic Method, 折衷法) が採られていた。その後、1924年にカーネギー財団の支援を受け、外国語教育の実態調査が行われ、1929年にその調査結果をまとめたコールマン・レポート ('Coleman Report') が発表され、それによって米国の外国語教育の状況が明らかにされた。

そこで明らかになったのは、米国の外国語教育が①外国語の学習期間が通常2年であり、②外国語教育の教師自身はその言語のスピーキングの能力が不足している、という事実であった。このため、コールマン・レポートでは、米国の実情に合わせた外国語教授法として、読解を通して外国の文化や歴史を学ぶリーディング・メソッド (Reading Method) が推奨され、多くの教育機関がその方針に沿った外国語教育を行っていった。

しかし、米国陸軍が求めた外国語能力は、読解能力ではなく、口頭によるコミュニケーション能力であったので、新しい教授法を研究し、採用する必要があった。

高見澤 (2006:79)

読解能力からコミュニケーション能力の養成へ、教育方針の転換は、次のDarian の記述のようになされた。

(2-4-2)

The war brought a sudden demand for instruction in languages seldom taught previously. The linguists, who were consulted on methods of teaching, applied the same descriptive techniques in preparing materials as they had used in their earlier study of languages. These included a native informant, phonemic transcription, and the emphasis of speech over writing. [...] From this emerged the ASTP, developed by a group of linguists under Henry Lee Smith, who produced a series of teaching materials, including manuals, dictionaries, and record. The objective of such a program was to train, in several months, men who could act as interpreters and perform other wartime tasks in which a knowledge of the foreign language would be extremely important. [...] Whereas peacetime language teaching had aimed at an appreciation of literature and culture, the military goal was strictly pragmatic: command of the colloquial spoken form of the language in order to communicate directly with natives.

Darian (1972:84-85)

(拙訳) 戦争は、これまでほとんど教えられてこなかった言語教育の必要性を突然もたらした。教育の方法を相談された言語学者は、以前言語研究で用いたのと同じ記述的方法を教材の準備のために使った。それらにはネイティブのインフォーマントを使うこと、音韻表記をすること、書き言葉より話し言葉を優先することなどが含まれていた。ここからASTPが出現し、それをヘンリー・リー・スミスの指導の下で言語学者グループが発展させた。彼らは、指導要領や辞書、レコードを含む一連の教材を作成した。こうしたプログラムの目的は、数か月間で通訳ができる人材、また戦時中の職務を外国語で遂行できる人材を作り出すことだった。〔中略〕平

和時の言語教育は、文学や文化の鑑賞を目的としていたが、軍隊の（言語教育の）目的は厳格に実用的であることだった。つまり、ネイティブスピーカーと直接コミュニケーションをはかることができるレベルの口語の運用力が求められたのである。

こうした教育方針の転換に大きな役割を果たしたのが構造主義言語学であったと、Sternは述べている。

(2-4-3)

The growth of structural linguistics in America played a crucial role in this change of attitude. Round 1940, the needs of an impending war had opened the eyes of American administrators to language problems that Americans, particularly in the armed forces, might be called upon to face. A group of linguists, under the leadership of the Linguistic Society of America, undertook to turn their experience in language description to the task of a 'linguistic analysis of each language to be taught, followed by the preparation of learning materials based on this analysis' (Moulton 1961:84). Within a few years manuals with such titles as *Spoken Burmese* or *Spoken Chinese* were composed. Many of the leading American linguists of this period were involved in the preparation of texts in this series, for example, Bloch (Japanese), Hall (French), Haugen (Norwegian), Hockett (Chinese), Hodge (Serbo-Croatian), Sebeok (Finnish, Hungarian), Hoenigswald (Hindustani), Moulton (German), and of the older generation Bloomfield (Dutch and Russian). General principals were expressed in Bloomfield's *Outline Guide for the Practical Study of Foreign Languages* and Bloch and Trager's *Outline of Linguistic Analysis*.

Stern (1983:157)

（拙訳）アメリカでの構造言語学の発展は、（それまでの言語教育に対する）姿勢からの転換にきわめて重要な役割を果たした。1940年ごろ、差し迫った戦争の必要性が、アメリカの執行部に、アメリカ人、とりわけ全軍隊に属するアメリカ人が直面せざるを得ない言語問題に気づかせた。アメリカ言語学会の指導の下で、言語学者たちが、言語記述の経験を「個別言語を教育用に分析する」ことに活かす試みを始めた。そして「言語分析の手法に基づいて学習用教材を準備した」のである。数年以内に*Spoken Burmese*や*Spoken Chinese*というタイトルのマニュアルが作られた。多くのアメリカの言語学者が、この期間このシリーズのテキストの準備に巻き込まれた。例えばBloch（日本語）、Hall（フランス語）、Haugen（ノルウェー語）、Hockett（中国語）、Hodge（セルビア＝クロアチア語）、Sebeok（フィンランド語、ハンガリー語）、Hoenigswald（ヒンドウスターニー語）、Moulton（ドイツ語）そして老齢のBloomfield（オランダ語とロシア語）などである。全体的な方針はBloomfieldの*Outline Guide for the Practical Study of Foreign Languages*及びBlochとTragerの共著*Outline of Linguistic Analysis*で示された。

Sternの記述のとおり、日本語以外にも多くの言語が研究され、名だたる構造主義言語学者たちによって各言語の教科書が編纂されていった。中でも、とりわけBloomfieldの果たした役割は大きかったようである。Sternは次のように述べている。

(2-4-4)

Linguists in the forties in America were fully aware of the fact that their role in language teaching and language course writing was a new experience for linguistics as well as for language pedagogy. There was little doubt in their minds that one must break with the traditions of conventional language teaching, especially in the teaching of ‘exotic’ languages. ‘Start with a clean slate’ wrote Bloomfield in his Outline Guide. [...] Bloomfield suggested a professional and almost technical approach. A language, he argued, can only be learnt from a native speaker who acts as an informant, and who must be closely observed and imitated. [...] Nevertheless, ideas derived from structural linguistics became the accepted doctrine which was more or less implemented in the American wartime language programmes.

Stern (1983:157-158)

(拙訳) 1940年代アメリカの言語学者は、自分たちの行っていることが、言語教育やコースの進め方において、教育方法にとっても言語学にとっても新しい経験であることに気がつき始めた。伝統的な言語教育を、特に「別世界」の言語教育において打破することに、少しも疑問を抱かなかった。「白紙の状態から始めよう」と *Outline Guide* の中で Bloomfield は書いた。[中略] Bloomfield は専門的で技術的な方法を提案した。言語は、インフォーマントとして務めるネイティブスピーカーから学ぶべきである、学習者はインフォーマントをよく観察して真似しなければならない、と Bloomfield は述べた。[中略] 構造主義言語学から生まれた思想は金科玉条となり、アメリカにおける戦争中の言語プログラムの中で程度の差こそあれ実行された。

Bloomfield は *Language* の著者であるほか、アルゴンキン語の言語調査を行った人物としてよく知られている。しかし、むしろ理論家として知られ、*Spoken Dutch* と *Spoken Russian* という外国語教科書を執筆したこと、また Spoken Language Series の編纂に関与したことなど、教育者としての側面はあまり知られていない¹⁴。高見澤 (2006:82) も「[中略] 戦時中の国家的な事業であったので、当時の米国の多くの学者がその計画策定に関与したが、なかでもアメリカ言語学会の指導的立場にあったブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) の理論的影響が大きかったと見られている」と述べてはいるが、彼自身が教科書を作成したことにまでは触れていない。

Bloch (1949) は Bloomfield が ASTP で果たした役割について、次のように述べている。

(2-4-5)

It was during the last war that Bloomfield’s concern for foreign-language teaching bore fruit. The history of the Intensive Language Program is familiar to most members of the Linguistic Society: how it was organized in 1941 by the American Council of Learned Societies to train teachers and prepare textbooks of strategically important languages; how it supervised the methods of instruction in the Army Specialized Training Program throughout the country; and how it published, through the Linguistic Society, a series of practical manuals written by trained linguists and applying the latest results of our science to the problem of teaching foreign languages. What is not so widely known is the part that

14 例えば Yale 大学の HP (<http://ling.yale.edu/history/leonard-bloomfield>) には、外国語教科書シリーズ編纂への関与や、*Spoken Dutch*, *Spoken Russian* などの業績は記されていない。

Bloomfield played in these activities. Although he was not a member of the committees that nominally directed the Intensive Language Program, and remained by preference in the background of its operations, there is no one to whom the Program is more deeply indebted. The influence of his teaching is obvious in every phase of its work: many of the younger men and women who took part in it learned their trade from him or from his book *Language*; and he himself contributed no fewer than four works to the series which the Program sponsored. In 1942, when it was not yet clear what direction the Program take, he wrote one of the Program's two booklets on descriptive methodology: his *Outline guide for the practical study of foreign languages*, a brief but lucid statement of how the linguist works with an informant. Later he wrote three of the practical manuals: two for Dutch and one for Russian, devoting months of grueling work to the task. In addition, he found time and strength to prepare a grammatical introduction for the War Department's Russian dictionary.

Bloch (1949:89-90)

(拙訳) Bloomfieldの外国語教育への関心が成果を上げたのは、さきの大戦の間であった。集中言語プログラムの経緯は、言語学会のメンバーには既によく知られている。1941年にAmerican Council of Learned Societiesによって戦略的に重要な言語の教科書の準備と教師の育成がどのようになされたか、国全体がASTPの教授法をどのように管理していたか、そして、外国語を教える問題についての最新の科学的な結果が適用され、訓練された言語学者によって書かれた実用的マニュアルが言語学会を通してどのように出版されたか。あまり知られていないことは、実は、これらの活動にBloomfieldが役割を果たしていたことである。彼は集中言語プログラムと呼ばれる委員会のメンバーではなかったし、好んで活動の表舞台に現れなかったが、プログラムはBloomfieldにこそ多大な恩を受けているのである。彼の教育の影響は、その出版物のあらゆる面によく表れている。このプログラムに参加した多くの若者は、その方法をBloomfieldとその著書*Language*から学んだ。また、彼自身、プログラムがスポンサーであるシリーズのうち、少なくとも四つの著書に貢献した。1942年、プログラムの方向性がまだはっきりしていなかった頃、彼は記述的方法論をもととした*Outline guide for the practical study of foreign languages*¹⁵を執筆した。それは簡潔だが明快な記述で、言語学者がどのようにインフォーマントと接すればいいのかが書いてあった。のちに、彼は実用的マニュアルを3冊書いた。2冊はオランダ語、1冊はロシア語で、それらを執筆するために何か月もの時間を費やした。しかも、彼は軍部のロシア語の辞書を準備するだけの時間と強さも持っていた。

Bloomfield (1942) は、わずか16ページの小さな冊子である。Bloomfieldはこの冊子を書いた目的を次のように述べている。

(2-4-6)

It seems likely that from now on many Americans will have to speak and understand various foreign languages. Our schools and colleges offer instruction in some of these, notably in French, Spanish, Italian, and German; for other languages it is difficult or impossible to get formal instruction. This

15 これを以下Bloomfield (1942) と記す。

booklet is planned to help the reader to shift for himself.

Bloomfield (1942:1)

(拙訳) これから多くのアメリカ人がいろいろな外国語を理解し、話さなければならなくなるだろう。我々の国の学校では、フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語などが教えられているが、そのほかの言語を教えることは難しいし、不可能である。この冊子はそうしたことを自力でやろうとする読者の助けとなるよう計画されたものである。

Bloomfield (1942) は、外国語と英語を対応させて逐一訳出していくような従来の教授法を批判した。例えばbe動詞にぴったり当てはまる外国語訳は存在しないという例を挙げながら、英語という尺度で外国語を計ることはできないのだということを強調した。

(2-4-7)

Our schools and colleges teach us very little about language, and what little they teach us is largely in error. The student of an entirely new language will have to throw off all his prepossessions about language, and start with a clean slate. The sounds, constructions, and meanings of different languages are not the same: to get an easy command of a foreign language one must learn to ignore the features of any and all other languages, especially of one's own.

Bloomfield (1942:1)

(拙訳) 学校で言語について教えてくれることはとても少ないし、その少ないことでさえ大部分は間違っている。言語をこれから新しく勉強する学習者は、言語に対する先入観を捨てて、白紙の状態から始めなければならない。異なる言語では、音、構造、意味は同じではない。外国語の簡単な運用力を身につけるためには、ほかの言語、特に我々自身の言語〔筆者注：つまり英語〕の特徴を無視するということを学ばなければならないのである。

そして、次のような方法で外国語を習得することを提案している。

(2-4-8)

Imitate the native sounds.

Combine words as he combines them, not according to some theory of your own or according to the habits of the English language.

Remember always that a language is what the speakers do and not what someone thinks they ought to do.

Practice everything until it becomes second nature.

Bloomfield (1942:16)

(拙訳) ネイティブスピーカーが出す音を真似しなさい。ネイティブスピーカーが結合するように、語を結合しなさい、英語の慣習やあなた自身の説によって結合してはいけません。言語とは、話者がすることであり、誰かがそうあるべきだと考えるものではないということを常に覚えておきなさい。第二の本性になるまで全てを練習しなさい。

このように、Bloomfield (1942) が教授法を提案し、その方法に従ってBlochをはじめとする構造主義言語学者らによって各言語の教科書が作成されていった。これがSpoken Language Seriesである。Howattは次のように書いている。

(2-4-9)

[...] It led, for example, to the production of a set of language courses called ‘The Spoken Language Series’ which included Spoken Dutch and Spoken Russian (both by Bloomfield himself), Spoken Japanese (Bloch), Spoken Norwegian (Haugen) and Spoken Chinese (Hockett). After the war, the work came under the general direction of the American Council of Learned Societies to which, it should be recorded, the eminent authors of the Series donated their royalties in support of linguistic research.

Howatt (1984:267)

(拙訳) ASTPは*Spoken Dutch*や*Spoken Russian* (どちらもBloomfield自身によって書かれた)、*Spoken Japanese* (Bloch)、*Spoken Norwegian* (Haugen)、*Spoken Chinese* (Hockett) などを含む‘The Spoken Language Series’を産出した。戦後、こうした成果はアメリカ諸学会評議員会 (A.C.L.S) の指揮下におかれ、シリーズの著者たちは、その印税を言語学研究のために寄贈した。

こうした教授法は、後のオーディオ・リンガル法に影響を与えていく。Howattは次のように述べている。

(2-4-10)

Both the senior instructors and the informants acted as classroom teachers. The former introduced the new material with any necessary explanations and then left the native speakers to drill the patterns by a simple method of imitation and repetition. This became known as the ‘mim-mem’ method (mimicry and memorization), and is the obvious forerunner of the audiolingual approach and the early language laboratory techniques.

Howatt (1984:266)

(拙訳) 上席講師とインフォーマントと一緒に教師としてふるまう。上席講師が新しい項目に必要な説明とともに導入し、ネイティブスピーカーが模倣と繰り返しというシンプルな方法でパターンを練習する。これがミムメモ法 (模倣と記憶) として知られるようになった手法であり、明らかにオーディオ・リンガル・アプローチと、初期のLL授業の先駆けである。

以上の考察から、SJを含むSpoken Language Seriesは、Bloomfield (1942) が示した方法と方向性に基づき、アメリカの構造主義言語学者が一丸となって作り上げたシリーズであることが確認された。またBloomfield自身も*Spoken Dutch*と*Spoken Russian*を執筆することで、実際に教授法のモデルを示していたことが明らかになった。

第5節. Spoken Language Seriesの構成の類似性

筆者が2013年10月から11月にかけて調査した結果、金城学院大学、南山大学の両図書館に所蔵されているSpoken Language Series には、次の17言語のものがあつた。著者と合わせて紹介

したい。

表2-2. 【Spoken Language Seriesのタイトルと著者¹⁶⁾】

Title	Author
<i>Spoken Japanese</i>	Bernard Bloch& Eleanor Harz Jorden
<i>Spoken Burmese</i>	William S. Cornyn
<i>Spoken Chinese</i>	Charles F. Hockett, Lt. A. & ChaoYing Fang
<i>Spoken Danish</i>	Jeannette Dearden&Karin Stig-Nielsen
<i>Spoken Dutch</i>	Leonard Bloomfield
<i>Spoken Greek</i>	Henry and Renee Kahane&Ralph L. ward
<i>Spoken Hindustani</i>	Heinrich Hoenigswald
<i>Spoken Hungarian</i>	Thomas A. Sebeok
<i>Spoken Italian</i>	Vincenzo Cioffari
<i>Spoken Korean</i>	Fred Lukoff
<i>Spoken Malay</i>	Isidore Dyen
<i>Spoken Norwegian</i>	Einar Haugen
<i>Spoken Portuguese</i>	Margarida F. Reno& Vincenzo Cioffari
<i>Spoken Russian</i>	Book One: I. M. Lesnin and Luba Petrova Book Two: Leonard Bloomfield and Luba Petrova
<i>Spoken Spanish</i>	S. N. Trevino
<i>Spoken Thai</i>	Mary R. Haas&Heng R. Subhanka
<i>Spoken Turkish</i>	Norman A. Mcquown&Sadi Koylan

これらの著者はアメリカの構造主義言語学者が多くを占めており、Blochを含め4人の論文が*Readings in Linguistics I*に掲載されている。それぞれの著者がどのような人物であったのか、Spoken Language Seriesはその後、各国での言語教育にどのような影響を与えたのか興味深い。今後の研究課題としたい。

Spoken Language Seriesは、どれもよく似た構成になっている。筆者はこれまでにSpoken Language Seriesのうち16言語の教科書についてその構成を調査した。各教科書のUnit 1からUnit 12までの構成をまとめたものが26ページから27ページの表2-3である。

表2-3から明らかなように、Part Oneは*Spoken Chinese*を除く15言語においてGetting Aroundから始まる。Unit 2は、ほとんどがMeeting Peopleというタイトルである。Unit3以降も、Trade, Family, The Weather, Where Are You Fromなど、どのテキストも似たような項目が並んでいる。Part TwoもGetting a Room, Let's Eat, Shopping, Getting Dressedなど、こちらも似たような項目である。Let's EatとShoppingはほとんどの教科書に配置されている。いずれも日常会話に直結する話題から構成されているのが特徴である。

16 掲載順は、SJを除き、言語のABC順である。

【表2-3. Spoken Language Series 全体の構成】

Title	Spoken Japanese	Spoken Burmese	Spoken Chinese	Spoken Danish
Author	Bernard Bloch	William S. Cornyn	Charles F. Hockett	Jeannette Dearden
	Eleanor Harz Jordan		ChaoYing Fang	Karin Stig-Nielsen
Contents	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit I. GREETINGS AND SIMPLE PHRASES	Unit 1. GETTING AROUND
	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit II. COUNTING; TIME AND MONEY	Unit 2. MEETING PEOPLE
	Unit 3. TRADES AND OCCUPATIONS	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit III. MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR JOB?
	Unit 4. ABOUT THE HOUSE	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS	Unit IV. FAMILY AND FRIENDS	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS
	Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. THE WEATHER	Unit V. HANDLING THINGS	Unit 5. SEEING THE SIGHTS
	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit VI. REVIEW	Unit 6. REVIEW
	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
	Unit 7. COUNTING	Unit 7. A PLACE TO LIVE	Unit VII. WHERE DO YOU WORK?	Unit 7. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
	Unit 8. ASKING DIRECTIONS	Unit 8. GETTING CLEANED UP	Unit VIII. A PLACE TO LIVE	Unit 8. GETTING A ROOM
	Unit 9. MORE NUMBERS	Unit 9. LET'S EAT	Unit IX. GETTING CLEANED UP	Unit 9. LET'S EAT
	Unit 10. THE FAMILY	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.	Unit X. May-DungShi-Chywu	Unit 10. SHOPPING
	Unit 11. GETTING DRESSED	Unit 11. SHOPPING	Unit XI. Yi Tyan-Dzwo-De-Shr	Unit 11. GETTING CLEANED UP
	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit XII. REVIEW	Unit 12. REVIEW

Title	Spoken Korean	Spoken Malay	Spoken Norwegian	Spoken Portuguese
Author	Fred Lukoff	Isidore Dyen	Einar Haugen	Margarida F. Reno
				Vincenzo Cioffari
Contents	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
	Unit 2. INTRODUCING YOUR-SELF	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE
	Unit 3. THE FAMILY	Unit 3. TRADES AND OCCUPATIONS	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?
	Unit 4. TALKING ABOUT THE WEATHER	Unit 4. ABOUT THE HOUSE	Unit 4. A PLACE TO LIVE	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?
	Unit 5. GETTING A ROOM	Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. SEEING THE SIGHT	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
	Unit 7. GETTING CLEANED UP	Unit 7. SHOPPING	Unit 7. PAPER AND PENCIL	Unit 7. GETTING A ROOM
	Unit 8. GOING OUT TO EAT	Unit 8. LET'S EAT	Unit 8. SHOPPING	Unit 8. SPRUCING UP
	Unit 9. SEEING THE TOWN	Unit 9. A PLACE TO LIVE	Unit 9. SPRUCING UP	Unit 9. LET'S EAT
	Unit 10. SHOPPING	Unit 10. SPRUCING UP	Unit 10. LET'S EAT	Unit 10. SEEING THE SIGHTS
	Unit 11. TRAIN FOR PHYONG-YANG	Unit 11. THE FAMILY	Unit 11. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 11. SHOPPING
	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW

Spoken Dutch	Spoken Hindustani	Spoken Hungarian	Spoken Italian
Leonard Bloomfield	Heinrich Hoenigswald	Thomas A. Sebeok (Robert A. Hall, Jr)	Vincenzo Cioffari
[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE
Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?
Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. SEEING THE SIGHTS.	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?
Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5. IN THE STORE	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
Unit 7.FINDING ROOMS	Unit 7. AN EVENING OUT	Unit 7. A PLACE TO LIVE	Unit 7. A PLACE TO LIVE
Unit 8.BARBER AND LAUNDRY	Unit 8. FAMILY DAYS	Unit 8. SPRUCING UP	Unit 8. SPRUCING UP
Unit 9. EATING	Unit 9. THE WEATHER	Unit 9. LET'S EAT	Unit 9. LET'S EAT
Unit 10. IN TOWN	Unit 10. SCHOOL	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.
Unit 11. SHOPPING	Unit 11. TRAVEL	Unit 11. SHOPPING	Unit 11. SHOPPING
Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW

Spoken Russian	Spoken Spanish	Spoken Thai	Spoken Turkish
1:I.M.Lesnin and Luba Petrova	S.N.Trevino	Mary R.Haas	Norman A. Mcquown
2:Leonard Bloomfield and Luba Petrova		Heng R.Subhanka	Sadi Koylan
[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
Unit 2. THE FAMILY	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2.BUYING THINGS	Unit 2. MEETING PEOPLE
Unit 3. MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR JOB?
Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS
Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5.WHAT DO YOU DO FOR A LIV-ING?	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
Unit 7. AT THE AIRPORT	Unit 7. GETTING A ROOM	Unit 7. HOW DO YOU LIKE THE WEATHER?	Unit 7. GETTING A ROOM
Unit 8. LAUNDRY AND BARBER	Unit 8. SPRUCING UP	Unit 8. GETTING A ROOM IN A HO-TEL	Unit 8. GETTING CLEANED UP
Unit 9. FINDING A ROOM	Unit 9. LET'S EAT	Unit 9. GETTING DRESSED	Unit 9. LET'S EAT
Unit 10. WRITING A LETTER	Unit 10. SEEING THE SIGHTS	Unit 10. LET'S EAT	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.
Unit 11. EATING AND DRINKING	Unit 11. SHOPPING	Unit 11.A SHOPPING TRIP	Unit 11. SHOPPING
Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW

※掲載順は、SJ以外は言語のABC順

次に、Spoken Language Seriesのうち16言語の教科書について、Unit 2の構成（表2-4）を見てみたい。30ページから33ページの表2-4をご覧頂きたい。こちら也非常によく似たものとなっている。

表2-4を見ると、どのテキストも、まず Basic Sentences が与えられる。次に、Hints on Pronunciationがある。Basic Sentencesを十分に練習した後、Word StudyもしくはNotesという項目で文法説明がなされる。そして、What Would You Say? と What Did You Say?という2タイプの練習問題が用意されている。次にListening Inで聞く練習をし、最後はFree Conversationで自由に会話ができるようになるまで練習するという構成になっている。

さきにも述べたが、日本語の発音が科学的に分析され、それが学習者に提示された教科書は、少なくとも日本語についていえば、Bloch以前にはなかったものである。Spoken language Seriesでは日本語以外にも多くの言語の発音が分析され、Pronunciation Practiceという形で学習者に示された。もっとも他言語の発音分析が妥当なものであったかどうか筆者にはわからないが、少なくともSpoken Language Seriesの全ての教科書が発音を重視したものであり、この時代にあっては新しい教科書であったということは述べてもよいであろう。

また、練習問題や聞く練習は、SJと同時代に作られた日本語教科書には見当たらないものであり、この時代の教科書としてはかなり画期的なものであった。練習問題については、第3章で詳しく考察する。

以上のような構成は、調査した16言語の教科書のほとんどに共通するものである。表記は全てローマ字が採用され、かな、漢字、ハングル文字などが一切使われていないことも統一された方針である。

次に、Unit 1でどのようなBasic Sentencesが導入されているか考察してみたい。ここではBlockのSJ、Bloomfieldの*Spoken Dutch*、*Spoken Chinese*の3冊を検討する。Unit 1で導入されている文と対応する英語訳をまとめたものが34ページから35ページの表2-5である。

これもまたとてもよく似た導入順序となっている。よりわかりやすくまとめると、表2-6に示したような順序である。

【表2-6：導入順序の比較】

	SJ	<i>Spoken Dutch</i>	<i>Spoken Chinese</i>
①日常生活でよく使われる挨拶	1.Ohayoo gozaimasu.	Goeden morgen!	Ní-'hǎw
②授業の中でよく使う文	18.Wakarimásu ka?	Verstaat u mij?	'Dǔng-bu · dǔng?
③「どこですか」	25.Ryooriya wa, dóko ni arimásu ka?	Waar is er en restaurant?	Fàn- 'gwǎn · dz dzǎy- 'nǎ · li?
④存在文「～にあります」	27. Koko ni arimásu.	Het is hier.	Dzǎy- 'jè · li.
⑤「これは何ですか」	33.Nǎn desu ka?	Wat is het?	'Jè shǐ-shèm · me?
⑥「～がほしいです」	48.Pǎn ga hosii desu.	Ik zou graag en cigaret willen hebben.	Wǒ- yǎw-'yǎn

表2-5を見ると、「レストラン」、「ホテル」、「たばこ」、「マッチ」の4語が3教科書で共通して使われているのはおもしろい。なるほど軍人が外国に行った際、すぐに使えそうな語ばかりである。

動詞文の導入が早いのは、Spoken Language Seriesに共通する特徴である。SJでは、Unit1で動詞文Wakarimásu ka?のほか、過去形Wakarimásita ka?、否定形Yóku wakarimasén desita、テ形Moo itido itte kudasáiまで導入されている。また、Pǎn ga hosii desu.という形容詞文も見られる。

ただ「～が欲しい」という文は中国語では動詞文であることから、*Spoken Chinese*ではWǒ-yào-yān' (我要烟) という文で登場している。

こうして比べてみると、*Spoken Language Series*の教科書は、名詞文から導入するとか、動詞文から導入するなどといったように、品詞にこだわった導入方法ではなく、日常生活に必要な文から次々に導入されたと考えられる。Bloomfield (1942) は外国語を逐一品詞に分類する分析手法を批判し、外国語は外国語として分析すべきだと主張したが、教科書の導入順序はBloomfieldの方針を忠実に反映した結果なのだろう。

(2-5-1)

In all this work it is important to take the language on its own terms, and to avoid distorting and confusing the facts by false classifications derived from one's own language. A description of Malay or Tagalog that started out with parts of speech such as noun, adjective, verb, adverb, would be wrong from the start, and so would a description of these languages or, say, of Japanese or of Ojibwa, which tailed about 'cases' of nouns.

Bloomfield (1942:15)

(拙訳) *Spoken Language Series*の全てにおいて、言語をそれ自身の語法を通してみるのが大切であり、そして、自分の言語から派生した間違った分類によって、事実をゆがめたり混同するのを避けることが大切である。マレー語とタガログ語の記述は、名詞、形容詞、動詞、副詞のような品詞から始まるが、それはそもそも間違っている。そういう方法では、例えば日本語やオジブエ語のように名詞の格を付加させるような言語の記述においても間違ってしまうだろう。

Basic Sentences の導入方法にどれくらい違いが見られるのか、同時代のNaganuma (1958a) と比較してみたい。

BlochがSJのUnit 1で導入した*Basic Sentences* 52個と、Naganuma (1958a) の*Basic Sentence*からはじめの52個を取り出して比較したものが36ページの表2-7、使われた語を品詞別に分類したものが37ページの表2-8である。

表2-8からわかるように、Naganuma (以下、長沼と表記する) はUnit 1でかなり多くの名詞を導入している。一方、Blochは生活に必要な最低限の語のみを導入し、限られた語を繰り返し使っている。確かに「戸」「かべ」という語より、「マッチ」「ホテル」という語の方が実用的である。もっとも長沼の語の選択は、その教授法と深く関わりがあることは周知の事実である。動詞は長沼は一つ、Blochは六つ導入している。他方、形容詞は長沼は色を中心に五つ、Blochは一つである。動詞、形容詞もBlochは実用的な語を選んでいる。人称代名詞は長沼が四つも使っているのに対して、Blochは一つも使っていない。BlochのSJには、「わたしは魚が欲しいです。」「あなたは水がほしいですか。」という*Basic Sentences*はほとんど見当たらない。これはBlochが日本語を注意深く観察した結果である。

【表2-4：Spoken Language Series Unit 2の構成】

Spoken Japanese	Spoken Burmese	Spoken Chinese	Spoken Danish
Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2.Counting; Time and Money	Unit 2. Meeting People
[SectionA]	SectionA. Basic Sentences	Section A:Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1.Basic Sentences	1.Basic Sentences	§ 1. Basic Sentences	1.Basic Sentences
2.Pronunciation Practice	2.Hints on Pronunciation	§ 2. Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation
3.Practice on the Basic Sentences		§ 3. Practice on the Basic Sentences	3.Check Yourself
4.Review of the Basic Sentences: Covering the English		§ 4. Check yourself	
5.Notes			
6.Exercise			
7.Check-Up on the Exercise			
8.Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese			
[SectionB]	SectionB. Word Study	Section B: Word Study	SectionB. Word Study
1.Basic Sentences	1.Word Study	§ 1. Review the Basic Sentences Covering the English	1. Word Study
2.Pronunciation Practice	2.Covering English and Burmese of Word Study	§ 2. Word Study	2.Covering English and Danish of word study
3.Practice on the Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences	§ 3. What Would You Say?	3.Review of Basic Sentences
4.Review of the Basic Sentences: Covering the English		§ 4. What Did You Say?	
5.Notes			
6. Exercise			
7.Check-Up on the Exercise			
8.Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese			
[SectionC]	SectionC. Review of Basic Sentences	Section C:Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1.Final Check-Up	1.Review of Basic Sentences	§ 1. Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2.Listening In	2.Covering the English of Basic Sentences	§ 2. Hints on Pronunciation	2. Covering the English of Basic Sentences
3. Free Conversation	3.What Would You Say?	§ 3. Practice on the Basic Sentences.	3. What Would You Say?
	SectionD. Listening In	Section D:Word Study	SectionD. Listening In
	1.What Did You Say?	§ 1.Review of Basic Sentences Covering the English	1. What Did You Say?
	2.Word Study Check-Up	§ 2. Word Study	2.Word Study Check-Up
	3.Listening In	§ 3. What Would You Say?	3.Listening In
		§ 4. What Did You Say?	
		§ 5.Review of Basic Sentences Covering the Chinese	
	SectionE. Conversation	Section E: Listening In	SectionE. Conversation
	1.Covering the Burmese of Basic Sentences	§ 1. Word Study Check-Up	1. Covering the Danish of Basic Sentences
	2.Vocabulary Check-Up	§ 2. Listening In	2. Vocabulary Check-Up
	3. Conversation		3. Conversation
	SectionF. Conversation	Section F: Conversation	SectionF. Conversation
		§ 1. Vocabulary Check-Up	
		§ 2. Carrying on Conversation.	

※掲載順は、SJ 以外は言語の ABC 順

※データはいずれも H.Holt 社のものを使用、大文字・小文字は見易さのため若干の修正が加えてある。

※これらの教科書は自習もできるように作られた教科書であるため、部分的に (Individual Study)、(15minutes) などといった表記が所々に見られるが、そういった但し書きはこの表では省略してある。

Spoken Dutch	Spoken Hindustani	Spoken Hungarian	Spoken Italian
Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
A. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1.Basic Sentences	1.Basic Sentences	1.Basic Sentences	1.Basic Sentences
2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation
3.Check Yourself	3.Check Yourself	3.Check Yourself	
B. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences	SectionB. Word Study and review of Basic sentences	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study
2.Review of Basic Sentences	2.Covering English and Hindustani of Word Study	2.Covering English and Hungarian of word study	2.Covering English and Italian of word study
	3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences
C. What Would You Say?	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1.What Would You Say?	1.Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2.What Did You Say?	2.Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences
	3.What Would You Say?	3. What Would You Say?	3. What Would You Say?
D. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
	1.What Did You Say?	1. What Did You Say?	1. What Did You Say?
	2.Word Study Check-Up	2.Word Study Check-Up	2.Word Study Check-Up
	3.Listening In	3.Listening In	3.Listening In
E. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1.Review of Basic Sentences	1.Covering the Hindustani of Basic Sentences		1. Covering the Italian of Basic Sentences
2.Vocabulary Check-up	2.Vocabulary Check-Up		2. Vocabulary Check-Up
3.Carring on Conversation	3. Conversation		3. Conversation
	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation

Spoken Korean	Spoken Malay	Spoken Norwegian	Spoken Portuguese
Unit 2. Introducing Yourself	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
SectionA. Basic Sentences	[SectionA]	SectionA. Basic Sentences	SectionA. BASIC SENTENCES
1.Basic Sentences	1. Basic Sentences	1.Basic Sentences	1.Basic Sentences
2.Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation
3.Check Yourself	3. Practice on the Basic Sentences	3.Check Yourself	3.Check Yourself
	4. Review of Basic Sentences: Covering the English		
	5. Commentary		
	6. What Would You Say?		
	7. What Did You Say?		
	8. Review of Basic Sentences: Covering the Malay		
SectionB. Word Study	[SectionB]	SectionB. Word Study and review of Basic sentences	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1.Word Study	1.Basic Sentences	1.Word Study	1.Word Study
2.Covering English and Korean of Word Study	2.Hints on Pronunciation	2.Covering English and Norwegian of word study	2.Covering English and Portuguese of Word Study
3.Review of Basic Sentences	3.Practice on the Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences
	4.Review of Basic Sentences: Covering the English		
	5.Commentary		
	6. What Would You Say?		
	7. What Did You Say?		
	8. Review of Basic Sentences: Covering the Malay		
SectionC. Review of Basic Sentences	[SectionC]	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1.Review of Basic Sentences	1. Check-Up	1. Review of Basic Sentences	1.Review of Basic Sentences
2.Covering the English of Basic Sentences	2. Listening In	2. Covering the English of Basic Sentences	2.Covering the English of Basic Sentences
3.What Would You Say?	3. Conversation	3. What Would You Say?	3.What Would You Say?
SectionD. Listening In		SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
1.What Did You Say?		1. What Did You Say?	1.What Did You Say?
2.Word study check-up		2.Word Study Check-Up	2..Word Study Check-Up
3.Listening In		3.Listening In	3.Listening In
SectionE. Conversation		SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1.Covering the Korean of Basic Sentences		1. Covering the Norwegian of Basic Sentences	1.Covering the Portuguese of Basic Sentences
2.Vocabulary Check-Up		2. Vocabulary Check-Up	2.Vocabulary Check-Up
3. Conversation		3. Conversation	3. Conversation
SectionF. Conversation		SectionF. Conversation	SectionF. Conversation

Spoken Russian	Spoken Spanish	Spoken Thai	Spoken Turkish
Unit 2. The Family	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
SectionA-BasicSentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1.Basic Sentences	1. Basic Sentences	1.Basic Sentences	1.Basic Sentences
2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation	2.Hints on Pronunciation
3.Check Yourself	3.Check Yourself	3.Check Yourself	3.Check Yourself
SectionB. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences	SectionB. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study
2.Covering English and Russian of Word Study	2.Covering English and Spanish of Word Study	2.Covering English and Thai of Word Study	2.Covering English and Turkish of Word Study
3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences	3.Review of Basic Sentences
SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1.Review of Basic Sentences	1.Review of Basic Sentences	1.Review of Basic Sentences	1.Review of Basic Sentences
2.Covering the English of Basic Sentences	2.Covering the English of Basic Sentences	2.Covering the English of Basic Sentences	2.Covering the English of Basic Sentences
3.What Would You Say?	3.What Would You Say?	3.What Would You Say?	3. Word Study Review
			4.What Would You Say?
SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
1.What Did You Say?	1.What Did You Say?	1.What Did You Say?	1.What Did You Say?
2.. Word Study Check-Up	2.. Word Study Check-Up	2.. Word Study Check-Up	2. Word Study Check-Up
3.Listening In	3.Listening In	3.Listening In	3.Listening In
SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1.Covering the Russian of Basic Sentences	1.Covering the Spanish of Basic Sentences	1.Covering the Thai of Basic Sentences	1.Covering the Turkish of Basic Sentences
2.Vocabulary Check-Up	2.Vocabulary Check-Up	2.Vocabulary Check-Up	2.Vocabulary Check-Up
3. Conversation	3. Conversation	3. Conversation	3. Conversation
SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation
		1.Conversation	1.Conversation
		2.Questions and Answers	2.Questions and Answers

【表2-5. Unit 1 Basic Sentencesの比較】

Spoken Japanese		Spoken Dutch
English Equivalents	Japanese	English Equivalents
1. Good Morning	1. Ohayoo gozaimasu.	Good day!
2. Good day or Hello	2. Koñiti wa.	Good morning!
3. Good evening	3. Koñbañwa.	Good evening!
4. How are you?	4. Ikága desu ka?	How are you?
5. I'm well	5. Géñki desu.	Well, thank you.
6. I'm well as usual	6. Aikawarazu géñki desu.	And (with) you?
7. Good-bye	7. Sayonára.	Quite well.
8. Excuse me or Pardon	8. Gomeñnasái.	Yes, msss.
9. Please	9. Dóozo.	No, sir.
10. Thank you	10. Arigatoo gozaimasu.	Please or if you please.
11. Don't mention it	11. Dóo itasimásite.	Thanks a lot.
12a. Yes.	12a. Háí	Thank you, ma'am.
12b. or (another word for Yes)	12b. Èe.	You're welcome.
13. No	13. Iie.	Excuse me.
14. Please say it again	14. Moo itido itte kudasái.	So long!
15. Please speak slowly	15. Yukkúri hanásite kudasai.	Good-by!
16. Please speak more clearly	16. Móttö hakkíri hanásite kudasai.	Do you understand me?
17. Please wait a moment	17. Tyóttö mätte kudasai.	Do you understand what I say?
18. Do you understand?	18. Wakarímásu ka?	Will you please speak slowly?
19. Yes, I do understand	19. Háí. Wakarímásu.	I don't understand what you say.
20. No, I don't understand	20. Iie. Wakarimaséñ.	What did you say?
21. Did you understand?	21. Wakarímásita ka?	Where is it?
22. I understood perfectly.	22. Yóku wakarímásita.	Where is there a restaurant?
23. I didn't understand very well.	23. Yóku wakarimaséñ desita.	Where's the restaurant?
24. Where is there one?	24. Dóko ni arimásu ka?	Where is there a good hotel?
25. Where is there a restaurant?	25. Ryoóriya wa, dóko ni arimásu ka?	Where's the hotel?
26. Where's there a toilet?	26. Beñzyó wa, dóko ni arimásu ka?	There's no good hotel here.
27. There's one here.	27. Koko ni arimásu.	Where's the station?
28. The railroad station's here.	28. Teisyaba wa, koko ni arimásu.	Where's the toilet?
29. There isn't any there.	29. Soko ni arimaséñ.	It's right.
30. There's one on the right.	30. Migi no hoo ni arimasu.	It's left.
31. The hotel's on the left.	31. Hóteru wa, hidari no hoo ni arimasu.	Go straight ahead.
32. There's one straight ahead.	32. Massúgu saki ni arimásu.	It's here.
33. What is it?	33. Nán desu ka?	Here it is.
34. What's this?	34. Kore wa, nán desu ka?	It's there.
35. That's a cigarette; Those are cigarettes.	35. Sore wa, tabako desu.	What is it?
36. That's a match; Those are matches.	36. Are wa, mátti desu.	What's that?
37. What's this building?	37. Kono tatémono wa, nán desu ka?	What's this?
38. That building's a hotel.	38. Sono tatémono wa, hóteru desu.	What do you want?
39. Are they [any] cigarettes?	39. Tabako ga arimásu ka?	I'd like a cigarette.
40. Yes, there are; or Yes, I have [some]	40. Háí. Arimásu.	I'd like some cigarettes.
41. No, there aren't [any].	41. Iie. Arimaséñ.	I'd like some matches.
42. Please give me a match.	42. Mátti o kudasai.	I'd like to eat something to drink.
43. Do you want it?	43. Hosíi desu ka?	I'd like to drink something.
44. Yes, I do want it.	44. Háí. Hosíi desu.	I'd like a drink.
45. No, I don't want it.	45. Iie. Hósiku arimaséñ.	Do you want coffee?
46. I'm hungry.	46. Onaka ga sukímásita.	I don't want any coffee.
47. Do you want some meat?	47. Nikú ga hosíi desu ka?	I'd like some milk.
48. I want some bread.	48. Páñ ga hosíi desu.	How much is it?
49. I don't want [any] meat.	49. Nikú wa hósiku arimaséñ.	How much are they?
50. I want [some] fish.	50. Sakana ga hosíi desu.	How much is that?
51. I'm thirsty.	51. Nódo ga kawakimásita.	One gulden.
52. Do you want [some] water?	52. Mizu ga hosíi desu ka?	That's two gulden.
		What time is it?
		It's one o'clock.
		It's ten o'clock.
		What time does the movie begin?
		What time does the train go?
		When does the train to Amsterdam go?

Spoken Dutch	Spoken Chinese	
Dutch(Conventional Spelling)	English Equivalents	Chinese(Aid to Listening)
Goeden dag!	Good morning, good evening, hello, how are you?	Ní-'hǎw
Goeden morgen!	I'm fine.	Wō- hén-hǎw.
Goeden Avond!	How are you, sir?	'Shyān · sheng 'hǎw?
Hoe gaat het met u?	Is that OK?	'Hǎw-bu · hǎw?
Goed, dank u.	That's OK.	'Hǎw
En met u?	No, that's not OK.	'Bù-hǎw.
Heel goed.	Is that right?	'Dwèy-bu · dwèy?
Ja, juffrouw.	That's right!	'Dwèy · le.
Neen, mijnheer.	That's not right.	Bú- 'dwèy
Als 't u blijft.	Do you understand?	'Dūng-bu · dūng?
Dank u wel.	I understand.	'Dūng le.
Dank u wel, mevrouw.	I don't understand.	Bù- 'dūng
Niets te danken.	Where is it?	Dzày- 'nǎ · li?
Neem me niet kwalijk.	Where's a restaurant?	Fàn · 'gwǎn · dz dzày- 'nǎ · li?
Tot ziens!	Over there!	Dzày- 'nà · li.
Dag!	It's not over there.	'Bú-dzày- 'nà · li.
Verstaat u mij?	It's right here.	Dzày- 'jè · li.
Verstaat u wat ik zeg?	Where's a hotel?	Fàn · 'dyan dzày-'nǎ · li?
Wilt u als 't u blijft langzaam spreken?	Where's the railroad station?	Hwō-chē- 'jàn dzày- 'nǎ · li?
Ik versta niet wat u zegt.	The railroad station is right here.	Hwō-chē- 'jàn dzày- 'jè · li?
Wat blijft u?	Where's the toilet?	Tsè · 'swō dzày- 'nǎ · li?
Waar is het?	Thank you.	'Shyè · shyè.
Waar is er en restaurant?	Please.	'Chǐng
Waar is het restaurant?	Please, may I ask you...?	'Chǐng-'wèn.
Waar is er een goed hotel?	You're welcome.	Bú- 'kè · chī.
Waar is het hotel?	Excuse me, I'm sorry, or forgive me.	'Dwèy-bu · chī.
Er is hier geen goed hotel.	Go to the right.	Shyàng- 'yèw dzèw.
Waar is het station?	Go to the left.	Shyàng- 'dzwó dzèw.
Waar is de W.C.?	Go straight ahead.	Yì · 'jǐ dzèw.
Het is rechts.	Please repeat.	Chǐng 'dzài-shwō
Het is links.	Please speak slower.	Chǐng 'màn · yì · dyan shwō
Ga rechttuit.	Please speak up.	Chǐng 'dà · shēng shwō
Het is hier.	What't this?	'Jè shǐ-shēm · me?
Hier is het.	That's a cigarette.	Nà-shǐ- 'yān
Het is daar.	What's that thing?	'Nà · ge-dūng · shi shǐ- shēm · me?
Wat is het?	This thing is a match.	'Jè · ge-dūng · shi shǐ-yáng · hwō
Wat is dat?	What do you want?	Nǐ-yàw- 'shēm · me?
Wat is dit?	I want cigarettes.	Wō- yàw-'yān
Wat wilt u hebben?	I want to eat.	Wō- yàw-chǐ- 'fàn.
Ik zou graag en cigaret willen hebben.	Do you want to eat some meat?	Yàw-chǐ- 'rèw-ma?
Ik zou graag cigarettten willen hebben.	No.	Bú- 'yàw
Ik zou graag lucifers willen hebben.	I want to drink some tea.	Wō- yàw-hē- 'chá.
Ik wou graag wat eten.	Does he want water to drink?	Tā- yàw-hē- 'chá.
Ik wou graag wat drinken.	He won't drink water, he'll drink wine.	Tā- bù-hē- 'shwěy, hē- 'jyěw.
Ik wou graag drinken.	Is there a restaurant here?	'Jè · li yěw-fān- 'gwǎn · dz-ma?
Wilt u koffie drinken?	Do you have any matches?	'Yěw-méy · yěw yáng · 'hwō?
Ik wil geen koffie.	I don't, but he does.	'Wō 'méy · yěw, 'tā yěw.
Ik zou graag wat melk willen drinken.	Goodbye.	Dzày- 'jyàn.
Hoeveel is het?		
Hoeveel zijn zij?		
Hoeveel is dat?		
Een gulden.		
Dat is twee gulden.		
Hoe laat is het?		
Het is een uur.		
Het is tien uur.		
Hoe laat begint de bioscoop?		
Hoe laat gaat de trein?		
Wanneer gaat de trein naar Amsterdam?		

【表2-7. Naganuma (1958a) とSJ、Basic Sentencesの比較】

Naoe Naganuma(1958a)	SJ
1.Kore wa [hon] desu.	1.Ohayoo gozaimasu.
2.Kore wa [isu] desu ka?	2.Koñiti wa.
3.Hai, sô desu.	3.Koñbañwa.
4.Iie, sô ja arimasen.	4.Ikága desu ka?
5.Sore mo [isu] desu ka?	5.Géñki desu.
6.Dewa, [sore] wa nan desu ka?	6.Aikawarazu géñki desu.
7.[Tsukue] desu.	7.Sayonára.
8.Are wa [to] desu ka, [mado] desu ka?	8.Gomeñnasái.
9.Kore wa [akai] hon desu.	9. Dóozo.
10.Kono kami wa [shiroi]desu.	10. Arigatoo gozaimasu.
11.Sono kami mo [shiroi] desu ka?	11.Dóo itasímásite.
12.Iie, [shiroku] wa arimasen.	12a Háí
	12b Èe.
13.Donna [iro] desu ka?	13.Iie.
14.[Kuroi]desu.	14 .Moo itido itte kudasái.
15.Kono [empitsu] wa donna iro desu ka?	15.Yukkúri hanásite kudasai.
16. Ano chiisai [hako] wa akai desu ka, aoi desu ka?	16. Mótto hakkíri hanásite kudasai.
17.Anata wa [seito] desu.	17.Tyóitto mátte kudasai.
18.Watakushi wa [seito] ja arimasen.	18.Wakarimásu ka?
19.[Anata] wa donata desu ka?	19.Hái. Wakarimásu.
20.[Tanaka]desu.	20.Iie. Wakarimaséñ.
21.[Kimura San] wa donata desu ka?	21.Wakarimásita ka?
22.Ano kata wa [Suzuki San] desu ka?	22.Yóku wakarimásita.
23.Anata no [otomodachi] desu ka?	23.Yóku wakarimaséñ desita.
24.Watakushi no [tomodachi] desu.	24.Dóko ni arimásu ka?
25.Ano kata wa kono gakkô no [seito] desu.	25.Ryooríya wa, dóko ni arimásu ka?
26.Nan no [sensei] desu ka?	26.Beñzyó wa, dóko ni arimásu ka?
27.[Nippongo] no sensei desu.	27.Koko ni arimásu.
28.Bēkā San no okusan wa [Eigo] no sensei desu.	28.Teisyaba wa, koko ni arimásu.
29.Ano kata wa [Amerikajin] desu ka, [Igisujin] desu ka?	29.Soko ni arimaséñ.
30.Anata wa [Nipponjin]desu.	30.Migi no hoo ni arimasu.
31.Kore wa [kutsu]de, kore wa [kutushita] desu.	31.Hóteru wa, hidari no hoo ni arimasu.
32.Kore wa watakushi no[hankechi]desu.	32.Massúgu saki ni arimásu.
33.Are wa donata no[kaban] desu ka?	33.Nán desu ka?
34.[Shimizu] San no desu.	34.Kore wa, nán desu ka?
35.Kono [mannenhitsu] wa anata no desu ka?	35.Sore wa, tabako dēsu.
36.Iie, [watakushi no] ja arimasen.	36.Are wa, mátti desu.
37.Sono [hon] to [zasshi] wa donata no desu ka?	37.Kono tatémono wa, nán desu ka?
38.Hon wa [Tomita] San no de, zasshi wa [Katō] san no desu.	38.Sono tatémono wa, hóteru desu.
39.Koko ni [tsukue] ga arimasu.	39.Tabako ga arimásu ka?
40.Soko ni [isu] ga arimasu.	40.Hái. Arimásu.
41.[Asoko] ni nani ga arimasu ka?	41.Iie. Arimaséñ.
42.[Doa] wa doko ni arimasu ka?	42.Mátti o kudasai.
43.[Soko] ni arimasu.	43.Hosíi desu ka?
44.[Tsukue] no soba ni arimasu.	44.Hái. Hosíi desu.
45.[Tsukue] no ue ni nani ga arimasu ka?	45.Iie. Hósiku arimaséñ.
46.[Hako] ga arimasu.	46.Onaka ga sukímásita.
47.Ikutsu arimasu ka?	47.Nikú ga hosíi desu ka?
48.[Hitotsu]arimasu.	48.Pāñ ga hosíi desu.
49.[Hako] no naka ni nani ga arimasu ka?	49.Nikú wa hósiku arimaséñ.
50.[Isu] no shita ni nani ga arimasu ka?	50.Sakana ga hosíi desu.
51. Nanni mo arimasen.	51.Nódo ga kawakímásita.
52.Watakushi no ushiro ni [kabe] ga arimasu.	52.Mizu ga hosíi desu ka?

【表2-8. Naganuma (1958a) とSJ、Basic Sentences 初出52文で使われた語の比較】

	Naganuma (1958a)			SJ		
名詞	本 何 まど 色 田中 鈴木さん 先生 奥さん イギリス人 靴下 清水さん 富田さん そば ひとつ かべ	いす 机 紙 箱 木村さん お友達 日本語 英語 日本人 ハンケチ 万年筆 加藤さん 上 中	そう 戸 えんぴつ 生徒 方 (かた) 学校 ペーカーさん アメリカ人 靴 かばん 雑誌 ドア いくつ うしろ	いかが 料理屋 右 左 何 建物 パン 水	元気 便所 方 (ほう) まっすぐ タバコ おなか 魚	一度 停車場 ホテル 先 マッチ 肉 のど
人称代名詞	わたし わたくし	あなた	どなた			
指示代名詞	これ この ここ	それ その そこ	あれ あの	ここ それ その	そこ あれ	これ この
形容詞	赤い 小さい	白い 青い	黒い	ほしい		
動詞	ある			言う わかる すく	話す ある	待つ かわく

※原文はローマ字書きだが、筆者が適宜漢字かな混じり文に直した。

※初出52文は、SJのUnit 1のBasic Sentencesが52個であるため、それに合わせた。

(2-5-2)

In Japanese, *watakusi* and *anata* are used only when they are really necessary to make the sentence clear. If someone asks you, *Doko kara kimásita ka?* you know that means ‘Where did YOU come from?’ even though he has not used the word *anata*; and if you answer, *Beikoku kara kimásita*, he knows that you mean ‘I came from America’ even though you have not used *watakusi*.

Bloch&Jorden (1945c:33)

(拙訳) 日本語では、「わたくし」と「あなた」は、文の意味を明らかにするために本当に必要なときにしか使われない。もしだれかがあなたに「どこから来ましたか」と聞いたら、それは例え「あなた」という語を使っていなくても「あなたはどこから来ましたか」ということを意味しているのである。もしあなたが「米国から来ました」と答えれば、例え「わたくし」という語を使っていなくても、相手には「わたくしは米国から来ました」という意味だとわかるのである。

SJは長沼より一つの文の長さが短い。これは、SJが人称代名詞を使っていないこと、またSJがBasic Sentencesを暗記させることを目的としたためであろう。

以上の考察から、Spoken Language Seriesは、その構成、文の導入順序がどれも非常によく似たものになっていることが確認できた。またBasic Sentencesはどの教科書も、教える言葉がコミュニケーションの実際を忠実に反映したものとなっていた。こうした構成の類似性は、繰り返しになるが、Bloomfieldの主導のもと、その編集方針に従ってそれぞれの言語学者がそれぞれの言語の教科書を作成したためであり、その編集方針の制約は比較的強いものであったろうことが伺われる。

第6節. まとめ

第2章では、SJが成立した時代的背景を中心に考察してきた。その結果、SJは単独に企画されたものではなく、ほかに*Spoken Spanish*や*Spoken Chinese*など非常によく似た構成を持つSpoken Language Seriesが存在することが確認できた。それらは、もともとはWar Department Education Manualというアメリカの軍人のために準備された膨大な教育用教材の一部であった。

Spoken Language SeriesはBloomfieldがその中心的役割を果たし、アメリカの構造主義言語学者が一丸となって作り上げたものであることも明らかになった。BlochのSJのほか、Bloomfieldの*Spoken Dutch*と*Spoken Russian*など、言語学者BlochやBloomfieldの教育上の業績を掘り起こすことができたのは、第2章での研究の大きな意義である。

Jordenが日本語教育に著しい貢献をしたことは、日本語教育関係者の一部に認められるところであるが、その先駆けにBlochのSJの存在があることを認め、それをしかるべき位置に据えた上でアメリカにおける日本語教育史を記述する必要があるだろう。

<謝辞>

本研究に際して、Spoken Language Seriesの画像掲載許可を快く下さいましたLinguistic Society of AmericaのExecutive Director であるAlyson Reed氏に深く感謝申し上げます。また、画像掲載に関して、多大なご尽力を頂きました京都産業大学図書館並びに金城学院大学図書館の皆様には感謝致します。ありがとうございました。

<付記>

第2章は、池田（2014b）を加筆訂正したものである。

第3章. Bernard Blochの *Spoken Japanese* 所収の練習問題

第1節. はじめに

ASTP¹⁷の言語教育という、「模倣し、暗記する¹⁸」、「反復・模倣による暗記¹⁹」、「もっぱらおうむ返し²⁰」といったキーワードで説明されることが一般的である。そうした説明は、基本的には適切である。

太平洋戦争中のアメリカで、構造言語学者たちが言語教育に協力し、*Spoken Japanese*や*Spoken Dutch*などの外国語教育教科書を作成したことは、第2章で詳しく述べたとおりである。それぞれの教科書には練習問題が掲載されている。その中で、Blochが著したSJには、ほかのSpoken Language Seriesの教科書とは趣の異なる練習問題が数多く所収されている。Blochの練習問題は、現代の日本語教育に携わる者から見て、大変興味深く、また示唆に富むものであり、「おうむ返し」という枠組みで説明できるものではない。

本章の目的は、Blochが作成した練習問題を詳しく考察し、BloomfieldやJordenの作成した練習問題と比較することにある。

第2節. *Spoken Japanese* 前後の練習方法

太平洋戦争以前のアメリカは語学教育にさほど熱心でなく、話すことよりも読むことを優先した文法訳読法やリーディング・メソッドといった教授法が中心であった。戦争の遂行によって口語習得の必要が生じ、構造言語学者Bloomfieldを中心に外国語教育事業が盛んに行われ、その手法が後にASTP教授法と呼ばれるようになった。このことは既に第2章で論じたが、口語習得の必要と共に、外国語を話すための練習をする必要性が生じたと考えるのはごく自然の流れである。また、SJが教室での使用を前提とせず、軍人が独学で日本語を学べるように工夫された教科書であったことも、数多くの練習問題を必要とした理由であったろう。SJ以前に書かれたものは文法説明が中心で、少なくとも日本語教科書に限って言えば、練習問題が収められているものは見当たらない。例えば、Baba (1873)、Chamberlain (1888)、Yamagiwa (1942)、Henderson (1943)などの日本語教科書に練習問題は収録されていない。

しかし教科書に収録されていなくても、教室活動としては何らかの練習が行われていたであろう。第2節では、SJが書かれた1945年前後に行われていた教授法と、その主たる練習方法について考察する。

まず、ASTP教授法である。現在、ASTP教授法は、一般に次のように理解されている。いくつかの説明を引用する。

(3-2-1)

〔中略〕教授法にはオーラルアプローチが採用され、読む、書く、話す、聞く、の4技能のうち“話す”が最優先に教えられた。文法説明は米国人教師が行い、口頭練習は日系人インフォー

17 7ページの注5を参照のこと。

18 関 (1997:99)。

19 東海大学留学生教育センター編 (2005:52)。

20 小出 (1972:244)。

マントが受け持ち、学習者は徹底してインフォーマントの話し方を模倣し（mimicry）暗記する（memorization）という方法が採られた。

関（1997:99）

（3-2-2）

〔中略〕Spoken Japaneseについて少し述べると、ブロックはアメリカン、インディアン語の研究に広く用いられた構造言語学の理論と方法を応用し、日本語を分析研究し、それに基づいてこの本を著した。

特徴としては、

ア．話しことばを主体とする。（ローマ字だけを使う）

イ．何度も何度も繰り返す。繰り返すことによって、単語や文を覚えてしまう。

やり方としては、

ア．文法の説明は、アメリカ人の言語学者によって行われる。

イ．あとは、もっぱらおうむ返しに繰り返して練習する。文型練習とも違い、ただ文を何度も繰り返す。

文の提示は、必ずしも文法的に体系づいていないし、応用力はつかないかもしれないが、教師をモデルとして、何度も繰り返し言い、暗記することは話しことばの習得に役にたち、その後の日本語教育のみならず、ほかの言語教育にも直接間接に大きな影響を与えている。

小出（1972:244）

（3-2-3）

〔中略〕構造言語学の流れをくむ教授法にMim-mem Method（模倣記憶教授法）というものがあつた。これは第二次世界大戦中に、軍人に集中的に外国語を教えるために合衆国陸軍によって採用された方法である。これは外国語と文法に言語学的な記述を採用したこと、高い動機づけ、集中教育、小クラス制などの新機軸を出し、一時は奇跡だとまでいわれるほどものではやされたものであつた。この教授法は、場面を中心にして、その場面の中で使われる発話の基本的なものを模倣記憶練習法によって定着させるというものである。したがって、模倣・記憶による指導ではある一つの場面に遭遇したときにはいろいろな言い方ができるようになる。

たとえば、希望の表現のいろいろな文末形式「～タイ」、「～テホシイ」、「～テモライタイ」のいずれもができるというものである。しかし、この教授法では、ある固定した場面を中心とした発話を練習するから、場面の変動に対しては、たとえ、それが一定のわくの中の変動であっても、柔軟性を欠くものと考えられる。

鈴木（1972:213-214）

以上の引用からわかるように、ASTP教授法は模倣記憶練習法であつたと考えられている。しかしながら一括りにASTP教授法といっても、Bloomfieldの*Spoken Dutch*と、BlochのSJを比べると、所収されている練習問題は随分異なつたものである。どのような違いがあるのかについては、次節で検討していく。

ASTPより少し前、ハロルド・パーマー²¹はオーラル・メソッドを実践したが、その練習方法は有田（2009）によれば、次のようなものであったという。

(3-2-4)

〔中略〕speech=運用としての言語を習得するために、直接法によって、言語学習の5習性を身につけなければならないとした。5習性とは、音声の観察（auditory observation）、口頭での模倣（oral imitation）、口頭での反復（catenizing）、意味化（semanticizing）、類推による作文（composition by analogy）である。そして、これを行うための具体的な練習方法として、〔筆者注：パーマーは〕次の七つの練習活動をあげている。耳を訓練する練習（ear-training exercise）、発音練習（articulation exercise）、反復練習（repetition exercise）、再生練習（reproduction exercise）、置換練習（substitution exercise）、命令練習（imperative exercise）、定型会話（conversational exercise）であった。

これらの方法は、Darian（1969）、Bowen, Madsen & Hilferty（1985）によれば、米国ミシガン大学のチャールズ・フリース（C.C. Fries）によるオーディオ・リング法に大きな影響を与えた。特に、置換練習はパターン・プラクティスの先駆けであり、パーマーの理論と方法がアメリカの英語教育に大きく貢献していることは、定説になっている。

有田（2009:27-28）

パーマーの影響を受けて、長沼直兄が日本語教育で実践したのは、問答法である。問答法とは「教師が問い、学生が答えるやりとりのうちに、学生が日本語をよく聞き、教師のモデルに従って答えることによって、発音・文型を身につけていく方法」（浅野 1972:64）である。問答法の授業は、まず文型の提示を行い、次に練習が行われた。

(3-2-5)

最初の授業は、「これ（それ、あれ）は です。」という文型からはいる。説明なしで、いきなり始めてよい。教師は本・紙・鉛筆を用意する。〔中略〕教師は品物を一つ一つ取り上げて、「本」「紙」など繰り返して言って聞かせる。〔中略〕次に教師は普通で速度で自問自答する。

これは本ですか。 はい、そうです。

これは紙ですか。 はい、そうです。

これは鉛筆ですか。 はい、そうです。

浅野（1972:66）

(3-2-6)

提示のあとをうけて練習すなわちドリルを行なう。提示は各課ごとに出る新出語彙や文型を既習のものを手がかりとして紹介するのであるが、ドリルでは、新出ばかりでなく既習のもの

21 ハロルド・パーマー（Harold E. Palmer, 1877-1949）：パーマーはジョーンズ（Daniel Jones, 1881-1967）とともにロンドン大学で教育研究に携わり、オーラル・メソッド（Oral Method）という教授法理論を打ち立てた。後にパーマーは長沼直兄と親交を深めた。長沼の日本語教授法はパーマーのオーラル・メソッドの影響を強く受けていると言われている。（以上は関・平高（1997:78-81）の要約である。）

を自由に組み合わせて、学生がかなりの速度で反応するまで反復練習するのである。頭で理解しただけでなく、理解したことは口に出せるということが要求される。教師はじゅうぶんに準備して、よどみなく次から次へと質問を繰り返さなければならない、

浅野 (1972:75-76)

長沼の教科書*Basic Japanese Course*や*Grammar and Glossary*にはExerciseやDrillに該当する項目は見当たらないが、長沼の練習方法は、教師と学習者の間で問答を繰り返し行わせるというものであった。

松宮 (1936) は練習について次のように述べている。

(3-2-7)

〔中略〕練習であるが、ちょつと申述べて置きたいことは、上來述べ來つた所から、日本語教授法を帰納して見ると、大部分は口で言はせることであつて、即ち暗誦である。もとより、読ませる事も、書かせる事も致すのであるけれども、それも口で言はせることが伴ふのであつて、終始、暗誦が附纏つて離れないのである。さうすると、私は、最初に、暗誦をさせるために、今の日本語教授が面白くない結果を齎してゐると言つたが、やはり、實際は暗誦で行くのかといふことになつて、あまりに、矛盾してゐるではないかと咎められるかも知れない。

〔中略〕私は、平生から、所謂暗誦といふものを強制的に致したくないと思つてゐる。それは、暗誦の強制から来る弊害は、決して少くないことを知つてゐるからである。今、その弊害と見るべきものを挙げるならば、(第一) に、応用力がなくなることである。〔中略〕(第二) に、悪い癖が付き易いのである。暗誦をさせると同一の言葉や言方ばかりを、幾度も繰り返すのであるから、自然に、その間に一つの習慣的の癖が出来る。そして、一旦その癖がつくと、又中々取り去り難いものである。〔中略〕(第三) に、暗誦から来る記憶は間もなく亡失してしまふといふことである。

〔中略〕私の所謂暗誦は記憶する為ではない。唯、よく口に言ひ慣れさへすれば目的は達せられたのである。

松宮 (1936:275-287²²)

このように、松宮は暗誦が必要だと考えたが、強制的暗誦を嫌い、口に出して言い慣れるための暗誦こそが練習であるとしている。この点、ASTP教授法とは少し異なる。松宮 (1936) は、さらに実践的練習方法について詳しく述べているのだが、長くなるのでここでは引用しない。だが、この時代、練習についてこれだけ多くを言及した人物は少なく、実際に日本語教育に携わった人物ならではの練習に対する信念から学ぶべきところは多い。

なお、BlochはBloch (1946c) を書く際、Matsumiya (1935) を参照したと述べている²³。

22 表記は一部、新仮名及び新漢字表記となっている。

23 Bloch (1946c:307) は、研究の材料として‘Yahei Matsumiya, A grammar of spoken Japanese 57-64 (Tokyo, 1935)’を使用したと述べている。しかし、‘Matsumiya groups pairs of transitive and intransitive verbs in 13 classes according to the native Japanese grammatical analysis; but the classification is based on largely irrelevant features.’ (拙訳：松宮は日本の伝統的分析の方法によって自動詞他動詞のペアを13クラスに分けているが、その分類は見当違いの特徴に基づいている。) と批判している。

Blochが松宮を知っていたことは興味深く、一応ここに記しておく。

最後に、オーディオ・リンガル・アプローチについて、Jordenの*Beginning Japanese*を使用した授業での練習方法を、高見澤（2005）から考察しておきたい。

(3-2-8)

*Beginning Japanese*は、その教育手順が明解なテキストであり、正規の訓練を受けた教師はまったく同じ手順で教育を進めることになっていた。

1) Basic Dialoguesの教授法

- ①Listening（聞き取り練習—教師が対話を聞かせる）
- ②Pronunciation（発音練習—新出語彙と対話文の発音練習を通して暗記する）
- ③Fluency（流暢さ練習—対話文を流暢に話す練習）
- ④Conversation（対話の役割を分担して行う会話練習）

ジョーデンの対話指導の重点は、(1)正しい発音の習得と(2)対話文の暗記にあったので、Audio-Lingual Approachのミムメモ練習(mimicry- memorization practice)と同じ目的であったが、各段階の訓練目標が明らかにされていたので、教えやすく、教師には歓迎されていた。

〔中略〕ジョーデンの指導法は、上述のとおり、音声教育を重視し、母語話者並みの正確さを求めているとともに、文型の正確な運用の指導にも重点を置いていたので、あらゆる種類の文型練習を開発していた。

2) 文型練習の教授法

文型練習としては、ジョーデンは主として次の6種類を多用していた。

- ①Substitution Drill（代入練習）
- ②Grammar Drill（文法練習・転換練習）
- ③Response Drill（応答練習）
- ④Level Drill（待遇表現練習）
- ⑤Expansion Drill（拡大練習）
- ⑥Supplementary Conversation（補足会話）

これらの練習は、Audio-Lingual Approach系のテキストでは一般的に使われているが、*Beginning Japanese*の場合は、量的にも種類の面でも極端に多く、練習の中心となっているといえる。特に、学習者の誤用を誘わないSubstitution Drillを多用している。また、社会での実用性に主眼を置くジョーデンは、待遇表現の訓練も重視し、Level Drillも他のテキストは比べものにならないほど、多く取り入れている。これによって「普通体」と「敬体」や「謙讓体」「丁寧体」などを対比させながら練習する手法が日本語教育で行われることになった。これらの文型練習の手法は、それ以降の日本語テキストの開発者に採用され、多大な影響を与えている。

高見澤（2005:10-11）

以上、SJ前後の教授法とその主たる練習方法について考察してきた。

なお、現代の日本語教育でよく行われている練習には、主に次のようなものがある。ここでは石田（1988）を要約する形で紹介しておきたい。

(3-2-9)

【文型練習】

a. 模倣練習 (Mim-men drill)

教師が口頭で与える文を模倣させる。

b. 代入練習 (Substitution drill)

例1:これは本です。「机」……これは机です。

c. 変形(転換)練習 (Transformation, Conversion drill)

例1:今日は寒いです。「否定形に」……今日は寒くないです。

「質問形に」……今日は寒いですか。

d. 応答練習 (Question & answer drill)

条件を与えて質問に答えさせる。

例1:今日は寒いですね。「いいえ」……いいえ、今日は寒くありません。(寒くないです。)

e. 拡張(展開)練習 (Expansion drill)

与えられた語句を付け足しながら、次第に長い文を作らせる。

例:本です。……本です。

「日本語の」……日本語の本です。

「友達に貰った」……友達に貰った日本語の本です。

「この間」……この間友達に貰った日本語の本です。

「これは」……これはこの間友達に貰った日本語の本です。

【ロールプレイ】

1. 特定の場面を設定したロールプレイ

ある場面を設定し、役割を与えて、会話を行わせる。場面の設定は学習者が実際に遭遇すると思われるものを選ぶ。

2. シュミレーションにおけるロールプレイ

ある状況についての情報を提示し、解決すべき問題や遂行すべき役割を学習者に与える。

【情報交換(コミュニケーション・ギャップを埋めるドリル)】

学習者は2人で組んで、または二つのグループA、Bに分かれて活動する。AとBにそれぞれ異なるインフォメーションを与える。相互のインフォメーションについて教え合い、最後には両者が相手のインフォメーションについて説明できるようにする。

【タスク】

ある達成すべき課題を与える。

【その他のドリル】

ビンゴやクロスワード・パズル、ゲームなど。

石田 (1988:152-158)

第3節. ASTP教授法の練習問題

ASTP教授法と一括りにいっても、BlochのSJとBloomfieldの*Spoken Dutch*に収録された練習問題が随分異なるものであることはさきにも述べた。第3節では、その違いを詳細に考察していく。

第1項. *Bloomfield*の*Spoken Dutch*

*Bloomfield*の*Spoken Dutch*には、次のような12パターンの練習問題がある。それぞれ何問かを簡潔に引用する。【 】は、それぞれの問題がどのような能力に着目して作られたものであるかを、筆者が分析したものである。

(1) Situationを英語で与え、それにぴったりのオランダ語を選ぶ練習²⁴。【語彙】

1. You meet Mr. Dekker one morning about nine o'clock. You say:

a. ghoedën- AAvënt, mẽneer-DEKKër.

b. ghoedën- MORghën, mẽneer-DEKKër.

Bloomfield (1944:17²⁵)

(2) 発音練習 【音声】

MAN 'man'

DACH 'day'

WAT 'what'

DAT 'that'

DANKën 'thank'

Bloomfield (1944:10)

(3) Listening In 【談話】 【聴解】

1. Asking Information.

Jan : nec-mě-niet-KWAALIK-měneer.

WAAR IS-ër ěn-rěstoRANG?

de-HEER : ěr-is ěn-hooTEL RECHS, en-ěn-rěstoRANG rechTUIT.

JAN : wat-BLIEFT-uu?

Ik-fěrSTAA-niet wat-uu-ZECHT.

WILT-uu als-t-uu-BLIEFT LANGsaam-spreekën?

De-HEER : HIER is-ěn-hooTEL.

HIER RECHS.

En-HIER rechTUIT is-ěn-rěstoRANG.

věrSTTAT-uu wat-ik-ZECH?

JAN : JAA-měneer.

Ik-verSTTA-uu.

Dank-uu-WEL-měneer.

24 練習問題は、(1) から (6) までは、第2項の*Spoken Japanese*の問題提示順と同じ順番に並べた。(7) 以降はページ順に並べた。

25 *Spoken Dutch*のオランダ語はAids to ListeningとConventional Spellingの2種類の表記が書かれている。例えば‘Good morning!’はAids to Listeningでは‘ghoedën-MORghën!’、Conventional Spellingでは‘Goeden morgen!’ (Bloomfield 1944:2) と書かれている。両方の表記が書かれている場合、本研究ではAids to Listeningの方のみを引用した。

De-HEER : niets-te-DANKĕn. DACH!

JAN : DACH-mĕneer!

Bloomfield (1944:18-19)

(4) 会話練習 【ロールプレイ】

Conversation 1. A asks B (a woman) for information

A: apologizes for speaking to B and asks where a restaurant is.

B: gives directions – to the right, to the left, or straight ahead.

A: apologizes and explains that he doesn't understand. He asks B to repeat, more slowly.

B: repeats slowly and clearly and asks A if he understands.

A: says he understands and thanks B

B: says A is welcome.

A: says good-by.

B: says good-by.

(拙訳)

会話 1. AがB（女性）にたずねるシーン

AがBに声をかけたことを詫び、レストランはどこかたずねる。

Bは道案内をする—例えば右へ行くとか、左へ行くとか、まっすぐ行くなど。

Aは理解できなかったことを言い、詫びる。そしてもう一度言ってくれるよう頼む。

Bはゆっくりはっきりと繰り返し、Aに分かったかどうか聞く。

Aは理解できたといい、Bにお礼を言う。

Bはどういたしましてと言う。

Aが別れる挨拶をする。

Bも別れる挨拶をする。

Bloomfield (1944:23)

(5) True or False 【聴解】 【意味論】

Each student is to take a sheet of paper and write down along the side the numbers from 1 through 80. Then the Guide, or the records will give you a series of eighty statements, repeating each one twice. You should have no trouble understanding these statements if you have done the work properly up to this point. Each statement is either obviously true, or else usually false. Of the statement is obviously true, mark a T by the corresponding number on your paper; if it is usually false, mark an F by the corresponding number on your paper.

Bloomfield (1944:112)

(拙訳) 学生は紙に1～80までの番号を書きます。ガイドまたはレコードが80個の文を2回ずつ読みます。ここまでしっかり勉強してきていれば難なく理解できるはずです。それぞれの文は明らかに正しいか、そうでなければ間違っています。文が正しいときはT、間違っているときはFを書きなさい。

(6) 英語の文を、オランダ語に訳す練習。【翻訳】

1. Good evening, sir.
2. What time is it?
3. It's four o'clock.

Bloomfield (1944:113)

(7) 質問をオランダ語で与え、オランダ語で答える練習。【意味】【会話】

例 1)

1. WAT-hept-uu ghistër-AAvēnt ghěDAAN ?
2. bent-uuOOJT in-niew-JORK-ghěweest?

Bloomfield (1944: 204)

(8) Aから文の前半部を、Bから文の後半部を選び、一つの文に結合する練習。

【マッチング】

A	B
1. Het spijt me erg.	1. maar het nummer was in gesprek.
2. Aangenaam	2. blijven we altijd thuis.
3. Eergisteren	3. voor de mannen.

:

:

Bloomfield (1945:269)

(9) オランダ語の文を読み、意味がわかるか確認する練習。さらに声に出して練習。

【意味】

1. Toen ik het licht aandraaide, zag ik dat er niemand in de kamer was.
2. Zij waren allemaal uitgegaan.

Bloomfield (1945:306)

(10) 英語の指示を読んで、そのとおりに実践する練習。【意味論】

1. Tell someone that you have to write a letter to your family.
2. Ask for pen and ink.
3. Ask someone to lend you his fountain pen.

Bloomfield (1945:344)

(11) 誰かに何かを依頼する文を考える練習。【作文】

1. Cash a check.
2. Deposit this check.
3. Endorse this check.
4. Give you a receipt.
5. Exchange your American money for Dutch money.

(12) 復習 【意味論】

例 1) 90個の規則的分詞を含む文を読んで、意味を確認する練習。

English Equivalents

Conventional Spelling

1. Have you answered his letter?

Hebt U hem al op zijn geantwoord?

2. What did she mean by that?

Wat heft zij daarmee bedoeld?

3. Before the boat leaves, a bell is rung three times. Voor de boot vertrekt, wordt er drie keer gebeld.

Bloomfield (1945:423-424)

以上の12パターンの練習のうち、(1) から (6) は *Spoken Dutch* 以外の教科書、例えば筆者が確認したところ、*Spoken Portuguese*、*Spoken Spanish*、*Spoken Chinese*にも共通して配置されている問題である。次節で考察するSJにも同じような問題がある。

Bloomfieldの練習は (6) の翻訳練習が一番多い。問題数は少ないものの (8) のような結合練習、(11) のような依頼文を考えさせる練習も若干見られる。

翻訳練習が多いことは少し意外な気がする。Bloomfieldは ‘The sounds, constructions, and meanings of different languages are not the same: to get an easy command of a foreign language one must learn to ignore the features of any and all other languages, especially of one’s own.’ (Bloomfield 1942:1) (拙訳：異なる言語の音、構造、意味は同じではない。外国語を習得するためには、ほかの言語、特に英語の特徴を無視しなければならない) と述べた。しかし翻訳練習ではやはり英語を強く意識してしまう。英語と外国語は構造も意味も全く異なると述べたBloomfieldだが、練習方法としては訳読法に意味を持たせたということであろうか。

第2項. Blochの*Spoken Japanese*

BlochのSJには、次のような52パターンの練習問題がある²⁶。

(1) Situationを英語で与え、それにぴったりの日本語を選ぶ練習。【語彙】

1. You meet someone on the street.

a. Aríгато gozaimasu.

b. Koñniti wa.

c. Sayonára.

Bloch&Jorden (1945c:11²⁷)

(2) 発音練習 【音声】

ikága

sayonára

wakarimásu ka

26 練習問題は、*Spoken Japanese*での問題提示順と同じ順番に並べた。

27 *Spoken Japanese*の表記は、原文どおり引用した。á、í、ú、é、óはアクセント核を表し、ñは「ん」を表している。

tabako

Bloch&Jorden (1945c:14)

(3) Listening In 【談話】 【聴解】

1. MR.TANAKA MEETS MR.DOE ON THE STREET.

Tanaka : Koñniti wa.

Doe : Koñniti wa.

Ikága desu ka?

Tanaka : Aríгато gozaimasu.

Aikawarazu géñki desu.

Tabako ga hosíi desu ka?

Doe : Háí.

Aríгато gozaimasu.

Mátti ga arimásu ka?

〔中略〕

Bloch&Jorden (1945c:22)

(4) 会話練習 【ロールプレイ】

Conversation 1. Asking for information

A sees B on the street and asks him to wait a moment.

A and B exchange greetings.

A asks the way to a restaurant, a hotel, or a movie theater.

B says it is to the right or the left or straight ahead.

A doesn't understand and asks B to repeat.

B repeats the information, speaking more slowly.

A says he understand, and thanks B.

B replies, and they both say good-bye.

Bloch&Jorden (1945c:24-25)

(5) True or False 【意味論】 【語彙】

1. Sakanaya wa, komé o tukurimasu.

Bloch&Jorden (1945c:77)

(6) 英語を適切な日本語に訳す練習。【翻訳】 【語彙 (数)】

1. Bring me the second book from the right.

2. This is his third glass of beer.

Bloch&Jorden (1946:548)

(7) 空欄を埋める問題。【文法】

・ 空欄に、(arimásu, imásu, désu) のどれかを入れる。

例) 1. Anáta no tomodati wa, Nihóñ ni _____.

Bloch&Jorden (1945c:47-48)

(8) 提示された英語にぴったりの日本語訳を見つけ、線で結ぶ練習。

【翻訳】【マッチング】

- | | |
|---------------------------|-------------------------------------|
| (a) What is your name? | (u) Hikóoki de ikimásita. |
| (b) He is an English man. | (v) Anáta no namae wa, náñ desu ka? |
| (c) I went to Japan. | (w) Tookyoo máde ikimásita. |

Bloch&Jorden (1945c:48)

(9) 文の前半を与え、適切な後半の文を三つの中から選ばせる練習。

【語彙】【意味論】【マッチング】

1. Anáta no namae wa, (a) dóko ni arimásu ka?
(b) náñ desu ka?
(c) dare desu ka?

Bloch&Jorden (1945c:48-49)

(10) 職業と関連するものを結ぶ練習。また、結んだ二つの語を使って文を作る練習。

【語彙】【作文】

- | | |
|---------------|--------------|
| (a) isya | (u) komé |
| (b) súihei | (v) ryooríya |
| (c) hyakusyóo | (w) zimúsyo |
| (d) zimúñ | (x) doogú |
| (e) syokkoo | (y) kusuri |
| (f) kyúuzi | (z) húne |

Bloch&Jorden (1945c:76)

(11) 部屋の家具の配置を、ほかの言葉で言い換える練習。【語彙】【意味論】

Hóñ no sita ni wa, zassi mo arimásita.

→Zassi wa hóñ no ue ni arimasita.

Bloch&Jorden (1945c:82)

(12) 2 文を結合させる練習。【結合】

1. (a) Kono heyá wa, ookíi desu.
(b) Kono heyá wa, suzusíi desu.

Bloch&Jorden (1945c:120)

(13) 質問を日本語で与え、ぴったりの答えを選ぶ練習。【Q&A】【意味論】

1. Kinoo no téñki wa, dóo desita ka?

- (a) Kinóo wa, sáñpo-simaséñ desita.
- (b) Kinóo wa, samúi desita.
- (c) Kinóo wa, sakana o tábeta kara, byooki désita.
- (d) Kinóo wa, áme ga hütte, kaze mo hukimásita.
- (e) Kinóo wa, zidóosya de inaka e ikimásita.

Bloch&Jorden (1945c:138)

(14) 五つの語の中から、仲間外れの語を探す練習。【語彙】

そして残りの四つが全て当てはまる文を作る練習。【作文】

1. (a) hyakusyóo

- (b) zimúñ
- (c) beñzyó
- (d) kyúuzi
- (e) syokkoo

Bloch&Jorden (1945c:145)

(15) グループ 1、2 からそれぞれ反対の意味になる語を探す練習。【語彙】

また、反対語がどちらでも入り得る文を一つ作る。【作文】

例えば atatakái と suzusii なら、Kyóo wa, téñki ga atatakái (or suzusii) desu (Bloch&Jorden 1945:146) のような文を作る。

Group 1

Group 2

- | | |
|-----------|------------|
| (a) déru | (a) akeru |
| (b) géñki | (b) atúi |
| (c) íi | (c) byooki |

Bloch&Jorden (1945c:146)

(16) 日本語の計算問題に、日本語で答える練習。

【語彙 (数)】【意味論】【Q&A】

1. Kono eñpitu wa, zisséñ desita. Teñiñ ni gozísseñ yarimásita. Oturi o íkura moraimásita ka?

Bloch&Jorden (1945c:168)

(17) 四則計算の問題に、日本語で答える練習。

【語彙 (数)】【意味論】【Q&A】

1. Nízyuu ni rokú ó tasu to, íkutu ni narimásu ka?

2. Zyusí kara rokú o hiku to, íkutu ni narimásu ka?

Bloch&Jorden (1945c:168)

(18) 数を数える問題。【語彙 (数)】

Practice counting out loud from 1 to 150. Count first by ones, then by twos, then by threes, and so on.

Bloch&Jorden (1945c:169)

(拙訳：声に出して1～150まで数える練習をなさう。はじめは1,2,3…のように、次に1,3,5…のように、次に1,4,7…のように数えなさい。)

(19) ゲーム 【語彙 (数)】 【ゲーム】

【a game of Buzz】

First, decide on a number —say 7. Then count in Japanese as fast as you can; but every time you come to a number that can be divided by 7, or that contains the number 7 (sití), you skip that number and say “Buzz” instead. The player who can count from 1 to 150 in this way with the fewest slips wins.

Bloch&Jorden (1945c:169)

(拙訳：バズゲーム:まず、一つ数字を決めなさい。例えば7に決めたとする。次に日本語でできるだけ早く数を数えなさい。ただし7で割り切れる数、もしくは7そのものを含む数に来たら、言わないで、代わりに「バズ!」と言いなさい。早く1～150まで数えられた人が勝ち。)

(20) 日本語の文を与え、適切な形に変形する練習。【活用】

1. Watakusi wa, háyaku arúku koto ga dekimasu.

(→For each sentence, make up three other versions: one in the past tense, one negative, and one negative past.)

Bloch&Jorden (1945c:220)

(21) 日本語で、算数の文章問題を作る練習。各問題は四つの説明文の後に質問が来るようにすること。【語彙 (数)】 【作文】

Watakusi wa, éñpitu o gohoñ mótte imasita.

Kodomo ni, sáñbon yarimásita.

Tomodati kara, yóñhoñ moraimásita.

Moo róppoñ kaimásita.

Watakusi wa, íma, náñboñ mótte imasu ka?

Bloch&Jorden (1945c:237, 256)

(22) 名詞と、それに対応する数量詞を選ぶ。【語彙 (数)】

そして両方を使った文を作る練習。【作文】

básu gomai

biñseñ háppoñ

déñsya hitótu

eñpitu ittuu

Bloch&Jorden (1945c:256)

- (23) 示された家系図をもとに書かれた10個の文を読み、名前か家族用語のうちのどれか1個を変えて、正しい文に直す練習。【読解】【語彙（家族用語）】【意味論】

1. Tíyoko wa, Tároo no imootó desu.

Bloch&Jorden (1945c:294-295)

- (24) 自分の家系図を書いて、それぞれの人間関係を表す日本語の文を10個作る練習。

【語彙（家族用語）】【意味論】

Bloch&Jorden (1945c:296)

- (25) 名詞句に適切な動詞を結び付ける練習。【語彙】【マッチング】

そしてそれらを用いた文を作る練習。【作文】

kaze ga	sóru
kami o	tabéru
bíiru o	kariru
sibai o	nómu
hige o	karu

組み合わせたものを、Non final clauseで使った文を作る練習。【作文】

ex) Hón o yóñde, tegami o kakimásita.

Bloch&Jorden (1945c:314)

- (26) 三つの文を、事が起きた順番に並び替える練習。【意味論】【結合】

三つの文を、事が起きた順番に並び替え、さらに三つの文を一つにする練習。

1. (a) Kamí o katte moraimásita.
- (b) kami ga añmari nágaku narimásita.
- (c) Tokoya e ikimásita.

Bloch&Jorden (1945c:329)

- (27) () 内の語を、適切な形に変える練習。【活用】

・ (→gerund)

1. Gaitoo o (kiru) mo (kinai) mo íi desu.
2. Tomodati ga (ikanai) mo, watakusi wa ikitái desu.

Bloch&Jorden (1945c:330)

- (28) 英語でsituationを与え、その時の発話として最も適切なものを選ぶ練習。

【語彙】【意味論】

1. Which man is talking to the barber?
- (a) Náñzi ni huró ni háiru tumori desu ka?

- (b) Ano akai hón wa, ikura desu ka?
 (c) Kamí ga sukósi nágaku nátta kara, katte kudasái.

Bloch&Jorden (1945c:330-331)

(29) 日本語の短い話を聞いたり、日本語で示された図を見て、日本語の質問に英語で答える練習。【聴解】【読解】

【Story of Mr. Tanaka】

Tanaka-sañ ní wa ókusañ to hutarí no kodomo ga átte tookyoo ni súñde imasu. Tanaka-sañ no utí wa atarasíkute ookii desu. Ie no usiro ni wa kirei na niwa ga arimasu. Musuko no tároo-sañ to musume no Hánako-sañ wa yóku soko de asobímasu. Tároo-sañ wa zissai de Hánako-san wa hássai desu. Hutarí wa tikáku no oka no ue ni áru gakkoo e itte beñkyoo-site imasu. [中略]

Unknown (1945: 'key to exercises and tests' より)

1. Tanaka-sañ wa, dóko ni súñde imasu ka?
2. Tanaka-sañ wa, doñna utí ni súñde imasu ka?

Bloch&Jorden (1945c:336)

(30) 24個の名詞のうち、時間を表すものにT、場所を表すものにP、両方を表すものにT、Pと書く練習。さらに文を作る練習。【語彙】【作文】

aida	kinóo	móto	sóba
ása	kotosi	náka	sóto
asitá	kyóneñ	ototoi	sugí

Bloch&Jorden (1945c:339)

(31) 数量詞を含む名詞句を使って、文を作る問題。【語彙 (数)】【作文】

1. tegami o nituu
2. sañsēñ sika
3. hakkágetu
4. okási o hitóhukuro
5. hassatú no hón ga

Bloch&Jorden (1945c:339)

(32) 複合動詞を作る練習。【活用】

1. hataráku, sugíru
2. beñkyoo-suru, hazimeru

Bloch&Jorden (1946:374)

(33) 文型を変える練習。【変型】

(‘Let’s do so-and-so’ → ‘Let’s decide to do so-and-so’)

1. Kono matí ni sumimasyóo.

2. Kónbāñ, éiga o mí ni ikimasyóo.

Bloch&Jorden (1946:375)

(34) 与えられた文の続きとして、最も適切なものを選ぶ練習。【意味論】【マッチング】

1. Ima hirugóhan o tábe ni ikoo to omótte iru tokoro desu.

(a) Ima gózi desu.

(b) Ima hatízi desu.

(c) Ima zyuunízi desu.

Bloch&Jorden (1946:530)

(35) これまでに習った語や句、文を英語で聞いて、すぐ日本語に直す練習。【翻訳】

The leader will call out various English words and phrases from Parts One and Two, and will ask the members of the group, one at a time, to give the Japanese equivalent. Don't prepare for this part of the review, but try to think of the proper Japanese word or phrase as soon as you hear the English, and snap out the answer when you are called on.

Bloch&Jorden (1946:557)

(拙訳) パート1とパート2で勉強した語や句をリーダーが英語で言うので、グループのメンバーはそれをすぐ日本語に直しなさい。この練習のために準備をしてはいけない。英語を聞いてすぐに日本語の語や句を考えなさい。そして呼ばれたらすぐに答えなさい。

(36) 36個の形容詞の意味を確認し、そのうち12個は「より」、12個は「ほど」、12個は「一番」を含んだ文を作る練習。【語彙】【作文】

amai, asai, atatakái, atúi, atui, hayái, hosíi, hosói hukái など

Bloch&Jorden (1946:596)

(37) 日本語で質問し、日本語で答える練習。【Q&A】【意味論】

1. Tamágo to náihu to, dóтира no hoo ga kowareyasúi n̄ desu ka?

2. Anáta wa, tañzyóobi ni náni ga itibañ hosíi n̄ desu ka?

Bloch&Jorden (1946:610)

(38) 比較表現を含む疑問文を作る練習。【作文】

Practice making up questions that involve comparison, on the model of the ones given in Note 19.15.

Bloch&Jorden (1946:611)

(拙訳) Note19.15をもとに、比較表現を含む疑問文を作りなさい。

(39) 日本語で質問を与え、正しい答えを三つの中から選ぶ練習。【意味論】【語彙】

1. Niñziñ ya daikoñ ya hooréñsoo nádo o uru hito wa, nán to iimásu ka?

(a) yaoya; (b) tabakoya; (c) kyokuin

2. Depáato de hataraité ite, monó o utte iru oñña no hitó wa, nán to iimásu ka?

(a) zyotyuu; (b) tenin; (c) kyúuzi

Bloch&Jorden (1946:631)

(40) 文の前半、後半を探して、結びつける問題。【マッチング】【意味論】

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1. Zidóosya o asoko de tomeru to, | a. takái hoo o kaú ñ desu ga . . . |
| 2. Tomodati no tañzyóobi da kara, | b. nání ka tyuumoñ-simasyóo. |
| 3. Yaoyasañ ni deñwa o káketé, | c. to kikaremásita. |
| 4. Okane sáe áreba, | d. nání ka kawanákereba narimaséñ. |
| 5. Dóko de umaretá ka | e. zyúñsa ni sikararemasu. |

Bloch&Jorden (1946:646)

(41) 縮約形を作る練習。【活用】【音声】

The passive causative verbs in the Basic Sentences are all given in the longer form. Go back to the Basic Sentences and change all the passive causatives to the shorter form.

Bloch&Jorden (1946:666)

(拙訳) Basic Sentenceの受け身使役形の動詞は全て長い形で提示されている。これら全ての受け身使役形を、縮約形にしない。

(42) 同音異義語。【語彙】【意味論】【音声】

You have learned several pairs of words that sound alike but mean different things, like English ‘(rubber) band’ and ‘(brass) band’. Each of the following pairs of phrases contains a word-pair of this kind. Use each phrase in a sentence that will make the meaning of the doubtful word clear.

Bloch&Jorden (1946:666)

(拙訳) 英語の（ゴム）バンドと（ブラス）バンドのように、音は似ているが意味は異なる語をいくつか勉強した。次の句のペアはこの種の同音異義語を含んでいる。それぞれ文を作り、意味を確定させなさい。

1. (a) watakusi no utí
(b) ása no uti
2. (a) Nihon no húne
(b) níhon no enpitu

(43) () の三つのうち、正しい答えを選ぶ問題。【語彙】【意味論】

1. (Inú, niwatori, néko) wa, tamágo o umimasu.
2. Nihóñ zya, tá o tagayásu toki ni (usi, kotori, buta) o tukaimasu.

Bloch&Jorden (1946:712)

(44) Riddles (なぞなぞ) 【読解】【語彙】【意味論】【なぞなぞ】

1. Watakusi wa tatémono desu. Watakusi ní wa, heyá ga takusañ arimasu. Kodomótati wa, watakusi

no náka de beñkyoo-simasu. Watakusi wa, nāñ desu ka?

Bloch&Jorden (1946:732)

(45) 文の最後の述語を「ながら」に変えて non-final clause にし、後半の文を考える練習。【活用】
【作文】

1. Hutótta kyúuzi wa, utá o utatte imasu.
2. Mégane o káketa gakusei wa, siñbuñ o yóñde imasu.

Bloch&Jorden (1946:741)

(46) 左側の英語表現にぴったりの日本語表現を、右側から探す練習。ただし、英語の文より日本語の文の方が多いため、全部結びつけることはできない。

【翻訳】 【マッチング】

- | | |
|-------------------------------|--|
| (a) Let's go and have a look. | (1) Seiyoo huu no desu ka? |
| (b) Will it be all right? | (2) Tábuñ |
| (c) Of course. | (3) Rokkágetu mo máe kara, tate hazimetá ñ desu. |
| (d) I think so. | (4) Ikkai dake desu. |
| (e) Probably. | (5) Kooeñ no tikáku da kara, kúuki wa íi ñ desu. |

Bloch&Jorden (1946:782)

(47) 語の意味を日本語で説明する練習。【語彙】 【作文】

1. Kondate 2. Kóogai 3. matiáisitu 4. nakóodo 5. seiyoo huu 6. syokudóosya 7. syosai 8. yoosi

Bloch&Jorden (1946:783)

(48) Plain style に変える練習。【スピーチスタイル】

Go back to the Listening In of Units 21, 22, and 23. Turn the conversations into the plain style by changing all verbs, adjectives, and copulas into the plain form and making any other changes that are necessary.

(拙訳: Unit 21, 22, 23 の Listening In に戻り、動詞、形容詞、繫辞を plain form に変え、また必要ならばそれに応じてほかの部分も変えて Plain Style にしなさい。

Bloch&Jorden (1946:796)

(49) 適当な助数詞を入れて文を完成させる練習。【語彙 (数)】

1. Húne ga 3 háitte kimasita.
2. Kono uti ni imá ga 2 arimasu.
3. Kono murá ni wa, ryooríya wa 1 mo arimasén.

Bloch&Jorden (1946:838)

(50) 自動詞他動詞の復習。文作り。【語彙 (自他)】 【作文】

Bloch&Jorden (1946:889)

(51) () の中から、正しい助詞を選ぶ練習。【文法】

1. Koko (kara, keredomo) sañtyoo (bákari, sika) iku (wa, to), migi (ni, no) hoo (ni, e) áru (kara, to) omoimasu.

Bloch&Jorden (1946:889-890)

(52) 与えられたトピックについて、5分で話す練習。【自由発話】

1. Describe in detail the layout of a typical American home, or of your own home. Tell what rooms are on each floor, where they are with relation to each other, and where they are with relation to each other, and what each one is used for. Describe the furnishings of each room. Be as explicit as you can.

Bloch&Jorden (1946:895)

以上が*Spoken Japanese*に所収されている52パターンの練習問題である。Blochが作成した問題はBloomfieldの練習問題に比べると量も多く、パターンも多種多様である。

これら練習問題は、Basic Sentenceを全て丸暗記すれば簡単に答えられるという類の問題ではない。例えばBasic Sentenceに「木の下で子どもが遊んでいます」があり、Additional Exampleに「木の下に雑誌と本があります」がある課の練習に、「木の下 __ __ いすがあります」の下線部に適切な助詞を入れなさいという問題がある。この下線部に「に」と「は」を入れることは、単にBasic Sentenceを暗記しただけで機械的にできるというものではないということは明らかである。

第3項. *Beginning Japanese* の練習問題

*Beginning Japanese*の練習問題は、既に第3章第2節で高見澤（2005）を引用したが、具体的にどのようなものであったか、幾つか例を挙げておきたい。

(1) 発音練習

Practice 1

a ‘oh!’ A-o ‘blue’ u-E ‘top’ e ‘picture’

A-a ‘oh!’ I-I ‘is good’ o-I ‘nephew’ E-e ‘yes’

A-i ‘love’ i-E ‘house’ o-O-I ‘are many’ o-U ‘owe’

A-u ‘meet’ i-I-E ‘no’ a-O-I ‘is blue’ o-O-u ‘conceal’

Jorden (1963a: xxii²⁸)

(2) 代入練習

A. Substitution Drill

1. Where is that? Sore (wa) doko desu ka

2. Which one (of three or more) is that? Sore (wa) dore desu ka

3. How is that? or How about that? Sore (wa) doo desu ka?

28 表記は全て*Beginning Japanese*の原文どおり引用した。ただし、原文ではアクセントや文末イントネーションの表記があるが、ここでは省略した。

Jorden (1963a:83)

(3) 文法練習

I. Grammar Drill (based on Grammatical Note 5)

Tutor: Koko ni arimasu. /soko/ 'It's here.' /there'/

Student: Soko ni mo arimasu. 'It's there, too.'

1. Eki no mae ni arimasu. /yoko/ Eki no yoko ni mo arimasu.
2. Tanaka-san (wa) Tookyoo ni imasu. /Yamamoto-san/ Yamamoto-san mo Tookyoo ni imasu.
3. Tookyoo ni ryoozikan (ga) arimasu. /Koobe/ Koobe ni mo ryoozikan (ga) arimasu.

Jorden (1963a:87)

(4) 応答練習

K. Response Drill (based on Grammatical Note 2)

(Give the answer in the same basic form as the question.)

1. Koko (wa) doko desu ka Koobe desu.
/Koobe/
2. Amerika-taisikan (wa) doko ni arimasu ka Tookyoo ni ariimasu.
/Tookyoo/
3. Asoko ni nani (ga) arimasu ka Kooen (ga) arimasu.
/kooen/

Jorden (1963a:88)

(5) 待遇表現練習

L. Level Drill

1. Tanaka-san imasu ka Tanaka-san irassyaimasu ka
2. Tabako arimasu ka Tabako gozaimasu ka
3. Tyotto matte kudasai. Syoosyoo omati kudasai.

Jorden (1963a:88)

(6) 拡大練習

M. Expansion Drill

1. [It]'s beyond Mukoo desu.
2. [It]'s beyond the post office. Yuubiñkyoku no mukoo desu.
3. [It]'s beyond the big post office. Ookii yuubiñkyoku no mukoo desu.
4. [It]'s beyond that big post office. Ano ookii yuubiñkyoku no mukoo desu.
5. Tokyo Station is beyond that big post office. Tookyoo-eki (wa) ano ookii yuubiñkyoku no mukoo desu.

Jorden (1963a:89)

Short Supplementary Dialogue

1. A: Watakusi no zisyo doko desu ka
B: Koko desu yo
2. A: Kyoo no sinbuu koko desu yo
B: Wakarimasita. Doomo.
3. A: Tanaka-sa~n to Yamamoto-sa~n imasu ka
B: Tanaka-sa~n wa iimasu ga, Yamamoto-sa~n wa imase~n.

Exercises.

1. Answer the following on the basis of the diagram on page 92. (道案内)
 - a. True-False
 - (1) Eki no mae ni deñwa ġa arimasu.
 - (2) Eki no tonari wa depaato desu.
- B. Answer the following questions for Mr. Tanaka, who is facing in the direction of the arrow.
 - (1) Giñkoo wa saki desu ka
 - (2) Eki wa dotira desyoo ka
2. Using the diagram on page 92, other similar diagrams, photographs, or models, take turns asking and answering questions about the identity and location of the buildings. Always use ‘left’ and ‘right’ relative to a position facing the front of a building.
3. You ask a stranger: The stranger replies:
 - a. where the American Embassy is. It’s that way.
 - b. where the Imperial Hotel is. It’s near the Nikkatsu Building.
 - c. where Tokyo Station is. It’s beyond that big building.
4. Practice the Basic Dialogues with variations and appropriate props.

Jorden (1963a-91-93)

第4節. 考察

SJの練習問題が、それぞれどのような能力に着目して作られたものであったのかを評価し、まとめたものが61ページの表3-1である。

表3-1からSJで多用された練習として、作文練習、数と数量詞に関する語彙の練習、応答練習、結合練習、変型練習を挙げることができる。特に数と数量詞に関する練習が多いことは注目すべき点である。優秀な音声学識者であり、かつ日本語学習者でもあったBlochが、数を数えるときの日本語の不規則な音変化を面白く感じ、よく練習する必要性を感じたのだろう。暗記が多く、単調になりがちな数の練習だが、Blochの問題はどれもとても面白いものである。SJ以前の日本語教科書だけでなく、現在使用されている日本語教科書でさえ、数にこれほど詳しく言及したものは見当たらない。縮約形や同音異義語に関する練習問題も音声にこだわったBlochならではの問題と言えよう。

また、(48)のように、スピーチスタイルに着目した練習があることは興味深い。スタイルに着目した練習を現代の日本語教育に定着させたのはJordanだと(3-2-8)で引用した高見澤は

【表3-1. Spoken Japanese 収録の練習問題一覧表】

	音声	翻訳	談話	ロールプレイ	意味論	文法	語彙	読解	聴解	活用	作文	マッチング	結合練習	Q & A	変形練習	スタイル	ゲーム・ なぞなぞ	自由発話
(1)							○											
(2)	○																	
(3)			○						○									
(4)				○														
(5)					○		○ (数)											
(6)		○																
(7)						○												
(8)		○																
(9)					○		○					○						
(10)							○				○							
(11)					○		○											
(12)													○					
(13)					○									○				
(14)							○				○							
(15)							○				○							
(16)					○		○ (数)							○				
(17)					○		○ (数)							○				
(18)							○ (数)											
(19)							○ (数)											
(20)										○							○	
(21)							○ (数)				○							
(22)							○ (数)				○							
(23)					○		○ (家族用語)	○										
(24)					○		○ (家族用語)	○			○							
(25)							○				○							
(26)											○		○					
(27)										○								
(28)					○		○											
(29)								○	○									
(30)							○				○							
(31)							○ (数)				○							
(32)										○								
(33)															○			
(34)					○							○						
(35)		○																
(36)							○				○							
(37)					○									○				
(38)											○							
(39)					○		○											
(40)					○							○						
(41)	○									○								
(42)	○				○		○											
(43)					○		○											
(44)					○		○	○									○	
(45)										○								
(46)		○										○						
(47)							○											
(48)																○		
(49)							○ (数)											
(50)							○ (自他)				○							
(51)						○												
(52)																		○

述べたが、それより先にBlochがあったということがわかる。数は多くないが、ゲームやなぞなどもあり、これは学習者の興味を引き出す工夫だったのだろう。ASTP教授法は暗記ばかりだと言われているが、少なくともSJの練習は、作文練習やロールプレイなど、単に丸暗記することでできる練習問題ばかりではないことが明らかになった。

*Beginning Japanese*の練習問題と比較すると、SJでは代入練習と拡大練習に相当するものが見当たらなかった。しかし、文法練習、応答練習、待遇表現練習、補足会話に当たるものは確認できた。また、SJには翻訳練習や作文練習など、*Beginning Japanese*には見られない種類の問題も存在した。

第5節. まとめ

本章では、1945年前後の日本語教育教授法と主たる練習方法について考察した。ASTP教授法は基本的には模倣暗記練習が中心ではある。しかし、一括りにASTP教授法といっても、BlochのSJに収録された練習問題は量や方法の面で、ほかのSpoken Language Seriesとは一線を画するものであることがわかった。

Blochの練習問題は、後のオーディオ・リンガル・アプローチほど明確かつ整然とパターン化されていない。構造を重視していて、この練習問題では応用力はつかないといった批判的見解もあるかもしれない。しかし、この時代にこれだけの練習問題を考案したBlochの業績は正当に評価されるべきであると考ええる。実際、空欄に助詞を入れるような問題は、現在の日本語教育でもテストなどで多用される問題である。Blochが考えた練習問題の中は、明日にでも教室活動で応用できそうなものもある。数に関する練習は、ついおろそかにしがちだが、本来、日本語教師はアクセントと併せ、丁寧に指導していくべき項目である。このように、SJ所収の練習問題は、現代の日本語教育に携わる者から見ても実に示唆に富んだものだと言えよう。

第4章. Bernard Bloch の *Spoken Japanese* 付属レコードに関する研究

第1節. はじめに

SJは、1945年にArmed Forces Edition版、同1945年にHolt社からPublic Edition版が出版された。1972年には復刻版が出版されたということは、既に第2章第3節で述べたとおりである。

Armed Forces Edition版、Public Edition版にはレコードが付いていたのだが、もはや国内でその所在を確認することはできない²⁹。SJの復刻版にはカセットテープが付いていたが、2016年10月現在、そのテープが全巻揃っているのは、Cinii及びNDLサーチで調べた限り、国内では国際日本文化研究センター（京都市。以下、日文研と略す）だけである。

筆者は日文研の特別共同利用研究員として、そのカセットテープの研究を行った。その結果、カセットテープに収録されている音声は、Armed Forces Edition版、Public Edition版のレコードに収録されたものと全く同一音声である可能性が高いことが確認された。つまり日文研所蔵のカセットテープは、1945年当時に収録された音声を聞くことができる、極めて貴重なテープなのである。

このカセットテープの研究を通じて、次のことを考察したい。

まず、なぜSJのレコードは作られたのかということである。太平洋戦争の頃、レコードを使った外国語学習は、日本でもアメリカでもまだあまり普及していない。第4章では、レコードに収録された内容と教科書本文を照らし合わせながら、レコードが作られた目的と具体的な使用方法を考察したい。

次に、収録されている日本語が、日本語として適切であるのかどうかということである。Blochが日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行ったことは既に述べたが、戦時下のアメリカで暮らす日系人がどのような日本語を話したのか、これまで知る術のないことであった。日文研所蔵のテープは、Blochが研究した日本語を完全に、そして忠実に再現してくれるのである。インフォーマントの話す日本語は、発音やアクセント、イントネーションという観点から見てふさわしいものだったのだろうか。インフォーマントの日本語が不正確であったために、Blochの分析に何らかの影響を与えてしまったということはなかったのだろうか。こうした点について、日本語教育という立場から検討したい。

最後に、SJのレコードと同時代に日本国内で作成された日本語教育レコードとの比較を行う。その過程で、SJのレコードが外国人を対象とした日本語教育という観点から見て、いかに先駆的なレコードであったのかを検証したい。本章の目的は、当時のアメリカにおける日本語の話し言葉とその教育の一端を明らかにすることにある。

第2節. *Spoken Japanese* のカセットテープの概要

日文研に所蔵されているカセットテープは6本である。SJはUnit 1. Getting Around、Unit 2. Meeting Peopleというように課で構成されている教科書である。テープにはUnit 1からUnit 5、Unit 7からUnit 11までのBasic SentencesとListening In³⁰、及びUnit 1からUnit 5のPronunciation

29 Armed Forces Edition版は国立国会図書館に収蔵されているが、付属レコードは収蔵されていない。

30 Listening Inは、日本語を聞く練習問題である。ここでの表記は原文どおり。大文字・小文字も原文に従った。

Practice、Unit 6、Unit 12のTrue-False Testが収録されている。録音時間は計240分である。SJ本文にはUnit 13～Unit 30も存在するが、レコードはもともとUnit 12までしか作成されなかったもので、Unit 13以降の音声はない。

日文研所蔵のカセットテープが、1972年の復刻版に付いていたカセットテープであることは第1節でも述べた。しかしこれは、1945年に初めて出版されたArmed Forces Edition版のSJに付いていたレコードと同一音声であり、1972年時点で改めて別人が吹き込み直したものでないことは明らかである。その傍証³¹として以下の2点を挙げる。

- (1) Armed Forces Edition版のSJには、“Record 2A, beginning”、“Record 2B, after spiral”のように、音声が入り込んでいる箇所が書かれている。カセットテープでは、例えばRecord 2AからRecord 2Bに移る場面でガチャッと切れる音が入っており、これらの切れ目は全てレコードの切れ目と一致している。
- (2) 復刻版のSJには、所々に“On the phonograph record, the English of sentences 280 and 281 is read all together. The Japanese sentences are read separately.” (Bloch & Jorden 1972: 262) (拙訳：レコードでは、280と281の英語の文は一緒に読まれているが、日本語の文は分けて読まれている) とか “The speaker on the phonograph record started to say *sóra ga haremásu ka?* and then corrected himself.” (Bloch & Jorden 1972: 142) (拙訳：レコードの話者は「空が晴れますか」と言ってしまい、その後、言い直している) といった注釈が入っている。もし1972年時点で誰かが吹き込み直したものであれば、その際に正しく吹き込めばよかったのであって、わざわざこのように書く必要はない。そもそも復刻版に付いているのはphonograph recordではなく、カセットテープである。

以上のことから、本稿で考察するのは、1945年に作成されたArmed Forces Edition版のレコードに収録されていた音声であると考えられる。日文研に所蔵されているカセットテープは、日本語教育史を考える上で、また当時の日本語の音声を知る上でも非常に貴重な音声データである。

さて、SJのレコードはどのようなものだったのだろうか。佐野 (1973:98) は「語学のレコード・テープ ポルトガル語編」の中で「Spoken Portuguese: Basic Course, A Self-Teaching Course T1+SPレコード24枚」と紹介している。Spoken Language Seriesはどれも同じような構成、規格であったことから考えて、おそらくSJも同じ規格であり、SPレコード24枚が付属していたのだろう。また、SJのPublic Edition版付属の*A Manual and Key*〔第2章第3節参照〕に“twelve-inch Vinylite records”という記述が見られることから、レコードのサイズは12インチ (30センチ) であったことがわかる。12インチのSPレコードは片面約5分収録できたということなので、24枚で240分、日文研のカセットテープと収録時間も一致する。

ところで、このSJのレコードが一体何枚ぐらい制作されたのか、どの程度利用されていたのか詳細は不明である。この当時、アメリカでレコードを使った外国語学習が既に普及していたのかといえ、決してそうではない。例えばミシガン大学に開校された陸軍日本語学校に参加していたハーバード・パッシンは、著書『米陸軍日本語学校』で当時の日本語授業風景を描写

31 元盤の内容とテープの内容を比較して同じであることを示せばよいのだが、現在元盤を入手することができないため、傍証を示すことしかできない。そのため完全に同じものであることを保証することは難しい。今後、元盤を入手することができたら、完全に同じであるかどうか検証したい。

している。その中で、レコードを聞いて日本語を勉強したという記述は見られない。記述がないからといって、必ずしも使わなかったということではないものの、少なくともレコードを用いた学習法が、当時の日本語学習の主流ではなかったということは言ってもいいであろう。

終戦後、占領下の日本でアメリカの軍人が日本語を学習する際、SJの教科書が使われていたことは確かである。森の記述を引用する。

(4-2-1)

終戦の翌年の七月、日本へ引き揚げてきたのだが、長沼氏は、私をA. E. P. School (Army Education School 当時「陸軍大学」と称されていた) の日本語教官に推薦してくれた。ここでは、年配の大佐、中佐より、若い一等兵、二等兵のほうが、当然ながら、できが良かったのを覚えている。BlochとJordenのこしらえたというE. M. マニュアル (Education Manual) を使って教えるのが当然であったが、長沼氏はこれで満足せず、自分の手を加えたものを謄写版刷りにして使った。この学校は夜学であった。

森 (1991:83)

森のいうE. M. マニュアル (Education Manual) というのがSJのArmed Forces Edition版のことを指すということは、第2章で述べたとおりである。森の記述からSJが使用されていたことは確認できるが、その際レコードも使われていたかどうかは定かではない。

また、山下も次のように書いている。

(4-2-2)

戦後に開校したT.E.A.M.³² (福音同盟教団) の軽井沢日本語学校では、ブロック (B. Bloch)・ジョーデン (E. H. Jorden) の『Spoken Japanese, Basic Course』を使っていたが、宣教師たちは授業に備えて、その会話文を暗記するため、ひねもす林の中や矢ヶ崎川沿いの小道を往きつ戻りつしていたものである。

山下 (1995:114-115)

戦後まもないこの当時、日本人にとってもまた、外国語教育レコードはまだ非常に珍しいものであったようである。Spoken Spanishのレコードについて、東京外国語大学教授でスペイン語を教えた荒井は、次のように、やや感慨深く回顧している。

(4-2-3)

いま私は一枚の古レコードを思い出した。すると気になり出し、たしかに仕舞いこんである戸棚の奥から持ち出し、あらためてレーベルを見た。12インチのSPである。U.S.Armed Forces Institute—SPOKEN SPANISH—Basic Course—Prepared by Special Division, A. S. F., War Department, for the War and Navy Departmentsとある。このレコードをどこで手に入れたのか、

32 T. E. A. M. : The Evangelical Alliance Mission (略称「チーム」)。1949年中華人民共和国の成立により中国伝道が継続不可能になったため、中国大陸を去り、日本で開拓伝道を始めた宣教師団。(この注釈も山下 (1995:118) からの引用)

それは忘れてしまったが、これを見ると、終戦後のそのころ、私たちの先生のスペイン人が、東京の米軍の学校へ教えに行っておられたことを思い出したり、アメリカという国は軍がこういうレコードをこしらえ、しかも陸軍と海軍が仲よくひとつのレーベルの上に名を連ねていることに感心させられたりする。ともかくあらためて聞いてみた。音も決して悪くない。

テキストはWar Department Education Manual-Spoken Spanishで、カーキ色のような色の表紙の、いわゆる進駐軍の学校用のこの教科書は、ひとところまで古本屋の棚でよく見かけたものだ。このArmed Forces Spoken Seriesは、その後Holtの手に移り、さらにLinguistic Society of Americaのthe intensive language programに加えられ、表紙の色もふつうの派手な色に変わった。

〔中略〕 もちろんこのころテープレコーダーという便利なものは、われわれの家庭になかった。スペイン語の『音』の教材といえば、私にとっては初めにご紹介したSPのSpoken Spanishが、最初で唯一のものだったということになる。

荒井 (1973:57)

ここまではSJのレコードについての話である。

一方、SJ復刻版のカセットテープだが、こちらもどの程度使われていたのか定かではない。水谷 (1973: 72) は「語学のレコード・テープ 日本語編」の中で「その他テープでは、“Round the World Japanese” Conversaphone社, 60分 2巻, “Spoken Japanese” Holt社, 60分 6巻などが市販されている」と述べているので、大きな書店では手に入ったのであろうし、また、日本語教育関係者の一部には知られていたようである。ただし、1973年当時、SJは既に新しい教科書ではなく、Blochの門下生であったJordenの教科書が既に広く使われている時期であるので、SJが大々的に売っていたということは考えにくい。水谷の記述から引用する。

(4-2-4)

“Beginning Japanese” by E. H. Jorden (1962年) Yale University Press, New Haven, Connecticut, U. S. A. アメリカの大学等でもっとも多く使われている入門教材の一つで、第一部 (四〇九ページ)、第二部 (四一〇) の二分冊からなる。通巻三十五課。テープは第一部、第二部それぞれに六十分ものテープ三十巻がついており、値段も張る。(154,600円)

水谷 (1973:71)

ところで、SJを含むSpoken Language Seriesには全てレコードが付いていたと考えられるが、レコードは次のような信念に基づいて作られたものであった。SJのIntroductionから引用する。

(4-2-5)

A native speaker is the only good source of first-hand knowledge of any language. Only a native speaker can tell you whether your pronunciation sounds normal, and whether the sentences you use in your Japanese conversations are actually Japanese.

The method used in this Manual requires the presence of a native speaker of Japanese at every session of the group. If no native speaker is available, you can use instead the phonograph records that are supplied with the Manual. Even if you have a native speaker at hand, you can still make good use of the

phonograph records for extra drill and for review. The records can't answer questions, but they can give you the same word or sentence over and over again in exactly the same way.

Bloch & Jorden (1945c:iv)

(拙訳) どんな言語においても、直接的な知識が得られる唯一の、そして最良の根源はネイティブスピーカーである。ネイティブスピーカーだけが、あなたの発音が正常であるかどうか、またあなたが日本語の会話の中で使った文が実際の日本語であるのかどうかを教えてくれるのである。この教科書で使われている方法は、全てのグループ授業において、日本語のネイティブスピーカーの存在を必要とする。もしネイティブスピーカーがいなければ、かわりに教科書付属のレコードを使いなさい。もし近くにネイティブスピーカーがいたとしても、なお、レコードはほかのドリルをしたり復習をしたりするのに役立つことでしょう。レコードは質問には答えられないが、いつも同じ語や文を何度も何度も繰り返し同じ方法で提供してくれるでしょう。

SJのPublic Edition版付属の *A Manual and Key* にも次のような記述が見られる。

(4-2-6)

A unique feature: A Holt SPOKEN LANGUAGE recording gives you the opportunity to speak and repeat the words of the native while the record is playing. You don't have to stop the record to talk, or wait until the whole record has been played. You start talking at once, at the beginning of the very first record, and imitate the native teacher twice after each word of phrase.

(*A Manual and Key*より引用³³)

(拙訳) ユニークな特徴：ホルト話し言葉シリーズのレコードは、レコードを流している間、あなたにネイティブの語を繰り返したり、話したりする機会を与えてくれる。あなたは、話すためにレコードを止めたり、全部のレコードが終わるまで待つ必要は全くありません。レコードの冒頭から、すぐにあなたは話すことを始め、語や句の後に続いて2回ずつネイティブの先生の真似をすることができるのです。

学習者がネイティブの発音を聞いて真似をする。真似をするためにレコードを1回停止する必要がなく、真似をするだけの空白時間が収録されているという、この現在では全く当たり前の語学学習法が、ユニークな特徴であったということがとても興味深い。だが、この時代の語学学習法としては、少なくともアメリカにおいては、斬新で、独創的な発想であったのである。

次に、収録された音声について述べていきたい。日文研にあるカセットテープの録音状態は決していい方ではない。レコードをそのままカセットに移しかえたものであるので、雑音も多く、エコーがかかっているように聞こえる箇所も多い。録音内容は、印刷教科書の一部を録音したという形式である。SJのレコードを吹き込んでいる人物は、英語を読む人が1人（以下、この人物を男性Aとする）、日本語を読む人が1人（以下、この人物を男性Bとする）の計2人で、Unit 1からUnit 12までの全ての音声を、この2人が吹き込んでいる。

Basic Sentencesは、まず英語部分を男性Aが読み、それに対応する日本語を男性Bが2回繰り返す。

33 この冊子にはページ数がない。引用部は‘Do the records give me a chance to talk?’の章から引用した。

返して読むという順に進められる。一度日本語を発音した後、繰り返すのに十分なポーズをおいて、2度目の日本語が発音される。例えばUnit 1, Section AのBasic Sentencesは次のように録音されている。

【収録内容：1³⁴】

男性A	Good morning.
男性B	Ohayoo gozaimasu.
(くり返し)	Ohayoo gozaimasu.
男性A	Good day or Hello.
男性B	Koñniti wa.
(くり返し)	Koñniti wa.
男性A	Good evening.
男性B	Koñbañ wa
(くり返し)	Koñbañ wa
男性A	how?
男性B	ikága
(くり返し)	ikága
男性A	How are you?
男性B	Ikága desu ka?
(くり返し)	Ikága desu ka?
男性A	health or good spirits
男性B	géñki
(くり返し)	géñki
男性A	I'm well.
男性B	Géñki desu.
(くり返し)	Géñki desu.
男性A	as usual, without change
男性B	aikawarazu
(くり返し)	aikawarazu
男性A	I'm well as usual.
男性B	Aikawarazu géñki desu.
(くり返し)	Aikawarazu géñki desu.

出典：Bloch & Jorden (1972: カセットテープ、日文研所蔵)

これらの収録部分は、次のように使われることを意図して録音された。ガイドというのはネイティブスピーカーのことであるが、レコードはガイドと同じ役割を担うことを目的として作られた。つまりレコードの役割は、ネイティブスピーカーの代行であった。

34 【収録内容：1】は筆者が書き起こしたものである。線より左側の男性A、男性B、(くり返し)という言葉そのものは収録されていない。表記はSJ本文に合わせた。ñは「ん」を表す。ikágaのような表記は、「いかが」の「か」にアクセント核があることを示している。

(4-2-7)

If you have a Guide, here is what you should do in studying the Basic Sentences:

1. The Leader reads the first English word or phrase.
2. The Guide speaks the Japanese
3. The whole group repeats what the Guide has said.
4. The Guide speaks the Japanese again.
5. The whole group repeats it again.

Proceed in this way through the whole list of Basic Sentences, with the Leader giving the English equivalent first, the Guide speaking the Japanese twice, and the group as a whole repeating it after him each time.

If you are using the phonograph records, they will give you steps 1, 2, and 4. There is a pause in the record after each Japanese word or sentence, so that the group can repeat it.

Bloch & Jorden (1945c:1)

(拙訳) もしあなたにガイド³⁵がいるなら、ベーシックセンテンスを勉強する際、あなたがすべきことは次のとおりである。

1. リーダー³⁶がはじめの英語の語や句を読む。
2. ガイドが日本語を発音する。
3. グループでガイドが言ったことを繰り返し発音する。
4. ガイドが日本語をもう一度言う。
5. グループでまたそれを繰り返す。

リーダーが英訳をはじめに与え、ガイドが2回日本語を言って、グループがそれぞれガイドの後に繰り返して言うという方法でベーシックセンテンスのリストの全部を学習してから次に進みなさい。もしあなたがレコードを使っているのなら、レコードは1、2、4のステップを与えてくれます。それぞれの日本語の語や文の後にはポーズがありますから、グループで繰り返し発音することができるでしょう。

続いて、各ユニットのSection Cに配置されているListening Inがどのように収録されているか見ていきたい。Listening Inは、会話文の聞き取りを目的としている。課を追う毎に長くなり、Unit 11では39行の長さから成る会話文を聞き取らせる。

Listening Inでは、英語は読まれず、同じ人物（男性B）が日本語を単独で読むという形式がとられている。日本語は一度しか読まれない。例えばUnit 1, Section CのListening Inは次のように録音されている。

35 The native speaker is referred to in this Manual as GUIDE. (Bloch & Jorden 1945c: iv) (拙訳：ネイティブスピーカーのことを、この教科書ではガイドと呼ぶ)

36 The Manual has been so organized that you can use it either by yourself or in a group. If you work in a group and have no regular teacher, choose one member of the group to act as LEADER. (Bloch & Jorden 1945c: iii-iv) (拙訳：この教科書は、独学用としても、グループ学習用としても使えるように作られている。もしあなたがグループで活動し、決まった先生がいないなら、グループのうち一人を選び、リーダーとしなさい。)

【収録内容：2³⁷】

Listening In

1. Mr. Tanaka meets Mr.Doe on the street.

Tanaka :	Koñniti wa.
Doe :	Koñniti wa. Ikága desu ka?
Tanaka :	Aríгато gozaimasu. Aikawarazu géñki desu. Tabako ga hosíi desu ka?
Doe :	Hái. Aríгато gozaimasu. Mátti ga arimásu ka?
Tanaka :	Hái dóozo.
Doe :	Aríгато gozaimasu. Onaka ga sukimásita. Ryooríya wa dóko ni arimásu ka?
Tanaka :	Massúgu saki ni arimasu. Wakarimásita ka?
Doe :	Iie. Wakarimaséñ desita. Moo itido itte kudasái.

出典：Bloch & Jorden (1972: カセットテープ、日文研所蔵)

ここでも、さきのBasic Sentencesと同様、レコードの役割はネイティブスピーカーの代行である。SJ本文を読めば、レコードをどう使って学習すればいいか明確に書かれている。

(4-2-8)

The Guide or the speaker on the phonograph records will read them to you, with a pause after every sentence to give you time to repeat it after him. Speak up loud and clear, and imitate the Guide's pronunciation as closely as you can.

The first time through, keep your book closed and see how much you can understand through the ear alone. The second time through, open your book and follow the printed version with your eye as you listen.

Bloch & Jorden (1945c: 22)

(拙訳) ガイドまたはレコードの話者は、あなたが後について繰り返し読むのに十分なポーズをあけて、読み上げます。大きくそしてはっきりと発音し、できるだけガイドの発音に忠実に繰り返し真似なさい。

一度目は本を閉じて、あなた自身の耳でどれくらい理解できているか確認なさい。二度目は本を開いて、聞くとときに、印刷された字を目で追いなさい。

次に、Pronunciation Practice がどのように収録されているか見ていきたい。Pronunciation PracticeはUnit 1からUnit 5にかけて配置されているが、レコードではまとめて録音されている。収録内容は以下のとおりである。

37 【収録内容：2】は筆者が書き起こしたものである。Tanaka、Doeといった人名も収録されている。表記はSJ本文に合わせた。ñは「ん」を表す。Aríгатоでは「ありがとう」の「り」にアクセント核があることを示す。

【収録内容：3³⁸】

Pronunciation Practice

<p>Practice 1.</p> <p>〔母音/a/〕</p> <p>ikága sayonára wakarimásu ka³⁹ tabako</p>	<p>Practice 2.</p> <p>〔母音/e/〕</p> <p>géñki hóteru beñzyó kore</p>	<p>Practice 3.</p> <p>〔母音/i/〕</p> <p>itido hakkíri migi hidari</p>
<p>Practice 4.</p> <p>〔母音/o/〕</p> <p>mótto yóku dóko nódo</p>	<p>Practice 5.</p> <p>〔母音/u/〕</p> <p>yukkúri kudasái massúgu mizu</p>	<p>Practice 6.</p> <p>〔二重母音〕</p> <p>háí mác kau kao ié ue teisyaba</p>
<p>Practice 7.</p> <p>〔長母音〕</p> <p>apáato obáasañ ée teeburu hosíi desu bíiru dóozo koohíi gyuunyuu zyúu</p>	<p>Practice 8.</p> <p>〔語末の/ñ/〕</p> <p>páñ goháñ wakarímaséñ Nihóñ Nihoñzín</p>	<p>Practice 9.</p> <p>〔語中/ñ/の[m],[n],[ŋ]〕</p> <p>sáñpuñ Koñbañ wa gúñtai Náñ desu ka? señsoo beñzyó géñki Páñ ga arimasu</p>
<p>Practice 10.</p> <p>〔語頭の[g]と語中の[n]〕</p> <p>géñki góhañ ikága migi</p>	<p>Practice 11.</p> <p>〔子音[h]〕</p> <p>hidari koohíi hi hirú</p>	<p>Practice 12.</p> <p>〔子音[f]〕</p> <p>húne huyú hurúi gohuñ</p>
<p>Practice 13.</p> <p>〔子音[r]〕</p> <p>sayonára yukkúri wakarimásu kore hóteru rainéñ rokú béñri</p>	<p>Practice 14.</p> <p>〔子音[ɕ]〕</p> <p>sigoto watakusi hosíi desu dóo itasimásite</p>	<p>Practice 15.</p> <p>〔子音[tɕ]〕</p> <p>itido utí máiniti tomodati</p>

Practice 16. 〔子音[tʃ]〕 tugí tuyói tutumi	Practice 17. 〔子音[dʒ]と[z]〕 zidóosya zimúin kyúuzi	Practice 18. 〔拗音[rʲ]〕 ryooríya ryóosiñ ryokoo
Practice 19. 〔拗音[ɕ]〕 syokkoo syúziñ teisyaba	Practice 20. 〔拗音[tʃ]〕 otya tyóto tyoodo	Practice 21. 〔拗音[dʒ]と[z]〕 Sóo zya arimaséñ zyotyuu zyúñsa
Practice 22. 〔促音〕 yukkúri ippai ⁴⁰ massúgu tyóto	Practice 23. 〔促音〕 zassi issyo ni mátti ittyaku yottú	Practice 24. 〔撥音〕 añmari koñniti wa gomeñnasái
Practice 25. 〔母音の無声化〕 kisyá kippu hito kusuri watakusi sukí desu	Practice 26. 〔母音の脱落〕 heитай desita arimásita tikái tukurimásu tukue hutari	Practice 27. 〔句末の母音の脱落〕 Sóo desu arimásu kimásu
Practice 28. 〔平板式アクセント〕 soko kodomo aida tañsu añmari siñbuñ aikawarazu	Practice 29. 〔1、2拍目にアクセント核〕 mádo hoñ háyaku máiniti damé desu anáta Nihóñ tatémono	Practice 30. 〔3拍目以降にアクセント核〕 koobá desu sayonára arimásita eigákaiñ atatakái arimaséñ yasumimásita arukimasyóo wakarimaséñ

出典：Bloch & Jorden (1972: カセットテープ、日文研所蔵)

38 収録内容：3は筆者が書き起こしたものである。表記はSJ本文に合わせた。また、〔 〕内は収録内容ではなく、何の発音練習であるか筆者が記したものである。

39 SJ Armed Forces Edition版には、ガイドのために書かれたマニュアルである *Guide's Manual* があることは第2章で述べた。その *Guide's Manual* の中には「分りましたか」と書いてあるが、レコードではwakarimásu kaと読まれている。

40 英語訳がone cupfulとなっているので、正しくはippai（1拍目のみ高ピッチ）だと思われる。しかし、レコードの発音がippai（1拍目のみ低ピッチ）となっていて、Blochもそのように表記したようである。

Pronunciation Practiceの収録部分は、学習者に次のように使われることを意図して録音された。ここでもまた、さきのBasic SentencesやListening Inと同様、レコードに求められたのはネイティブスピーカーの代行である。

(4-2-9)

The Leader will choose one member of the group to read the following section out loud, and the Guide or the speaker on the phonograph records will give you the Japanese words in the Practices. After each word that you hear from the Guide, repeat it after him in unison. Imitate his pronunciation as exactly as you can, with special attention to the sound that is being discussed. Go through each practice as often as you need to in order to get the pronunciation right. If you have a Guide, he will tell you whether your imitation of the Japanese satisfies him; if it doesn't, he will keep on saying the word over and over until you get it right. If you are using the phonograph records, the whole group should judge the quality of each man's pronunciation, and should keep on playing the Practice over and over until every man's imitation sounds like an echo. On the phonograph records, the speaker will pronounce each Japanese word only once, with a pause after it long enough to let you repeat it after him at the same rate of speed. The English equivalents are printed in this book but are not given on the phonograph records.

Bloch & Jorden (1945c:14)

(拙訳) リーダーは、グループの中から一人選んで、次の部分の解説を読ませます。ガイドまたはレコードの吹込者は、練習にある日本語の語を与えます。それぞれの語をガイドから聞いた後、繰り返し斉唱します。そのユニットで説明された音に特に気をつけながら、できるだけガイドの発音を真似なさい。正しい発音を習得するために必要に応じて何度も練習しなさい。もしあなたにガイドがいるなら、ガイドはあなたの模倣がガイドを満足させたかどうか言ってくれるでしょう。もし満足できないなら、ガイドはあなたが正しくその音を習得するまで何度も何度もその語を言い続けてくれます。もしあなたがレコードを使っているのなら、グループ全体で、一人一人の発音を評価し、こだまのように聞こえるまで何度も何度も練習を続けなければなりません。

レコードでは、吹込者は日本語を一度ずつしか発音しませんが、繰り返し発音をするのに十分なポーズがとられています。英語訳は教科書には印刷されていますが、レコードには収録されていません。

ところでPronunciation Practiceでは、SJ本文とレコードの収録内容が異なるところが何カ所がある。例えば、Practice 13の**bénri**という語は、レコードには収録されているが、SJ本文には書かれていない。反対に、SJ本文ではPractice 16の**tugí**の前に**tukurimásu**があるが、レコードには収録されていない。Practice 17も**kyúuzi**の前に**Nihonzín**があるが、これもレコードには収録されていない。こうしたことから、レコード吹込者は何を見ながら収録を行ったのだろうという疑問が生じる。Armed Forces Edition版が完成する前の草稿のようなものがあったのだろうか。そうだとすると、完成段階で、**bénri**をPractice 13から外し、Practice 16に**tukurimásu**を、practice 17に**Nihonzín**を加えた目的は何だったのであろうか。ちなみにPronunciation Practice以外で、レコード収録後に本文を書き換えた形跡が見られる箇所は見当たらない。吹込者が読み間違えた場合

は逐一注釈という形で説明している。

このPronunciation Practiceは、単音の練習をさせるにあたり、その単音が現れる環境をよく考慮して作られている。例えば、Practice 14は子音[ɕ]の練習であるが、sigotoのように語頭に現れる場合、watakusiのように語中でかつ無声化母音と共に生じる場合、hosii desuのように語中でアクセント核を伴う母音と共に現れる場合、dóo itasimásiteのようにitasiの[ɕ]とmásiteの[ɕ]の2回が現れ、かつmásiteの[i]が無声化する場合の4例を挙げている。Pronunciation Practiceで取り上げた単語には、練習する単音が撥音や促音の後に生じないような工夫も見られる。

Practice 13は子音[r]の練習で、英語話者にとって発音しにくい音であり、ほかのPracticeに比べて練習量も多い。その中でも[i]に先行する[r]がyukkúri, wakarimásu, bēnriと三つある。bēnriの[r]は「ん」の後であるから弾きがなく、聞き取りにくい。発音練習させる語として無難ではない。そのために練習から除外したと考えるのはどうだろうか。

Practice 16は、tugí, tuyóí, tutumiの三つがレコードには収録されているが、tukurimásuが本文にはあるのに、レコードにはない。実はPractice 16を学習する時点で、この三つの語は学習者にとって未習語である。Pronunciation Practiceで使われている語は、そのほとんどが既習語であり、学習者にとっても意味や用法のわかる語を練習した方がよい。そこで、tukurimásu が付け加えられたのではないだろうか。tukurimásu はPractice 16が配置されているUnit 3の新出語句である。

Practice 17はzidóosya, zimúinの[ɟ]が語頭、kyúuziの[z]が語中である。第3節で述べるように、Blochはこの二つの子音を自由異音と見なしている。Nihonjínは語中で[ɟ]が出現するよい例である。

レコードが吹き込まれた時期と、教科書が完成した時期を比べると、レコードが吹き込まれた時期の方が先である。なぜなら、先に述べたとおり、レコードで言い間違えた箇所について、教科書本文の注釈で指摘がなされているからである。したがって、収録音声と本文との差異があるとするならば、収録後に本文に訂正が加えられたと考えるのが妥当である。しかし、実際にはどのような理由があって本文を修正したのか、その真意はもはや知る術がない。ただ、日本語教師が日本語の発音練習をさせる場合、どの語でもいいわけではなく、アクセントや特殊拍の有無、無声化の有無、語頭か語中かなど単音の現れる場所などを考慮して語を選ぶことは、現在ではごく当然のことである。Pronunciation Practiceのレコードと本文の違いから、Blochがいかに学習者に配慮した良い発音練習を作成することにこだわったか、その気遣いが伝わってくるような気がする。

ここまで、ごく簡単にではあるが、レコードに収録された音声の一部を紹介し、その収録部分がどう学習者に利用されることを目的として作成されたのか、本文とレコードの対応関係を観察してきた。その結果、レコードの役割はネイティブスピーカーの代行であり、レコードの使用方法は、具体的かつ明確にSJ本文中に示されていることが確認できた。また、日本語の文や句の後に十分なポーズが確保され、学習者がネイティブスピーカーの発音を繰り返し真似するための配慮がなされた。そのゆえに学習者は、レコードを止めたり、前に戻したりという煩雑な作業をすることなく、語学学習に専念できたのである。

吹き込まれた音声の特徴については次節で、インフォーマントについては第4節でさらに考察していきたい。

第3節. 日本語吹込者の音声的特徴

SJのレコードに収録された音声について、その特徴を詳しく考察していきたい。日本語を吹き込んでいる人物は、Blochのインフォーマントの1人で、おそらく日系人である。またその人物は、音声を聞く限り、特にアナウンスの訓練を受けたことのない素人のようである。しかし、日系人とはいえ、彼の読む日本語はアクセントが正確であるほか、ガ行鼻濁音や無声化の発音も大変きれいなものである。ただ、次の発音は、日本語教育レコードとしては、やや気になるところである。

- (1) 吹込者の日本語を読むスピードがやや遅く感じられる⁴¹。読むスピードが遅いことの例を挙げると、「もう一度言ってください」という文は、SJでは約1.3秒で読まれているが、Jordenの*Beginning Japanese*のカセットでは、同じ文が約0.9秒で読まれている。また、「あの人はだれですか」という文は、SJでは約1.4秒で読まれているが、*A Course in Modern Japanese*のCDでは同じ文が約1秒で読まれている⁴²。もちろん、これだけで読むのが遅いと言い切ることはできない。しかしSJの吹込者は、一文字ずつはっきり読み過ぎているように聞こえ、そのことが遅さに繋がっているのかもしれない。
- (2) 「まどから そとを 見てください」というような場合、「ま」「そ」「み」が強く、やや不自然な抑揚が感じられる。
- (3) 「はいります」、「あります」といった、-masu formの発音で、「ま」が強く「す」が弱い。そのため「はいりまーす」「ありまーす」のように聞こえる箇所が多い。
- (4) 「あなたは米国人ですか」「あなたはどんな仕事をしていますか」などの疑問文でもイントネーションが上がらない発音がされている。これは吹込者の個人的な習性であるのか、あるいは何か意図するところがあったのかよくわからない。ただ、Basic Sentencesだけならともかく、Listening Inは普通の会話文である。会話文で全くイントネーションが上がらないと、やはり日本語としてはかなり不自然に聞こえる。

不思議なことにSJには、イントネーションに関する言及が全くない。例えば、“Particle ka in questions” (Bloch & Jorden 1945c:9 拙訳：疑問文の助詞「か」)の項目では、次のように書かれているが、イントネーションについては触れられていない。

41 録音・再生機器の精度については、以下に倉田から引用する。この引用部は倉田曰く、『理学協会雑誌』第44巻（明治20年12月15日発兌）の「エヂソン氏新發明蓄声器^{ホノグラフ}」を林静介（理学協会書記）が訳したものである。

通常自然ノ声ニテ通常ノ速度ヲ以テ之ニ向ッテ談話シ、談ジ終レバシート即チホノグラムヲ特別ニ造ラレタル小箱ノ内ニ入レ、之ヲ先方ニ送ル事ナリ。扱テ、之ヲ受取リタル先方ノ人ハ、直チニ其ノ所持ノ同器ニ置ケバ、談話次第二發出シ、恰カモ発信人ト対語スルト異ナル事ナク、其ノ分明爽快ナル、現時存在スル電話器中ノ最良ナルモノヲ以テスルモ、之ニ優サル事能ハズ。且ツ最モ驚ク可キハ、音声ノ調子ガ両器ニ於テ毫モ変異セザル事ニシテ、発信処ニ於テ二十人ノ人々ガ互ニ立替ハリテ話シタル其ノ声ハ、受信処ニ於テ正サシク同ジ調子ヲ以テ順次ニ顯ハレ出ヅル事是ナリ。

又タ一度話シ置キタルモノハ、幾年ニテモ之ヲ貯ヘ置キ、一モ変ズル事ナキ、其ノ上ニ此ノ器ヲ作クルノ費用モ、通常ノ書状紙ヲ製スルノ費用ニ超過セズシテ、受信処ニ於テ発スル声ノ速度モ、始メ発信処ニ於テセシモノニ異ナラズ。

倉田（1979: 20-21）

これによれば、アメリカのレコード録音技術は、明治20年の段階で既に、録音した場所での声の速度とレコードを再生した際に流れる声の速度が同じであったということである。もっとも科学的に測定したのかどうかは不確かである。このことが仮に事実だったとしても、まだなおSJがレコードからカセットテープに移し替えた際に、録音機器の兼ね合いでスピードが遅くなったなどという可能性も否定することはできない。

42 ここでの測定は、VictorのMicro Component MD System UX-Z2で再生し、ストップウォッチで計測を行った。

(4-3-1)

Every normal question in Japanese ends in ka; and any statement can be turned into a question by adding ka at the end, without any other change.

Bloch & Jorden (1945c: 9)

(拙訳) 日本語の普通の疑問文は、全て「か」で終わる。どんな発話でも「か」を付け加えるだけで、ほかに何も変えることなく、疑問文にすることができる。

後にJordenは、同じ ‘Question Particle ka’ (Jorden 1963a:9 拙訳：疑問の助詞「か」) の項目で、次のような説明を与えている。

(4-3-2)

Questions with ka end in rising intonation or in low intonation.

All sentences ending with the question particle ka are questions; but not all questions end with ka. For example, the phrase anata wa ‘as for you’ becomes a question when pronounced with question intonation.

Jorden (1963a: 9-10)

(拙訳) 「か」で終わる疑問文は、上昇調イントネーションか、平板調イントネーション⁴³で発音される。助詞「か」で終わる全ての文は疑問文である。だが全ての疑問文が「か」で終わるわけではない。例えば「あなたは」という句は、疑問文のイントネーションで発音されれば疑問文になるのである。

一方、Bloch (1946b) では、日本語のイントネーションを次のように説明している。

(4-3-3)

An utterance in Japanese ends with one of four intonations.

- (1) Falling, with the last syllable lower in pitch than the second-last. Meaning: conclusive (‘end of sentence’ or the like). Symbol / . / , e. g. Sôo desu ka. ‘Is that so?’
- (2) Rising, with the last syllable considerably higher in pitch than the second-last. Meaning: animation or special interest. Symbol / ? / , e. g. Sôo desu ka? ‘Is that [really] so?’ (expressing interest or surprise)
- (3) High-falling, with a wide interval between the highest pitch (on the last accented syllable, or, if no syllable is accented, on the first syllable of the utterance) and the lowest (on the last syllable). Meaning: lively emotion. Symbol / ! / , e. g. Sôo desu ka! ‘Oh so that’s it!’
- (4) Level, with the last syllable slightly higher after an unaccented syllable, lower and slightly rising after an accented syllable. Meaning: suspensive (‘incompleteness’ or the like) . Symbol / . . / , e. g. Sôo desu ga . . ‘That may be so, but [still]...’

Bloch (1946b:154-155)

(訳⁴⁴) 日本語の発話は、以下の4種のイントネーションのいずれかで終わる。

43 Jordenのイントネーションに関する拙訳は、Jorden (1963a: xxxviii-xli) を参照した。

44 この訳は、ロイ・A・ミラー著 林栄一監訳 (1975:26-27) の訳をそのまま引用した。

- (1) 下降調 (Falling) — 最終音節のピッチが直前の音節より低い。意味：終結 (「文の終り」あるいはそれに類すること)。記号：/. / 例：Sóo desu ka.<そうですか> ‘Is that so?’
- (2) 上昇調 (Rising) — 最終音節のピッチが直前の音節よりかなり高い。意味：活気あるいは特別な関心。記号：/ ? / 例：Sóo desu ka.<そうですか> ‘Is that [really] so?’ (関心や驚きの表現)。
- (3) 高下降調 (High-falling) — (最終有アクセント音節の、あるいは、どの音節もアクセントをもたない場合は発話の第1音節の) いちばん高いピッチと (最終音節の) いちばん低いピッチとの差が大きい。意味：生き生きとした感情。記号：/ ! / 例：Sóo desu ka ! <そうですか> ‘Oh so that’s it !’
- (4) 平板調 (Level) — 最終音節が、無アクセント音節の後では少し高めに、有アクセント音節の後ではより低くかつやや上昇調。意味：保留 (「不完結」あるいはそれに類すること)。記号：/. . / 例：Sóo desu ga..<そうですが> ‘That may be so, but [still]…’

Bloch (1946b) が述べたイントネーションの説明を、なぜSJでは学習者に提示しなかったのだろうか。レコードの、特にListening Inのような会話文の収録で、疑問文のイントネーションを上昇調にしなかったのは、何か意図するところがあったのだろうか。このあたりについては今後の課題としたい。

- (5) 複文は前半と後半に分けて発音される。日本語教育レコードとしては、分けずに長い文を練習させた方がよかったようにも思える。
- (6) [ɾ]の発音は、全般に弾きが弱く、[ɹ]のように聞こえる。例えば「ホテル」「これ」「もらいました」といった語が文中で読まれる場合である。そのため「ありました」が「あいしました」と聞こえる場合がある。
- (7) 語中の[k]が[g]のように濁る。例えば「ください」「どこに」「さかな」「たばこが」「たなかさん」「食べてから」のような語で、それぞれ「ぐださい」「どごに」「さがな」「たばごが」「たながさん」「食べてがら」のように聞こえる。
- (8) 「兵隊」「停車場」「水平」「たいてい」「映画館」「米国」といった語で、[ee]ではなく[eɪ]と発音されている。ただし、早く読む場合は、[ee]と発音していることもある。そのためBlochも[heitai]、[Teisyaba]と書いている。それゆえに、第2節で考察したPronunciation Practiceでは、「Teisyaba」は二重母音のPractice 6に、「teeburu」は長母音のPractice 7に配置されている。実際、レコードの発音は「Teisyaba」は[eɪ]、「teeburu」は[ee]となっている。

後に、Jordenは[eego]、[beekokuzin]、[teeburu] (Jorden 1963a:391-392, 404) のように表記した。BlochとJordenの表記の違いを疑問に感じていたが、Blochがインフォーマントの発音に忠実に表記した結果であることが確認できた。

現代でも[eɪ]と[ee]の発音は規範に揺れがあることは、次の『NHK日本語発音アクセント辞典』の記述にあるとおりだが、Blochのインフォーマントは[eɪ]と発音する傾向にある人物であったことがうかがえる。

(4-3-4)

共通語では、漢字音「英」エイ[eɪ]などをエー[e:]のように長母音に発音する。例えば次の

例のとおり。エーゴ（英語）ケーサツ（警察）センセー（先生）テージ（定時）ヘーワ（平和）
メーモク（名目）レーカイ（例会）ただし、特にていねいに発音するときはエイゴ・ケイサツ・
センセイのようにエイになる。

この長母音は、〔中略〕東京方言以外の地方にも広く行われる。これに対して日常生活で、
エイ[eɪ]が優勢な地方は、九州をはじめ四国・紀伊半島などの南部や伊豆利島や八丈島三根な
どである。しかし、今日では、これらの地方も、しだいにエイ[eɪ]は退化してエー[e:]に変わ
りつつある。

NHK放送文化研究所編（1998:138）

(9) ザ行子音は、母音に挟まれたときは摩擦音、それ以外の環境では破擦音として現れるとい
う立場から説明すると、「みじかくて」の「じ」は母音に挟まれているので摩擦音として発
音するところを、吹込者は破擦音に近い発音を行っている。同様に、「ごじっせん」の「じ」
も破擦音に近い。そのためBlochもSJの中で次のように述べている。

(4-3-5)

Some speakers of Japanese pronounce this consonant like the ‘dz’ in ‘adze’ or the ‘ds’ in ‘beds’.
Follow your Guide, and say the sound in the way that he says it ; but if he pronounces z like ‘dz’,
remember that the sounds ‘dz’ and ‘z’ are interchangeable in Japanese, and that either one is correct
wherever the consonant z occurs before the vowels a, e, o, and u.

Bloch & Jorden (1945c: 66)

(拙訳) 日本人の中には、この子音〔筆者注：[z]〕を‘adze’の‘dz’、または‘beds’の‘ds’のように
発音する人がいる。ガイドに従って、ガイドが発音した音を言いなさい。しかし、もしガイド
が[z]を‘dz’のように発音したとしても、日本語において‘dz’と‘z’は交換可能であることを覚え
ていなさい。そして母音 a、e、u、oの前のどこで子音[z]が生じて、どちらの発音でも正し
いということを忘れてはいけません。

(10) アクセントは正確である。例えば副詞の「昨日」をLHH、名詞の「昨日」をLHLと発音し、
またBlochもそう書いている。

しかし「うち」という語は吹込者の発音とBlochの記述が異なるのでおもしろい。Blochは
“utíe” “utíni” “utíwa” “utíde” “utíkara” といずれも“tí”にアクセントを付け、尾高型と認識
している。ただし、「うちの犬」は“uti no inu”と書いており、「の」が後続する場合はアクセ
ントを付けていない。一方、吹込者は「うちへ（LHH）」「うちに（LHH）」「うちは（LHH）」「う
ちで（LHH）」「うちから（LHHH）」と、いずれも平板式アクセントで発音し、「わたくしの」
が前に来る場合のみ、「(わたくしの) うちへ（LHL）」「(わたくしの) うちは（LHL）」と尾高
型アクセントで発音している。このことは、『NHK日本語発音アクセント辞典』で、「うち（LH）」
を平板式アクセントとし、但し書きとして「「～のうち」は尾高も」と書かれているため、吹
込者の発音と一致する。

第4節. インフォーマント

レコードの日本語を収録した人物が、Blochのインフォーマントであり日系人であろうということは第3節で述べた。インフォーマントという言葉、Bloomfieldは次のように定義している。Bloomfield (1942) が戦時中のアメリカで行われた一連の外国語教育事業の理論的基礎であることは第2章で論じたとおりである。

(4-4-1)

One can learn to understand and to speak a language only by hearing and imitating speakers of that language. These speakers are called informants.

Bloomfield (1942: 2)

(拙訳) その言語の話者が話すのをよく聞いて、真似をすることで初めて我々はその言語を話し、理解することができるようになるのである。そういう話者のことをインフォーマントと呼ぶ。

Bloomfieldは、インフォーマントとの接し方について、次のように述べている。

(4-4-2)

The informant is not a teacher and must not be treated as such. As a rule, he will never have studied the sounds, inflections, or constructions of his language. He cannot make correct theoretical statements about his language ; any attempts he may make in this direction will turn out to be a sheer waste of time. Even a trained linguist can furnish generalizations about a language only after much careful work. One is often tempted to ask the informant such questions as ‘How do you produce that sound ?’ or ‘When do you use that verb form?’ or the like. Such questions merely embarrass and confuse the informant; he has not the training which would enable him to answer, and he will only waste your time by trying to patch up some sort of an explanation.

Bloomfield (1942: 2)

(拙訳) インフォーマントは先生ではないし、先生のように扱ってはいけない。原則として彼らは自分の母語の音や活用、構造について勉強したことはないはずである。彼らは自分の母語について理論的説明を正しく行うことはできないのである。彼らがそういう説明をしようとしたら、それは全く時間の無駄であることがわかるだろう。言語学者であっても、慎重な検証の後でしか、当該言語の概括を述べることはできないのである。「どのようにその音を産出するのか」とか「その動詞形はいつ使うのか」とか、そういうたぐいの質問をインフォーマントにしようとする人もいるだろう。そういう質問は、ただインフォーマントを困惑させ、混乱させるだけである。彼らはそれに答えられるだけの訓練を受けていないので、なんとか説明を取り繕おうとして、あなたの時間を無駄にするだけである。

そしてBloomfieldは、インフォーマントと言語学者との関係は、次のようにあるべきだと述べている。

(4-4-3)

In sum, educated or ‘cultured’ informants are by no means preferable and often inferior. The best informant is one who can be made to talk freely and naturally over a wide range of vocabulary and at the same time can slow up his speech sufficiently for dictation. The worst informant is one who delivers theoretical discourses in English.

Treat the informant courteously as an equal, but hold him to the task of speaking in his own language and of dictating speeches for you to write down. Encourage him in narrative, reminiscence, and humor, provided he presents them in his own language.

Bloomfield (1942: 4)

(拙訳) 教育を受けた、「教養ある」インフォーマントは決して好ましくなく、時に粗悪である。よいインフォーマントとは広範囲な語彙を駆使しながら自然に、自由に話せ、同時に言語学者が書き取れる速度で話すこともできる人である。悪いインフォーマントは英語で理論的説明をしようとする人である。インフォーマントを丁寧に扱いなさい、ただし、インフォーマントには言語を話し、書き取るために必要なスピーチをさせるだけの業務にとどめておきなさい。インフォーマントが物語や思い出話、ユーモアを自分の言語で話せるように仕向けなさい。

さて、Blochはどのようなインフォーマントとともに、日本語研究を行ったのであろうか。Armed Forces Edition版のSJには、著者の名前の下に“with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others”と書かれている⁴⁵。このことからMikiso HaneとToshio Konoという人物がSJ作成に大きく寄与したインフォーマントであると考えられる。そのことはBlochの門下生であったロイ・A・ミラー (1969: xv) が、「ブロックが多くのインフォーマントを高く買っていたことは、自分の*Spoken Japanese*の第1巻の表紙に自分とエレノア・ハーズ・ジョーデンの名前と一緒に彼らの名前を載せたことでわかる。この功績表示の伝統は、イェールでのブロックの弟子であるジョーデン夫人の*Beginning Japanese*でも受け継がれている。」と、述べていることから明らかである。

このうち、Mikiso Hane (羽根幹三⁴⁶、1922–2003) について、今回の調査から次のような経歴の持ち主であることがわかった。

(4-4-4)

Hane was born in 1922 in Hollister, California, to Japanese immigrant parents and lived there until the age of ten, when his parents sent him to Japan, where he lived with an uncle and attended school in Hiroshima.

Hane returned to the United States in 1940, and following the outbreak of war with Japan in 1941, he was interned by the United States government in a camp in Arizona from May 1942 until October 1943.

After 18 months in the internment camp, Hane applied for a position teaching Japanese at a program operated by the U.S. Army at Yale University. Following the war he earned college degrees at Yale — a bachelor’s degree in 1952, a master’s degree in 1953, and a doctoral degree in 1957 — paying his own

45 第2章第3節の図2-1を参照のこと。

46 Mikiso Haneの漢字表記は、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities) に記載されているものである。

way through college by teaching Japanese and setting type for an Asian studies journal.

[...]Hane taught a wide range of history courses at Knox – including Japanese, Chinese, Indian and Russian history, as well as the Western civilization sequence –from 1961 until his retirement in 1992.

(Knox College Website)

(拙訳) 羽根は1922年、カリフォルニアのホリスターで、日系移民の両親から生まれ、10歳の年までそこで暮らした。羽根の両親が、羽根を日本へ送り出し、羽根は広島で叔父と共に暮らし、学校に通った。

羽根は1940年にアメリカに戻ったが、1941年、日本との戦争が勃発すると、1942年5月から1943年10月まで、アメリカ政府によってアリゾナキャンプに抑留された。18カ月に及ぶ抑留生活の後、羽根はイエール大学の米軍プログラムで日本語を教える職に申し込んだ。戦後、羽根は日本語を教えたり、アジア研究ジャーナルで文字打ちをするなど働きながら大学を卒業し、1952年に学士、1953年に修士、1957年に博士の学位を取得した。

[中略] 羽根はノックス大学で、1961年から退職する1992年まで、西洋文明の歴史はもちろん、日本・中国・インド・ロシアの歴史など幅広い歴史コースを教えた。

戦後の羽根の業績として、*Modern Japan : A Historical Survey*がある。これはアメリカの大学生向けに、日本の歴史を易しく解説した書である。そのほか、*Eastern Phoenix : Japan Since 1945* (拙訳：東の不死鳥—1945年からの日本) や、思想史家丸山眞男の『日本政治思想史研究』を翻訳した *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan* (拙訳：徳川ジャパンの思想史に関する研究) が挙げられる⁴⁷。だが、戦後に書かれた羽根の著書の中で、Blochや戦時中の日本語教育に関する言及は見られない。

羽根はSJ作成の協力者として筆頭に名前が挙がっているほか、SJのガイドのために準備されたマニュアル *Guide's Manual for Spoken Japanese : War Department Education Manual EM 563* の監修を行った人物でもある。そのようなことから、SJが出版された1945年当時若干23歳だった羽根に、Blochが日本語話者として、一定の信用を置いていたということは一応言ってもいいであろう。

第5節．戦前・戦中の語学教育と音声教材—SJの周辺—

ここからは、SJとほぼ同時代に日本国内で作られた主要な日本語教育レコードを紹介し、SJと比較してみたいと思う。その前に、まず、いつごろから語学教育にレコードが使われるようになったのだろうか。その時期について、野村は次のように述べ、世界最初の語学レコードを作った人物として、コーティナフォンを挙げている。

(4-5-1)

1882年、アメリカに世界最古の語学校を創立したコルチナ伯は、音と脳細胞の直接の結びつきは訓練によって得られると考え、トマス・A・エディソンの協力を得て、世界最初の語学レコードを世に送った。

47 ここに挙げた業績は、いずれもKnox College Websiteに2015年4月20日時点で記載されている。

日本語教育のためのレコードが作られるようになった時期について、倉田は次のように述べている。

(4-5-2)

『音楽と蓄音機』(12年4月号)によると、横田昇一らは、11年⁴⁸ 9月28日に日本録音蓄音機協会を設立し、小学校国定教科書の標準レコードを完成した。まだ“標準語⁴⁹”という概念のない時代であるから、たとえば、「扇」の読み方は「オーギ」か「アウギ」か。「後」は「ウシロ」か「オシロ」か。「質屋」は「ヒチャ」か「シチャ」かなど、朗読上の問題提起がなされた。

国語学者上田万年や三上参次らはこのレコードを絶賛したので、標準語と方言の扱いがにわかにクローズアップされてくる。

倉田 (1979:273)

桜井は、上の倉田 (1979: 273) を引用し、さらに『コロムビア50年史』を引用した上で、次のように述べている。

(4-5-3)

『コロムビア50年史』によれば、「昭和4年〔1929年〕9月、わが社は日本で最初の教育レコードを発売した」ということである。いずれが「日本で最初」であるかは本稿の主題ではないので、その議題には入らない。ただ、この時に国語（あるいは日本語）関係のレコードが発売されたことは、まちがいない事実である。それは神保格『33000 日本語のアクセントの言葉調子』（上下）である。

桜井 (1992:40、原文どおり)

だが、倉田が挙げた小学校国定教科書の標準レコードも、桜井が挙げた神保格のレコードも、どちらも外国人が日本語を習得するために作られた日本語教育レコードではない。そのことを確認するため、桜井の引用にあるレコード番号、コロムビア33000 神保格《発音とアクセント》のA面に収録されている〈日本語のアクセントと言葉調子（上）⁵⁰〉の内容を紹介する。ここで考察のために使用した音声は、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に録音されているものである。このレコードの収録時間は両面で約6分、講演の録音か、あるいは何かを朗読しているように聞こえる。

【収録内容：4⁵¹】

48 大正11年（1922年）のことである。

49 上田万年「標準語に就きて」が1895年に発表されており、大正11年（1922年）には、既に標準語という概念はあったと考えられるが、原文どおり引用した。倉田、桜井は標準語という語について定義を示しておらず、どのような意味でこの語を用いたのかは不明である。

50 このレコードの収録内容が、どこで発言されたものであるのか、講演であったのか、聴衆はどのような人物であったのかなど詳細は不明である。

51 【収録内容：4】は、筆者が書き起こしたものである。

わたくしどもの言葉には、いろいろな音を使いますが、そのほかに声を高くしたり低くしたりして、調子をつけることもあり、強くしたり弱くしたりして抑揚をつけることもあり、また音を長くひいたり短くつめたりして、話の早さを変えることもあります。そのうち例えば、同じそうですかという言葉も、そうですか〔ノ：筆者注：上がるイントネーション〕と終わりの方であげたり、そうですか〔ㇿ：筆者注：下がるイントネーション〕と下げたりするのは声の高さの違い、調子の違いでございます。「わたくしはきのう帰りました」という言葉も「わたくしはきのう帰りました」〔筆者注：「きのう」にプロミネンス〕とか「わたくしはきのう帰りました」〔筆者注：「わたくしは」にプロミネンス〕とかいうのは、ところどころで声を強く言う違いでございます。また、「わたくしはきのう帰りました」と言えば早口になり、「わたくしはきのう帰りました」〔筆者注：一文字ずつゆっくり発音〕といえはゆっくり言うことになります。早いというのは音の短いこと、ゆっくりというのは音を長くすることでございます。この調子や抑揚や早さは、話のいろいろな場合によってさまざまに変わるものでございますが、ある言葉には、いつも同じような調子の決まっているものがあります。例えば、東京ではご飯を食べるときに箸を使う、川に橋がかかっている、などと言います。箸のときは「は」が高く「し」が低い、橋というときは「は」が低く「し」が高いのでございます。〔中略〕

（コロムビア33000 神保格 A 〈日本語のアクセントと言葉調子（上）〉）

このように、神保格の〈日本語のアクセントと言葉調子（上）〉は、外国人が初級日本語を習得するために作成されたものとは到底考えられない内容である。おそらく日本人が東京⁵²のアクセントやイントネーションを勉強するために作られたレコードであろう。では、いつ頃から外国人を対象とした日本語教育のためのレコードが日本国内で作られるようになったのだろうか。

次に、コロムビア33350 国際日本語協会編《レコードによる日本語の学習 JAPANESE LANGUAGE STUDY COURSE》（以下《レコードによる日本語の学習》と略す）を考察してみたい。ここで考察する音声も、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に収録されているものである。ただしレコードの作者または監修を行った人物、レコードが作られた目的や正確な発行年など、詳細はよくわからない。だが、レコード番号から昭和4年（1929年）～昭和17年（1942年）の間に発行されたことは確かである。

このレコードのA面〈日本語の発音（1）Pronunciation Exercise i. The Japanese Vowels〉とB面〈日本語の発音（2）Pronunciation Key Word ii. The Japanese Syllabary〉を取り上げ、SJの発音練習とどのように異なるか検討する。このレコードを朗読しているのは男性1名である。

【収録内容：5⁵³】

いえあおう

いーえーあーあーえーいー

いーえーあーえーいーあー

52 ここでいう東京とは、『NHK日本語発音アクセント辞典』に収録の金田一春彦「共通語の発音とアクセント」が使用する東京と同じ意味で用いた。なお補足だが、Bloch自身、SJで取り扱う日本語を「the speech of educated persons in Tokyo」（拙訳：東京の教養ある人々の話し言葉）（Bloch & Jorden 1945a: iii）と述べている。

53 【収録内容：5】は、筆者が書き起こしたものである。

おーうーうーおーあーあーおーうーおーあー
 いーえーあーおーうー
 うーおーあーえーいー
 あいうえお
 かきくけこ
 さしすせそ
 たちつてと
 なにぬねの
 はひふへほ
 まみむめも
 やいゆえよ
 らりるれろ
 わいうえを
 ん
 がぎぐげご
 がぎぐげご（鼻濁音）
 ざじずぜぞ
 だぢづでど
 ばびぶべぼ
 ぱぴぶべぽ

め みみ はな くち あたま ゆび て うで いえ と まど かぎ へや ざしき か
 べ れんが やね けむり いす つくえ ほん えのぐ いろ せんす ぼうし
 げた ぞうり き えだ は はな ね くき はる なつ あき ふゆ とり いぬ ねこ
 うし ぶた にわとり すずめ やま かわ もり はし みち そら あさ
 ひる よる ごぜん ごご ちち はは あに あね おとうと いもうと おじ おば
 （コロムビア33350 国際日本語協会編 A 〈日本語の発音（1）Pronunciation Exercise i .The Japanese
 Vowels〉、B 〈日本語の発音（2）Pronunciation Key Words ii . The Japanese Syllabary〉）

このレコードに教科書があったかどうかはわからない。だが、第2節で記したSJの発音練習に比べると、かなり量が少なく感じられる。実際には、SJのPronunciation Practiceが7分半、《レコードによる日本語の学習》の発音練習が7分20秒であるので、時間的な差は全くない。

「あいうえお」ではなく、「いえあおう」から練習が始まっているところがなかなか興味深い。これは、イギリスの音声学者Daniel Jonesの基本母音の影響だろうか。JonesはHarold Edward Palmerとかつて同僚であったことが知られている。そのことは、例えば、高梨（1963: 10）が「日本に来るまでのPalmerの研究をふりかえてみよう。ロンドン大学に奉職してJones博士の下で教授法、音声学、Spoken Englishの研究に従事した7年間（38～45才）がかれの学問の最盛期と考えられている」と述べていることから明らかである。

高梨（1963:32）は、Palmerが著書 *A Grammar of Spoken English* で示した英語音分類表をまと

め直している。次の表は、その一部を抜粋したものである。これを見るとPalmerが記した母音もやはり「いえあおう」の順に始まることがわかる。

(4-5-4)

番号	音声記号	該当音を含む例語	正書体
No.1	i:	si:	SEE
No.2	i	giv	GIVE
No.3	e	ten	TEN
No.4	æ	bæk	BACK
No.5	a:	ka:m	CALM
No.6	ɔ	stɒp	STOP
No.7	ɔ:	ɔ:l	ALL
No.8	u	buk	BOOK
No.9	u:	tu:	TOO

高梨 (1963:32)

《レコードによる日本語の学習》が作られた経緯はよくわからないが、「いえあおう」から始まる発音練習から、この当時の日本語教育にJones、Palmerの英語教育の影響を垣間見ることができるようと思われる。また、後に紹介する『ハナシコトバ』でも、上巻の冒頭で口の形と口腔断面図が提示されているが、これも「イェアオウ」の順に並んでいることは興味深いところではある。この点については本稿ではこれ以上言及しないが、今後研究してみたい課題である。

《レコードによる日本語の学習》の発音練習は、「いえあおう」から始まることを除いては、工夫が感じられる箇所は少ない。SJがそれぞれの母音、子音、また特殊拍やアクセントなど細かく分類した発音練習を準備したことに比べると、《レコードによる日本語の学習》は語の並びに脈略がなく、アクセントもバラバラである。実際に収録音声聞いてみると、「ごご」ははじめの「ご」がガ行音、二つ目の「ご」が鼻濁音で発音されているし、「つくえ」「くき」で母音の無声化が見られる。何の説明もなくこうした音声を聞かされた学習者は混乱するであろう。この発音練習に比べると、SJの発音練習が学習者にいかに親切で、わかりやすいものであったかがわかる。

次に、コロムビア33646、33647、文部省内日本語教育振興会監修《ハナシコトバ》を考察する。このレコードは、『ハナシコトバ』の付属レコードである。『ハナシコトバ』は上・中・下の3巻から成る初級用日本語教科書で、「初めて日本語を学ぼうとする東亜の人々が話言葉としての日本語を学習するための〔中略〕教科書」(長谷川1991: 63)である。そのレコードは、「1942年6月には『ハナシコトバ』のレコードが文部省関係者などの試聴を経て完成した」(関1997: 186)ので、SJとほぼ同年代のレコードであるといってよい。SJは、戦時中のアメリカが、言語学者を総動員して作り上げた日本語教科書であるが、『ハナシコトバ』もまた、戦時中の日本政府が威信をかけて作り上げた日本語教科書である。『ハナシコトバ』作成にあたっては、長沼直兄が意見を述べたということが言われている⁵⁴。

レコードの収録内容は、教科書の印刷内容をそのまま全て朗読した形式である。『ハナシコ

54 河路 (2011: 2) や山下 (1998: 8-10) にそう記載されている。

トバ』の下巻は挿絵がふんだんに使われた44ページの教科書である。下巻のレコードは（下一）～（下四）の両面2枚で、全体の収録時間は約11分半である。発音練習などは一切ない。以下はその収録内容である。ここで考察に使用した音声も、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に収録されているものである。朗読しているのは、女性1名である。

【収録内容：6⁵⁵】

トーキョーカラ ホーテンオ トーッテ ペキンエ イキマス。

ペキンマデノ キシャチンワ クジューニエン ハッセンデス。

モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデショーカ

〔中略〕

キシャガ テッキョーオ トーッテイキマス。

ゴーゴート オトオ タテテ ハシッテイマス。

コドモガ カワノ キシデ 「バンザイ」 「バンザイ」 ト イッテイマス。

〔中略〕

ゴブサタシマシタ。

ミナサン オカワリワ アリマセンカ。

チョーカコー⁵⁶ニ イル オジガ ワタクシノ ウチエ マイリマス。

オヒマデシタラ アサッテノ バン オイデクダサイ。

モーコノ メズラシイ ハナシオ キキマシヨー。

ユーガタニ ナリマシタ。

ニシノ ソラガ マッカデス。

コドモガ ユーヤケノ ウタオ ウタッテイマス。

「ユーヤケ コヤケデ ヒガ クレテ、ヤマノ オテラノ カネガ ナル。

オテテ ツナイデ ミナ カエロー。カラスト イッショニ カエリマシヨー。」

（コロンビア33646文部省内日本語教育振興会監修A〈ハナシコトバ（下一）〉、B〈ハナシコトバ（下二）〉。コロンビア33647A〈ハナシコトバ（下三）〉、B〈ハナシコトバ（下四）〉）

このレコードは、文と文の間隔が1秒～2秒と非常に短い。例えば「トーキョーカラ ホーテンオ トーッテ ペキンエ イキマス。」という文が読まれた後、わずか2秒で次の文「ペキンマデノ キシャチンワ クジューニエン ハッセンデス。」が始まり、またその2秒後に「モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデショーカ」が読まれる。これでは、レコードを聞いた学習者が、後について発音練習しようとしても、「トーキョーカラ」まで言ったところで、もう次の文が始まってしまう。同様に、「チョーカコーニ イル オジガ ワタクシノ ウチエ マイリマス」の後、わずか1秒後に「オヒマデシタラ アサッテノ バン オイデクダサイ。」が始まる。夕焼け小焼けの歌の部分に関しては、もはやポーズは全くない。よほど上級学習者でなければ、後について発音することはできないであろう。レコードゆえ少し戻してまた聞くという作業はもちろん簡単ではなかったはずである。

55 【収録内容：6】は筆者が書き起こしたものである。表記は『ハナシコトバ』（下）の本文に合わせた。

56 チョーカコー：張家口（中国の地名）。

SJが、ネイティブスピーカーの発音を真似するだけのポーズを確保したレコードであることは既に何度も述べてきた。そのことは、一文がかなり長くなっても変わらない。その確認のため、Unit 10のSection Aの収録内容を見ておきたい。

【収録内容：7⁵⁷】

Unit 10 Section A Basic Sentences

男性 A	Still or yet
男性 B	máda
(くり返し)	máda
男性 A	father
男性 B	otóosañ
(くり返し)	otóosañ
男性 A	mother
男性 B	okáasañ
(くり返し)	okáasañ
男性 A	father and mother
男性 B	otóosañ ya okáasañ
(くり返し)	otóosañ ya okáasañ
男性 A	I haven't met your father and mother yet.
男性 B	Watakusi wa máda anáta no otóosañ ya okáasañ ni, átta koto ga arimaséñ. (5 秒のポーズ)
(くり返し)	Watakusi wa máda anáta no otóosañ ya okáasañ ni, átta koto ga arimaséñ. (5 秒のポーズ)
男性 A	together
男性 B	issyo ni
(くり返し)	issyo ni
男性 A	take along
男性 B	tureru
(くり返し)	tureru
男性 A	introduce
男性 B	syookai-suru
(くり返し)	syookai-suru
男性 A	Please take me home with you and introduce me.
男性 B	Issyo ni uti e turete itte, syookai-site kudasai. (4 秒半のポーズ)
(くり返し)	Issyo ni uti e turete itte, syookai-site kudasai. (4 秒半のポーズ)

出典：Bloch&Jorden 1972 (カセットテープ、日文研所蔵)。

上の収録部分では、“Watakusi wa máda anáta no otóosañ ya okáasañ ni, átta koto ga arimaséñ.”の後には5秒間のポーズがある。同様に“Issyo ni uti e turete itte, syookai-site kudasai.”の後にも4秒半のポーズがある。したがって、学習者はネイティブスピーカーの発音を聞いた後、十分に繰り返して発音練習ができるのである。

57 【収録内容：7】は筆者が書き起こしたものである。線より左側の男性A、男性B、(くり返し)という言葉そのものは収録されていない。表記はSJ本文に合わせた。ただし、SJ本文ではuti eと書かれているが、レコードではuti eと発音されていることは、既に第3節で述べたとおりである。

ところで、『ハナシコトバ』には、『日本語教科用ハナシコトバ学習指導書』（以下、『ハナシコトバ学習指導書』と略記）がある。これは、長沼直兄が執筆したものである⁵⁸。『ハナシコトバ』は問答法を中心として教えられていた。例えば【収録内容：6】で取り上げた「トーキョーカラ ホーテンオ トーッテ ペキンエ イキマス。〔中略〕モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデショーカ」の部分では、次のような教室活動が行われていたことが『ハナシコトバ学習指導書』からわかる。

(4-5-5)

○⁵⁹とうきょうから ほうてんまで なにに のっていきますか。(地図を指しながら)

△きしゃに のっていきます (一人々々に)

○ほうてんから ペキンまで なにに のっていきますか。(地図を指しながら)

△きしゃに のっていきます (一人々々に)

○これは なんですか。(汽車の切符を掲げ示して)

△きっぷです。(指導者も和して一齊に、また一人一人に)

○きっぷ。(繰返す。)

△きっぷ。(一人々々に)

○これは どこから どこまでの きっぷですか。(切符を示し、または切符を圖示して)

△とうきょうから ペキンまでの きっぷです。(一人々々に)

○きしゃちん。(と繰返していひながら、切符を示し、また財布を示して、その意を明らかにする。)

きしゃちんは いくらですか。(圖示したきっぷの金額の符號を指して)

○△クジューニエン ハッセン。(繰返す)

○拾圓紙幣として紙幣大の紙九枚を數へさせてクジュー エンと板書し、壹圓紙幣として紙幣大の紙を二枚數へさせて二を書加へ(または壹圓紙幣として紙幣大の紙を九十二枚數へさせ)、なほ壹錢銅貨八枚を數へさせてハッセンと書き足す。

クジューニエン ハッセン。(繰返す)

△クジューニエン ハッセン。(一人々々に)

○くじふにゑん はっせん。

たくさんですね。

それは なんの おかねですか。

△きしゃちんです。(一人々々に)

○さうです、きしゃちんです。(といひながら、さきに板書した符號キシヤの下にチンと書き加へる。)

キシヤチン。(繰返す。)

△キシヤチン。(一人々々に)

○これは ひとりの きしゃちんですか、ふたりの きしゃちんですか。

△(それは) ひとりの きしゃちんです。(一人々々に)

58 河路(2011: 2-3)、山下(1998: 9)を参照。

59 ○は指導者、△は學習者である(原文表記のまま)。

○もし ふたりで いけば いくら かかるでせうか。

言語文化研究所（1998c:49-53 表記は原文どおり）

『ハナシコトバ学習指導書』では、レコードについて何も書かれていない。学習指導書のとおりの教室活動が行われていたとすれば、少なくとも教室でレコードは必要なかったであろう。もちろん、この時代、学習者が自宅でレコードを聞いて学習したとは考えにくい。

レコードの文と文の間のポーズが非常に短いこと、教室では問答法を中心とした授業が行われていたことなどから考えると、『ハナシコトバ』のレコードは、学習者がレコードを聞いて発音を繰り返し練習することを想定して作られたというわけではなさそうである。ネイティブスピーカーの音を真似して発音練習させるというSJの徹底した方針は、『ハナシコトバ』にはない。『ハナシコトバ』のレコードは、明確で具体的な使用目的がなく、漠然と、日本語普及のために作られたレコードであるような印象を受ける。

河路は次のように述べているが、『ハナシコトバ』のレコードは、結果的に学習者ではなく、日本語教師が標準的な発音を聞くために役立ったレコードなのである。

(4-5-6)

当時、普及すべき日本語は、「標準語」で、模範的な発音、アクセントを最初から提示することが大切であった。日本語教員養成研修においても「発音」の実習は、標準的な発音・アクセントの訓練であった。

しかし、このことからわかるように、実際に大陸に赴いた日本人日本語教師が必ずしも標準的な発音・アクセントの使い手であったわけではない。

5枚セットのレコードは、標準的な発音・アクセントの模範を示すために作成された。

河路（2011⁶⁰: 3）

ここまで、SJより前に日本国内で作られた主要な日本語教育レコードを概観してきた。戦前戦中に作られた日本語教育レコードは、戦後の1960年代の頃から本格的に始まった外国人を対象とした日本語教育ではほとんど使われることはなかった。戦後に作られたレコードとしては、水谷によれば、次のようなものがある。

(4-5-7)

○“Naganuma’s Practical Japanese” 長沼直兄 発行＝開拓社 昭和34年6月

レコードはコロムビアLP三枚。価格¥2,400

○“Practical Spoken Japanese” 「実用日本語会話」、三浦順二、1964年、三省堂、価格¥2,000 フォノシート五枚（録音時間四時間四十分）

○“Japanese on Record” by O.Vaccari 価格＝¥4,500 レコードはLP三枚

○”Living Japanese, A Complete Language”, by E.Shirota 価格＝¥4,310

レコードLP四枚

60 http://www.tufs.ac.jp/blog/is/g/news/tenji_booklet_23.pdfで、2016年10月現在閲覧できる。

以上、SJの周辺に位置付けられる、戦前・戦中の語学教育と音声教材について概観してきた。昭和初期に日本で発売された日本語教育レコードは、どれも学習者が日本語習得をするために工夫されたレコードであるとは言い難いものばかりであった。レコードを作成した目的は明確ではなく、どのようにレコードを使って学習すればよいかははっきりしないのである。SJはネイティブスピーカーの発音を聞き、繰り返し発音練習するために、文と文の間にポーズを十分に設けた。しかし『ハナシコトバ』のレコードは、日本語を「聞く」ことが目的であり、文を聞いた後すぐその発音を真似して練習するためには作られてはいなかった。このように考えてきたとき、SJのレコードは、外国人を対象とした日本語教育の先駆的レコードであったということとはできるだろう。もちろんその内容は印刷されたテキストの音読ではあるのだが、外国語の音を聞いて、それを繰り返し発音して練習するという、現在では当たり前の語学学習スタイルの先駆け的存在なのである。

第6節．おわりに

Blochの日本語教育上の業績の一つにSJがあることは、日本語教育関係者にほとんど知られることなく今日に至っている。まして付属レコードは、これまで全く日の目を見ることがなかった。そのレコードの存在を明らかにしたこと、またその過程で羽根幹三という日系人を掘り起こすことができたということが、第4章での研究の大きな意義である。

本研究を踏まえ、SJのレコードは、外国人を対象とした日本語教育の先駆け的存在として、日本語教育史の中に記述されるべきであると考ええる。また、Blochの業績の一つとして、このレコードは正当に評価され、研究がなされる必要があるということを結論としたい。

結局、レコードの吹き込みを行った人物は誰だったのだろうか。SJの著者として、Bloch、Jorden、羽根幹三、Toshio Konoの名前しか挙げられていないのだから、吹き込みを行ったのは英語がBloch、日本語が羽根幹三であると考えるのが妥当なように思われる。しかし、そう断定できる根拠は残念ながら見つかっておらず、一番大きな謎を残したままこの研究を終える。

ロイ・A・ミラー（1975: xv）によれば、「イェール大学でブロックが日本語を研究し、教えるのを手伝うインフォーマントを雇うに至った手紙が、任用書類と給与計算書、移民当局者に対する嘆願書などと一緒にある」ということである。それを見れば、レコードの収録を行った人物が特定できるだろうか。これを今後の課題として残す。

<謝辞>

本研究に際して、特別共同利用研究員としての受け入れを快く許可して下さった国際日本文化研究センターのジョン・グリーン教授、並びに国際日本文化研究センター関係者の皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

<付記>

本研究は、池田（2016）を加筆訂正したものである。初出は国際日本文化研究センター学術誌『日本研究』第52号。

第5章. Bernard Blochが聞いた日本語： 母音の無声化と脱落に焦点をあてて

第1節. はじめに

無声子音に挟まれた高母音/i/と/u/が無声化することは、一般によく知られている。『国語学辞典』は無声化を次のように定義している。

(5-1-1)

無声化：声がなくなること。持続部における声帯の振動がなくなること。例えば、東京語の「機械」という単語の頭の[kʲ]の次には、なかば有声、またはなかば無声の母音[i̯]の来ることがあり、また全然、母音のないこともある。〔中略〕このような場合、「本来有声であるべき母音が、特殊な場合に無声になった」という考え方から、これを「母音の無声化」と言っていた。このような母音の無声化は、東京語では、無声の子音音素の間にはさまれた/i/・/u/、または無声の子音音素に続く語頭の/i/・/u/に該当するところに見られるのが普通であるが、文末のデス・マスの最後の/u/に該当するところにも見られる。

国語学会国語学辞典編集委員会編（1956:899）

これによると、母音の無声化という現象には、一つに「なかば有声、またはなかば無声の母音が来ること」、もう一つに「全然、母音のないこと」の二つが内在していることがわかる。しかし、具体的にどのような環境で無声母音が来て、どのような環境で母音がなくなるのかといったことには触れられていない。本研究では、以下、無声母音が来る場合を特に「母音の無声化」、母音がなくなる場合を、「母音の脱落」と「」に入れて両者を使い分け、その現れ方の違いを考察していく。

その手懸りとして、Bloch（1950）が記述した日本語の音声表記を分析し、「母音の無声化」と「母音の脱落」の間に規則性があるのかどうか、先行研究と比較しながら検証していきたい。

第2節. 音声表記について

音声表記は、Blochが用いたものをそのまま使用する。「母音の無声化」の場合、母音を大文字[A, I, U, O⁶¹]と記す。「母音の脱落」の場合、子音の後に[・]をつける。また促音、撥音も、それが1拍分の長さを持つことを示すため、[・]をつけて表してある。口蓋化子音は斜体で記す。

第3節. 研究の概要

Bloch（1950）は458個の音声表記を、アメリカ式音声記号で表している。（重複するものを除く。また‘kore’のような1語に限定せず、‘kaŋ-ŋɔf-fUtari’や‘mádoaketenemáš-ta’のような句も含む。）この458個の中から、Bloch（1950）が「母音の無声化」として表記したもの（例：atsUsa）、「母音の脱落」として表記したもの（例：ts-tʃi）を取り出し、「無声化」と「脱落」

61 No instances of voiceless [E] have been observed, (拙訳：無声音[E]を含む例は見つからない) とBloch (1950:103) は述べている。一方、佐久間（1963:232）のように「ケッシテ、テスキ、セッカク」を無声音[E]の例として挙げている研究もある。

が生じている環境の違いを考察する。

第4節. 結果

結果を次ページの表5-1、表5-2に示す。表5-1は「母音の脱落」が見られたもので52個、表5-2は「母音の無声化」が見られたもので55個観察された。なお、左側に音声記号、右側に英語訳を示している。これらは筆者がabc…の順に並べ替えたものである。

「無声化」または「脱落」が生じる母音に先行する子音ごとにまとめ直したものが、94ページの表5-3と表5-4⁶²である。表5-3から、「母音の脱落」が生じる場合、「脱落する母音」に先行する子音は、[s], [ʃ], [f], [x], [ts], [tʃ]の6個に限られていることがわかる。また「脱落する母音」は、/i/または/u/である。一方、表5-4より、「母音の無声化」が生じる場合、「無声化する母音」に先行する子音は、[s], [ʃ], [f], [x], [ts], [tʃ]のほか、[k], [p], [t]でも観察された。先行子音が[s], [ʃ], [f], [x], [ts], [tʃ]の場合に「無声化する母音」は、/i/または/u/のみだが、先行子音が[k], [p], [t]の場合には、/i/, /u/に限らず、/a/, /o/においてもまた、「無声化」が見られた。

第5節. 先行研究との比較

第1項. 松崎・河野 (2010)

松崎・河野 (2010) は、母音の「無声化」と「脱落」について、次のように述べている。

(5-5-1)

イ段の「キシチヒピ」、ウ段の「クスツフ」「シュ」が、カサタハバ行の前や「ッ」の前にあるとき、母音が無声化する傾向が強い。これを再定義すると、「無声子音に挟まれた狭母音／イ／／ウ／が、声帯振動を伴わなくなる現象」と言うことができる。言い切り（後に休止がある状態）の／あります。／／しかし、／等でも、無声化が生じることがある。また狭母音以外の／かたい／／ここ／／はか／／ほこり／等や、／あかい／等の句頭の中母音・広母音でも、無声化が生じることがある。

〔中略〕ただし、／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／などの摩擦音や破擦音の場合、無声化母音があるというより、摩擦音が引き伸ばされている、つまり母音の脱落現象だと見なし、／ステル／ [steru]と表記することもある。

松崎・河野 (2010:127)

松崎・河野 (2010) は「イ段の「キシチヒピ」、ウ段の「クスツフ」「シュ」が、カサタハバ行の前や「ッ」の前にあるとき」を、母音が無声化する条件として挙げている。そのうち、「／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／などの摩擦音や破擦音の場合」を、特に「脱落」する条件だとしている。

さて、Bloch (1950) では、表5-3を見ると、確かに／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／で多くの「脱落」を確認することができる。しかし、表5-4では、／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／でも「脱落」ではなく、「無声化」として挙げられているものも見られる。／

62 表5-3は53個、表5-4は56個あるが、これは‘f•kimáš•ta’と‘kUs•setsUsuru’がそれぞれ「脱落」と「無声化」を二つずつ含んでいるため、重複して分類したものである。

表 5-1. 【母音の脱落】

arimas•	there is
arimáš•ta	there was
f•kimáš•ta	blew
f•kuro	bag
f•táhako	two boxfuls
f•tats•	two
f•tóru	grows fat
f•tšidži	government of an urban prefecture
f•tsuuno	regular
gof•kuya	drygoods store
hatš•	eight (in rapid speech)
hats•ka	twenty days
its•ka	five days
íts•ka	some time
kaǵ•ǵóf•fUtari	two nurses
kaǵ•ǵófUf•tari	two nurses
katš•toosu	wins through
kíots•kéru	pays attention
kutš•ki	decayed wood
mádoakete # nemáš•ta	I opened the window and went to bed.
mádoaketenemáš•ta	I went to bed with the window open.
māñ•néǵ•x•tsu	fountain pen
matš•kara	from the town
matš•to	town and (country, etc.)
máts•to	if one waits
nif•ku	two sips
nix•ki	two (animals)
š•kata	way of doing something
s•keeriǵ•ǵu	skating
š•kimono	carpet
s•kóši	a little
š•ta	tongue
š•tawa	as for the place beneath
š•táwa	as for the tongue
s•teru	throws away
š•tši	seven
s•tšiimu	steam
š•tsúrei	rudeness
sān•fūrání•šís•ko	San Francisco
soodes•ka	Is that so?
tš•kára	strength
ts•tši	soil
tš•tši	father
tš•tsúdžo	good order
ts•tsúmu	wraps
uís•kii	whisky
uts•kúšIsa	beauty
x•kúi	low
x•to	person
x•tóts•	one
x•tšoo	flying bird
x•tsudži	sheep

表 5-2. 【母音の無声化】

atsUsa	thickness
átsUsa	heat
dekIta	was possible
fUsuma or hUsuma	light opaque sliding door
fUt•tei	scarcity
gũm•pUku	uniform
hatšIfúrân•	eight francs
hatšIsén•tši	eight centimeters
hatsUšimo	first frost of the year
ip•pIki (or ip•piki)	one (animal)
ip•pUku	one sip
kAkéru	hangs it
kaǵ•ǵóf•fUtari	two nurses
kaǵ•ǵófUf•tari	two nurses
kAp•pa (or kap•pa)	raincoat
kAt•te	kitchen
keš•šIte	never
kIfu	contribution
kIp•pu	ticket
kIs•soo	good news
kIša	train
kIsóona	seeming to come
kIt•to	surely
kIta	came
kOkóro	heart
kOp•pu (or kop•pu)	glass tumbler
kOr•tši	this direction
kUs•setsUsuru	refracts
kUš•šōn•or kuš•šōn•	cushion
kUsa	grass
kUt•taku	trouble
kUtábíréru	get tired
kUtši	mouth
kUtsu	shoe
ókIta	woke up
pAkurito	in one gulp
pIk•koro	piccolo
pI•tšaa	pitcher (in baseball)
pItšaplItša	splash
pOkét•to	pocket
šIk•kēn•	judgement
šIš•šoku	unemployment
šIsei	municipal government
šIt•ta	knew
sUp•pái	sour
šUsai	supervision
šUsei	alcohol
sUsumu	advances
tAk•kYuu	pingpong
tAkái	high
tOkoro	place
tšIsei	topography
uts•kúšIsa	beauty
xífu or xIfu	skin
xIsomeru or hIsomeru	conceals

* 第2節で述べたように、表の表記は Bloch の原文のままであり、口蓋化子音は斜体で記している。

表 5-3. 【母音の脱落】：先行子音による分類

[s]	
s•keerij•ŋu	skating
s•teru	throws away
soodes•ka	Is that so?
s•kōši	a little
s•šīimu	steam
uis•kii	whisky
a•rimas•	there is
sān•fūrān•šis•ko	San Francisco

[š]	
š•kata	way of doing something
š•kimono	carpet
š•ta	tongue
š•tawā	as for the place beneath
š•tši	seven
š•tāwa	as for the tongue
mādoooketenemāš•ta	I went to bed with the window open.
a•rimāš•ta	there was
f•kimāš•ta	blew

[f]	
f•kuro	bag
f•tats•	two
f•tšidži	government of an urban prefecture
f•tsuuno	regular
go•f•kuya	drygoods store
ni•f•ku	two sips
f•tōru	grows fat
f•tāhako	two boxfuls
f•kimāš•ta	blew
kaŋ•ŋōf•fU•tari	two nurses
kaŋ•ŋōfU•tari	two nurses

[x]	
x•to	person
x•tšoo	flying bird
x•tsudži	sheep
nix•ki	two (animals)
x•kūi	low
x•tōts•	one
mān•nēŋ•x•tsu	fountain pen

[ts]	
f•tats•	two
hats•ka	twenty days
its•ka	five days
ts•tši	soil
its•ka	some time
māts•to	if one waits
ts•tsūmu	wraps
x•tōts•	one
kiots•kéru	pays attention
uts•kūšIsa	beauty

[tš]	
hatš•	eight (in rapid speech)
kutš•ki	decayed wood
tš•tši	father
tš•tsūdžo	good order
matš•to	town and (country, etc.)
tš•kára	strength
katš•toosu	wins through
matš•kara	from the town

表 5-4. 【母音の無声化】：先行子音による分類

[s]	
sUsumu	advances
sUp•pái	sour

[š]	
keš•šIte	never
šIk•kēn•	judgement
šIs•soku	unemployment
šIsei	municipal government
šIt•ta	knew
šUsai	supervision
šUsei	alcohol
uts•kūšIsa	beauty

[f]	
fUsuma or hUsuma	light opaque sliding door
fUt•tei	scarcity
kaŋ•ŋōf•fU•tari	two nurses
kaŋ•ŋōfU•tari	two nurses

[x]	
xifu or xIfu	skin
xIsomeru or hIsomeru	conceals

[ts]	
atsUsa	thickness
hatsUšimo	first frost of the year
kUs•setsUsuru	refracts
átšUsa	heat

[tš]	
tšIsei	topography
hatšIfūrān•	eight francs
hatšIsēn•tši	eight centimeters

[k]	
kAp•pa (or kap•pa)	raincoat
kAt•te	kitchen
kIp•pu	ticket
kIs•soo	good news
kIt•to	surely
kOp•pu (or kop•pu)	glass tumbler
kOt•tši	this direction
kUs•setsUsuru	refracts
kUsa	grass
kUt•taku	trouble
kUtši	mouth
kUtsu	shoe
kIfu	contribution
kIsa	train
kIta	came
ókIta	woke up
kUs•šōn•or kuš•šōn•	cushion
dekIta	was possible
kAkéru	hangs it
kOkóro	heart
kIsóona	seeming to come
kUtábíréro	get tired

[p]	
gūm•pUku	uniform
ip•piki (or ip•piki)	one (animal)
ip•pUku	one sip
pIk•koro	piccolo
pIt•tšaa	pitcher (in baseball)
pItšapItša	splash
pAkurito	in one gulp
pOkét•to	pocket

[t]	
tOkoro	place
tAk•kYuu	pingpong
tAkái	high

シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／でも「脱落」ではなく、「無声化」であるとBloch（1950）が記したものを、表5-4から取り出すと、次のとおりである。

- ①[sUsumu]
- ②[sUp·pái]
- ③[keš·šIte]
- ④[šIk·kěŋ]
- ⑤[šIš·šoku]
- ⑥[šIsei]
- ⑦[šIt·ta]
- ⑧[šUsai]
- ⑨[šUsei]
- ⑩[uts·kúšIsa]
- ⑪[fUsuma]
- ⑫[fUt·tei]
- ⑬[kaǵ·ŋóf·fUtari]
- ⑭[kaǵ·ŋófUf·tari]
- ⑮[xIfu]
- ⑯[xIsomeru]
- ⑰[atsUsa]
- ⑱[átsUsa]
- ⑲[hatsUšimo]
- ⑳[kUs·setsUsuru]
- ㉑[tšIsei]
- ㉒[hatšIfúrân·]
- ㉓[hatšIsěŋ·tši]

これらは、全て／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／であるのだから、松崎・河野（2010）に従えば、「脱落」とみなしてよいはずである。つまり、①は[sUsumu]ではなく、[s·sumu]でよい。それをBloch（1950）は、わざわざ「ススム」は[sUsumu]と書き、「ステル」は[s·teru]と書くことで表記を分けている。このことから、「ススム」の「ス」と、「ステル」の「ス」は、少なくともBloch(1950)の耳には違って聞こえたと考えることができる。では、その違いは何だろうか。

以上の観察から、「母音が脱落する」条件は、単に／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／であるとは言えなさそうである。

第2項. 川上（1977）

川上（1977）は、次のように述べている。

(5-5-2)

日本語は母音に富むという定評はどうも事実と反するようだ。日本語には次のような規則ないし原則があって母音追放につとめている。すなわち、アクセント等の条件が許すかぎり無声

子音の直前の「き、ぴ」「く、ぷ、しゅ、ちゅ」は母音をもたず、その代りに無声母音[i̥][ɸ]をもつ。また、無声子音の直前の「し、ち、ひ」「す、つ、ふ」は一般に無声母音すらもたない。もしもったとしても、その長さは極度に短い。

川上 (1977:26)

(5-5-3)

[シ、チ、ヒ、ス、ツ、フ]は、細かくは、(1) 無声母音をもつもの、つまり[ʃ̥, tʃ̥, ç̥; s̥, ts̥, F̥⁶³]と、(2) 子音だけのもの、つまり[ʃ, tʃ, ç; s, ts, F]とに分れる。その使い分けは次のとおりである。すなわち、それに促音の付く場合は(1)の使われることが多く、それ以外は(2)の使われることが多い。例えば[シッカク] (失格)は[ʃ̥ikkaku]が普通である。[シカク] (資格、四角、視覚、等)は[ʃkaku]がむしろ普通である。

ただし、その直後に同じ子音の来る場合は(2)の使われることがさほど多くない。例えば[シシヨク] (試食)は[ʃʃoku]もあるが、[ʃ̥ʃoku]がかなり多い。[シッシヨク] (失職)は[ʃ̥ʃ̥ʃoku]が[ʃ̥ʃ̥ʃoku]より断然多い。

川上 (1977:73)

川上 (1977) は、[シ、チ、ヒ、ス、ツ、フ]を、「無声母音を持つもの」と「子音だけの(すなわち母音が脱落する)もの」に分けているので、この点はBloch (1950)と共通する。川上 (1977)によると、[シ、チ、ヒ、ス、ツ、フ]のうち、後ろに促音が付く場合には、「脱落」せず、「無声母音」として現れるという。

Bloch (1950) が[シ、チ、ヒ、ス、ツ、フ]の拍でも、「脱落」ではなく、「無声化」であると記述したものは、第5章第5節第1項で触れたように、①から②③までの23個である。その23個のうち、「無声母音」の後ろに促音が来るものは、以下の五つである。

②[sUp·pái]

④[ʃlk·kēn]

⑤[ʃl̥š·šoku]

⑦[ʃlt·ta]

⑫[fUt·tei]

すると、この五つは、後ろに促音が付くことに影響されて、「無声母音」として Bloch (1950)の耳にも聞こえたということだろう。

また、川上 (1977) によると、「直後に同じ子音が来る場合」には「脱落」ではなく、「無声母音」として現れやすいと言う。第5章第5節第1項で触れた23個の中で、直後に同じ子音が来るものは、次の二つが該当する。

①[sUsumu]

⑭[kaŋ·ŋófUf·tari]

ここで、⑬[kaŋ·ŋóf·fUtari]と⑭[kaŋ·ŋófUf·tari]の違いを考えておきたい。⑬は、[kaŋ·ŋóf·#fUtari]のように、「看護婦」と「二人」の間にポーズ[#]を入れて発音した場合であると筆者は考えて

63 (5-5-3) の音声表記は、川上 (1977) が用いたものをそのまま引用した。[ʃ, tʃ, ç, s, ts, F]はBloch (1950)の表記では、順に[ʃ̥, tʃ̥, x, s, ts, f]に対応している。

いる。[#] があるとき、[kaŋ·ŋóf·]の最後の母音が脱落する。ポーズがなく連続して発音された場合、子音[f]と[f]に挟まれた母音[U]が無声化すると見ることができる。

しかし、それでもなお説明がつかない表記が残る。松崎・河野（2010）、川上（1977）の説に従えば、以下に挙げた語は、「母音の脱落」として生じやすいとされているものである。だが、Bloch（1950）は、「無声化」と表記している。

- ③[keš·šIte]
- ⑥[šIsei]
- ⑧[šUsai]
- ⑨[šUsei]
- ⑩[uts·kúšIsa]
- ⑪[fUsuma]
- ⑬[kaŋ·ŋóf·fUtari]
- ⑮[xIfu]
- ⑯[xIsomeru]
- ⑰[atsUsa]
- ⑱[átsUsa]
- ⑲[hatsUšimo]
- ⑳[kUs·setsUsuru]
- ㉑[tšIsei]
- ㉒[hatšIfúrān·]
- ㉓[hatšIsén·tši]

ただし、このうち⑥、⑧、⑨、⑮について、『NHKアクセント辞典』では、「シセイ」、「シュサイ」、「シユセイ」、「ビフ（ヒフ）」のように無声化しないとされているものである。これについて、『NHKアクセント辞典』（1998:228）は「無声化する拍のアクセントが高く、次の拍が低い時」「無声化する拍の次にサ行音やハ行音、そして《シャ》《シュ》《ショ》などの拍がくると、アクセントに関係なく無声化しにくく、また無声化しなくても、不自然に聞こえない」と述べている。ただ『NHKアクセント辞典』では、「母音が脱落」する場合については特に触れられていない。

しかしながら、少なくともBloch（1950）には、インフォーマントが発した日本語がこのように聞こえたということは事実であり、本稿ではあくまでもBloch（1950）が聞いて書き留めた音声表記について考察していく。

第6節．考察

先行研究では、[シ、チ、ヒ、ス、ツ、フ]というように、「脱落」または「無声化する」母音に先行する子音に着眼点が置かれている。母音に後続する子音については、松崎・河野（2010）、川上（1977）ともに、単に「無声子音」という大きな括りでまとめられている。後続子音に何かヒントがあるのではなからうか。次に、音形素性の観点から研究を進めていく。

先に挙げた表5-3、表5-4から、「脱落」または「無声化する」母音に先行する子音が[s], [š], [f], [x], [ts], [tš]である場合、後続子音がどのようなものであるかをまとめたものを次に示す。φは脱落を、#はポーズを示す。なお、促音が後続するケースについては、すでに「無声化母音」

として現れやすいことが先行研究より確認されているので、ここでは省略してある。

[u]→ ϕ / f _ k, t, tš, ts, #

[u]→ ϕ / s _ k, t, tš

[u]→ ϕ / ts _ k, t, tš

[u]→[U] / f _ s

[u]→[U] / s _ s

[u]→[U] / ts _ s, š

[u]→[U] / š _ s

[i]→ ϕ / x _ k, t, tš, ts

[i]→ ϕ / š _ k, t, tš, ts

[i]→ ϕ / tš _ k, t, tš, ts, #

[i]→[I] / x _ s, f

[i]→[I] / š _ s

[i]→[I] / tš _ s, f

このことから、「脱落する母音」の後続子音は[k], [t], [tš], [ts]及び[#]で、[#]も声門閉鎖音[ʔ]が続くとみなせば、いずれも閉鎖から始まる子音であることがわかる。一方、「無声化する母音」の後続子音は、[s], [š], [f]で、こちらは閉鎖を伴わない子音であることがわかる。

そこで、次に、「脱落」または「無声化する」母音の前後に生じる子音の継続性（±continuant）に着目してみたい。「脱落」または「無声化する」母音に先行する子音が、摩擦音、破擦音の場合には継続性をプラス（+continuant）とし、閉鎖音の場合に継続性をマイナス（-continuant）とする。また後続する子音が、摩擦音の場合に継続性をプラス（+continuant）、閉鎖音、破擦音及びポーズの場合は、閉鎖から始まるため、継続性をマイナス（-continuant）とする。例えば、[fUsuma]は、無声化した母音[U]に先行する子音が[f]、後続する子音が[s]であるため、（+、+）である。[s·teru]は、脱落した母音に先行する子音が[s]、後続する子音が[t]であるため、（+、-）とする。この情報を書き加えたものが、次ページの表5-5、表5-6である。表5-6には、先行子音が[k], [p], [t]の場合も含まれている。[k], [p], [t]では「脱落」は生じないが、どのような環境で無声化が生じているか検討するため、これらについても前後の環境の継続性を書き加えた。

この調査によって、表5-5から明らかなように、全ての場合において、「脱落する」母音に先行する子音の継続性は（+）、後続する子音の継続性は（-）であることがわかった。[kaŋ·ŋóf·fUtari]は（+、+）だが、これはさきにも述べたとおり、「看護婦」と「二人」の間にポーズがあることを想定した発音であるため（[kaŋ·ŋóf·#fUtari]）、先行子音を[f]、後続するものをポーズとみなせば、これもまた（+、-）であると見るができる。その結果、Bloch (1950)が記した「母音脱落」は、継続性が（+、-）という性質を持つ子音に挟まれた環境において生じていることがわかる。

次に、表5-6から、「無声化する」母音の前後にある子音の継続性には、それほど顕著な規則がなかった。（+、+）、（-、-）、（+、-）、（-、+）のいずれも見られた。ただし、（+、-）となるのは [keš·šIte]と[kaŋ·ŋóf·fUtari] の二つだけである。しかし、この二つの表記は、Bloch

表 5-5 【母音の脱落】：前後の子音の継続性

[s]		
s•kee•in•ŋu	skating	(+, -)
s•teru	throws away	(+, -)
soodes•ka	Is that so?	(+, -)
s•kóši	a little	(+, -)
s•tšíimu	steam	(+, -)
uís•kii	whisky	(+, -)
a•rimas•	there is	(+, -)
sān•fūrān•šis•ko	San Francisco	(+, -)

[š]		
š•kata	way of doing something	(+, -)
š•kimono	carpet	(+, -)
š•ta	tongue	(+, -)
š•tawa	as for the place beneath	(+, -)
š•tši	seven	(+, -)
š•táwa	as for the tongue	(+, -)
mádoaketememáš•ta	I went to bed with the window open.	(+, -)
a•rimáš•ta	there was	(+, -)
f•kimáš•ta	blew	(+, -)

[f]		
f•kuro	bag	(+, -)
f•tats•	two	(+, -)
f•tšidži	government of an urban prefecture	(+, -)
f•tsuuno	regular	(+, -)
go•f•kuya	drygoods store	(+, -)
ni•f•ku	two sips	(+, -)
f•tóru	grows fat	(+, -)
f•táhako	two boxfuls	(+, -)
f•kimáš•ta	blew	(+, -)
kañ•ŋóf•fUtari	two nurses	(+, -)
kañ•ŋófUf•tari	two nurses	(+, -)

[x]		
x•to	person	(+, -)
x•tšoo	flying bird	(+, -)
x•tsudži	sheep	(+, -)
ni•x•ki	two (animals)	(+, -)
x•kúi	low	(+, -)
x•tóts•	one	(+, -)
mān•nēŋ•x•tsu	fountain pen	(+, -)

[ts]		
f•tats•	two	(+, -)
hats•ka	twenty days	(+, -)
its•ka	five days	(+, -)
ts•tši	soil	(+, -)
its•ka	some time	(+, -)
máts•to	if one waits	(+, -)
ts•tsúmu	wraps	(+, -)
x•tóts•	one	(+, -)
kiots•kéru	pays attention	(+, -)
uts•kúšIsa	beauty	(+, -)

[tš]		
hatš•	eight (in rapid speech)	(+, -)
kutš•ki	decayed wood	(+, -)
tš•tši	father	(+, -)
tš•tsúdžo	good order	(+, -)
matš•to	town and (country, etc.)	(+, -)
tš•kára	strength	(+, -)
katš•toosu	wins through	(+, -)
matš•kara	from the town	(+, -)

表 5-6. 【母音の無声化】：前後の子音の継続性

[s]		
sUsumu	advances	(+, +)
sUp•pái	sour	(促音の前)

[š]		
keš•šIte	never	(+, -)
šIk•kēn•	judgement	(促音の前)
šš•šoku	unemployment	(促音の前)
šIsei	municipal government	(+, +)
šIt•ta	knew	(促音の前)
šUsai	supervision	(+, +)
šUsei	alcohol	(+, +)
uts•kúšIsa	beauty	(+, +)

[f]		
fUsuma or hUsuma	light opaque sliding door	(+, +)
fUt•tei	scarcity	(促音の前)
kañ•ŋóf•fUtari	two nurses	(+, -)
kañ•ŋófUf•tari	two nurses	(+, +)

[x]		
xífu or xIfu	skin	(+, +)
xlomeru or hlsomeru	conceals	(+, +)

[tš]		
atsUsa	thickness	(+, +)
hatsUšimo	first frost of the year	(+, +)
kUs•setsUsuru	refracts	(+, +)
átsUsa	heat	(+, +)

[tš]		
tšIsei	topography	(+, +)
hatšIfūrān•	eight francs	(+, +)
hatšIsēn•tši	eight centimeters	(+, +)

[k]		
kAp•pa (or kap•pa)	raincoat	(促音の前)
kAt•te	kitchen	(促音の前)
kIp•pu	ticket	(促音の前)
kIs•soo	good news	(促音の前)
kIt•to	surely	(促音の前)
kOp•pu (or kop•pu)	glass tumbler	(促音の前)
kOt•tši	this direction	(促音の前)
kUs•setsUsuru	refracts	(促音の前)
kUsa	grass	(-, +)
kUt•taku	trouble	(促音の前)
kUtši	mouth	(-, -)
kUtsu	shoe	(-, -)
kIfu	contribution	(-, +)
kIsa	train	(-, +)
kIta	came	(-, -)
ókIta	woke up	(-, -)
kUš•šōn•or kuš•šōn•	cushion	(促音の前)
de•kIta	was possible	(-, -)
kAkéro	hangs it	(-, -)
kOkoro	heart	(-, -)
kIsóona	seeming to come	(-, +)
kUtábireru	get tired	(-, -)

[p]		
gūm•pUku	uniform	(-, -)
ip•plki (or ip•piki)	one (animal)	(-, -)
ip•pUku	one sip	(-, -)
plk•koro	piccolo	(-, -)
pl•tšaa	pitcher (in baseball)	(-, -)
plItšapItša	splash	(-, -)
pAkurito	in one gulp	(-, -)
pOkét•to	pocket	(-, -)

[t]		
tOkoro	place	(-, -)
tAk•kYuu	pingpong	(-, -)
tAkái	high	(-, -)

(1950) の次の記述に矛盾する。

(5-6-1)

[I]: after [tš, š, x, h] and before [s, š, f] or any long⁶⁴ voiceless consonant; or after [p, k] and before any voiceless consonant, long or short.

[U]: after [ts, tš, s, š, f, h] and before [s, š, f, x, h] or any long voiceless consonant; or after [p, k] and before any voiceless consonant, long or short.

Bloch (1950:103)

(拙訳)

[I]は、[tš, š, x, h]の後かつ[s, š, f]または無声の長子音の前で生じる。もしくは[p, k]の後かつ長短に関わらず全ての無声子音の前で生じる。

[U]は、[ts, tš, s, š, f, h]の後かつ[s, š, f, x, h]または無声の長子音の前で生じる。もしくは[p, k]の後かつ長短に関わらず全ての無声子音の前で生じる。

この記述によって、Bloch (1950) は、無声化母音[I], [U]の後続子音は[s, š, f, x, h]といった摩擦音に限られると述べていることがわかる。つまり、[k][t][ts]のような閉鎖を伴う子音が後続する場合、無声化母音[I], [U]は現れない、すなわち必ず母音は脱落するということである。すると[keš·šIte]は、[keš·š·te]、[kañ·ŋóf·fUtari]は[kañ·ŋóf·f·tari]となるべきである。このあたりは疑問が残るところである。

以上のことから、Bloch (1950) が記述した音声表記に見られる「母音の無声化」、「母音の脱落」は、次のような環境で生じている。

まず、「母音の無声化」は、前後の子音が無声子音である場合に発生する。前後子音の継続性の有無には関わらない。よって表5-6に見られるとおり(+, +)、(+, -)、(-, +)、(-, -)のいずれも現れうる。ただし(+, -)は[keš·šIte]と[kañ·ŋóf·fUtari]の二つのみである。

$$\left[\begin{array}{c} +V \\ +high \end{array} \right] \rightarrow [-V] \text{ / } [-voice] \text{ ____ } [-voice]$$

一方、「母音の脱落」は、上記「母音の無声化」が生じる環境下であって、特に前後の子音の継続性が(+, -)である場合に顕著に生じる・ただし、前後に促音が生じる場合は例外となる。Bloch のような英語話者にとって(+, -)である場合には、母音が脱落し、子音だけが残ったように聞こえるようである。

$$\left[\begin{array}{c} +V \\ +high \end{array} \right] \rightarrow \phi \text{ / } \left[\begin{array}{c} -voice \\ +continuant \end{array} \right] \text{ ____ } \left[\begin{array}{c} -voice \\ -continuant \end{array} \right]$$

64 long, shortという用語をBloch (1950:94) は次のように定義している：A segment that contains the quality Q (syllabic quantity) is described as long; a segment that lacks this quality is described as short. A long segment is one that constitutes a syllable by itself; a short segment is one that does not. (拙訳：拍を構成する性質Qを持つ要素を「長い」、Qを持たないものを「短い」と表現する。長い要素は、それ自身で拍を構成するが、短い要素は、それ自身では拍を構成できない。)

第7節. *Spoken Japanese*の記述

SJは母音の「脱落」と「無声化」を、学習者に向けて次のように説明している。

(5-7-1)

When the vowel *i* or *u* stands between two voiceless consonants, it is usually voiceless too, or else lost completely. A voiceless vowel sounds like a kind of ‘h’. If the first of the two consonants is *k* or *p*, the vowel *i* or *u* is more likely to be voiceless. If it is *h*, *s*, or *t*, the vowel is more likely to be lost altogether.

Bloch&Jorden (1945c:109)

(拙訳) 母音 *i* と *u* が無声子音の間にあるとき、母音 *i* と *u* も一般に無声化する、または完全に失われる。無声母音は ‘h’ の一種のように聞こえる。もし二つの子音のはじめが *k* か *p* なら、母音 *i* と *u* は「無声化」し、*h*, *s*, または *t* であれば、母音は完全に消えてしまう。

第8節. まとめ

一般に母音の無声化と呼ばれる現象のうち、特に「母音が脱落する」現象は、これまでは単に、／シ／／ス／／ヒ／／フ／／チ／／ツ／などの摩擦音や破擦音に無声子音が後続する環境で生じると考えられてきた。第5章ではBloch (1950) が記述した日本語音声表記をもとに、無声子音といっても、その子音が持つ継続性の有無によって「無声化」だったり「脱落」だったりという聞こえ方になるということを考察してきた。ただし、このことは458個の音声表記からの考察に過ぎず、この結果が日本語全般について言えることであるのかどうかは、今後より多くの例を検証していかなければならないだろう。しかし、少なくともBloch (1950) のような英語話者にとって、日本語の母音がどのように聞こえているのかを示したこの結論は、日本語学習者が、日本語音声をどのように聴取しているかを分析するための基礎データを提供するものである。

<謝辞>

本研究に際して、金城学院大学の原田かづ子名誉教授、高野祐二教授から多くのことをご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

<付記>

第5章は、池田 (2014a) を加筆訂正したものである。

第6章. Bernard Blochの活用論の成立：影響を与えた先駆者たち

第1節. はじめに

Bloch (1946a) が記述した動詞の活用論は、動詞を母音動詞と子音動詞に分けた点において斬新なものだった。彼の活用論は、その後の日本語教育の基盤となったと言っても過言ではない。

Blochの活用論成立の背景に、どのような先駆的研究があったのかを探ることが、本章の目的である。その手懸りとして、Suski (1942)、Bloch (1942)、Henderson (1943)、Yamagiwa (1942) に着目する。これらはいずれも戦時下のアメリカで発表されたが、これまで研究の対象とされてこなかったものばかりである。こうした研究から、Bloch (1946a) より4年前のBloch (1942) で、既に母音動詞、子音動詞に言及していたこと、Henderson (1943) が、子音動詞について、動詞語幹は全て子音で終わると指摘していることなど、これまで知られていなかった新しい知見を得ることができた。戦時下のアメリカで出版された日本語研究を検証し、当時のアメリカでの日本語教育について、その一端を明らかにすること、そしてBlochが現代の日本語教育にどのような貢献をしたかを明らかにすることに、第6章の研究の意義は認められるのである。

なお、この研究において使用する用語は、以下のように統一する。

語幹 + 活用語尾

語基

Stem + Inflectional ending

Base

動詞「読む」を例にとると、

語幹 yom + 活用語尾 i

語基 yomi

第2節. Blochの動詞の活用論

第1項. Bloch (1946a) の動詞分析

Bloch (1946a) は、10種類の活用形を持つものが動詞であると定義している。動詞「食べる」を例にとると、次のように活用する。「食べる」の語幹は‘tabe’、語尾はハイフンより後に示されたものである。なお、Past indicativeから下の五つは閉鎖音語尾⁶⁵を持つという点で共通している。

Non-past indicative	[非過去直説形 ⁶⁶]	tabé-ru
Non-past presumptive	[非過去推量形]	tabe-yóo
Imperative	[命令形]	tabé-ro/tábe- ϕ ⁶⁷

65 下の五つは、語尾が順に -ta, -taroo, -tara, -tari, -te で、いずれも t 音から始まっている。t 音は、歯茎を調音点とする閉鎖音である。

66 []内の日本語訳はロイ・A・ミラー編、林栄一監訳（1975）で使われている用語である。

67 ゼロ語尾。普通、助詞「よ」に後続される。

Provisional	[与件形]	tabé-reba
Infinitive	[不定詞形]	tábe
Past indicative	[過去直説形]	tábe-ta
Past presumptive	[過去推量形]	tábe-taroo
Conditional	[条件形]	tábe-tara
Alternative	[選択形]	tábe-tari
Gerund	[動名詞形]	tábe-te

この10種類の活用形から、Imperativeを除いた9種類に活用するのが形容詞、ImperativeとInfinitiveを除いた8種類に活用するのが繫辞（－ダ）であるという。

ここにNegative（否定形、つまりtábe-nai）が含まれていないことが、Blochの分析の特徴である。BlochはNegativeを、動詞から派生した形容詞の下位分類に位置づけている。ここに含まれない形、例えば、使役形、受動形、可能形、願望形は、活用形ではなく派生形として、Bloch（1946c）で扱われる。

Bloch（1946a）のように、動詞を語幹と語尾に分けた結果、日本語の規則変化動詞は大きく二つに分けられることになった。一つは母音動詞、一つは子音動詞である。

Bloch（1946a）は、母音動詞を次のように説明している。

(6-2-1)

The base of a vowel verb ends in -e- or -i-. The endings of the inflectional categories are added directly to the base. For the imperative there are two forms, a longer and a shorter, the latter with zero ending.

Bloch（1946a:100）

（拙訳）母音動詞の語幹は-e-か-i-で終わる。活用形の語尾は、語幹に直接加える。命令形には二つの形があり、長いものと短いもので、後者は語尾がゼロである。

Bloch（1946a）は、子音動詞を次のように説明している。

(6-2-2)

The base of a consonant verb has two alternant shapes: one that appears in the name form and in four other forms, one that appears before any of the stopped endings. Since the second alternant is always one syllable longer than the first, we may speak of a SHORT BASE and a LONG BASE. The long base is predictable from the shape of the short base, but the converse is not always true; accordingly, verbs of class II are classified in terms of their short bases only.

The short base of a consonant verb terminates in one of nine consonants.

Bloch（1946a:101）

（拙訳）子音動詞の語幹は、二つの交替形を持つ。一つは、代表形⁶⁸と四つの形⁶⁹に現れるもので、もう一つは閉鎖音語尾の前に現れるもの⁷⁰である。後者の語幹は常に前者の語尾より1音節長いので、長語幹と短語幹と呼ぶ。長語幹は短語幹の形から予測可能だが、逆は必ずしもそ

68 非過去直説形のこと。

69 非過去推量形、命令形、与件形、不定詞形の四つのこと。

70 過去直説形、過去推量形、条件形、選択形、動名詞形のこと。

うではない。したがって子音動詞は、短語幹の観点のみから分類される。

子音動詞の短語幹は、九つの子音のうちの一つで終わる。

この説明に従えば、動詞「待つ」は、次のように活用する。上から5個、Non-past indicativeからInfinitiveは、短語幹‘mat’、Past IndicativeからGerundまでは長語幹‘maq⁷¹’を持つ。

Non-past indicative	[非過去直説形]	mát-u
Non-past presumptive	[非過去推量形]	mat-óo
Imperative	[命令形]	mát-e
Provisional	[与件形]	mát-eba
Infinitive	[不定詞形]	mát-i
Past indicative	[過去直説形]	maq-ta
Past presumptive	[過去推量形]	maq-taroo
Conditional	[条件形]	maq-tara
Alternative	[選択形]	maq-tari
Gerund	[動名詞形]	maq-te

子音動詞の短語幹は、九つの子音のうちの一つで終わるとされるが、各子音の短語幹、長語幹の関係について示したものが以下である。

(6-2-3)

	例	短語幹 / 長語幹
-t- ~ -q-	mátu	base mat-/maq-
-r- ~ -q-	náru	base nar-/naq-
-w- ~ -q-	omóu	base omow-/omoq-
-s- ~ -si-	hanásu	base hanas-/hanasi-
-k- ~ -i-	arúku	base aruk-/arui-
-g- ~ -i ^{v72} -	isógu	base isog-/isoi ^v -
-b- ~ -n ^v -	erábu	base erab-/eran ^v -
-m- ~ -n ^v -	nómu	base nom-/non ^v -
-n- ~ -n ^v -	sinu	base sin-/sin ^v -

Bloch (1946a:101)

活用語尾は、母音動詞、子音動詞でそれぞれ次のようになる。

(6-2-4)

	Vowel Verbs	Consonant Verbs
Non-past indicative	-ru	-u
Non-past presumptive	-yoo	-oo
Imperative	-ro/- ϕ	-e
Provisional	-reba	-eba

71 qは促音を示している。

72 ^vは、次に有声音が来ることを示す。

Infinitive	- <i>ϕ</i>	- <i>i</i>
Past indicative	- <i>ta</i>	- <i>ta</i> , - <i>da</i>
Past presumptive	- <i>taroo</i>	- <i>taroo</i> , - <i>daroo</i>
Conditional	- <i>tara</i>	- <i>tara</i> , - <i>dara</i>
Alternative	- <i>tari</i>	- <i>tari</i> , - <i>dari</i>
Gerund	- <i>te</i>	- <i>te</i> , - <i>de</i>

Bloch (1946a:109)

Bloch (1946a) は、不規則動詞として、次の 4 種類を認めている。

- (1) 語幹が三つあるもの: *kúru*, *suru* (例) *kú-ru*, *ko-yóo*, *kí-ta*
- (2) 短語幹と長語幹の関係がパターンと異なるもの: *iku*⁷³
- (3) 母音動詞と子音動詞の特徴を併せ持つもの: -*másu* (例) -*masyóo*と-*másite*
- (4) 語幹の構造が不規則で特別な語尾を持つもの: *kudasáru*, *nasáru*, *oqsyáru*, *iraqsyáru*, *gozáru*

以上が、Bloch (1946a) が述べた動詞の活用論をごく簡単にまとめたものである。Blochの活用論は、以下の 4 点を指摘した点において非常に斬新なものであった。

- (1) 動詞を語幹と語尾に分節した。
- (2) (1) の結果、規則変化動詞は母音動詞と子音動詞の 2 種類であることを指摘した。
- (3) (2) のうち、子音動詞は語尾の種類によって 2 種類の語幹を持つことを指摘した。
- (4) (3) のうち、子音動詞の短語幹は九つの子音のいずれかで終わることを指摘した。

(3) と (4) が明らかになったことで、日本語学習者は、動詞の過去形やテ形を規則的に形成することができるようになった。このことはBlochの日本語教育への大きな貢献のうちのひとつである。

このうち、(1) については、先行研究としてShibatani (1990) がある。

第 2 項. 先行研究 – Shibatani Masayoshi –

(6-2-5)

The inflectional paradigm that is adopted in the traditional Japanese grammar dates back to the period between the late eighteenth century and the early nineteenth century, when the grammatical tradition was being developed by a number of able scholars such as Fujitani Nariakira (1738-79), Motoori Norinaga (1730-1801), his son Haruniwa (1763-1828), Suzuki Akira (1764-1837), and Gimon (1786-1843). The establishment of the present-day six inflected categories goes back to Gimon's work in 1833. The contemporary designations of the inflectional categories are also largely due to Gimon.

Although not all inflected words have six distinct form, the traditional grammar recognizes six inflectional categories since some words have six inflected forms.

73 短語幹がkで終わる子音動詞の長語幹～短語幹の関係は、-k- ～ -i-となる。例えばaruk-u/arui-ta。しかし *iku*はこのパターンをとらず、ik-u/iq-taとなる。

【表6-1. Inflectional categories of Classical Japanese】

		‘die’	‘look at’	
Mizen	(Irrealis)	si-na	mi	(m-i)
Renyoo	(Adverbial)	si-ni	mi	(m-i)
Syuusi	(Conclusive)	si-nu	miru	(m-iru)
Rentai	(Attributive)	si-nuru	miru	(m-iru)
Izen	(Realis)	si-nure	mire	(m-ire)
Meirei	(Imperative)	si-ne	miro/miyo	(m-iro/iyo)

Shibatani (1990:222 表の番号は筆者)

(拙訳) 文語文法の活用パラダイムは18世紀後半～19世紀前半に、富士谷成章 (1738-79)、本居宣長 (1730-1801)、その息子である本居春庭 (1763-1828)、鈴木胤 (1764-1837)、義門 (1786-1843) [筆者注: 東条義門] といった学者によって作られてきた。現在の六つの活用カテゴリーの確立は1833年の義門の研究にまでさかのぼる。現在の活用カテゴリーの名称は大部分義門による。全ての活用語が六つの形を持つわけではないが、文語文法は六つの活用形を持つ語があるため、六つの活用カテゴリーを認めている。

この文語文法の活用カテゴリーは、口語文法では次のように変化する。

(6-2-6)

In the course of development, certain inflectional categories fell together, and a large number of auxiliaries, especially those expressing conjectural and aspectual meanings, atrophied. The inflectional paradigm of Modern Japanese is normally given in terms of the six classes shown in Table below, although the conclusive form and the attributive form are identical for all inflecting parts of speech except for the copula *da*, whose conclusive form and attributive form are *da* and *na*, respectively.

【表6-2. Inflectional categories of Modern Japanese】

		‘die’	‘look at’	
Mizen	(Irrealis)	si-na	mi	(m-i)
Renyoo	(Adverbial)	si-ni	mi	(m-i)
Syuusi	(Conclusive)	si-nu	miru	(m-iru)
Rentai	(Attributive)	si-nu	miru	(m-iru)
Katei	(Hypothetical)	si-ne	mire	(m-ire)
Meirei	(Imperative)	si-ne	miro/miyo	(m-iro/iyo)

Shibatani (1990:223-224 表の番号は筆者)

(拙訳) 口語文法へ変化の過程で、ある活用カテゴリーは一つに合体し、多くの助動詞、とりわけ推測やアスペクトの意味を表現する多くの助動詞が衰退した。口語日本語の活用パラダイムは一般的には下の表のようになり、終止形と連体形は同じ形となった。ただしコピュラ (繫辞) については終止形は「だ」、連体形は「な」となり異なる形となる。

表6-2では、「sin-u」ではなく「si-nu」と分節されている。この点について Shibatani (1990) は次のように述べている。

(6-2-7)

Though never explicitly formulated, in the conception of the traditional grammar the Japanese verbal morphology involves the following composition of elements:

Root + Inflectional ending (+ Auxiliary) | (+ Particle)
Stem

Whereas certain inflected forms (e.g. the conclusive form) occur without any auxiliary, some others (e.g. the irrealis form) always occur with an auxiliary; and still others (e.g. the adverbial form) may occur alone or in combination with an auxiliary. The conjunctive particles are called for when a clause is conjoined, and they follow the inflected form. (Remember that auxiliaries also inflect in the pattern of the verb.) In this analysis, then, the inflectional endings are considered to be a stem-forming element, and the auxiliaries and particles attach to the verbal stems, never directly to the verb root. [中略]

A major problem in the traditional analysis is concerned with the identification of the root and the inflectional ending. The traditional grammar identifies the first portion (the portion before the hyphen in Tables 6-1 and 6-2) as a root and the rest as inflectional endings. The idea behind this is clearly the notion of segmentation utilized in the morphological analysis of structural linguistics. However, the transliterated forms in Tables 6-1 and 6-2 show that the segmentation technique is not quite rigorously applied, for one would think that the root should be identified as *sin-* rather than *si-*. The reason for this unhappy situation is caused by the syllabary writing, which does not allow one to segmentize a syllable (i.e. the sequence of a consonant and a vowel) into two. Thus, for the irrealis *sina*, the kana syllabary representation gives us two kana units of *si* and *na*, and as such the latter cannot be segmentized any further. Particularly troublesome in the traditional treatment are those forms such as *miru* 'look at', which consists of only one kana for *mi* in the irrealis and adverbial forms. If the root is identified as *mi-*, then the endings for these categories will be zero. In order to avoid this situation, which entails a case of auxiliaries directly attaching to the root (unless a zero morpheme is recognized), the traditional analysis includes *mi-* in the inflectional endings, which, however, leads to an analysis in which there is no root!

Shibatani (1990:224-225 表の番号は筆者)

(拙訳) 明示的には表現されていないが、伝統的な文法の考えでは、日本語の動詞の形態素には以下の構成要素が含まれている。

語幹 + 活用語尾 (+ 助動詞) | (+ 助詞)
語基⁷⁴

ある活用形（例えば終止形）は助動詞を伴わずに生じるが、あるもの（例えば未然形）は常に助動詞を伴う。ほかのもの（連用形）は単独でも、助動詞を伴っても生じる。接続助詞は節をつなぐ際に必要とされ、活用形に後続する。（助動詞自体、動詞パターンのように活用する。）この分析において、活用語尾は、語基を形成する要素とみなされ、助動詞と助詞は動詞の語基に付くことができるが、決して直接語幹には付かない。

74 Shibataniは、本研究で語幹としているものを‘root’、語基としているものを‘stem’と表記しているが、拙訳では、この研究の用語定義（cf.第6章第1節. はじめに）に従っておく。

伝統的な文法分析の大きな問題は、語幹と活用語尾の同一視に関わる。伝統文法では1番目の部分（表6-1と6-2のハイフンより前の部分）を語幹とみなし、残りを活用語尾とみなす。この背後にある考えは、言語構造の形態分析に使われている分節の考え方である。しかし表6-1、6-2のローマ字表記では、語幹はsi-ではなくsin-とみなされるべきであるが、分節テクニックが厳密に適用されていない。この不幸な状況の理由は、字音表（50音）表記であり、それは音節（つまり子音と母音の連続）を二つに分節することを許さないからである。したがって未然形sinaは、仮名表記では「si」と「na」の二つの単位が与えられるが、後者「na」はそれ以上分節されない。特にやっかいなことに「miru」のような形は、未然形、連用形が一字の仮名「み」である。語幹を「mi-」とみなせば、これらカテゴリーの活用語尾はゼロとなる。（ゼロ形態素を認めない限り）語幹に直接助動詞が付加されてしまう事態となるが、それを避けるために、伝統分析では「mi」を活用語尾に入れた。しかしその分析では語幹がないという結果にたどりついてしまうのである！（表の番号は筆者）

Shibatani（1990）によると、この問題は山田孝雄によって大きく進展する。

(6-2-8)

[...]following the pioneering practice of Yamada (1908), point out that, if these forms are Romanized, the roots and the endings are clearly discernible, e.g. m- being the root and -i being (part of) the inflectional ending for the verb miru, as in the parenthesized representation is recognized, the segmentation of other forms such as sinu 'die' would be called into question: i.e., why shouldn't the irrealis form sina, for example, be segmentized as sin-a, with the sin- portion and the -a portion being the root and the inflectional ending, respectively?

Shibatani (1990:225)

（拙訳）山田（1908）の先駆的研究に倣って、次のような指摘が行われた。もし、この形をローマ字表記すれば、m-が語幹で-iが活用語尾であり、語幹と語尾は明らかに見分けられる。それは表6-1と6-2の（ ）で示したようになる。しかし一旦ローマ字表記が認識されると、ほかの形、例えばsinuのようなものの分節に異議が唱えられた。つまり、例えば未然形sinaはsin-aと分節され、sin-の部分と-aの部分はそれぞれ語幹と活用語尾とみなされるべきではないか？（表の番号は筆者）

新しい流れは、佐久間鼎へ受け継がれていくとShibatani（1990）は指摘している。

(6-2-9)

Since Sakuma was not concerned about correlating the inflectional forms and categories of Modern Japanese with those of Classical Japanese, eight newly labeled inflectional categories were proposed.

	'die'	'look at'
Basic form	sin-u	mi-ru
Formative form	sin-i	mi- ϕ

Negative form	sin-a	mi- ϕ
Hypothetical form	sin-eba	mi-reba
Imperative form	sin-e	mi-ro
Future form	sin-oo	mi-yoo
Determined form	si-nda	mi-ta
Suspended form	si-nde	mi-te

As evident from the above table, segmentation is applied fairly consistently, thanks to the Romanized transliteration, except in the last two categories.

Shibatani (1990:226)

(拙訳) 佐久間は、現代日本語の活用形と活用の分類を、古典語のものと関連づけることに関心を持たなかったため、八つの新しい活用カテゴリーを提案した。

この表から明らかなように、ローマ字表記のおかげで、首尾一貫した分節法が用いられた。ただし最後の二つを除く。

このように、佐久間はsi-nde、si-ndaとしたため、語幹がsin-、si-の二つになった。Shibatani (1990)によると、より首尾一貫した分節法は、Blochによって完成する。

(6-2-10)

Such consistency is obtained in the analysis of the American structuralist Bernard Bloch (1946), who applied the technique of segmentation fairly thoroughly to phonemically transcribed inflected forms of verbs, adjectives, and the copula.

	‘die’	‘look at’
Non-past indicative	sin-u	mi-ru
Past indicative	sin-da	mi-ta
Non-past presumptive	sin-oo	mi-yoo
Past presumptive	sin-daroo	mi-taroo
Imperative	sin-e	mi-ro/ ϕ
Provisional	sin-eba	mi-reba
Conditional	sin-dara	mi-tara
Alternative	sin-dari	mi-tari
Infinitive	sin-i	mi- ϕ
Gerund	sin-de	mi-te

Shibatani (1990:226-227)

(拙訳) 分節の一貫性は、アメリカの構造主義の学者Bernard Blochによって得られた。Blochは動詞、形容詞、コピュラ（繫辞）の活用形を、音素論的に完全に公平に記述するための分節テクニックを応用した。

以上、Shibatani (1990) が指摘しているように、動詞を語幹と語尾に分節することを成し遂げたのはBlochであり、後世の言語学者から高い評価を得ている。

第3節. Blochの活用論への影響

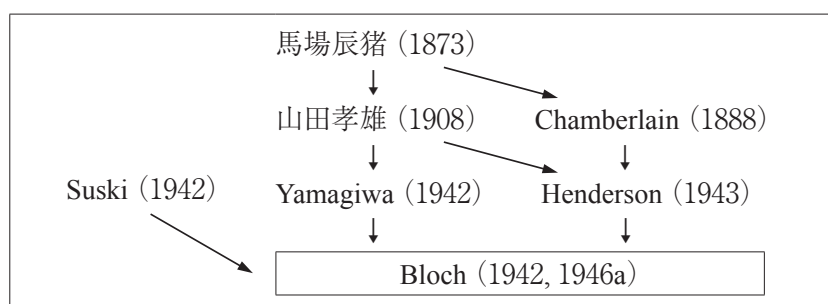
次にBlochの活用論の成立に、どのような人物の先駆的研究が影響を与えているのかを考察

していきたい。第6章第2節第2項で考察したように、Shibatani (1990) は、山田孝雄が活用研究の中で果たした役割の大きさを高く評価しているが、その山田孝雄は、馬場辰猪を尊敬していたと述べている研究がある⁷⁵。馬場辰猪は日本語を一つの言語として国外から研究し、ローマ字で表記した最初の人物である。馬場の研究はアストン、サトウ、Chamberlainへ続く。そこで本研究では、Bloch活用論成立の背景を知る手懸りとして、はじめに馬場辰猪、山田孝雄、Chamberlainの活用論がどのようなものであったのかを検証する。

次に、Bloch (1946a, b) を執筆するにあたって役立った著書として挙げられているHenderson (1943) とYamagiwa (1942) を考察する。これらはいずれも戦時下のアメリカで出版された著書であるが、これまであまり研究がなされてこなかった。彼らは、山田孝雄やChamberlainと決して無縁ではない。Henderson (1943) は山田とChamberlainの研究に、Yamagiwa (1942) は山田や佐久間の研究に、それぞれ精通していたのである。

また、Blochが酷評したがために、これまで全く取り上げられてこなかったSuski (1942) の活用論、それに対するBloch (1942) の書評も見していきたい。

Suski (1942)、Yamagiwa (1942)、Henderson (1943) については、彼らが一体どのような人物であったのか、戦争下のアメリカでどのような日本語教育が行われていたのかについても、少し触れていければと考えている。以下はBlochの周延的研究を図にまとめたものである。



なお、Bloch(1946a: 97) は ‘The material in this paper is derived mainly from my own notes and from my colleagues’ (拙訳：この論文の題材は、主に自分自身のノートと同僚たちから得られたものである) と述べており、基本的にBlochの日本語研究は日本語インフォーマントとの対話から記述されたものである。ただ ‘The following books have been useful for reference’ (拙訳：以下の著書は参照に値するものであった) として、当時のアメリカで入手可能であった数少ない著書や論文を挙げており、その一つが Henderson (1943) であり、Yamagiwa (1942) である。ゆえに参照した著書がどの程度Blochにとって役に立ったのかは、もはや知る術がない。本研究は、あくまでそうした先駆的研究が存在したということを述べるに過ぎない。

第1項. 馬場辰猪の活用論

馬場辰猪 (1850 ~ 1888) は、土佐藩出身の武士で、明治維新後の1870年に英国に留学し、森有礼による英語国語論に反対してBaba (1873) を著した。Baba (1873) は、動詞を次のように説明している。

75 金沢 (2008), pp. 65-66

(6-3-1)

Verbs are divided into three classes. The First ends in u, as suku, to like; the second ends in ru, as kangayeru, to think; the third ends in uru, as suru, to make.

(拙訳) 動詞は三つのクラスに分けられる。1 番目は suku のように u で終わるもの、2 番目は kangayeru のように ru で終わるもの、3 番目は suru のように uru で終わるものである。

Baba (1873:11-12)

馬場の3分類法について、金沢(2008: 68-69)は「馬場は動詞の3分類法に関して単音文字による形態の分析をなすことによって今日の日本語教育の長所を先取りした」と高く評価し、その分類法の影響を「アストン及びアーネスト・サトウから受けた」と述べている。Baba(1873)のうち、動詞「行く」の活用のみを取り出して、まとめたものが以下である。

(6-3-2)

Indicative Mood	Present Tense	Watakusi wa ik-imasu
	Past Tense	Watakusi wa ik-imasita
	Future Tense	Watakusi wa ik-imasho
Potential Mood	Present Tense	Watakusi wa ik-emasu
	Past Tense	Watakusi wa ik-emasita
	Future Tense	Watakusi wa ik-emasho
Subjunctive Mood	Present Tense	Mosi watakusi ga ik-imasu nara
	Past Tense	Mosi watakusi ga ik-imasitanara
Imperative Mood	Command	Ike
	Entreaty	I-tte-okure, I-tte-kudasare
Infinitive Mood		Iku koto
Indicative (Negative)	Present Tense	Watakusi wa ikimasen
	Past Tense	Watakusi wa ikimasenanda
	Future Tense	Watakusi wa ikimasumai
Potential (Negative)	Present Tense	Watakusi wa ikemasen
	Past Tense	Watakusi wa ikemasenandara
	Future Tense	Watakusi wa ikemasumai
Subjunctive (Negative)	Present Tense	Mosi watakusi ga ikimasen nara
	Past Tense	Mosi watakusi ga ikimasenanda nara
Imperative (Negative)	Command	Iku-na
	Entreaty	I-tte-kudasaruna

Baba (1873: 12-19)

活用を英語で説明したこと、日本語をローマ字で表記したことは、Baba(1873)の大きな業績である。活用形もIndicative Moodのように、従来の未然形、連用形といった分類にとらわれない新しいものを提案している。ただ Imperative Mood の‘Ike’や Negative の‘Ikemasen’など分節を明らかにしていない部分も見られ、分節の一貫性という観点から見ればBaba(1873)はまだ十分ではない。しかしBaba(1873)が動詞「行く」をi-kuではなく、ik-uと分節した初めての日本人であろう事実は何ら変わらない。この点においてBaba(1873)は高く評価されるべきである。

金沢(2008: 65)によると、Baba(1873)はこの後も国語の研究者の間で等閑視される。そ

の理由として、外国人学習者の母語背景を考えて口語の文法を整理、体系化する認識は当時の国語の研究者には皆無であったろうこと、やはり文語文典を研究対象としていたこと、Baba (1873) が英語で書かれていて、海外で出版されたために国内の国語研究者に知られることがなかったことを挙げている。

第2項. 山田孝雄の活用論

第6章第2節第2項で考察したShibatani (1990) は、m-iruのように音節（子音と母音の連続）を二つに分節することに成功した人物として山田孝雄を挙げている。金沢 (2008:66) によると、山田は馬場を尊敬していたという。

(6-3-3)

日本語にて普通教育を完成することは十分に可能なることを通説し、森の意見の謬れることを論破せるは一の偉観なり、而してこれ実に邦人が英文にて出版せし日本文典の嚆矢たると共に、日本口語法の全般に通じたる組織的研究のはじめにして、国語学史上重要なる地位に立てるものなりとす。口語法の上に大いなる事功を立てたるは馬場辰猪を第一とせざるべからず。而してこの人は研究の上のみに止まらず、国語擁護の大恩人として永遠に記憶して忘るべからざる所たり。

金沢 (2008: 66)

山田の動詞分析には語幹にローマ字表記が使われているが、これは山田以前の研究には見られなかったものである。ここで、山田 (1908) の動詞の活用表を確認しておきたい。

(6-3-4)

動詞の原形は一段は「る」音の加はりたるもの、其の他は皆「ウ」韻なり。

山田 (1908: 260)

(6-3-5)

従来の活用研究の基本とする所は實に五十音圖の組織なりき。これによりてかの本居春庭氏が四段、一段、中二段、下二段の名を命じたりしなり。かくてこの五十音圖に基因せる「段」といふ術語は今に至りてますます活用の上に固定し来りぬ。春庭氏以後林國雄氏は下一段を唱道して、一段は上下の二種となりぬ。次に中二段といふを上二段と改めたるのみにて遂に今日に至れり。今日普通の説にては四段、上二段、下二段、上一段、下一段及び變格といふ分類なり。今この例にならへば、吾人の二段、一段は又上下の二つに分たるべし。しかしてなほ、吾人はかの熟音を以て活用の語尾と見る説の煩なるを厭ひて純粹に變化する部分のみを以て語尾と稱す。かの五十音圖によりて何行にはたらくなどいふことは實は文法上の説明としてさまで必要ならぬ事にして説くべき限にあらざるべし。さてまた辭彙の體をなして其の単語の意義を一々説き、又はあらむ限りの語を集めて示すなどは文法上の根據を示す必要なき限りは不要の事なりとす。

動詞を形體上より分類して見れば、以上の如し。之を一覧し易しからしめむが爲に下を表に示す。

動詞の活用種類一覧表								
種類	別小	語幹の一例	原形	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
四段	通	(咲く) Sak.	ウ	ア	イ	ウ	エ	エ
	別	(往ぬ) In.	ウ	ア	イ	うる	うれ	エ
三段		(來) K.	ウ	オ	イ	うる	うれ	オ
二段	上	(起く) Ok.	ウ	イ	イ	うる	うれ	イ
	下	(寄す) Yos.	ウ	エ	エ	うる	うれ	エ
一段	上	(見る) M.	イ	イ	イ	イ	イレ	イ
	下	(蹴る) K.	エ	エ	エ	エ	エレ	エ
注意、羅馬字は語幹の音素を示し、片假字は語尾の韻を示し、平假字は添加の熟音を示す。								

山田 (1908: 258-259)

山田の分析は、ローマ字で表記することによって平仮名1文字を、より細かく分節することに成功した。ただ、第6章第3節第1項の馬場は、kangaye-ruと分節した。これに従えば「見る」は‘mi-ru’という文節になる。しかし山田は‘m-iru’と分節したので、この点において馬場と山田の分節には違いが見られる。最終的にBlochはmi-ruと分節し、その分節方法が広く受け入れられていくことになるが、山田の提唱したm-iruという分節方法は、後に考察するYamagiwaやHendersonにもまた見られるものである。この1点から見ても、山田がいかに後世の日本語研究に大きな影響を与えていったかをうかがい知ることができる。

第3項. Basil Hall Chamberlainの活用論

Chamberlain (1888) は、Blochが1965年に亡くなったときに、研究室に残されていた本である⁷⁶。ただしBlochは、Chamberlain (1888) に言及したことはなく、Bloch (1946a) を著した際、Chamberlain (1888) に目を通していたかは定かではない。ロンドン及び東京で出版されたChamberlain (1888) を、戦時下のアメリカでBlochが入手することは困難であったのではないというのが筆者の推測である。

Bloch (1946a) は、活用論を書くにあたって、Henderson (1943) が役に立ったと述べているが、そのHenderson (1943) は、著書の中でChamberlain (1888) を引用している箇所が見られる。

(6-3-6)

The above paragraph is quoted almost verbatim from Chamberlain's "Handbook of Colloquial Japanese" (Trubner & Co., London, 1888, p.233), as it seems to me the most useful general rule I have yet come across.

Henderson (1943:9)

(拙訳) 上の段落はチェンバレンの『口語日本語ハンドブック』からほぼそのまま引用した。これは、私がこれまで出会った規則の中で最も役に立つものと思われる。

以下、Chamberlain (1888) の動詞分析を確認していく。

76 ロイ・A・ミラー編、林栄一監訳 (1975) 『ブロック日本語論考』研究社、p.xvi.

(6-3-7)

Most of the Japanese verbal forms occurring in actual practice consist of four elements, viz. the root, the stem, the inflection of “base”, and the agglutinated suffix or suffixes. Take, for instance, the word *komarimashita*, which is so often heard in conversation, and which signifies “(I) was in trouble,” “was at a loss,” “didn’t know what to do.” The root is *kom*, which we meet with in the small group of related verbs *komu*, “to stuff into” “to crowd into,” “to inclose,” “to confine”; *komeru*, synonymous or nearly so with *komu*; *komoru*, an intransitive verb signifying “to be in a state of confinement,” “to be shut up.” From the root *kom* is formed the stem *komar* by the agglutination of *ar(u)*, “to be.” To this is added the unexplained suffix *i*, which gives the “indefinite form” of the verb, a sort of participle or gerund, which can also be used as a “base” or foundation form, to which certain suffixes are agglutinated. (下線は筆者)

Chamberlain (1888:133-134)

(拙訳) 実際に生じる日本語の動詞形の多くは四つの要素から成る。語根、語幹、語基の活用及び接尾辞である。会話でよく聞かれる「困りました」を例にとってみると、語根は‘kom’であり、これは「混む」「込める」、自動詞の「籠もる」などといった動詞でも見られる。語根‘kom’に、接尾辞‘ar(u)’を付け加えることによって語幹‘komar’が作られる。これに説明不能な接尾辞 *i*が加わることで、動詞の「不定詞形」、つまり動名詞形や不定詞形といった種類のものができ、これはまた「語基」として使われ、これに接尾辞が付加されるのである。

このようにChamberlain (1888) は動詞形を、語根 (root)、語幹 (stem)、語基 (base)、接尾辞 (agglutinated suffix) の四つから成ると説明している。動詞「困る」を例にとると、語根は‘kom’、語幹は語根 + 接尾辞‘ar(u)’で‘komar’、語基は語幹 + 説明不能な接尾辞 *i* で‘komari’であるという。Chamberlainが‘unexplained suffix *i*’と呼んでいるところが、動詞の分節の難しさを物語っているようでもある。

(6-3-8)

The “bases” are four in number, and all the other conjugational forms are obtained by agglutinating certain suffixes to them. Their names are the Certain Present, the Indefinite Form, the Conditional Base and the Negative Base.

The “bases” are not always formed in the same manner, nor are the suffixes always attached to them quite in the same manner. Hence the distribution of verbs into three conjugations. (In the Classical language there are four; but in the Colloquial the third and fourth coalesce.)

Chamberlain (1888:135-136)

(拙訳) 語基は四つあり、そのほかの活用形は接尾辞を語基に付け加えることによって得られる。四つの語基の名前は現在形、不定詞形、条件形、否定形である。語基は必ずしも同じ方法で作られるのではないし、接尾辞もまた同じ方法で付加されるのではない。したがってその作られ方によって動詞は三つの活用に分けることができる。(文語ではそれらは四つあった。しかし口語においては3番目と4番目が合体したのである。)

(6-3-9)

< Examples of The Bases in The Three Regular Conjugations of Verbs >

	1st. Conj		2nd. Conj		3rd. Conj.	
	to sell	to put	to sleep	to eat	to fall	to see
Certain Present	<i>uru</i>	<i>oku</i>	<i>neru</i>	<i>taberu</i>	<i>ochiru</i>	<i>miru</i>
Indefinite	<i>uri</i>	<i>oki</i>	<i>ne</i>	<i>tabe</i>	<i>ochi</i>	<i>mi</i>
Negative Base	<i>ura</i>	<i>oka</i>	<i>ne</i>	<i>tabe</i>	<i>ochi</i>	<i>mi</i>
Condit.Base	<i>ure</i>	<i>oke</i>	<i>nere</i>	<i>tabere</i>	<i>ochire</i>	<i>mire</i>

(The stem is italicized.)

Chamberlain (1888:136)

このようにChamberlain(1888)は語基によって活用を説明した。Chamberlainが2nd. Conjの「食べる」を ‘tab-eru’、3rd. Conjの「見る」を ‘m-iru’ のように分節している点は山田の分節と同じである。また、Chamberlainは次のような表も示している。

(6-3-10)

< First Conjugation. oku, “to put” (stem ok). >

Positive Voice.

1. Certain Present or Future	oku
2. Indefinite Form	oki (used for all tenses)
Desiderative Adjective	okitai
Adjective of Probability	okiso na
Polite Certain Present or Future	okimasu
・ Gerund	o(k)ite
・ do. Emphasised	o(k)icha
・ Certain Past	o(k)itaro
・ Probable Past	o(k)itara (ba)
・ Conditional Past	o(k)itari
・ Concessive Past	o(k)itaredo (mo)
・ Frequentative Form	o(k)itari
3. Conditional Base	oke
Imperative	oke!
Conditional Present	okeba
Concessive Present	okedo (mo)
4. Negative Base	oka
Probable Present or Future	oko (for okau)

(・は筆者)

Chamberlain (1888:138)

この表の「・」で示したGerundからFrequentative Formについて、‘The *k* of the stem is dropped in these tenses.’ (Chamberlain 1888: 138) (拙訳：語幹の*k*はこれらのテンスのときには脱落する)と述べ、*t*音の前で*k*音が脱落するという見方をしている。Bloch (1946a) は ‘ok-’と‘oi-’の2種類の語幹を認めることでこの問題を解決したが、Chamberlain (1888) は語幹の脱落だと考え

たようだ。Chamberlain (1888) はテ形、過去形を作る際の音変化については、次のように説明している。

(6-3-11)

In the Classical Dialect each suffix was simply agglutinated to one of the bases without any letter-changes occurring, e.g. gerund oki-te, ari-te, tsugi-te. But in modern usage phonetic decay has obliterated this pristine simplicity, and has given us oite, atte, tsuide, -forms in which the stem loses its final consonant, and other letter-changes take place. The nature of the irregularity thus caused depends in every case upon the last letter of the stem. The student will more easily master this difficulty by committing to memory the following examples, than by being given a set of abstract rules.

Chamberlain (1888:145-146)

(拙訳) 文語においては、各接尾辞は語基に、何ら字が変化することなく付加されていた。すなわち動名詞形は「おきて」「ありて」「つぎて」のように。しかし現代の用法では音の脱落が本来の単純さを壊し、「おいて」「あつて」「ついで」という形のように、語幹の最後の子音が失われ、ほかの字の変化が生じたのである。したがって不規則性は語幹の最後の字によるものである。学習者がこの困難を乗り越えるためには、抽象的なルールを与えられるよりは、下の例を記憶したほうがより簡単であろう。

	Certain Present	Indef.form	Negative Base	Gerund	Gerund Emphas.	Certain Past
Stems ending in a vowel.	shimau	shimai,	shimawa,	shimatte,	shimatcha,	shimatta.
	iu	ii,	iwa,	itte,	itcha,	itta.
	omou	omoi,	omowa,	omotte,	omotcha,	omotta.
	nuu	nui,	nuwa,	nutte,	nutchu,	nutta.
Stems ending in b or m.	manabu	manabi,	manaba,	manande,	mananja,	mananda.
	nusumu	nusumi,	nusuma,	nusunde,	nusunja,	nusunda.
	yobu	yobi,	yoba,	yonde,	yonja,	yonda.
	yomu	yomi,	yoma,	yonde,	yonja,	yonda.
Stems ending in g.	kogu	kogi,	koga,	koide,	koija,	koida.
	tsugu	tsugi,	tsuga,	tsuide,	tsuija,	tsuida.
Stems ending in k.	kaku	kaki,	kaka,	kaite,	kaicha,	kaita.
	tsuku	tsuki,	tsuka,	tsuite,	tsuicha,	tsuita.
Stems ending in r.	aru	ari,	ara,	ate,	atcha,	atta.
	toru	tori,	tora,	totte,	totcha,	totta.
Stems ending in s.	nasu	nashi,	nasa,	nashite,	nashicha,	nashita.
	orosu	oroshi,	orosa,	oroshite,	oroshicha,	oroshita.
Stems ending in t.	butsu	buchi,	buta,	butte,	butcha,	butta.
	matsu	machi,	mata,	matte,	matcha,	matta.

Chamberlain (1888:146)

Chamberlain (1888) は、「置く」を‘ok-u’と分節したにも関わらず、規則変化動詞のうち1st Conj.の語幹末の音が子音に終わるとは述べていない。Chamberlain (1888) は「言う」「思う」などの動詞の語幹末の音を、母音であると分析した。

(6-3-12)

Stems ending in a vowel=shimau, iu, omou, nuu.

Chamberlain (1888:146)

Chamberlain (1888) はNegative BaseにSimawa, iwa, omowaのように出現するwを何だと考えていたのだろうか。

Chamberlain (1888) は不規則動詞については、kuru, suru, masuであるとしたが、iku、aru動詞 (kudasaru, nasaru, irassharu, gozaruの四つ。ossharuは見られない)、sinuruについても、また、その不規則性を指摘している。しかし、不規則動詞については分節には触れていない。

その後、Chamberlain (1888) もまた、継承されることはなかった。このあたりの事情は、第6章第3節第1項の金沢 (2008:65) の指摘と同じで、当時は文語文典を研究対象としていたこと、Chamberlain (1888) が英語で書かれていたこと、また外国人向けの日本語教育がまだ行われていなかったことなどが考えられる。

第4項. Joseph Koshimi Yamagiwaの活用論

Bloch (1946b) はYamagiwa (1942) から多くの例文を引用している。ただしBloch (1946a) ではYamagiwa (1942) に触れていないことから、活用論についてはYamagiwa (1942) を参照しなかったとも考えられる。だがYamagiwa (1942) はミシガン大学のASTP⁷⁷で用いられていた日本語テキストであり、当時のアメリカで、一般的にどのように日本語の動詞の活用が説明されていたかを知るためにも、ここでYamagiwaの動詞の活用論を確認しておきたい。

Joseph Koshimi Yamagiwa (1906-1968) は、日系二世で、戦時中はミシガン大学教授としてASTPの日本語教育に携わった人物である。日本名は山極越海、妻は、東條英樹の側近であった政治家星野直樹の妹、星野花子である。Yamagiwaは晩年、『落葉集』の研究でも大きな業績を残している⁷⁸。

まず、Yamagiwa (1942) のPrefaceの記述を見てみよう。アメリカで生まれ育ったYamagiwaだが、多くの国語学者の研究に明るかったことがうかがえる。

(6-3-13)

This book in modern conversational Japanese represents the basic materials of the author's beginner's course in the Japanese language taught at the University of Michigan.

The section on pronunciation derives in large part from the introductory materials of the Kokugo hatsuon akusento jiten ("Dictionary of Accents in the Pronunciation of the National Language"), first published by Professors Kaku Jimbo and Chisato Tsunefuka in 1932. The grammatical material owes a great deal to the language philosophy of Professor Shinkichi Hashimoto.

The author has also consulted the latest works of Professors Yoshio Yamada, Daizaburo Matsushita, Kanae Sakuma, and others.

77 注5を参照のこと。

78 Yamagiwaの経歴はhttp://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/H/hoshino_mi.html及び<http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/start/sel=9/first=21/numit=5/>を2016年10月に閲覧し、それをもとに筆者がまとめたものである。

From the works of the Japanese scholars and from the various Japanese-English dictionaries, especially the one by Professor Yoshitaro Takenobu, many examples have been taken.

Yamagiwa (1942:v-vi)

(拙訳) この本は、ミシガン大学の日本語初心者コースで使われているYamagiwaの基礎的な会話教材である。発音の部分は1932年に神保格と常深千里によって出版された『国語発音アクセント辞典』から得られている。文法的な資料は橋本進吉教授の言語哲学に恩義がある。

また、Yamagiwaは山田孝雄、松下大三郎、佐久間鼎らの最新の研究についても調べている。日本の学者の研究や辞書、とりわけ武信由太郎の『武信和英大辞典』から多くの例文が取り上げられている。

このうち、『国語発音アクセント辞典』と『武信和英大辞典』は、Bloch (1946a:97) も参照したものである。Yamagiwa (1942) では、動詞は次のように整理されている。

(6-3-14)

For the colloquial verb, there are four conjugations, two regular and two irregular. The regular conjugations are designated A and B. Verbs of conjugations A characteristically end in syllabic -u or in a consonant plus -u. Verbs of conjugation B end in -iru or -eru. The irregular conjugations are represented by one verb each, kuru (to come) and suru (to do, to consider).

The conjugations show seven stems.

Yamagiwa (1942:28)

(拙訳) 口語の動詞は、二つの規則動詞と二つの不規則動詞の四つの活用がある。規則動詞をAとBで示す。規則動詞Aは-uまたは子音 + -uという音節で終わるという特徴を持つ。規則動詞Bは-iruまたは-eruで終わる。不規則動詞はkuruとsuruである。活用は七つの語基⁷⁹を有する。

(6-3-15)

Conjugation	1.Imperfective	2.Conjunctive	3.Participial-past	4.Conclusive-attributive	5.Conjectural	6.Conditional	7.Imperative
A	-a	-i	See below	-u	-o (o)	-e	-e
B	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・	-ru	-yo (o)	-re	-ro, -yo
kuru	ko	ki	ki	kuru	koyo (o)	kure	koi
suru	shi, sa, se	shi	shi	suru	shiyo (o)	sure	shiro, seyo

The participial-past stem of conjugation A is formed variously, depending on the consonant used in the last syllable of the verb as it appears in conclusive-attributive form.

Yamagiwa (1942:28-29)

(拙訳) 規則動詞Aの過去分詞形語幹は、辞書形の動詞の最後の音節に使われている子音によっていろいろに形づくられる。

(6-3-16)

79 Yamagiwa (1942) は‘stems’と書いているが、これは本研究の用語定義 (cf:第6章第1節) に従えば、「語基」を指すものである。

Conclusive ending of the verb	Participial-past plus -te	Participial-past plus -ta
-bu, -mu, -nu (as in yobu, to call)	-nde (yonde)	-nda (yonda)
-ku (as in káku, to write)	-ite (káite) *	-ita (káita) *
-gu (as in kógu, to write)	-ide (kóide)	-ida (kóida)
-su (as in dásu, to put out)	-shite (dáshite)	-shita (dáshita)
-tsu, -ru, and syllabic-u (as in tátsu, to stand)	-tte (tátte)	-tta (tátta)

*itte and itta for iku (yuku), “to go” are irregular.

(拙訳)「行く (ゆく)」の「行って」と「行った」は不規則である。

Yamagiwa (1942:29)

以上より、Yamagiwaは動詞を、次のように学習者に向けて説明していたことがわかる。

- (1) 動詞は2種類の規則動詞と2種類の不規則動詞に分類される。規則動詞は、-uまたは子音+uという音節で終わるものと、-iruまたは-eruで終わるものの2種類である。
- (2) 語基は7種類ある。それぞれ、未完了形、接続形、過去分詞形、辞書形、推量形、条件形、命令形を表す。例えば、動詞「書く」の未完了形語基は「kaka」である。
- (3) 過去形やテ形は、辞書形の最後の音節に使われている子音によってそれぞれ形成のされ方が異なる。

Yamagiwa (1942) の分析は、第6章第2節第2項でShibatani (1990) が示した佐久間の分節と非常に近い。佐久間はsin-u, sin-i, sin-a, sin-e, sin-eba, sin-oo, si-nda, si-ndeの8種類を活用形としたが、Yamagiwa (1942) もParticipial-pastを2種類認めているので、sin-u, sin-i, sin-a, sin-e, sin-e, sin-oo, si-nda, si-ndeの計8種類である。佐久間が-ebaとしたところをYamagiwaは-eとした以外は語尾も同じである。過去形、テ形について-ndeと分節している点は佐久間と全く同じである。ただ規則動詞Bについては「-iruまたは-eruで終わるもの」と述べているにも関わらず、(6-3-15) で引用した表ではConclusive-attributiveが-ruとなっており、少し分節がわかりにくい部分も見られる。このあたりは山田孝雄が-iru, -eruと分節し、佐久間が-ruと分節したことと関係があるのだろうか。いずれにせよ、山田や佐久間の分析にYamagiwa (1942) が精通していたこと、Yamagiwa (1942) がアメリカのASTPで用いられたテキストであるということは、大変興味深い事実である。そして、Bloch (1946b) がYamagiwa (1942) から非常に多くの例文を引用していることも、また事実である。

第5項. Peter Marie Suskiの活用論

次にBloch (1942) を考察する。Bloch (1942) は、ロイ・A・ミラー (1974a:55) が述べているように、Bloch (1946a) の4年前、Blochが日本語研究を始めた直後に書かれたもので、Peter Marie Suski (1942) への書評である。

(6-3-17)

最初のインフォーマント相手の研究から生まれたのは日本語動詞分類の簡素化体系であったが、これはススキ (P.M.Suski) の『日本語動詞活用』(Conjugation of Japanese Verbs, South Pasadena, 1942) を酷評するという形をとったもの。

ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳 (1974a:55)

Bloch (1942) は、これまで研究の対象とされてこなかった。しかし、Bloch (1942) では、Bloch (1946a) で明らかにされている動詞の活用論が、既にこの時期、集大成されていたことを知ることができる。なお、Vowel Verb (母音動詞)、Consonant Verb (子音動詞) という用語が使われたのは、この書評が最初である。

まず、Peter Marie Suskiの略歴について述べる。

(6-3-18)

Dr. Peter Marie Suski was born in 1875 in Okayama, Japan, the son of a samurai. Suski was briefly apprenticed in the Osaka Iron Works before travelling to Tokyo to learn photography. Then, at the age of twenty-three, he left Japan for the United States.

Suski decided to begin, at the age of thirty-eight, studying medicine at USC. He graduated in 1917 and began a successful new career.

Throughout his life, Dr. Suski cultivate a deep interest in the cultures of East Asia. He was a regular contributor to the English section of the Los Angeles Japanese language newspaper, *Rafu Shinpo*⁸⁰, writing on the Japanese language for the benefit of Nisei readers. He also continued to collect books on the ancient forms of Chinese characters.

(南カリフォルニア大学の図書館のホームページ⁸¹より)

(拙訳) Suskiは1875年に岡山で生まれた侍の息子であった。Suskiは東京へ写真を学びに行く前は、大阪でしばらく鉄工場の見習工をしていた。そして23歳のとき、日本を離れ、アメリカに渡った。Suskiは38歳のとき南カリフォルニア大学で医学を学び始め、1917年に卒業し、輝ける新しい生涯が始まったのである。彼は人生をつうじて、東アジアの文化に興味を深めた。彼はロサンゼルス日本語新聞である羅府新報にも、日系二世の読者のために日本語を書いて毎回投稿していた。彼はまた漢字の古代の形についての本を収集した。

Suskiの著書には次のようなものが挙げられる。

1928 Dictionary of Kanji

1931 Phonetics of Japanese language

1942 Conjugation of Japanese verbs

Suski (1942) はカリフォルニアで出版された。カリフォルニアにはツーリレーキ収容所があり、1942年から3万人近い日系人を強制収容している。この当時の日系人の日本語力はかなり低下していて、収容所内でも日本語教育が行われていたようである⁸²。そのこととSuski (1942) の関連は残念ながら不明である。

なお、Suski (1942) は、Blochに酷評されたにも関わらず、2002年に復刻版⁸³が出版されていることは、何とも皮肉な現実である。

Suski (1942) は、本を著した目的を次のように述べている。

80 羅府新報。アメリカ最大の邦字新聞で、ロサンゼルスで日系人向けに発行されている。

81 南カリフォルニア大学の図書館のホームページに2011年11月時点で記されている。
<http://www.usc.edu/libraries/archives/arc/libraries/eastasian/china/SuskiCollection.html>

82 関・平高編 (1997)、pp.138-139。

83 Suski, P. M. (2002) *Japanese Verbs Super Review*, Research & Education Association.

(6-3-19)

I have been observing the Japanese conversation of the American-born Japanese children, and notice that they are experiencing difficulty in verb endings. [...] There is no Japanese grammar available that is written in English, which treats of verbs extensively as to different endings in conformity with proper Japanese etiquette.

Suski (1942:1)

(拙訳) アメリカで生まれた日本人の子供の日本語会話を観察していて、彼らが動詞の語尾に難しさを感じているようだと言った。日本語の作法に合致した語尾の選択に関して広汎に扱った、英語による日本語の文法書は存在しないのである。

Suski (1942) は、文法書というより、単に動詞の様々な形を羅列しただけのテキストである。例えば‘erabu’という動詞について、実に100を超える形が提示されている⁸⁴。以下は、そのうちのほんの一部を筆者が抜粋したものである。

(6-3-20)

erabu	erabanakattaroh	erabande
erabimasu	erabeba	erabamaide
eraban (ai)	erabaneba	erabanakutte
eranda	erandara (ba)	oerabinasaru
erabananda	erabanandara (ba)	oerabininaru
erabanakatta	erabohnara (ba)	oerabinasaimasu
eraboh	erabumainara (ba)	oerabininarimasu
erabumai	erabe	oerabiasobasu
erandaroh	erabuna	oerabiasobasimasu
erabanandaroh	erande	

Suski (1942:10-12)

日本語は、一つの動詞がこれほど多くのふるまいをするのである。その様々な形を一覧表にしたかのようなSuski (1942) が戦時下のアメリカに存在していたことは、Blochの言語資料として役立つものであったろう。

Suski (1942) は、動詞を次のように整理している。

(6-3-21)

All Japanese verbs are classified according to the endings. There are eleven conjugations as we have eleven different endings. All Japanese verbs invariably end in u. The consonant which precedes the final u determines the conjugation. The vowel just before the final syllable is called the stem vowel of the verb. The stem vowel does not undergo change in conjugation except in the eleventh, which

84 ほかにoerabiasobasimasendesitara (ba) といったものまで見られる。

involves three different ways of changes.

Suski (1942:3-4)

(拙訳) 全ての日本語の動詞は、語尾によって分類される。日本語には11の異なる語尾があるので、11の活用が存在する。全ての日本語の動詞は常にuで終わる。最後のuに先行する子音が活用を決定する。最後の音節の一つ前の母音を、動詞の語幹母音と呼ぶ。11番目の活用だけは語幹母音が3とおりに変化するが、それ以外の語幹母音は活用において変化を受けない。

Conjugation	1	2	3	4	5	6
Stem vowels	AEO	AEIOU	AEIOU	AEIOU	I	AEIOU
Present	bu	gu	ku	mu	nu	ru
Negative	ban	gan	kan	man	nan	ran
Past	nda	ida	ita	nda	nda	tta
Future	boh	goh	koh	moh	noh	roh
Imperative	be	ge	ke	me	ne	re
Connective Substantive	bi	gi	ki	mi	ni	ri
Examples	erabu	aogu	kaku	amu	sinu	soru

Conjugation	7	8	9	10	11a	11b	11c
Stem vowels	EI	AEOU	AOU	AIOU	U (Changeable)		
Present	ru	su	tu	u	Uru	Uru	Uru
Negative	n	san	tan	wan	On	En	An
Past	ta	sita	tta	tta, hta	Ita	Ita	nda
Future	yoh	soh	toh	oh	Oyoh	Iyoh	Oh
Imperative	yo	se	te	e	Oi	Ei	Ei
Connective Substantive	—	si	ti	i	I	I	I
Examples	ageru	osu	matu	arau	kuru	suru	inuru

これを、Suski (1942) が全く独自に考えたのか、あるいは何か参考とした文献があるのかは定かではない。この表は、動詞の最後の音節に注目して11種類に分けただけのもので、特に言語学的な知識に基づいて分節したというわけでもなさそうである。にも関わらずPresentが bu, mu, nu のときPastがndaになっていたり、7と11だけ明らかに異質であるなど規則性が見えやすい。言語学者であるBlochが1～6、8～10が子音動詞、7が母音動詞、11が不規則動詞だと気がつくのに多くの時間は要しなかったのではないだろうか。

Bloch (1942) は、Suskiの著書を次のように批判した。

(6-3-22)

The student for whom this book is intended may be excused for throwing up his hands in despair: Japanese verbs must be impossibly difficult, their inflections endless and wholly whimsical, their use one of those mysteries that only the native speaker understands.

Bloch (1942:202)

(拙訳) この本で勉強する学習者は、失望してお手上げだろう。日本語の動詞は途方もなく難しく、その活用は無限で、全く予測不能で、その用法はネイティブスピーカーだけが理解できる謎である。

そして、Bloch (1942:202-203) はこの‘Dr. Suski’s parade of paradigms’、‘Dr. Suski’s chaos’ (拙訳：Suskiの活用オンパレード、Suskiの混沌) を次のように整理した。

(6-3-23)

Dr. Suski classifies all verbs into eleven conjugations ‘according to endings’ (more accurately, according to the ending of their stems). [...]Japanese regular verbs fall into two classes (not eleven) according to the final phonemes of the stem. : CONSONANT VERBS and VOWEL VERBS.

(拙訳) Suskiは全ての動詞を「語尾によって (より正確には語幹の語尾によって)」11の活用に分類した。しかし日本語の規則変化動詞は、語幹の最後の音素によって分類すれば、(11ではなく) 二つに分類されるのだ：子音動詞と母音動詞である。

Imperfect:

Indicative	-(r)u	osu, mátu; ageru, míru
Presumptive	-(y)oo	osóo; matóo; agéyóo, miyóo
Conditional	-(r)eba	oséba, máteba; agéréba, míreba
Imperative	-e(-ro, -yo)	ose, máte; agero, -yo, míro, -yo

Perfect:

Indicative	-ta	osita, mátta; ageta, míta
Presumptive	-taroo	ositároo, máttaroo; agétároo, mítaroo
Conditional	-tara	ositára, máttara; agétára, mítara
Alternative	-tari	ositári, máttari; agétári, mítari
Gerund	-te	osite, mátte; agete, míte

Bloch (1942:202-203)

この整理について、Bloch (1942: 203) は‘The formulation is my own; the terminology is eclectic, based in part on Denzel Carr, Certain Verb Formations in Modern Japanese⁸⁵ (Yale diss., 1937)’ (拙訳：公式化は私独自のものである。術語はところどころデンゼル・カーの口語日本語の動詞形成をもとに選択して使用している) と述べている。Blochの日本語に関する論文において、Consonant VerbsとVowel Verbsが登場するのは、これが初めてである。

BlochはSuskiの著書を言語学的でないと批判したが、Suskiの表は実際Blochの活用の整理に何らかのひらめきを与えたと考えるのは短絡的だろうか。Miller (1970:x) によると、Blochは1941年12月16日に友人Hockettに向けた手紙の中で ‘Brown is about to introduce a course in either Russian or Japanese, probably the latter; I expect to take it.’ (拙訳：ブラウン大学はロシア語か日本語のどちらかのコースを導入しようとしている、恐らく後者だろう。私はそのコースを受講しようと思っている) と書いており、この時点ではまだ日本語の研究は始めていなかったものと一応考えられる。Bloch (1942) の掲載された Journal of the American Oriental Society, Vol. 62は1942年9月に出版されており、したがってBlochがSuskiの表を目にしたのは、日本語研究のかなり初期であったと考えてよい。9か月という短期間で、戦時下の限られた資料に基づいて、Blochはこのような動詞の活用に関する斬新な分析を提示することができたのである。

85 Denzel Carrの論文は日本国内では入手することができなかった。したがってDenzel CarrがVowel Verb、Consonant Verbという用語を使っていたかどうかは、現時点では不明である。今後の課題としたい。

なお、4年後に発表されたBloch（1946a）の活用は、上の9カテゴリーにInfinitiveが追加され、10カテゴリーとなったほかは大きな違いは見られない。

第6項. Harold Gould Hendersonの活用論

Bloch（1946a）は次のように述べている。

(6-3-24)

The following books have been useful for reference:

H. G. Henderson, Handbook of Japanese grammar; Cambridge, Mass., 1943.

Y. Takenobu, Kenkyusha's new Japanese-English dictionary; Tokyo, [1931 et seq.].

K. Zinboo and S. Tunemi, Kokugo hatuon akusento ziten [Accented pronouncing dictionary of the national language] ; Tokyo, 1932 et seq. I am indebted to Professor Serge Elisseeff for lending me his copy of this book.

Denzel Carr, Certain verb formations in modern Japanese (MS) ; Yale diss., 1937.

Bloch（1946a:97）

このうち、Henderson(1943)について考察する。まず、Harold Gould Hendersonの略歴を述べる。

(6-3-25)

Harold Gould Henderson (1889-1974) was an American academic, art historian and Japanologist. He was a Columbia University professor for twenty years. From 1948 through 1952, he was the President of the Japan Society in New York. Henderson earned a degree at Columbia University in 1910, and continued his studies in Japan between 1930 and 1934.

(http://en.wikipedia.org/wiki/Harold_Gould_Henderson⁸⁶)

(拙訳) Hendersonはアメリカ人の学者であり、芸術史家で日本研究者である。彼はコロンビア大学で20年間教授を務めた。1948年から1952年、彼はニューヨークの日本人会の会長だった。Hendersonは1910年にコロンビア大学で学位をとり、1930年から1934年までは日本で研究を続けた。

Hendersonはアメリカ・ハイク協会 (Haiku Society of America) の創設に貢献し、彼を記念したハイク賞 (Harold G. Henderson Memorial Award) が1976年から設けられている⁸⁷。Hendersonの著書には以下のものが見られる。

1934 The Bamboo Broom

1939 The Surviving Works of Sharaku

1943 Handbook of Japanese Grammar

1958 An Introduction to Haiku

1965 Haiku in English

86 出典はWikipediaだが、これ以外にHendersonの略歴を見つけることができなかった。

87 Haiku Society of Americaのホームページに2011年11月時点で記されている。: <http://www.hsa-haiku.org/>

GHQ民間情報教育局顧問だったHendersonは、Reginald Horace Blythとともに、いわゆる天皇陛下の人間宣言案文の作成に携わったということがわかっている⁸⁸。

Henderson (1943: v) は、Prefaceで山田孝雄への感謝を記している。

(6-3-26)

I must express my obligation to Professor Yamada Yoshio, the great pioneer among modern Japanese grammarians, whose voluminous and comprehensive works have been invaluable.

Henderson (1943:v)

(拙訳) 山田孝雄教授に感謝する、彼は現代日本語の文法家の中でも偉大な先駆者であり、彼の膨大で幅広い研究は計り知れない。)

Henderson (1943: 9) が、Chamberlain (1888) を引用していることは既に 6 章 3 節 3 項で触れた。Henderson (1943) では、動詞は次のように説明されている。

(6-3-27)

The basis of conjugation is comparatively simple. There are for each verb certain “line-forms” or “bases” to most of which suffixes may be added.

Henderson (1943:11)

(拙訳) 活用の基本はかなりシンプルである。各動詞についてそれぞれ「ラインフォーム」もしくは「語基」というものがあり、これに接尾辞が付け加えられる。

「ラインフォーム」もしくは「語基」は次のように整理されている。

(6-3-28)

Line	Japanese name	English name for “base” or “line-form”
1	Mizenkei	Imperfect, Dubitative, Non-positive, Negative, Future, Conditional, Indefinite
2	Renyoikei	Conjunctive, Predicative, Connective, Adverbial, Verbal
3	Shushikei	Conclusive, Predicative, Substantive, Sentence-ending, Full-stop
3A	Rentaikei	Attributive, Adjectival, Substantival, “Form joined to Substantives”
4	Izenkei	Perfect, Conditional, Conditional Definite
5	Meireikei	Imperative

これらについてHenderson (1943:13) は、G.B.Sansom (1928) を参照したと述べている。Sansom, George Bailey (1883–1965) は英国人で、大使館に勤務していた人物である⁸⁹。Sansom (1928) のPREFACEではアストン、チェンバレン、サトウに謝辞が述べられている。しかし、Bloch自身はSansom (1928) を参照した形跡がないことから、これ以上本論文では取り上げないこととする。

次に、Hendersonの一つ目の規則変化動詞について見てみたい。

88 毎日新聞2006年1月1日。

89 松本 (1933) より。

(6-3-29)

From the manner in which their “bases” are formed, the vast majority of colloquial Japanese verbs fall into two categories.

The first conjugation is known to the Japanese as the yodan ‘four-step’ or ‘four-vowel’ conjugation, because it has four “bases” all with the same “root”, but ending respectively with the four vowels a, i, u, and, e. The “roots” all end with consonants. (下線は筆者)

Henderson (1943:14)

(拙訳)「語基」が作られる方法によって、口語日本語の動詞の大部分は二つのカテゴリーに分けられる。一つ目の活用は、「四段」とか「四母音」活用として日本人に知られている。なぜならこの活用は、同じ「語幹⁹⁰」を持つ「語基」だが、その語尾はそれぞれ異なる四つの母音 a, i, u, e を持つからである。「語幹」は全て子音で終わる。

(6-3-30)

“Root” is here used in a special sense, and only in default of a better word, to mean an unchanging (or practically unchanging) element which is found in all forms of a word.

Henderson (1943:14)

(拙訳) ここで用いた「語幹」という語は特別な意味で使っている。もっと相応しい用語があればそれを使うのだが。ここでの意味は、全ての形に見られる、「変化しない」(もしくはほとんど変化しない) 要素である。

ここでHenderson (1943) が「「語幹」は全て子音で終わる」と述べていることは、本研究における大きな発見の一つである。日本語の規則変化動詞のうち、一つのグループの語幹が全て子音に終わることは、Bloch (1946a) が最初に指摘したことだと考えられてきた。三上 (1970:170) も「〔筆者注: 動詞をモルフェムにまで分解する〕技法をもっとも早く、しかも組織的に述べたのは、たぶんB.Bloch (’46) であろう。確かめてないが、きっとそうだろう」と述べているのである。Shibatani (1990) も、規則変化動詞を語幹と語尾に一貫して分節するテクニックは、Bloch (1946a) によって得られたと述べている。それ以前に「「語幹」は全て子音で終わる」ことを指摘できるわけがないのである。ok-u という分節を行ったChamberlain (1888) でさえ、「思う」の語幹末の音を母音と分析したがために、母音動詞、子音動詞という分類が出来なかったことは既に述べた。しかし、Henderson (1943) はBloch (1946a) より3年も早く指摘しているのである！

Henderson (1943) はハ行転呼について、次のように説明している。

(6-3-31)

Following is a table showing the pronunciation of the final syllables of all the “bases” of all verbs of the first conjugation. At the top of each column in parenthesis is given the final consonant with which each “root” ends.

90 Hendersonは‘root’という言葉を用いているが、本研究の用語定義 (cf. 第6章第1節) に従えば、これは「語幹」のことである。

Line		(K)	(G)	(B)	(N)	(M)	(T)	(H)	(R)	(S)
1	Mizen	-ka	-ga	-ba	-na	-ma	-ta	-wa	-ra	-sa
2	Renyo	-ki	-gi	-bi	-ni	-mi	-chi	-(h)i	-ri	-shi
3	Shushi	-ku	-gu	-bu	-nu	-mu	-tsu	-(h)u	-ru	-su
4	Izen	-ke	-ge	-be	-ne	-me	-te	-(h)e	-re	-se

In the (H) column the “h” seems to have been originally sounded. The present pronunciation does not sound the “h” at any time, and replaces it by “w” in the first line form.

Henderson (1943:14-15)

(拙訳) この表は、第1活用に属する全ての動詞が有する「語基」の最後の音節がどう発音されるかを示したものである。各縦の欄の上にある () の中には、各「語幹」が終わる最後の子音が示されている。(H) の欄については、もともとh音が聞こえていたようである。現代の発音ではh音は聞こえない発音となり、最初のラインにw音が置き換わったのである。

次に、二つ目の規則変化動詞は次のように紹介されている。

(6-3-32)

For the colloquial, what is here called the second conjugation comprise a certain number of verbs whose Line 3 forms end in -iru and -eru. Their conjugation is a some what shortened form of the first conjugation (R) column.

		-iru verbs	-eru verbs
Line 1 form	Mizenkei	-i	-e
Line 2 form	Renyokeyi	-i	-e
Line 3 form	Shushikei	-i ru	-e ru
Line 4 form	Izenkei	-i re	-e re

Henderson (1943:15)

(拙訳) 口語では、二つ目の活用と呼ばれる動詞が一定の数を占めるが、それはライン3の終止形が-iruか-eruで終わるものである。その活用は一つ目の活用の (R) の欄の活用をいく分短くしたもののである。

二つ目の規則変化動詞の分節はm-iruであり、これは山田 (1908) と同じである。

最後に、不規則変化動詞を見ておきたい。

(6-3-33)

In the colloquial the only verbs which are properly called “irregular” are suru‘do’, kuru‘come’, and the suffix -masu. The five old formal and polite -aru verbs gozaru, nasaru, kudasaru, ossharu, and irassharu are regular yodan verbs which happen to have an alternative base- form.

		Suru	Kuru	-masu	The five -aru verbs
Line1	Mizenkei	se, shi	ko (ki)	-mase	-ara
Line2	Renyokeyi	shi	ki	-mashi	-ari, -ai
Line3	Shushikei	suru	kuru	-masu (-masuru)	-aru
Line4	Izenkei	sure	kure	-masure (-mase)	-are

Henderson (1943:17)

(拙訳) 口語では、厳密に不規則だと呼ばれる動詞は「する」「くる」接尾辞「ます」だけである。五つの古いフォーマルで丁寧な動詞「ござる」「なさる」「くださる」「おっしゃる」「いらっしゃる」は規則四段動詞だが、交替形の「語基」を持つ。

Henderson (1943) は、過去形、テ形については、‘Sound Chages with the –TE and –TA Suffixes’ (拙訳：接尾辞-TE、-TAを伴う際の音変化) として説明している。

(6-3-34)

The suffixes –te, –ta, –tara, and –tari are always added to the Line 2 form (renyokei) of verbs. In the colloquial these combinations are usually contracted.

In the official (Tokyo) colloquial the following contractions are standard. For verbs of the first conjugation ending in:

-ku	-kite and –kita	contract to	-ite and –ita
-gu	-gite and –gita	contract to	-ide and –ida
-bu	-bite and –bita	contract to	-nde and –nda
-nu	-nite and –nita		
-mu	-mite and –mita		
-tsu	-chite and –chita	contract to	-tte and –tta
-(h)u	-(h)ite and (h)ita		
-ru	-rite and –rita		

Note that there are only four types of standard contractions.

The verbs yuku and iku‘go’both contract irregularly to itte and itta, etc.

Henderson (1943:19-20)

(拙訳) 接尾辞-te、-ta、-tara、-tariは常に動詞のライン2の形(連用形)に付けられる。口語では、これらの組み合わせは通常縮約される。(東京の)共通語では、以下の縮約が一般的である。1番目の活用は、終わりの音節によって次のように縮約される。

基本的な縮約は4種類のみである。「ゆく」と「いく」はどちらも不規則で、「いって」「いった」というように縮約される。

以上の考察より、Henderson (1943) が、日本語の規則変化動詞のうち一つのグループについて、「語幹末の音が子音に終わること」を指摘していたことが明らかになった。繰り返しになるが、このことは、これまでBloch (1946a) が最初に指摘したことだと考えられてきたので、それより3年早い。ただし、本研究より、Bloch (1942) が既に母音動詞、子音動詞の分類を行っていたことが明らかになった。Bloch (1942)、Henderson (1943) はどちらも戦時下のアメリカで発表されており、両者の動詞の活用における説明の類似は大変興味深い。Bloch(1946a)のReferenceとしてHenderson (1943) があることは既に述べた。

ここで、Henderson (1943) とBloch (1942) の共通点をまとめておきたい。

- (1) 動詞を二つの規則変化動詞と不規則変化動詞の3種類に分けた。
- (2) 規則変化動詞のうち、一つのグループは、その語幹が子音で終わることを指摘した。
- (3) (2) のグループは9種類の子音で終わることを指摘した。

- (4) ハ行転呼の歴史を踏まえ、BlochはW子音動詞、HendersonはH子音動詞とした。
- (5) -masu, aru動詞を不規則動詞に分類した。また、ikuの不規則性を指摘した。
- (6) -te、-ta、-tara、-tariの前での音変化を指摘した。

このうち、(5)の不規則動詞について、Bloch (1942) はsuru、kuru、-masuしか挙げていないが、Bloch (1946a) はsuru、kuru、-masuに加えてikuとaru動詞を指摘している。Henderson (1943) はsuru、kuru、-masu、iku、aru動詞を不規則動詞に分類している。ikuの不規則性はYamagiwa (1942) も指摘しているが、aru動詞に言及しているのはHenderson (1943) とChamberlain (1888) のみである。

(2), (3), (4), (6)についてはBloch (1942)の方が先に発表されている。Henderson (1943) がBloch (1942)を読んだかどうかは定かではなく、Hendersonがどのようにこうした知見を得たのか疑問が残る。

第4節. まとめ

Blochの周縁的研究としてYamagiwa (1942) やHenderson (1943) といった山田や佐久間に精通した人物の存在を明らかにできたこと、またSuski (1942) のような全く無名の日本人を掘り起こすことができたことは、本研究の大きな意義である。

以下の2点については、今後の課題としたい。

- (1) Denzel Carr (1937) *Certain verb formations in modern Japanese*, Yale diss.,については、国内で入手することができなかった。Bloch (1942)はこの論文から術語を借りたと述べている。
- (2) Henderson (1943) はSansom (1928)を参照しているが、英国ではどのように動詞の活用が説明され、どのような日本語教育が行われていたのだろうか。今後さらに検討したい。

<付記>

第6章は、池田 (2013) を加筆訂正したものである。

第7章. 妖怪「だ」の研究：何もないのか、ゼロがあるのか

第1節. はじめに

現代の日本語教育では、日本語の述語は動詞、形容詞、「名詞＋だ」の3本立てであると教えるのが一般的である。それぞれ動詞文、形容詞文、名詞文と呼ばれている。しかし、はじめから3本立てであったわけではない。動詞と形容詞が、以前から述語として安定的地位を保っていたことに比べると、「名詞＋だ」はなかなか述語としての地位を確立することができなかった。その原因は「だ」にある。

文法研究の歴史において、「だ」ほど名立たる文法家たちを翻弄してきたものがほかにあるだろうか。動詞の活用の説明が文法諸家によってそれほど大きな差がないことなどに比べると、「だ」の解釈は実に様々である。その理由の一つに「だ」の語法上の面白さがある。「だ」は、あるときには現れ、あるときには見えなくなる。「アノ人ハ病気サ」と言ったときに、「だ」は「病気」の後ろにあるのだろうか、ないのだろうか。省略されているのだろうか、もともとそこには存在しないのだろうか、あるいはゼロという形で存在しているのだろうか。多くの文法家が「病気」の前に「だ」は存在しないと考えた。そこで、今度は、終助詞も名詞を述語にする力があると言う人があれば、いや、そうではない、名詞そのものに叙述性があるのだと言う人もあった。

また、「だ」は全く別の顔を持っている。今となっては「で」が「だ」の活用形であることは当然であるような気がする。しかし、文法家の多くはなかなかそのことに気がつかなかったのである。さらにやっかいなことに、「だ」は、あるときには「な」になり、あるときには「の」にもなる。「に」や「と」も「だ」の活用形であるかのような顔をすることがあって、そのことがまた文法家を困惑させる。「だ」を断定の助動詞、「だろう」は推量の助動詞というように別のものと考える人もいれば、「だから」や「でも」は接続詞として「だ」と切り離して考えようとする人もいる。しかし、結局それらは全て一つの「だ」でしかないのだ。そのような「だ」の面白さを、筆者はBlochに教えてもらった。

「見えんけど、おる」は漫画家の故水木しげる氏の信念として有名な言葉だが、文法の中の「だ」はまさに見えんけど、いるからややこしくなるのである。文法諸家を悩ませ続けてきた「だ」を、本研究では愛着を込めて妖怪「だ」と呼ぼう。妖怪「だ」がこれまでの文法研究の歴史においてどのように扱われてきたかを詳しく考察し、どういう経緯で「名詞＋だ」が述語として認められ、3本立ての述語が日本語教育に定着したのか、その変遷を見ていくことが第7章での研究の目的である。これからBloch (1946b) 以前あるいはBloch (1946b) と同時代の文法家が説明する「だ」を検討していくが、その際の手懸りは次の8点である。

- ①「だ」の品詞は何か。「である」をどのように分析しているか。
- ②「だ」の活用パラダイムに「で」、「の」、「に」、「と」を入れているかどうか。
- ③「友達ノ池田サン」の「の」を「だ」の活用形と認めているかどうか。
- ④「アノ人ハ病気サ」の「さ」の前に「だ」があるか、ないか、と見ているか。助詞の前で、「だ」が脱落する現象について、どう捉えているか。
- ⑤「名詞＋だ」を述語として見ているかどうか。
- ⑥「雨が降った。雨が降ったから、人がこなかった。」を「雨が降った。だから、人がこな

かった。」のように言えるということから、「だ」には「前文代理的な役割⁹¹」(佐久間1956:190)があると佐久間は述べたが、これについてほかの文法家は言及しているかどうか。

⑦奥津(1978)のうなぎ文で知られる「述語代用説⁹²」について言及しているかどうか。

⑧「だ」の前に来るのは名詞だけなのか。

第2節. 文法諸家の「だ」の記述

第1項. 19世紀の日本語教科書の記述

19世紀後半に書かれた日本語教科書は、その多くが動詞、形容詞の2本立て述語である。「だ」そのものの説明はなく、「である」の説明の中で、その縮まった形として「だ」を取り上げているものが多い。Aston(1871)は、助詞「で」の説明の一つとして次のように述べている。

(7-2-1)

When two nouns are joined together by the verb to be (Aru, Arimasū, gozaimasū) the latter affixes de.

Examples

Watakūshi wa kajiya de gozarimusū. I am the Blacksmith.

Kono mushi wa tombo de aru. This insect is a dragon fly.

Aston (1871:11)

(拙訳) 二つの名詞がbe動詞(ある、あります、ございます)で結ばれるとき、後ろの名詞に「で」が付きます。

例)

わたくしは、鍛冶屋でござりむす。

この虫はトンボである。

(7-2-2)

De aru is in the vulgar Yedo dialect contracted into da, and de wa, into ja.

Aston (1871:11)

(拙訳) 江戸の下品な方言の「である」が、縮まって「だ」になった。「では」は「じゃ」になる。

このようにAston(1871)は、「で」を助詞、「ある」をbe動詞として説明した。

Imbrie(1889)は、名詞や代名詞そのものが述語であり、その後ろにbe動詞である「である」やその縮まった形「だ」がつくのだと説明した。Imbrie(1889)の「だ」「である」は共にbe動詞である。

(7-2-3)

Followed by a noun or pronoun as a predicate, to 'be' is rendered by de aru, often contracted da.

91 この語は佐久間(1956)の用語であるが、このまま使わせていただき、「前文代理的な役割」と「 」に入れて表記する。

92 この語は奥津(1978)の用語であるが、このまま使わせていただき、「述語代用説」と「 」に入れて表記する。

Followed by an adjective as a predicate.

Imbrie (1889:35)

(拙訳) 述語としての名詞や代名詞の後に、「である」やその縮約形「だ」という形でbe動詞が来る。述語としての形容詞の後にも来る。

Chamberlain (1889) も述語は、動詞と形容詞のみである。

(7-2-4)

The predicative verb or adjective of each clause is placed at the end of that clause, the predicative verb or adjective of the main clause rounding off the entire sentence.

(拙訳) 節の述語となる動詞と形容詞は節の最後に置かれ、最終節の述語となる動詞や形容詞が全体の文を包括する。

Chamberlain (1889:254)

Chamberlain (1889) は、「ある」「あった」「あろう」に助詞「で」がついた形についてこう述べた。

(7-2-5)

De gozaimasu, de gozaimashita, de gozaimasyo, etc. (truly polite) , are the simple verb “to be” without “there”, – that is to say they mean “I am,” “he, she, or it is,” “we are,” “you are,” “they are,” and so on through all the other tenses. Da is a corruption of de aru; datta and daro are corruptions of de atta and de aro, with which they exactly agree in meaning.

(拙訳) 「でございます」「ございました」「ございましょう」(丁寧な形) はbe動詞であり、存在の意味はない。つまり“I am,” “he, she, or it is,” “we are,” “you are,” “they are,” ということである。「だ」は「である」の縮まった形で、「だった」「だろう」はそれぞれ「であった」「であらう」の縮まった形で、意味の上では全く同じである。

Chamberlain (1889:216)

この引用部から、Chamberlain (1889) は「だった」「だろう」を「だ」の活用形と考えていたと受け取ることもできるが、はっきりとした言及はない。いずれにせよChamberlain (1889) も「である」をbe動詞として動詞の範疇で扱ったことだけは確かである。

だが、Chamberlain (1889:61) は卓見である。助詞「で」の用法の一つに、be動詞に相当するものがあることに気がついた。

(7-2-6)

De has its second signification, i.e., it properly means “being”, in such cases as the following: –

Ima no kuruma-ya wa, dajaku de, yaku ni tatanai.

Yoppodo beppin de aru.

San-ji han de gozaimasu.

(拙訳)「で」にはもう一つの意味がある。以下の例では、“being”と同じ意味になる。

今の車屋は懦弱で、役に立たない。

よっぽどベッピンである。

三時半でございます。

Chamberlain (1889:61)

以上のように、19世紀後半の日本語教科書は、「である」やその縮まった形「だ」をbe動詞として、動詞の一つとして扱ってきた。よって述語とは、動詞と形容詞の2本立てだという考えが一般的であった。

ここまで見てきたのは、19世紀後半の教科書だが、こうした流れは、20世紀前半になっても基本的には変わらない。Hendersonは第6章第3節第6項で述べたように、大変な日本通として知られる人物であり、Chamberlainや山田の研究に精通していたことがわかっている。そのHenderson (1943:76) さえも「である」の「で」について、次のように述べ、その扱いに苦慮しているのがわかる。

(7-2-7)

It is only a matter of nomenclature whether the de before aru and gozaru is regarded as a postposition or as a verb. It seems simplest to regard this de as essentially a verb, with a meaning similar to that of the English participial “being”.

Henderson (1943:76)

(拙訳)「ある」や「ござる」の前の「で」を助詞とみなすか、動詞とみなすかという名称の問題がある。この「で」を英語の分詞形“being”に似た意味を持つ動詞と基本的にはみなしておくことが最も簡単であろう。

第2項. 山田孝雄

「である」そのものがbe動詞、あるいは「で」が助詞で「ある」がbe動詞という考え方の流れが変わったのは、山田(1922)からである。山田(1922)は、用言を実質用言と形式用言に分け、動詞、形容詞を実質用言、「ある」「だ」「です」を形式用言とした。

(7-2-8)

この古來所屬の不定な「あり」といふ用言を見ると、これは形容詞にも動詞にも属すべきものでなくて、二者に共通して兼ねる点もあり、さうして、その實質が極めて廣く漠然としてただ存在を示すだけのものであるが、その用ゐ方によつてはただ斷言の用をするに過ぎないものもある。この「ある」といふ語を一の品類として他の用言と區別することとすれば、古來の疑點を片附けることが出来る。そこで、用言を実質用言と形式用言との二にわけることが意味のあることとなるのである。

實質用言といふのは陳述の力と共に何等かの屬性觀念をもあらはしてゐる用言であつて、所謂「ある」を除いた動詞形容詞のすべてが之にあたる。形式用言といふのは陳述の力を有することは勿論だが實質の甚しく缺乏してただ存在をいふに止まり進んでは單に陳述の力を有する

だけに止まるものである。

形式用言とこゝにいふのは「ある」の外に「だ」「です」などいふものもある。これらはいづれも陳述の力を有するだけである。これを一の品詞として取扱ふ場合に存在詞と名づける。この外に文語には「如し」「なり」「たり」等形式用言といふべきがあるけれど、口語では「ある」「だ」「です」を形式用言とする。

山田⁹³ (1922:62)

このように山田 (1922) は「ある」に着目し、「ある」を存在詞として立てたが、このうち陳述の力だけを持つ「ある」を特に説明存在詞とした。

(7-2-9)

陳述の力だけの「ある」は説明存在詞と名づける。これは「で」の下に用ゐられるものであるが、その「で」と「ある」との合體して出來た「だ」といふ語があり、又「である」の代りに用ゐられる「です」といふ語がある。此「だ」「です」も説明存在詞である。

「で」の下に「ある」を加へたものが、陳述をなすものであることは前にいつた所であるが、これを存在の「ある」と區別して説明存在詞といふ事にする。さうするとこの類が外にも多少はある。

「だ」といふ語は上の「である」の合體して約まり下が略されたもので、關西地方では「ぢや」といふのである。この「だ」は今は終止形だけであるが、その用は終止としても用ゐられ、また連體としても用ゐられる。その例

ことは豊年だ。

楠木正成は忠臣だ。

本当に寒さうだ。

これらは終止に用ゐた例で、

あの人が嫌いなのですから。

ほんとうにうまそうだこと。

これらは連體に用ゐた例である。

山田 (1922:87-88)

このように山田 (1922) は、「だ」を説明存在詞とした。しかし、「だ」の活用は「だ」だけであると考えた。「なり」は別の説明存在詞として扱われた。

(7-2-10)

文語には「なり」といふ説明存在詞があるが、これが口語でも用ゐられるが活用形と用法とが、多少かはつて次のやうになつてゐる。

93 原文どおり引用したが、2点しんにようだけは入力できなかったので、1点しんにようとなっている。
以下、山田 (1922) からの引用は全て1点しんにようとなっている。

	未然形	連用形	終止形	條件形
(體言をうけるもの)	なら	なり		なれ
(副詞をうけるもの)	なら		な	なれ

文語の「なり」は助詞「に」と「あり」との結合したものだが、それは體言をうける場合と副詞を受ける場合とある。それが口語には伝わつてはゐるが、體言を受ける場合と副詞を受ける場合とによつて活用形の上にも用法の上にも多少の違いが出来てゐる。

山田 (1922:90)

山田 (1922) は存在詞の敬語として「ござる」を挙げた。だが、「これは一豊の馬でございます。」(山田1922:94) の場合の存在詞は「ござる」であるとし、「で」は助詞とした。

このように、山田 (1922) は「だ」「です」を説明存在詞として一つの品詞を立てたのだが、「ある」や「ござる」も説明存在詞とし、その前につく「で」は助詞とした。

山田 (1922) は、「述格」の一部に「賓格」を置く。「賓格」とは次のような語を指す。

(7-2-11)

ある語が主格に對して陳述をするに用ゐられるを述格といひ、述格に立つてゐる語を述語といふ。述語はまた説明語といふことがある。

述格はpredicateの譯語で又賓格とも譯する。しかし本書はこの二語を區別して、その陳述をする語の位置を述格といひ、用言の觀念部を補充するものを賓格とする。即ち述格の一部分に賓格といふものを置くのである。〔中略〕

賓位觀念の缺けた用言「する」「ある」「だ」「な」等に接してその賓位觀念として補充せられるものを賓格といふ。〔中略〕

その例。

兄さんといつしよに勉強する。

月は永久に人間の良友である。

これも一興だ。

それは容易でない。

あすはもう5月の節句です。

みごとな瀧だ。

山田⁹⁴ (1922:242-245)

そして次のように賓格に説明存在詞がついた形を述格とした。

(7-2-12)

「ある」「ない」「ございます」等に對する賓格は體言、準體言⁹⁵、情態副詞⁹⁶で、いずれも格

94 下線は山田の原文どおり。

95 山田 (1922:249) は存在詞の前に来る準體言として「獣なのである」「逃がしたのでは」のような「の」を挙げた。

96 山田 (1922:249) は存在詞の前に来る情態副詞として「静かである」「質素である」などを挙げた。

助詞「で」を伴って接するのである。〔中略〕

體言が賓格である例。

大方鷗であらう。

これは銀行家である。

此の身は鐵石ではない。

それは私の着物でございます。

〔中略〕

「だ」「です」の賓格は「ある」の賓格に同じであるが、助詞を伴わずに直に接するものである。〔中略〕

體言が賓格である例。

あれが北斗七星だ。

今度の競争こそ見ものだぞ。

蝶はいつ見てもかはいらしいものです。

〔中略〕

すべて賓格の語とそれについての形式用言とは相合して一の用言と見做して取扱はねばならぬものである。

山田⁹⁷ (1922:249-251)

ここで、山田 (1922) が「ある」「ない」「ございます」の前の「で」を格助詞と述べているところがおもしろいところである。山田ほどの文法家がなぜ「で」を「だ」の活用形と考えなかったのか。

さて、山田は「賓格＋存在詞」、例えば「北斗七星だ」というような形を一つの述格としたのだが、「だ」や「である」がなくてもまた述格であると述べた。

(7-2-13)

「ある」「だ」に對する賓格である體言は、その文勢の急迫な場合に述格である所の用言を全く缺いて直に終助詞間投助詞を下にふんで述格に立つことがある。

その例。

今来たのは誰か。

あれも支那からくるのか。

字をかくのよ。

しれた事よ。

そういつたのはわたしさ。

それはその筈さ。

山田⁹⁸ (1922:251-252)

このように山田は説明存在詞を欠くもの、つまり名詞に助詞が直接ついた形もまた述格であ

97 下線は山田の原文どおり。

98 下線は山田の原文どおり。

るとした。これらの表現が「だ」を省略したものとは考えず、用言を全く欠いたものとする。山田のこの記述は、体言そのものが述格になる力を持つと考えたということなのか、終助詞、間投助詞に体言を述格にする力があると考えたのかは不確かである。

以上のことから、本研究の八つの手懸りに従って、山田（1922）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は説明存在詞。「である」の「で」は格助詞、「ある」は説明存在詞。
- ②「だ」の活用は、「だ」のみである。
- ③「友達ノ池田サン」のような例は挙げていない。
- ④「アノ人ハ病気サ」のような文では、「病気+サ」は用言を全く欠いた述格だと言う。つまり「さ」の前に「だ」は存在しないと考えている。「体言+終助詞、間投助詞」も述格になることができると見ている。
- ⑤賓格+説明存在詞を述格とした。
- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない⁹⁹。
- ⑧説明存在詞の前に来るのは名詞、「の」、形容動詞語幹¹⁰⁰である。

第3項. 松下大三郎

松下（1930¹⁰¹）は、名詞そのものに叙述性があるのだと考えた。

(7-2-14)

敘述態は名詞が動詞の様にその觀念に明確な判斷が加はつて敘述性を帯びたものである。

苦は樂の種。 酒は百藥の長。

親の物は子の物。 ならぬ堪忍するが堪忍。

の「 」の類である。「種だ」「長だ」……といふ様な意である。但し「種だ」……と云へば名詞でなくて名詞性動詞である。「だ」なしに「だ」の様な意味を帯びる用法が名詞の叙述態である。

松下¹⁰² (1930:427)

松下は、「だ」なしに「だ」の意味を帯びる用法を名詞そのものが持っているのだと考えた。「酒は百藥の長。」という表現は、「だ」が省略されたものではなく、「だ」は最初からそこには存在しないと考えた。逆に「だ」がある場合をわざわざ「名詞性動詞」と呼び、動詞の一つと考えている。

99 少なくとも山田（1922）では「述語代用説」について明確な言及はない。しかし奥津（1978:212）は、山田（1936:270）が存在詞の定義として、「ほとんどいっさいの用言の基本的な部分を代表す」と述べたことを挙げ、山田が「述語代用説」派であると言っている。

100 形容動詞を立てる文法家もいれば立てない文法家もいる。日本語教育ではこれをナ形容詞と呼ぶ。本研究では「静か」や「きれい」という部分を特に指して言いたいときは、便宜上形容動詞語幹と呼んでおくことにする。

101 筆者が参照したのは松下（1961）であるため参考文献ではそう記したが、これは1930年出版のものの復刻版であるため、本文では松下（1930）として書いていく。

102 下線は松下（1930）の原文どおり。

松下（1930:195）は、「に」「と」を断定の動助辞とした。この「に」は「静かにする」の「に」で、「と」は「大臣となる」の「と」だと言う。そして、「に」の「轉活用¹⁰³」として「な」「だ」「です」を挙げ、これらもそれぞれ別々の断定の動助辞だと考えた。はじめに「に」があつて、その活用した形に「だ」があるというところはユニークな発想である。

「に」に静助辞「て」がついた形「にて」の約音が「で」であるとしたが、この「で」もまた断定の動助辞とした。松下は「で」を助詞から断定の動助辞に格上げた最初の人物である。ただ松下は「で」を「だ」の活用形とは見ていない。「だ」も「で」もそれぞれ別々の断定の動助辞だと言う。

松下は、それまでの文法家が助詞として扱ってきた「で」を、断定の動助辞とした。そこまではよかった。ところが松下は、今度は何でもかんでも断定の動助辞「で」にしようとした。「今日は祭日で明日は日曜だ。」（松下1930:207）は当然断定の動助辞だが、「小刀で鉛筆を削る」「東京で学問をする」（松下1930:208-209）など、明らかに助詞だと考えられるような「で」も、断定の動助辞として全て説明できるとした。これは少し残念なことである。しかし、ここがまた妖怪「だ」らしいところである。「だ」と助詞の境界線が実に曖昧なのである。

ところで、松下（1930）の説明は、松下（1906）とはやや異なる点もある。例えば松下（1906:542）は、「です」を断定の動助辞ではなく、助詞としているし、「父ハ商人デ、兄ハ軍人デス」の「で」を助詞であると述べている（松下1906:583）。また、松下（1930）では「の」を断定の動助辞とはしていないが、松下（1906）では名詞修飾の例文で、さりげなく「私ト同ジ下宿ノ客」を出している（松下1906:564）。松下（1906）と松下（1930）の説明の違いは、考えがその後変わったということかもしれないし、松下（1906）が日本語学習者に向けて易しく書かれたためであるかもしれない。

以上から、手懸りに従って、松下（1930）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は断定の動助辞。「である」の「で」は断定の動助辞、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、「だら」「だり」「だ」「だれ」（松下1930:195）。「だ」は「に」の轉活用である。「な」や「で」は、「だ」の活用形ではなく、それぞれ別の動助辞として扱われる。
- ③「友達ノ池田サン」の「の」を「だ」の活用形とは述べていない。だが松下（1906）で「私ト同ジ下宿ノ客」という例を出している。
- ④「アノ人ハ病氣サ」のような文では、「病氣」という名詞自体の叙述的用法だとした。
- ⑤松下（1906）では「□ハ」を主語、「□デス」を説明語と述べている。
- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧松下（1930）では、「だ」「です」の前は名詞か形容詞語幹の例文しか見当たらない。

第4項. 橋本進吉

橋本（1948a:22）は、述語には、動詞的なもの（「どうする」）、形容詞的なもの（「どんなだ」）、

103 「に」の轉活用は、松下（1930:195）によれば以下のとおり。

		第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
特別ラ行變格	〔静か〕	なら	なり	なり	な	なれ
同	〔静か〕	だら	だり	だり	だ	だれ
特別サ行變格	〔静か〕	でせ	でし	です	です	ですれ

及び体言¹⁰⁴に「だ」のついたもの（「何だ」）の3種があると述べている。ただし、純粹に3本立てというわけではなく、「用言¹⁰⁵が述語になる場合が最も普通である」（橋本1948a:219）としている。体言が述語になる場合は、その後ろに指定の助動詞「だ」「です」がつくのだが、第3種の助詞がついても述語であると述べた。

(7-2-15)

體言も述語となることがあります。その場合には體言に指定の助動詞「だ」「です」や、第三種の助詞の附くのが通例です。

これは地理書だ（です）。

會場は此處か。

あれはにせものさ。

[注意]體言に助詞が附いて述語になつた例として挙げた類のものを、次のやうに體言の下に指定の助動詞が略されたものとして、一々それを補つて文法的説明を興へる人があります。

會場は此處（です）か。

あれはにせもの（だ）さ。

しかし本書では、體言に助詞の附いたのを、ありのまゝの形で直ちに述語と見ます。

橋本¹⁰⁶（1948a:219）

このように橋本もまた、さきの山田、松下と同様「体言+助詞」もすなわち述語であり、ここに「だ」は省略されているわけではないという考えを述べた。

橋本（1948a）は「だ」「です」を指定の助動詞としたが、一方「だろう」「そうだ」「ようだ」などもそれぞれ別の助動詞として認めた。よって橋本の「ダ」は三種類、四種類にもなる」と述べたのは奥津（1964a:76）だが、その指摘のとおりである。

また、体言を述語にする力を持つものとして、「だ」、「です」、助詞のほか「らしい」を挙げた。

(7-2-16)

體言その他に附くものは、指定（だ、です）の助動詞及び推量の「らしい」で、助動詞自身に叙述する意味を持つて居り、體言のやうな、自身で叙述する力の無いものに附いて、これに叙述する意味を附與し、之と共に一の用言のやうなものとなり、之に述語となり得る力を興へるものであります（「地図だ」「學校です」「あれは父親らしい」などは右の通りです。）

橋本（1948a:39）

「である」については次のように述べ、「で」は、やはり助詞であるとの見方を示した。

(7-2-17)

104 橋本の体言は名詞、代名詞、数詞。

105 橋本の用言は動詞、形容詞、形容動詞。

106 引用は原文どおりだが、一部2点しんじょうの入力ができず、1点しんじょうの表記になっている。下線は橋本（1948a）。

「だ」と「である」とは共に指定に用ひられますが、文法上からは、「だ」は一語の助動詞で、「である」は助詞「で」と動詞「ある」とに分けて見るべきものです。実際の用法から見ましても、共に指定に用ひられるとはいひながら、

孝子ではあるが……。

勉強家でさへあれば……。

某は美術家でもあれば文學者でもある。

のやうないひ方は、「だ」にはありません。かやうに「で」と「ある」との間に、他の語の入る事があるのは、この二語が一語と見なすべき程に、緊密に結びついて居ないからであります。

橋本¹⁰⁷ (1948a:144-145)

橋本 (1948a) の指定の助動詞「だ」「です」の活用体系は次のとおりである。

(7-2-18)

未然形	だら	でせ
連用形	だつ	でし
終止形	だ	です
連體形	(な)	—
假定形	なら	—
命令形	—	—

橋本 (1948a:巻末第4表)

橋本の「だ」の活用パラダイムに「で」は入っていない。しかし、「だ」系列のもの以外に「な」系列のものも入れた。これは山田 (1922)、松下 (1930) には見られなかったものである。

(7-2-19)

「だ」の活用は頗る不規則であります。その用法も限られてゐます。その五活用形（命令形を缺く故、活用形は五となる）に配したものは、その起原からいへば、二つの系統に分れます。即ち未然形から終止形まで（「だ」のあるもの）は「である」から出たものであり、連體形・假定形（「な」のあるもの）は「にある」から出たものであります。それ故、之を二つの語として取扱ふものもありますが、それ等は現在の用法から見れば互いに他に無い活用形を補つて、一語のあらゆる活用形の用をなしてゐるのですから、本書では一語の語形變化と認めたのであります。

橋本¹⁰⁸ (1948a:139)

橋本 (1948a) は形容動詞を品詞として別に立てるので、一応その活用表を確認しておきたい。この活用表は形容動詞の一部であり独立した品詞ではないが、ここには「で」や「に」が入っている。

107 下線、°の記号は橋本 (1948a)。

108 原文どおり引用したが、「即ち」の「即」のみ新字体しか入力できなかった。

(7-2-20)

未然形	だろ
連用形	だっ、で、に
終止形	だ
連體形	な
假定形	なら
命令形	○

橋本（1948a:巻末第3表）

以上は橋本（1948a）の記述である。しかし、橋本（1948b¹⁰⁹:161）では「学生だ」「学生なので」「学生になる」「あれは学生で」「学生ではない」などの例を挙げて、この場合の「に」や「で」は、「だ」の代用をなしているものという解釈を述べている。

(7-2-21)

「だ」の場合に「學生に」「學生で」を「だ」の活用のやうに取扱つたが、これは普通助詞と見られてゐるのであつて（「で」だけは「だ」の活用と見るものもある）、かやうな取扱は不當なやうであるが、右のやうな場合には、「に」「で」は活用形と同様なはたらきをなしてゐるので、少くともその代用をなしてゐるものと見て不当ではあるまいとおもふ。

橋本（1948b:161）

以上から、手懸りに従つて、橋本（1948a）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は指定の助動詞。「である」の「で」は助詞、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、「だら」「だっ」「だ」「な」「なら」。な系列のものも「だ」の活用とした。「で」はここには入らない。ただし、橋本（1948b）では、「で」と「に」について、「だ」の活用形ではないが、その代用をなすこともあるとした。また、「だろう」や「ようだ」はそれぞれ別の助動詞である。
- ③「の」は「だ」の活用形ではない。
- ④「だ」「です」以外に、助詞や「らしい」も体言を述語にする力があるとしている。
- ⑤体言＋だ、です、助詞、らしいなどを述語とした。だが、普通は用言（動詞、形容詞、形容動詞）が述語になるのだと述べている。
- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧「だ」「です」の前が名詞、または形容動詞語幹の例文しか見当たらない。

第5項. 佐久間鼎

佐久間（1943）は、「である」の「で」に着目し、これを助詞とする分析に異を唱え、次のように述べた。

109 橋本（1948b）は橋本進吉博士著作集第二冊であり、引用部は、橋本進吉（1936）「助動詞の分類について」『國語と國文學』第13巻第10号からとった。

(7-2-22)

“で”といふ助詞と“ある”といふ動詞とに分解して、その結びつきとして説くことは、この邊の事理を明かにする所以ではない。存在をあらはす“ある”は、還元された“である”の形において、語源的になごりを留めてゐるにしても、それはすでに存在をあらはすといふ本來の機能を失つてゐるし、その際の“で”を助詞の一種として説くが、格助詞“で”とその用法において、まったく異なつてゐることは、特に注意すべきものがある。すでに“で”に十分にコプラの意義が含まれてゐることは、これが中止法として用ゐられることや、他の語と結んで接續詞を造り出すことなどに徴して察しられる。

そこで、日本語にあつては、存在の意味をあらはす動詞は、單獨にかつ十分にその機能を發揮して、存在文の述語となるのに對し、論理學にいふ説明判斷に相當する文にあつては他の語詞中にも典型的に“だ”が普通に解されるコプラの役目を荷つて登場するといふことになる。この種の語詞が、形態の上でもおのづから他の動詞と異なり、しかも用法の上で他の助動詞とも同様に見ることが適切でないところから、筆者は特にこれに措定詞といふ名稱を興へて特立させてみようと考えた。

佐久間¹¹⁰ (1943:141-142)

このように佐久間 (1943) は、「で」にコプラの意義を見出した。そして「で」を「だ」の活用とし、「だ」を措定詞とした。「だ」の活用を佐久間 (1943) は次のようだとした。佐久間 (1943) は形容動詞を立てるので、形容動詞の活用と併せて紹介しておきたい。

(7-2-23)

性状詞Ⅱ (形容動詞)	ナダ活	-na (連體) -da (終止)	-ni	-nara	-de	-daro	-dat-
措定詞		da	×	nara	de	daro	dat-

佐久間 (1943:141)

佐久間 (1943) によって、「で」は初めて「だ」の活用形の一つとして認められた。さきの松下 (1930) も「で」を断定の動助辞としたが、松下は「で」を「にて」の縮まった形と見ていて、「だ」の活用形とは考えなかった。

佐久間 (1943) は、措定詞を述語の一つとした。

(7-2-24)

日本語では、状態概念や、性質概念を賓辭とする“品さだめの判斷”は、存在を示す動詞“ある”や形容詞・形容動詞を述語とする構文によつて表現されるのに對し、対象概念を賓辭とする“説明的判斷”は前述の措定詞を述語として表現される次第で、この構文の上の殊別は、判斷のそれぞれの論理的特性を區別して考へるためにはむしろ有利な立場を興へるものといふべきだ。

110 原文どおり引用したが、「説く」の「説」など一部旧字体が入力できないものについては、新字体に改めている。

さらに、佐久間 (1956¹¹¹) は、「だ」の持つ機能について大きな発見をした。「だ」「です」が接続詞を作る機能に着目し、「だ」「です」には「前文代理的な役割」(佐久間1956:190)を有すると考え、その意味ではかの語詞とは違うと述べた。

(7-2-25)

單に「が」を用いるかわりに「だが」「ですが」というような類もあります。「けれども」「だけれど」「ですけれども」なども同様です。しかし、一方には、斷定の語詞をつけないと成り立たないものもあります。「だから」「ですから」「だのに」「だったら」「でしたら」というような接續詞がそれです。この場合に「だ」や「です」は、前の一文の内容を反復するかわりに代理しているといったカタチで、そういう役割については、ソ系統の指示語とおのずから相通じるものを示します。すなわち

雨が降った。だから、人がこなかった。

という場合は、内容上

雨が降ったから、人がこなかった。

というのと異なるところがないのでして、つまり

雨が降った。雨が降ったから、人がこなかった。

というところを、反復をさけて接續詞を使ったのだと見る事が出来ましょう。

佐久間 (1956:24-25)

このように佐久間は、「で」を「だ」の活用形と認め、「前文代理的な役割」にも気がついた。「だ」の研究は一気に進展した。

しかし、その佐久間でさえも、「アノ人ハ病氣サ」のような「だ」が現れない文については、やはり既出の文法家同様、「だ」に惑わされるのである。「アノ人ハ病氣サ」の名詞「病氣」を述語にする役割を担っているのは、「サ」だと考えたのである。つまり「さ」の前に「だ」はもともとなくて、その代りに「さ」が「だ」を代行しているのだと述べた。

(7-2-26)

“終助詞”の一つとして取扱はれてゐる“さ”の如きも、實は“だ”の職能を代行するところの(活用のない)措定詞と認めるべきものだし、また措定詞を缺いてその代りに“よ”“ね”のやうな助詞を添へていふ場合も、口頭語の實際ではすくなくない。

事件の叙述をその主要な職責とする一般の動詞と大いに趣を異にする所以を、そこにも見出すことができよう。

佐久間 (1943:143-144)

終止助詞「さ」については、佐久間 (1956:69) でも、「だ」など、斷定の語をつけずにす

111 筆者が参照した佐久間の『現代日本語法の研究』は1956年出版のものだが、この初版は1940年に出版されている。

ぐ名詞に接続する点、「よ」と少し似ていますが、「よ」の方はもともと「正月だヨ」のようにいうのが普通なのに対し、「さ」は「だ」を受けることがないというわけで、やっぱりちがいます」と述べ、助詞「さ」には「だ」と同じく措定詞としての職能があることを強調している。

以上から、手懸りに従って、佐久間（1943）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は措定詞。「である」の「で」は措定詞、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、「だ」「だっ」「な」「なら」「だろう」「で」。佐久間は「で」を「だ」の活用形と認めた最初の人物である。
- ③「の」を「だ」の活用形としない。
- ④助詞の「さ」も「だ」の代理をすることができるので、措定詞の一つだとした。つまり「アノ人ハ病気サ」の「サ」の前に「だ」は存在せず、「病気」を述語にするのは「さ」だとした。
- ⑤「名詞＋措定詞」を述語の一つとした。ただし佐久間の措定詞は「だ」「です」「さ」。
- ⑥「だ」は、ほかの語と結んで接続詞を作り出すことができるとして、「前文代理的な役割」に言及した。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧「だ」「です」の前は名詞、または形容動詞語幹の例文しか見当たらない。

第6項. 三尾砂

三尾（1942）は、「だ」「です」を助動詞とするが、ほかに「である」「でございます」「でいらっしやる」もまたそれぞれ別の助動詞としている。その一方、「だの」や「だか」は助詞である（三尾1942:169）。また、「なんだ」「なんだろう」「なんです」「なんでせう」や「もんだから」「もんですから」などもそれぞれ独立した助動詞とする（三尾1942:170）。このように三尾（1942）の「だ」は何とおりもある。

「だ」の活用形は以下のとおりである。

(7-2-27)

	基本形 (終止)	連体形	假定形	推量形	中止形	過去形
[だ]	だ	な	なら (ば)	だらう らう	で	だつた

三尾（1942:169）

活用表には入っていないが、三尾（1942）は、「の」が「だ」の活用形である可能性を示唆した最初の人物である。

(7-2-28)

〔中略〕話言葉では、この「な」の用法のせまい¹¹²といふことが非常に不便なのです。これは日本語の文構造において、最も大きな弱点の一つといへばいへるものでせう。しかし、われわれは、その不便を幾分なりとも軽減するために、それに代るものとして、「の」をつかつて

112 三尾（1942:171）によれば、連体形「な」は「の」「もの」「もんで」「もんだから」「もんですから」「もんでございますから」「だけ」「ばかり」などにしか接続することができないという意味。

ゐます。この「の」が、「だ」の連體形の缺陷の幾分かを補つてゐるのです。

雪舟が子供の時の話です。

英世が三才の時のことでありました。

酔へば追分を歌ひだすのがおきまりのおちいさんです。

濱へ出てはなぎさに流れてくる木ぎれや炭を拾ふのが仕事の、年とつた祖母をかゝへてゐた。

中村さんがとてもよく御存じの方なんですつて。

旅行は鎌倉へ行つたのがたゞ一度つきりの、いはゞ籠の鳥さ。

金満家で生物學者の彼は、金にあかして資料をあつめた。

大きなのがじまの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらましました。

右の例は、「…である」「…であつた」の意味に用ひられた「の」です。つまり、「だ」の連體形のやうな役目をしてゐる「の」であります。これらの「の」は、體言と體言の間に立つ普通の「の」とは性質がちがつてゐます。普通のさういふ種類の「の」は

ゲーテの著作、父の妹の連合ひ

母の愛、子供の教育、あこがれの涙

羊の一群、机の上

のやうに、なんらかの意味で二つの體言が相屬關係にあることを示すものです。

三尾¹¹³ (1942:173-174)

三尾 (1942) も佐久間 (1943) 同様、「だ」の活用形の一つに「で」を認めている。三尾は中止形「で」の例として次のようなものを挙げている。一部を引用しておく。

(7-2-29)

今日は日曜日で、こうあほうこう日です。(『よみかた』三)

内に居ると大威張りの癖に、外へ出ちやしゞみつ貝で、からツきし、意氣地がないんですから。(『戀を知る頃』)

うちの人は七人で、あとはてつだひの人です。(『カヅノホン』三)

三尾 (1942:188-189)

三尾は「「だ」「です」を佐久間博士は『前文代理的な役割』をするものと述べられてゐますが」(三尾1942:208)と断った上で、三尾自身も「だ」の持つ「前文代理的な役割」を認めた。その例として、「僕は君を尊敬してゐる。尊敬してゐるから救ひに来た」(三尾1942:207)という文は、「僕は君を尊敬してゐる。だから救ひに来た」(三尾1942:209)と言えることを挙げた。

三尾 (1942) は、「「だ體」での問の出しかたは、動詞形容詞の場合は、そのおしまひに「か」をつければよく、體言や「な」形容詞、「の」形容詞の場合には「だ」のつく場所へ、「だ」を略して、かはりに「か」をつける」(三尾1942:221)と述べて、助詞「か」の前では「だ」を略すのだとした。しかしながら、助詞の「よ」については、「高樹町は、とにかく苦手よ。」「スケートもやめる覚悟よ。」(三尾1942:417)などの例を挙げ、「體言その他に直接に「よ」を附

113 下線は三尾 (1942)。

け」(三尾1942:417) する場合があるとした。その上で「「よ」は、「さ」や「ね」とともに、「だ」に似た叙述機能を持つものと考へることもできませう。つまり、「だ」の代理的役目ができるものともいへませう」(三尾1942:418) と述べている。すなわち、三尾の場合「苦手よ」と言った場合、「苦手」を述語にする役割を担っているのは、助詞「よ」であって、「だ」ではない。このあたりの考え方は、佐久間(1943)に近い。佐久間は特に「さ」だけを取り上げ、これを活用のない措定詞としたが、三尾は「さ」に加え、「よ」や「ね」も叙述機能を持つ、つまり名詞を述語にする力を持つのだと積極的に述べている。

三尾(1942)は、「だ」「です」の前に名詞や形容動詞語幹以外に、次のような名詞句が来る場合があることに気がついた。このことはこれまで考察してきた文法家が指摘しなかったことである。

(7-2-30)

これが僕だ。

これ、僕にですか。

これはお母さんから、これはお姉さんからです。

三尾(1942:199,228)

ここまでは三尾(1942)の記述である。

三尾(1942)にはなかったが、三尾(1948)は、次の記述のように、「だ」のある文を展開させて「内容を盛つた文」(三尾1948:102)に言い換えることができると述べた。

(7-2-31)

「火事だ!」「自動車だ!」「おおかみだ!」に用いられる「だ」は、「AはBだ◎」の「だ」とはちがつたものである。判断文の「AはBだ◎」の「だ」は陳述作用をあらわすものであるが、「火事だ!」の「だ」は、思いがけない存在や生起を驚きを以てさけぶ「だ」である。

火事だ!

は

火事がおこっている。

であり、

自動車だ!

は

自動車がきた!

である。すなわち助詞「は」と共にある判断の「だ」ではなくて、助詞「が」と共にある現象の「だ」とよぶべきものである。

三尾¹¹⁴(1948:104-105)

この記述をもって、三尾(1948)が「だ」の「述語代用説」に言及したと見ることもできる。

114 原文どおり引用したが、一部1点しんじょうとなっているところがある。◎も原文どおり。◎は、その文が、三尾の言うところの「判断文」であることを表すマークである。

ただ、三尾は、展開して「内容を盛った文」に言い換えることができるのは、必ずしも「だ」だけが持つ機能だと考えていたわけではなさそうである。それは次の記述から読み取れる。

(7-2-32)

あ！

梅の花を見て「あ！」といったのなら

梅が咲いている。

というふうに展開させることができる。「しつかり勉強しなさい」といわれて

はい。

といったのなら、その「はい」の内容は、

しつかり勉強します。

というふうに展開できる。

三尾（1948:102）

以上から、手懸りに従って、三尾（1942）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は助動詞。「である」も一つの助動詞。
- ②「だ」の活用は、「だ」「だっ」「な」「なら」「だろう」「で」。
- ③連体形「な」の代用としての「の」を認め、「大きなのがじまんの大蛙」のような例を挙げ、それは「机の上」の「の」とは違うことを述べた。
- ④助詞の「さ」や「よ」「ね」も「だ」の代理をすることができると考えた。
- ⑤「「だ」は體言だとか「な・の」形容詞の語幹だとか、そのほか叙述の力のない語が述語に用ひられるときに、それを助けて動詞のやうな働きをさせるもの」（三尾1942:197）と述べている。
- ⑥「前文代理的な役割」に言及した。
- ⑦明確に述語の代用とは述べていないが、「火事だ」は「火事がおこっている」に展開できるという考えを、三尾（1948）で述べた。
- ⑧「お姉さんからです」のように、「だ」「です」の前に名詞以外のものが来る例を挙げた。

第7項．時枝誠記

時枝（1950）は形容動詞を立てない。これを名詞に指定の助動詞「だ」のついたものと解釈する。

(7-2-33)

「静か」「丈夫」を一語とするならば、「静かな」「静かだ」或いは「丈夫に」「丈夫で」「丈夫なら」に於ける「なら」「で」「に」「だ」を何と見るべきかといふに、本書では、これを指定の助動詞「だ」の活用系列と考へたのである。即ち、「静かな」「丈夫に」は、「静か」「丈夫」といふ語形の變化しない語、即ち體言に、指定の助動詞の附いたものと考へたのである。このことについては、後章指定の助動詞の項を参照せられたいが、右のやうにして、いはゆる形容動詞は、一般に體言（名詞）に指定の助動詞の附いたものと全く同等に取扱はれることとなるのである。

そして、指定の助動詞「だ」の活用を次のようだとした。

(7-2-34)

未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
で	で、に、と	だ	な、の	なら	○

指定の助動詞は、話手の単純な肯定判断を表はす語である。この中、「に」「と」「の」は、従来助詞として取扱はれてゐたものであるが、下に挙げる例によつて知られるやうに、そこには明かに陳述性が認められるので、これを助動詞として認めるのが正しいであらう。また、右¹¹⁵の表に掲げた各活用形は、その起源に於いては、それぞれ異なつた體系に属する語であつたであらうが、今日に於いては、一の體系として用ゐられるやうになつたものである。本書に於いては、形容動詞を立てないから、従来形容動詞の語尾と考へられてゐた「だら」「だつ」「で」「に」「だ」「な」「なら」は、そのまま、或は分析されて、すべて右の活用形に所屬させることが出来る¹¹⁶。次に用例を活用形に従つて掲げることとする。

未然形

體が健康でない。

連用形

體が健康である。(「ある」は指定の助動詞であるから、この場合は二重指定の表現といふことが出来る)

體が健康であらう。(健康だらう)

體が健康で、性質が愉快だ。(中止の場合)

私は健康で働いてゐます。(連用修飾的陳述を表はす場合)

月明かに、風涼し。(中止の場合、文語だけに用ゐられる)

元氣に、愉快に、働いてゐる。(連用修飾的陳述を表はす)

隊伍整然と行進する。(連用修飾的陳述を表はす)

花が雪と散つてゐる。(右に同じ)

「今日は行かない」と云つてゐた。(右に同じ)

野となく、山となくかけまはる。

終止形

今日は日曜だ。

連體形

それが駄目な時。

僅かの御禮しか出来ない。

假定形

明日がおひまなら、お出かけ下さい。

気分が悪いなら、お止めなさい。

115 原文では「右」だが、本稿では上の表を指す。

116 「だらう」は推量の助動詞として別に扱われる。「だつ」がどうなったかは不明。

あながた行くなら、一緒に行きませう。

時枝 (1950:183-185)

時枝は「で」を「だ」の活用形としたが、「ある」もまた指定の助動詞とした。よって「である」は二重指定となった。

時枝は連用形に「に」と「と」を入れた。時枝の「に」は、「元気に」「愉快地」という例文からわかるように一般に形容動詞とされているものの一部である。時枝の「に」が、「病になりました」のような「に」を含むのかどうか定かではない。「整然と行進する」の「と」は形容動詞の一部とも考えられるものである。また、一般に引用の「と」と呼ばれる助詞も「だ」の活用形に入れている。

連体形には「の」を入れ、「僅かの御礼」を例に挙げた。しかしこの部分の注釈には次のように書かれている。

(7-2-35)

「な」「の」は、屢々共通して用ゐられるが、語によつて、「な」の附く場合と「の」の附く場合とがある。「駄目の」「僅かな」とも云うことが出来るが、「突然」「焦眉」「混濁」等には「の」がつき、「親切」「孤独」「あやふや」等には、大體に「な」がつくやうである。

時枝 (1950:187)

このように、時枝がここに「の」を入れたのは、「僅かな御礼」とも「僅かの御礼」とも言うことができるという理由である。この「の」は「友達ノ池田サン」の「の」ではない。このことは奥津 (1978) も指摘しているとおりである。

一方、この活用表には「だろう」はない。「だろう」はこの活用パラダイムに入れず、「別に推量の助動詞として」(時枝1950:186)扱われる。

時枝 (1950:259) は「用言に零記號の陳述を想定」する。次の時枝の説明は、本研究にとっては重要な記述である。

(7-2-36)

陳述は次のやうな零記號に於いて表現されてゐると見ることが出来るのである。

犬が走る ■

氣候が暖い ■

右のやうな説明法は、「故郷の山よ」といふ表現に於いて、感動を表はす「よ」が表現されず、「故郷の山！」と表現された場合、これを

故郷の山 ■

として圖解説明するのと同じである。

以上のやうに、國語に於いては、用言は常にそれだけで別に陳述を表はす語を伴わずに陳述的表現とすることが出来るのであるが、方言の中には、「犬が走るだ」といふやうに、「だ」を以て陳述を表はしたり、「犬が走るです」「氣候が暖いです」といふ風に、「です」を以て陳述を表現することがある。また、「日中は暖かい。だが朝晩は冷える。」といふやうに、前文を受

けて、これを繰返す場合に、ただ陳述だけを繰返して、「だが」といふことがある。この場合「だ」は前文の零記號の顯現したものと見ることが出来るのである。また、「朝晩は冷える。」といふ表現は、聞手に對する敬意を含める時、「朝晩は冷えます。」といふ表現をとる。「ます」は、「だ」「です」と同様に、零記號の陳述が、語の形式をとつて現れたものと解することが出来るのである。

時枝 (1950:258-259)

このように時枝は「故郷の山！」という表現では、「山」の後ろに「だ」が零記號の形で存在するのだと述べた。つまり「だ」は見えていないが、そこにゼロという形で存在しているということである。これは、ここまで見てきた文法家の見解には見られなかったものである。時枝は、このような零記號の陳述には、「だ」「です」以外に「ます」があり、名詞ばかりでなく、動詞や形容詞の後ろにも零記號の陳述があるのだとした。したがって、述語とは「すべて陳述の助動詞或は零記號の陳述によつて統一されたもの」(時枝1950:263)であると述べた。

ただ、時枝(1950)の述語は、単に「名詞+零記號の陳述」というわけにはいかない。「[彼は勉強家です]」という文は、入子型構造によつて「彼は勉強家」の部分が述語である」(時枝1950:265)と述べた。時枝の「です」は零記號の陳述であり、述語の一部には含まれない。

一方、(7-2-36)で引用したように、時枝(1950)は「だ」の「前文代理的な役割」については認めている。「日中は暖い。だが朝晩は冷える。」という文で、「だ」は前文の零記號が顯現化したものだと時枝は述べている。

以上から、手懸りに従つて、時枝(1950)の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は指定の助動詞。「である」の「で」は指定の助動詞、「ある」も指定の助動詞。よつて「である」は「で」と「ある」の二重指定である。
- ②「だ」の活用は、「だ」「で」「に」「と」「な」「の」「なら」。
- ③「の」を「だ」の活用形としたが、それは「駄目なとき」「駄目のとき」というようにどちらとも言える語があるからであり、特に「友達ノ池田サン」の「の」を指したものではない。
- ④ 故郷の山 ■の■には、「だ」「です」という零記號の陳述が隠されていると述べている。時枝は「だ」がゼロという形でここに存在していると考えた。本研究で考えてきた「アノ人ハ病氣サ」という文は、時枝によれば 病氣 ■というように零記號の陳述があるということになる。
- ⑤ 述語とは「すべて陳述の助動詞或は零記號の陳述によつて統一されたもの」と述べ、犬が走る ■、氣候が暖い ■、故郷の山 ■の3タイプを挙げた。動詞や形容詞の後にも「だ」「です」「ます」がゼロという形で存在していると考えた。
- ⑥「日中は暖い。だが朝晩は冷える。」という例文で、「前文代理的な役割」に言及した。
- ⑦「述語代用説」には明確な言及は見られない。
- ⑧「犬が走る」「氣候が暖い」も後ろに「だ」「です」があると述べた。しかし「だ」の前に名詞句が来るような例は挙げていない。

以上、ここまで20世紀前半の「だ」の記述を考察してきた。このように「だ」は、文法諸家によつて実に多種多様であつた。

第3節. Bloch以降の「だ」の記述

第1項. Bernard Bloch

日本国内で「だ」の実体をめぐって文法家が頭を悩ませている中、科学的で体系的かつ明快な答えをもたらしたのがBlochである。次にBloch (1946b) の「だ」について考察していきたい。

Bloch (1946b) は、「だ」と「です」の二つをコピュラとする。

Bloch (1946b:207) は、‘The Predicate’の中で、‘Every predicate contains an INFLECTED WORD as its NUCLEUS.’ (拙訳：述語は全て核となる活用語を持つ) と述べ、‘The nucleus of a predicate, together with all preceding words within the predicate, is an INFLECTED EXPRESSION. According as the nucleus is a verb, an adjective, or the copula, the inflected expression is a VERBAL EXPRESSION, an ADJECTIVE EXPRESSION, or a COPULAR EXPRESSION.’ (Bloch 1946b:208) (拙訳：述語の核と述語内で核に先行するすべての語を合わせたものが活用表現である。述語の核が動詞、形容詞またはコピュラであるのに応じて、活用表現は動詞表現、形容詞表現またはコピュラ表現となる) として、述語を明確に3本立てとした。

述語3本立ては、Blochの日本語教科書SJでも学習者に向けて説明された。

(7-3-1)

A sentence may consist of a single clause, or of several clauses strung together. In each clause, the smallest part that could be used as a complete clause all by itself is called the PREDICATE. This may be a verb or a verb phrase, an adjective, or a copula with some other word before it – in each case with or without a following particle.

Some clauses consist of a predicate alone; in others, the predicate is preceded by one or more noun phrases or other elements, none of which could be used alone without the predicate. The predicate of a final clause can be a complete sentence by itself.

Bloch&Jorden (1945c:138)

(拙訳) 一つまたはそれ以上の節が結合して文を構成する。それだけで完全な節になれる最小部分のことを述語と呼ぶ。これは動詞または動詞句、形容詞、そしてコピュラの前にほかの語がついたものである。また、どの場合にもその後に助詞が付いたり付かなかったりする。一つの述語だけで節になるものもある。述語の前に一つ以上の名詞句やほかの要素が先行することもあるが、述語がないものは節にはなれない。最終節の述語は単独で文になれる。

このようにBloch (1946b) は述語こそが文の要であると考えた。その述語を担うものとして動詞または動詞句、形容詞、そしてコピュラの前にほかの語がついたものを挙げた。ただし、‘Dóno tatémono ga, teisyaba desu ka’ (Bloch 1946b:237) という質問に対して、‘Ano sirói, tatémono desu’を、‘Ano sirói tatémono’とだけ答えた場合については、述語を欠くものとしてMinor Sentenceというカテゴリーに入れた。一方、述語があるものをMajor Sentenceとした。

「だ」「です」の前に来るのは名詞だけではない。Bloch (1946b) は次のように述べ、「だ」「です」の前に様々な形が来ることを指摘した。

(7-3-2)

(1) By a noun or other type of substantive expression¹¹⁷.

Examples: *heitai da* ‘is a soldier’; *sóo da* ‘is so’; *watakusi no, boosi da* ‘is my hat’; *kádo ni, áru, ano sírokute, tiisái uti da* ‘is that small white house (which is) on the corner’; *nedañ ni, yotté da* ‘is dependent on the price’; *señsoo ni túite da* ‘is about the war’.

(拙訳)「だ」「です」の前に名詞やある種の実詞表現が来るもの「兵隊だ」「そうだ」「わたくしの帽子だ」「角にあるあの白くて小さいうちだ」「値段によってだ」「戦争についてだ」

(2) By a relational phrase¹¹⁸.

Examples: *watakusi nó da* ‘is mine’; *Tookyoo kára da* ‘is from Tokyo’; *Tookyoo kára no da* ‘is the one from Tokyo’; *tomodati no, musumé no da* ‘is [my] friend’s daughter’s’; *bangóhañ o, tábete kara dátta* ‘it was after eating dinner’.

(拙訳)「だ」「です」の前に関係句が来るもの「わたくしのだ」「東京からだ」「東京からのだ」「友達の娘のだ」「晩御飯を食べてからだだった」

(3) By an indicative inflected expression. The following examples illustrate all the common combinations of an indicative form with an indicative, presumptive, or hypothetical copula; *tabéru* ‘eats’ and *samúi* ‘is cold’ represent all verbs and all adjectives respectively. With an indicative copula as nucleus: *samúi desu* ‘is cold’, *samúi desita* ‘was cold’, *sámukatta desu* ‘was cold’; with a presumptive as nucleus: *tabéru daroo* or *tabéru desyoo* ‘will probably eat’, *samúi daroo* or *samúi desyoo* ‘will probably be cold’, *tábeta daroo* or *tábeta desyoo* ‘probably ate’, *sámukatta daroo* or *sámukatta desyoo* ‘probably was cold’, (*heitai*) *dátta daroo* or (*heitai*) *dátta desyoo* ‘was probably (a soldier)’; with a hypothetical copula as nucleus: *tabéru nara* or *tabéru naraba* ‘if [someone] eats’, *tábeta nara* or *tábeta naraba* ‘if [someone] ate’, *samúi nara* or *samúi naraba* ‘if it is cold’. Other examples: *sámuku náru daroo* ‘will probably grow cold’, *arúite iku daroo* ‘will probably go on foot’, *túyoku naritái daroo* ‘probably wants to grow strong’, *arúite ikitaku nákatta daroo* ‘probably did not want to go on foot’.

(拙訳)「だ」「です」の前に直説形活用表現が来るもの。以下の例は直説形活用表現に直説形、推量形、仮定形のコピュラが来るものである。「食べる」と「寒い」はそれぞれ動詞と形容詞を代表する例として使った。述語の核がコピュラの直説形であるもの：「寒いです」「寒いでした」「寒かったです」述語の核がコピュラの推量形であるもの：「食べるだろう／食べるでしょう」「寒いだろう／寒いでしょう」「食べただろう／食べたでしょう」「寒かっただろう／寒かったでしょう」「兵隊だっただろう／兵隊だったでしょう」述語の核がコピュラの仮定形であるもの：「食べるなら／食べるならば」「食べたなら／食べたならば」「寒いなら／寒いならば」その他：「寒くなるだろう」「歩いて行くだろう」「強くなりたいだろう」「歩いて行きたくなかったらう」

117 Substantive expressions are of two kinds: noun expressions and pseudo-clauses. (Bloch1946b:223) (拙訳：実詞表現には名詞表現と疑似節の2種類がある。)
「実詞表現」「疑似節」の訳語はロイ・A・ミラー著林栄一監訳 (1975) のものを用いた。Bloch (1946b) は「－ながら」「－次第」「－たり形」「－て形」、不定詞形を疑似節とした。

118 A RELATIONAL PHRASE has two immediate constituents: an element called the *relatum*, and a following particle. The *RELATUM* is most commonly a noun or other type of substantive expression. (拙訳：関係句とは二つの直接構成要素を持つ。リレータムと呼ばれる要素と後続する助詞である。リレータムは一般的に名詞または実詞表現であることが多い。)
「関係句」という訳語はロイ・A・ミラー著林栄一監訳 (1975) のものを用いた。

(4) By an indicative inflected expression with a clause particle following.

Examples: *tábeta kara da* ‘it is because [someone] ate’, *tábeta iru kara da* ‘it is because [someone] is eating’, *sámuku náí kara da* ‘it is because it is not cold’.

(拙訳)「だ」「です」の前に「活用表現の直説形＋節助詞」が来るもの。「食べたからだ」「食べているからだ」「寒くないからだ」

Bloch¹¹⁹ (1946b:212-213)

Bloch (1946b:213) は「である」「であった」「であります」などは、それぞれコピュラと動詞が一体化したものだとして述べた。

Bloch (1946a) はPlain Copulaの「だ」とPolite Copulaの「です」は、次のように命令形と不定詞形を除く8カテゴリーに活用するとしている。

(7-3-3)

Non-past indicative	(直説形 ¹²⁰ ・非過去)	(dá, na, no)	désu
Non-past presumptive	(推量形・非過去)	daróo	desyóo
Provisional	(与件形)	(nára/ náraba)	—
Past indicative	(直説形・過去)	dáqta ¹²¹	desita
Past presumptive	(推量形・過去)	dáqtaroo	desitaroo
Conditional	(条件形)	dáqtara	desitara
Alternative	(選択形)	dáqtari	desitari
Gerund	(動名詞形)	(dé)	desite

Bloch (1946a:108)

表の中の「な」は、‘*taiheñ sízukana tokoro*’ (Bloch&Jorden 1945c:289) のような場合の「な」である。Blochは形容動詞を立てず、名詞の一分類としている。また‘*heitai ná no da or heitai ná ñ da*’の「な」のように「の」「ん」の前の「な」も「だ」の交替形とする。「で」は‘*Otokó no ko wa hássai de, oñná no ko wa gósai desu.*’ (Bloch&Jorden 1945c:266) のような「で」をコピュラのGerundとした。

一方、「に」はコピュラの活用形には入れなかった。例えば‘*Sízuka ni arúite kudasai*’ (Bloch&Jorden 1945c:291)、‘*byooki ni narimásita*’ (Bloch&Jorden 1945c:75-76)、‘*nán de mo sitte isoo ni miemásu*’ (Bloch&Jorden 1946:722) などの「に」は全て助詞であるとし、一貫して助詞でとおした。

「の」は‘*tomodati no Tanaka-sañ*’、‘*señsei no Kurihara Yoneo*’ (Bloch&Jorden 1945c:270) などの例を挙げ、こうした「の」を「だ」の交替形だとした。

また、「だ」のゼロ交替形を認めた。助詞「か」の前でコピュラの「だ」はゼロ交替形として存在すると述べている。

119 原文どおり引用した。斜字体も原文どおり。Blochは日本語部分を斜字体で示すので、以下、そのまま引用することとする。

120 この8カテゴリーの訳語は、ロイ・A・ミラー編林栄一監訳 (1975) のものをそのまま使用した。

121 ‘q’は「っ」を表している。

(7-3-4)

Before the particle *ka*, the non-past indicative of the copula, *dá*, is replaced by a zero alternant (i.e. drops out) ; e.g. *Heitai ka, súihei ka siranai* ‘I don’t know whether he is a soldier or a sailor’ (cf. *Heitai dátta ka, súihei datta ka siranai* ‘I don’t know whether he was a soldier or a sailor’, with the past indicative of the copula before *ka*.)

Bloch (1946b:213)

(拙訳) 助詞「か」の前で、非過去直説形のコピュラ「だ」は、ゼロ交替形に代わる。例)「兵隊か水兵かわからない。」(参考:「か」の前で過去直説形のコピュラは残る「兵隊だったか水兵だったかわからない。」)

助詞の前でコピュラがゼロ交替形になる現象は、SJでも繰り返し説明された。

(7-3-5)

However, if the original question ends with a noun plus *désu ka*, the quoted question before *to* will usually end either in the same way or simply with a noun plus *ka*; THE PLAIN PRESENT FORM OF THE COPULA (*dá*) IS NOT NORMALLY USED BEFORE THE PARTICLE *ka*. Notice the following two sentences:

- (a) I asked if he was a soldier. *Anó hito wa heitai désu ka to kíkímásita.*
- (b) I asked if he was a soldier. *Anó hito wa heitai ká to kíkímásita.*

Bloch&Jorden (1946:436)

(拙訳) しかしながら、もとの質問が名詞+ですかで終るとき、「と」の前の引用疑問文は普通同じ形で終るか、もしくは名詞+かで終る。コピュラの普通体の現在形(だ)は、助詞「か」の前では使われないのが普通である。下の二つの文に気をつけよう。

- (a) あの人は兵隊ですかと聞きました。
- (b) あの人は兵隊かと聞きました。

(7-3-6)

The plain present form of the copula, *dá*, is normally omitted before the particle *ka*. Compare the following two sentences:

- (c) Is he a doctor or a teacher? *Anó hito wa, isya désu ka, seǹséi desu ka?*
- (d) I don’t know whether he’s a doctor or a teacher. *Anó hito wa, isya ka senséi ka sirimaséñ.*

Bloch&Jorden (1946:453)

(拙訳) コピュラの普通体の現在形「だ」は、助詞「か」の前で省かれる。二つの文を比べてみよう。

- (c) あの人は、医者ですか、先生ですか。
- (d) あの人は、医者か先生か知りません。

(7-3-7)

(7) *heitai ká mo sirenai*

(9) *heitai kara ka mo sirenai*

(10) *heitai nó ka mo sirenai*

In example (7), (9), and (10), notice that the plain present tense of the copula (*dá*) is omitted before *ka*;

Bloch&Jorden (1946:540)

(拙訳)

(7) 兵隊かもしれない

(9) 兵隊からかもしれない

(10) 兵隊のかかもしれない

(7), (9), (10)の例で、コピュラの普通体の現在形「だ」は、助詞「か」の前で省かれる。

「だ」は常に落ちるわけではなく、残る場合もある。‘*Sóo da sóo desu née.*’ (Bloch&Jorden1946:380) は「そう」の前で「だ」が残る例で、Blochはこの例が‘tricky’に聞こえるとして面白がった。

このように、Bloch (1946b) は、助詞「か」の前に「だ」のゼロ交替形があることを想定した。Bloch (1946b) に従えば、「アノ人ハ病気サ」という文は「アノ人ハ病気Øサ」となり、述語を担っているのは「だ」のゼロ交替形である。「病気」という名詞でもないし、「サ」でもない。この発見がいかに大きいかは、第7章第2節で取り上げた6人の文法家の考察を思い出して見れば明らかである。念のためここで再確認しておこう。

山田 (1922)：名詞＋助詞も直ちに述語である。

松下 (1930)：名詞そのものが叙述性を持つのである。

橋本 (1948)：名詞＋助動詞「だ」「です」「だろう」「ようだ」「らしい」などや第3種の助詞がついたものも述語である。

佐久間 (1943)：助詞「さ」も活用しない措定詞である。

三尾 (1942)：助詞「さ」「よ」「ね」にも叙述性がある。

時枝 (1950)：「故郷の山■」の■に零記号の陳述が隠されている。

時枝 (1950)は、Bloch(1946b)より時代は後だが、大変興味深いものである。ただBloch(1946b)に比べると、目に見えない部分を多く想定している。例えば「日中は暖かい。だが朝晩は冷える。」という例において、「だ」は前文の零記号が顕現したと言うが、そう説明するよりは、「だ」が前文を受けていると言った方がわかりやすい。動詞の後に■を想定し、「犬が走るだ」というのも方言にあると述べているが、この場合、陳述を担っているのはやはり動詞「走る」であり、「だ」ではないように思える。「走ります」と言えば「ます」は丁寧にする役割であって、陳述部ではないように感じる。このように時枝の説明は、とてもおもしろいものであり、決して否定するわけではないが、日本語学習者にとってはわかりやすい規則であるとは言えない。

次に「述語代用説」についてだが、SJでは次のように述べ、「どこですか」と「どこにありますか」は、厳密には意味が異なると学習者に向けて説明している。

(7-3-8)

The question *dóko desu ka* is often more SPECIFIC than *dóko ni arimásu ka*. To ask where some kind of place can be found, you say *Dóko ni arimásu ka?*. To ask where a particular place is, you say *Dóko*

desu ka?

Bloch&Jorden (1945c:201)

(拙訳)「どこですか」という質問は、「どこにありますか」よりも具体的である。探しているある種の場所を聞くときには、「どこにありますか」を使い、特定の場所を聞くときには「どこですか」を使う。

一方、「疑問詞＋でも」の説明の中では、‘dāre de mo’、‘dóre de mo’などの例を挙げた上で、次のように述べている。

(7-3-9)

The word *dé* in these combinations is the gerund of the copula. In its place, you can use the gerund of a verb or an adjective, without affecting the generalized or all-inclusive meaning of the expression.

dāre ga kite mo …whoever comes; no matter who comes

dāre ni kiité mo …whomever [I] ask; no matter whom [I]ask

dāre o mite mo …whomever [I] see; no matter whom [I]see

Bloch&Jorden (1946:480)

(拙訳)「だれでも」「どれでも」などに現れる「で」は、コピュラの動名詞形である。この「で」を動詞や形容詞の動名詞形で置き換えることもできるが、その場合でも、表現の一般的かつ包括的な意味に影響を与えることはない。

誰が来ても

誰に聞いても

誰を見ても

(7-3-8) と (7-3-9) の引用部から、Blochは「だ」や、その活用形「で」がほかの述語で代用できるととらえていたと一応考えることができる。ただ、(7-3-8) の引用では、述語を「だ」で置き換えると、意味が若干異なるのだと述べている。このようにBlochは述語代用説に近いことを述べてはいるのだが、二つの文の意味の違いにはこだわった。

一方、「だ」が持つ「前文代理的な役割」については‘*Dé mo and kéredomo*’の項で次のように述べている。

(7-3-10)

312. Anyway, I'll wear a hat. *Dé mo, boosi wa kabútte ikimasyóo.*

The expression *dé mo* in sentence 312 consists of the gerund of the copula plus the particle *mo*. It is an abbreviation of *soo demo* or *sore demo*, meaning literally ‘even if it is so’ or ‘even if it is that’.

Bloch&Jorden (1945:327)

(拙訳) 312. でも帽子はかぶっていきましょう。

この文の「でも」はコピュラの「で」と助詞の「も」から成る。これは「そうでも」もしくは「それでも」の短くなった形で、文字どおりの意味は「例えそうでも」である。

この説明から、Blochは「でも」を「そうでも」または「それでも」が短くなった形だと述べ、コピュラの「で」そのものが前文を代理するとは述べていない。Blochの説明だと、あくまでも前文を受けるのは「そう」「それ」ということになる。一方、Bloch (1946b) は *dá kara*、*dé wa* をコピュラ「だ」から出来た接続詞であると述べている。

以上から、手懸りに従って、Bloch (1946b) の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」はコピュラ。「である」の「で」はコピュラ、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は *dá*, *na*, *no*, *daroo*, *nára/náraba/*, *dáqta*, *dáqtaroo*, *dáqtara*, *dáqtari*, *dé*
- ③「の」を「だ」の交替形とした。
- ④助詞「か」の前で、「だ」はゼロ交替形になると述べた。
- ⑤述語とは動詞表現、形容詞表現、コピュラ表現の3種類。
- ⑥‘*dá kara*’、‘*dé wa*’が「だ」からできた接続詞であることは述べたが、「だ」が前文を代理するとは明確には述べていない。
- ⑦「述語代用説」に近いことは述べたが、厳密には意味が異なる場合もあると述べた。
- ⑧「だ」の前には、名詞や実詞表現のほか、関係句なども来ることを指摘した。

第2項. Eleanor Harz Jorden

次にJordenによってBloch (1946b) はどのように継承されたのかを検討していきたい。

Jorden (1987a, b) の述語は3本立てである。Bloch (1946b) は「だ」「です」の前に来るものは名詞だけではないことを明らかにしたが、Jorden (1987a) では、まず早い段階で「名詞+です」を述語一つの柱として導入する。

(7-3-11)

A predicate, you will remember, is a verbal expression, or an adjective expression, or a /nominal+*désu/* expression.

Jorden (1987a:86)

(拙訳) 述語は、動詞表現、形容詞表現、「名詞+です」表現である。

その後、Jordenは「名詞+です」を「名詞+句助詞+です」というパターンに拡大する。

(7-3-12)

/NOMINAL+PHRASE-PARTICLE+ *désu* /

We will now extend our definition of the nominal predicate to include both /nominal+ *desu* / and /nominal+phrase-particle+ *desu* /. [...]

yo-zí-han made desu.

Jorden (1987a:208)

(拙訳) 「名詞+句助詞+です」

今、名詞述語の定義を拡大し、「名詞+です」と「名詞+句助詞+です」を含むものとします。
4時半までです。

このようにして、Bloch (1946b) を忠実に継承しつつ、学習者に配慮した導入順序とした。

Bloch (1946b) は「だ」のゼロ交替形を認め、SJでは「だ」が脱落するとして学習者に提示したが、「だ」がなくなったり残ったりする現象をさらに追究したのは、Jordenである。

(7-3-13)

dà – an extremely unstable form which is dropped in a number of contexts – is lost.

(拙訳) 「だ」はとても不安定な形であるので、多くの文で脱落、つまり失われるのです。

Jorden (1987a:227)

(7-3-14)

Dà may also be dropped in sentence-final position, or before most sentence-particles. In other words, the direct-style equivalent of *Sôo desu*. may be *Sôo da*. or *Sôo.*; of *Sôo desu ne!*, either *Sôo da ne!* or *Sôo ne!*; but of *sôo desu kedo*, only *sôo da kedo* (since *kedo* is not a sentence-particle.)

Jorden (1987a:227)

(拙訳) 「だ」は文の最後や多くの終助詞の前で失われる。つまり「そうです」は「そうだ」か「そう」になる。「そうですね!」は「そうだね!」か「そうね!」になる。でも「そうですけど」は「そうだけど」になる。(なぜなら「けど」は終助詞ではないから。)

(7-3-15)

X *dà yo* and X *da né(e)* are markedly blunt; X *yo* and X *né(e)*, with *dà* dropped, are more gentle.

(拙訳) 「Xだよ」と「Xだね」は特にぶっきらぼうな言い方だ。「Xよ」と「Xね(え)」はより穏やかな言い方だ。

Jorden (1987a:228)

(7-3-16)

/kâ mo sirenai/

[...]However, *da* – that very unstable form – disappears here, too.

<i>yamérù</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[someone] may quit’
<i>yamétà</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[someone] may have quit’
<i>takâi</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[it] may be expensive’
<i>tâkâkatta</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[it] may have been expensive’
<i>tâkâku nâi</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[it] may not be expensive’
<i>byooki</i>	+ <i>kâ mo sirenai</i>	‘[someone] may be sick’
<i>byoôki dàtta</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[someone] may have been sick’
<i>tomodati kara</i>	+ <i>kâ mo sirenai</i>	‘[it] may be from a friend’
<i>tomôdati dà kara</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>	‘[it] may be because s/he’s a friend’

Jorden (1987b:7)

(拙訳) 「かもしれない」

[中略] 「だ」はとても不安定な形なので、ここでも消えます。

やめるかもしれない。
やめたかもしれない。
高いかもしれない。
高かったかもしれない。
高くないかもしれない。
病気かもしれない。
病気だったかもしれない。
友達からかもしれない。
友達だからかもしれない。

Jordenは(7-3-16)のように、例文は必ず3種類の述語を使った文を出し、常に‘parallel’なものとして扱った。「友達からかもしれない」「友達だからかもしれない」という、「だ」があるかないかで意味が変わる秀逸な例文は、学習者にとって役立つものだったろう。「だ」が脱落したり残ったりする現象は規則的ではないので、日本語学習者は「だ」が現れるパターンを逐一覚えていかなければならないのである。

Jorden (1987a) は「だ」が残る場合も説明した。

(7-3-17)

/PREDICATE + sôo da/

Sôo is one of the very few nominals preceding which the *da* form of the copula (ending a sentence modifier) occurs in an unchanged form.

Gênki da soo desu.

Gênki datta soo desu.

Jorden (1987b:234-235)

(拙訳)「そう」は文修飾の終りのコピュラの「だ」がそのまま残る数少ない名詞のうちのひとつである。「元気だそうです。」「元気だったそうです。」

以上のように、Jordenは、「だ」の不安定さについてBloch (1946b) を一歩進めた研究を行った。

Jordenは「だ」の活用表を明示していないものの、「の」を「だ」の活用形の一つとしている。この点はBloch (1946b) と同じである。

(7-3-18)

When a sentence consisting of or ending with /nominal+dà/ occurs as a modifier of a following nominal, *dà* acquires the special form of *no*, unless the preceding nominal is a *na*-nominal, in which case it becomes *na*. Thus:

/byoóki dà + gakusee/ > *byoooki no gakusee* ‘a student who is sick,’ ‘a sick student’

/gênki da + kodomo/ > *gênki na kodomo* ‘a child who is healthy,’ ‘a healthy child’

Jorden (1987a:183)

(拙訳) 後続名詞の文修飾が「名詞+だ」で終るとき、「だ」は「の」という特別な形になる。

ただし、先行する名詞がナ名詞¹²²であるときは「な」という形をとる。

病気だ+学生>病気の学生

元気だ+学生>元気な学生

Jorden (1987a:183) は、‘*nihónzīn no señsée.*’という例を挙げ、「の」が「だ」である場合と、「の」が助詞である場合では意味が異なることを述べたが、これはBloch (1946b) の継承である。

‘*damé ni nâru*’ (Jorden1987a:245) のような場合の「に」を助詞として扱っているのも、Bloch (1946b) と同じである。Jordenも「に」を一貫して助詞とした。

Jordenは、「述語代用」という語は用いていないものの、「です」と「あります」の説明の中で、次のような例文を挙げている。

(7-3-19)

Kore wa pâi desu. ‘This is *pie*.’

Tomodati wa pâi desu. ‘My friend is [having] *pie*.’

Kyôo wa pâi desu. ‘Today is *pie*.’ (i.e., today’s dessert)

Jorden (1987a:93)

このようにBlochを忠実に継承してきたJordenであるが、Bloch (1946b) と見解が異なる点もある。Jordenは、「です」の前に「だ」を想定した。

(7-3-20)

*onâzi dà + distal dèsu > (*onâzi dà desu) > onâzi dèsu.*

Jorden (1987a:226)

(拙訳) 同じだ+です>(同じだです)>同じです

(7-3-21)

yasúmi da ‘[it] is or will be vacation’ > (**yasúmi da desyoo*) > *yasúmi desyoo* ‘[it]probably is or will be vacation’

Once again the unstable *dà* is lost.

Jorden (1987a:230)

(拙訳) 休みだ>(休みだでしょう)>休みでしょう ここでも不安定な「だ」は失われます。

Bloch (1946b) は、「だ」を普通体のコピュラ、「です」を丁寧体のコピュラとして扱ったので、「名詞+だ」と「名詞+です」は並列するものだった。Jordenは「だ」も「です」もコピュラと認めつつ、「名詞+「だ」のゼロ交替形+です」と考えている。とすると「同じです」は「同じ+Ø+です」となり、コピュラが二つあるということになる。奥津 (1964a) も「N+Ø+*desu*」と書いているが、奥津は「です」を助詞としている。この部分のみJordenとBlochに考

122 普通、日本語教育ではこれをナ形容詞というが、Jordenはこれをna-nominalと呼ぶ。これはBlochがこれを名詞に分類したことに起因する。

え方の違いがあり興味深いところである。

以上から、手懸りに従って、Jordenの研究をまとめておきたい。

- ①「だ」はコピュラ。「である」の「で」はコピュラ、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、表を明示してはいないが、Blochとほぼ同じだろうと考えられる。つまり、「で」、「な」、「の」を活用パラダイムに入れた。「に」は入れなかった。
- ③「の」を「だ」の交替形とした。
- ④助詞「か」だけでなく「よ」や「ね」などの前でも「だ」が脱落することを指摘し、一方「けど」や「そう」の前では残ることを丁寧に学習者に説明した。
- ⑤述語とは動詞表現、形容詞表現、名詞表現の3種類。
- ⑥「でも」の「で」をコピュラとし、'even so'という訳を当てている。だが、ここはBloch同様、「だ」そのものに前文を受ける機能があったとははっきりとは述べていない。
- ⑦「述語代用説」という語は使っていないが、「友達はパイです」という例を挙げた。
- ⑧「だ」の前には、名詞のほか、句助詞が来ることも学習者に向けて説明した。

第4節. 考察

以上の分析から、手懸りを一覽にしたものが次ページの表7-1である。表7-1を見ると、「だ」の機能が山田からJordenに至るまで、だんだんと順に明らかになってきているのがよくわかる。はじめは「で」さえも活用形として考えられていなかったことが、不思議な感じさえする。

「だ」には実に様々な姿がある。あるときには「で」、あるときには「な」や「の」になる。あるときには姿が見えない。「アノ人ハ病気サ」の「病気」と「サ」の間には何もないのではない。ゼロがあるのだ。そのことを明らかにしたのがBloch (1946b) である。Bloch (1946b) は「だ」のゼロ交替形を認めた。これは構造主義言語学理論の見事な適用であった。この適用によって「だ」の研究は飛躍的に進展する。「名詞+だ」が述語として一人立ちできたのも、この発見によるところが大きい。述語3本立てはJordenあるいは寺村 (1982) に確かに引き継がれ、日本語教育においては動詞、形容詞、「名詞+だ」の述語3本立てが定着した。

さて、Bloch (1946b) は「だ」の交替形「の」について、一つの大きな宿題を残した。「医者伯父」という問題である。

(7-4-1)

Since *no*, the alternant of the copula, is homonymous with the referent particle *no* 'of', some expressions are ambiguous. *Isya no, ozi* means 'my uncle, who is a doctor' if *no* is the copula, but 'the doctor's uncle' if *no* is the particle. Since the head of each expression is the noun *ozi* 'uncle', there is no way of distinguishing them except by meaning. To analyze a sequence A *no* B (where A and B are nouns), we apply the following semantic test: if the statement A *da* 'someone or something is A' provides a description of B, then *no* is the copula; if not, it is the particle.

Bloch (1946b:227)

(拙訳) コピュラの交替形の「の」は、関係助詞の「の」と同音異義なので、表現によっては多義的になるものがある。「医者伯父」という表現は、「の」がコピュラなら 'my uncle, who is a doctor' の意味になり、助詞なら 'the doctor's uncle' という意味になる。表現の核となるのは

表7-1：妖怪「だ」の変遷

	品詞		「だ」の活用 パラダイム	「の」 ＝ 「だ」	アノ人ハ病気サ	述語	前文代 理機能	述語 代用説	「だ」の前
			で	の	に	と			
山田 (1922)	「だ」	「である」	×	×	×	×	×	×	「だ」の前 名詞、「の」、形容動 詞語幹
松下 (1930)	説明存在詞	「で」助詞 「ある」説明存在詞	×	×	×	×	×	×	名詞、「の」、形容動 詞語幹
橋本 (1948a)	断定の助動詞	「で」断定の助動詞 「ある」動詞	×	×	×	×	×	×	名詞、形容動詞語幹
佐久間 (1943)	指定の助動詞	「で」助詞 「ある」動詞	×	×	×	×	×	×	名詞、形容動詞語幹
三尾 (1942)	措定詞	「で」措定詞 「ある」動詞	○	×	×	×	○	×	名詞、形容動詞語幹
時枝 (1950)	助動詞	助動詞	○	×	×	×	○	△	名詞句も来る
Bloch (1946b)	助動詞	「で」指定の助動詞 「ある」指定の助動詞	○	○	○	○	○	×	名詞のみ
Jorden (1987a, b)	指定の助動詞	「で」コピュラ 「ある」動詞	○	○	×	×	△	△	名詞、実詞表現 関係句など
	コピュラ	「で」コピュラ 「ある」動詞	○	○	×	×	△	○	名詞、実詞表現 関係句など

名詞「伯父」であるのだから、意味によってしか両者を区別できない。「AのB」(A、Bは名詞)という表現を分析するためには以下の意味的テストを行う。「Aだ」という陳述がBの説明であれば「の」はコピュラであり、そうでなければ助詞である。

このような説明は、日本語学習者にとって重要なものである。しかし、残念ながらその後の日本語教育において、Jorden (1987a) を除き、こうした問題が取り上げられてきたことはない。

それどころか助詞「の」を廃止しようとする動きさえあった。奥津 (1964b:246) は「格助詞の「の」は、全て「だ」の連体形と考え、格助詞から除くことを主張した。奥津 (1978) は、次のように述べている。

(7-4-2)

(4) [オーストラリア人デ 都立大学生ダ]クラーク君 →

[オーストラリア人デ 都立大学生ノ]クラーク君

並列構造ならば「ノ」は「ダ」の連体形だが、単純な

(5) 都立大学生ノクラーク君

の場合なら、「ノ」は「ダ」ではなく連体助詞だというのはおかしい。どちらにしても要するに「都立大学生デアルクラーク君」という意味であるし、この「ノ」もやはり「ダ」の連体形とした方がいい。ブロックが指摘した「医者ノ伯父」も同じことである。

奥津 (1978:142、下線は原文どおり)

これはBlochと何も同じではない。Blochが述べているのは次のような場合である。

(1) 殺人事件の犯人は、この病院に勤務している医者の伯父にあたる人物だそうだ。

(2) セカンドオピニオンを医者の伯父に聞いてみよう

(1)の「の」は「だ」ではない。(2)の「の」は「だ」である。「の＝だ」である場合と「の≠だ」である場合で意味が異なるというのがBloch (1946b) の指摘である。したがって助詞「の」を全廃したら、この2文の違いは説明はできなくなってしまうのである。

コピュラの「だ」の活用形と、助詞の境界線が実に曖昧であることはさきにも述べた。松下 (1930) は「で」を断定の動助辞とし、「東京で学問する」のような格助詞の「で」も、全て断定の動助辞「で」で説明できるとして、助詞の「で」を撤廃しようとした。奥津も助詞「の」は全て「だ」の連体の「の」で説明できるとして、助詞「の」を廃止しようとした。逆に、Bloch、Jordenは「病気になる」のような「に」を助詞とし、コピュラの「に」を認めなかった。こういうところが「だ」のおもしろいところである。

さて、Bloch、Jordenは、全ての「の」が「だ」の連体形とは考えていない。「の＝だ」である場合と「の≠だ」である場合の違いを日本語教科書の中で取り上げて、説明した。ただそうした丁寧な説明は、その後の日本語教科書には継承されていない。現在、実際に日本語を教える場面では、この「の」を助詞として教えるほうが一般的であろう。例えば次のようにである。

(7-4-3)

The particle の itself doesn't have any special meaning in this pattern, but it functions as a connector of two nouns. The meaning comes from a semantic relationship between the first noun and the second noun after they have been connected. Some examples are shown below. […]

5. The first noun indicates the relationship between the speaker and the second noun or explains something about the second noun.

- (例) 1. 先生の中村さん
2. 友だちの山田さん

名古屋大学日本語教育研究グループ編 (1988:67-68)

(拙訳) 助詞「の」はこのパターン (N1のN2) において特別な意味を持たず、二つの名詞を結びつけるものとして機能する。一つ目の名詞と二つ目の名詞が結合された結果、意味的關係が生じる。以下例を挙げよう。[中略]

5. 最初の名詞が、話者と二つ目の名詞の關係を示しているか、または二つ目の名詞について説明している。

「だ=の」である場合であっても、とりあえず助詞として教えておくほうが無難だからであろう。藤原 (2010) が述べているように、記述文法と教育文法と必ずしも一致しない。しかし、だからといって Bloch (1946b) の残した宿題を、私たち日本語を教える立場にある者が無視していいということにはならない。

以上、「だ」をめぐる研究史と日本語教育の現状を概観してきた。Bloch (1946b) がゼロ交替形を想定するまで、「だ」は文法諸家によって実に様々に解釈されてきた。そのことを念頭において、次のミラーの言葉を読むとき、Blochの業績の偉大さがよくわかる。やや長くなるが引用する。

(7-4-4)

ブロックによる現代日本語繫辞の完全なる系列の公式化は、実際問題として、彼の日本語記述の最も独創的部分の一つであり、卓越した考察にまさる功績でもある。大多数の日本の文法家にとって、繫辞は未だに助動詞という大グループの一つに過ぎず、助動詞自体、日本語の形態論的型式内におけるその変則的位置はもとより、統語論におけるその独自の役割をも全く曖昧にしている範疇である。それは更に、日本語文法では、一般に、指定助動詞 (deictic auxiliary verb) なる驚くべき用語のもとに扱われており、これは、文法用語は本来恣意的性格であるという原則を好意的に解釈しても、利点も論理も認め難い混成名称である。日本語文法手引書などに見られる普通の論法は、指定助動詞を、その形態が極めて複雑な系列を示していることに全くふれずに扱おうとしているが、これは、英語の 'to be' を 'am, is, are, was, were' などにふれずに「記述」しようとするに相当するはなれ業と言えよう。isya no oziのnoと sizuka na tokoro (静かなところ) のnaはいずれも繫辞の異形態とするブロックの考え方は、先ず屈折論文¹²³で示され、エール大学戦時言語課程から生まれて広く用いられた口語日本語入門書¹²⁴に

123 Bloch (1946a) のこと。

124 *Spoken Japanese* のこと。

も組み入れられた。同分析は、また、ブロックの門下生エレノア・ジョーデンの著わしたテキスト¹²⁵に取り入れられた。これらのテキストによって、それは多くの外国の日本語学徒には常識となっているが、彼らの大多数は言語学の素養もないし興味もなく、ただ便宜上学んだに過ぎない。にもかかわらず、*isya no ozi* ([my] uncle the doctor) の *no* を繫辞の異形態とする分析法は、日本の文法家には全く知られないままになっている。それも、或る時は、この原理は常に彼らの研究の表面下、手をのばせば直ぐにとどくようなところに潜んでいるというのに。故時枝誠記 (1900～67) は、おそらく現代文法家のだれにも劣らぬほどその点に近づいた学者と言える。これに関して、奥津敬一郎は、時枝が自力でその点に到達した、と主張しているが、事實はやや異なる。たしかに時枝は、*no* を繫辞の異形態と自発的に認め、それを繫辞異形態 *na* と同じレベルで分析に組み入れた点では (現在は学校文法でかなり確立されている)、現代日本の文法家の間ではユニークな存在であった。しかし彼は、*no* がはっきり *na* と平行する比較的限られて重要性の少ない (しかも明白な) 場合、たとえば *dame na toki* (駄目な時) と並んで *wazuka no o-rei* (僅かの御礼) などの場合にだけ言ったのであり、分析を広げて *isya no ozi* のような難問を包括するまでには至らなかった。時枝分析に関する奥津の主張は不当であるが、更に驚くべきは、彼が、ブロックをもって初めとする分析そのものを、門下生ジョーデンの業績に帰していることである。これは、ブロックの日本語研究の詳細が、ヨーロッパ諸語で著わされた言語学文献に関わりをもつ少数の日本の学者にさえ、ほとんど知られないままになっていることを示す一つの著しい例証である。問題の分析に関する伝統的な日本語文法家の総意は、おそらく、その分野の総帥金田一春彦の研究に見られる。彼は、繫辞形態の説明を、*uti ga hongoo no hito* (家ガ本郷ノ人) の *no* という秀例でしめくくっているが、この句について、それは相関助詞〔金田一では「格助詞」－訳者〕*no* が繫辞の代用をした場合であると述べている。

ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳 (1974b:147-148)

ミラーがこう述べた後、ほどなくして、奥津 (1978) の「述語代用説」が大々的に広まっていった。「だ」は述語の代用なのか、述語の省略なのか、その議論は現在でもまだ続いている¹²⁶。その一方、「だ」のそのほかの機能についてはほとんど取り上げられることはない。

例えば、「だ」の「前文代理的な役割」は、今や単に前文を受けて接続詞を作るだけではない。以下は、筆者と小学校4年生の娘の会話である。

A: ねえ、明日って給食ないんじゃないの。

B: なの?

A: じゃ、お弁当ってこと?

B: じゃない?

A: 明日、部活はあるんでしょ?

B: かも。

A: 試合、出れそうなの?

B: っぽいね。

125 Jorden (1963a:350) に '*no* and *na* are special alternants of *da* which occur only at the end of a sentence which describes a nominal.' (拙訳: 「の」と「な」は「だ」の交替形で、名詞を修飾する文の最後で生じる) という記述があり、'*gēnki na kodomo*', '*byōōki nā no*', '*byōōki no kodomo*' という好例を挙げている。

126 例えば野田 (2001) など。

A：よかったね。頑張らなきゃね。

B：だね。

「だ」は、たった一つの音でありながら、前の人が言ったこと全部を引き受けている。「だ」ばかりか「な」や「じゃ」、ゼロ交替形も前文を受けることができるようである。こんなに便利な語がほかにあるだろうか。もはや指示詞「そう」の領域を脅かしている。

妖怪「だ」は、まだまだ進化中だかもしれない。

第8章. 結語

言語学者Bernard Blochが、現代の日本語教育に果たした功績を様々な角度から考察してきた。最後に、各章で行った研究の結論と意義をまとめておきたい。

アメリカは戦時中、軍人教育のためにWar Department Education Manualという膨大な教育用教材を作成した。この教材の中には外国語教育教材も数多く存在した。その一つがBlochのSJであり、同様に*Spoken Spanish*や*Spoken Chinese*など非常によく似た構成を持つ教科書が存在することを確認した。これら外国語教育教材はBloomfieldをはじめとする構造主義言語学者が一丸となって作り上げたものであった。BlochのSJのほか、Bloomfieldの*Spoken Dutch*や*Spoken Russian*など、言語学者BlochやBloomfieldに、これまで知られていなかった教育上の業績があることを明らかにできたことは、第2章の研究における大きな意義である。

第3章では、SJ所収の練習問題を検討した。一般にASTP教授法という、模倣暗記練習が中心だと考えられている。しかし、BlochのSJに収録された練習問題は、単に模倣暗記練習ばかりではなく、なぞなぞやゲームなども取り入れた非常に面白い問題が並んでいた。SJ所収の練習問題は、現代の日本語教育に携わる者から見ても実に示唆に富んだものと言えよう。

第4章では、SJの付属レコードを検討した。Blochの日本語教育上の業績の一つにSJがあることは、日本語教育関係者にほとんど知られることなく今日に至っている。まして付属レコードの存在は、これまで全く日の目を見ることがなかった。そのレコードの存在を明らかにしたこと、またその過程で羽根幹三という日系人を掘り起こすことができたということが、第4章で行った研究の大きな意義である。

以上、第2章から第4章まではSJの研究を行った。これらの考察を踏まえ、日本語教育関係者は、BlochのSJと付属レコードの存在を認め、日本語教育の先駆的存在として、それをしるべき位置に据えた上で日本語教育史を記述する必要があると考える。Blochの業績の一つとして、SJと付属レコードは正当に評価され、研究がなされるべきである。

次に、第5章では、Bloch (1950) が記述した日本語音声表記をもとに、母音の前後の環境によって、母音が脱落したり無声化したりするように聞こえるという現象を検討した。第1章でも述べたが、日本語の全ての異音と音素を書き出したBlochの業績は十分に高く評価されるべきである。Bloch (1950) の音素と異音が、文化庁 (1971) で検討されたことは第2章第2節第4項で述べたが、これが現代日本語教育の音声学の基礎となってきたのである。

第6章では、日本語の規則変化動詞を母音動詞と子音動詞に分け、学習者に動詞の活用を効率的に教育する道筋をつけたのはBlochだということを検証した。Blochの周辺的研究としてYamagiwa (1942) やHenderson (1943) といった、山田や佐久間に精通した人物の存在を明らかにできたこと、またSuski (1942) のような全く無名の日系人を掘り起こすことができたことが、第6章の研究での意義である。

第7章では、コピュラの「だ」を検討した。「だ」は、あるときには「で」、あるときには「な」や「の」になる。あるときには姿が見えなくなる。それで文法諸家は「だ」に翻弄され続けてきた。そのような中、一気に「だ」の全貌を体系的に明らかにしたのがBloch (1946b) である。Bloch (1946b) は「だ」のゼロ交替形を認め、それによって「だ」の研究は飛躍的に進展した。この結果、「名詞+だ」は述語として一人立ちして、日本語教育において動詞、形容詞、「名詞

+だ」の述語3本立てが定着したのである。

以上、言語学者Bernard Blochの日本語教育への貢献について述べてきた。Bloch研究はまだ始まったばかりである。Blochの業績が今後、日本語教育という観点から研究され、正当に評価されることを望んでこの拙論を終える。

参考文献

- Aston, W. G. (1871) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* 2nd ed.. 李長波編 (2010) 『近代日本語教科書選集』 第9巻、クロスカルチャー出版.
- Baba, T. (1873) *An Elementary Grammar of The Japanese Language*. Reprinted in 2009 London and New York: Routledge.
- Bloch, B. (1942) Review of Conjugation of Japanese Verbs, by P. M. Suski. *Journal of the American Oriental Society* 62, pp.202-204.
- Bloch, B. (1946a) Studies in Colloquial Japanese: I .Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66, pp.97-109.
- Bloch, B. (1946b) Studies in Colloquial Japanese: II .Syntax. *Language* 22, pp.200-248.
- Bloch, B. (1946c) Studies in Colloquial Japanese: III .Derivation of inflected words. *Journal of the American Oriental Society* 66, pp.304-315.
- Bloch, B. (1949) Obituary Notice: Leonard Bloomfield. *Language* 25, pp.87-98.
- Bloch, B. (1950) Studies in colloquial Japanese IV. *Language* 26, pp.86-125.
- 【Bloch (1946a, 1946b, 1946c, 1950) は、日本語訳がロイ・A・ミラー著 林栄一監訳 (1975) 『ブロック日本語論考』 に収録されている。】
- Bloch, B. & Jorden, E. H. with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others (1945a) *Spoken Japanese Basic Course Units1-12* (War Department Education Manual EM 561), published for the United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others (1945b) *Spoken Japanese Basic Course Units13-30* (War Department Education Manual EM 562), published for the United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies.
- 【(1945a) と (1945b) が Armed Forces Edition版】
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1945c) *Spoken Japanese Book One*. New York: H. Holt.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono and others (1945d) *Guide's Manual for Spoken Japanese: Basic Course Units1-30* (War Department Education Manual EM 563). The United States Armed Forces Institute.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1946) *Spoken Japanese Book Two*. New York: H. Holt.
- 【(1945c) と (1946) が Public Edition版】
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1972) *Spoken Japanese Book One*. Ithaca, N. Y. : Spoken Language Services, Reprinted in Bloch, B. & Jorden, E. H. (1945c) *Spoken Japanese Book One*. New York: H. Holt.
- Bloomfield, L. (1942) *Outline Guide for the Practical Study of Languages*. Baltimore: Linguistic Society of America.
- Bloomfield, L. (1944) *Spoken Dutch Basic Course Units1-12* (War Department Education Manual EM 529), The United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies.

- Bloomfield, L. (1945) *Spoken Dutch Basic Course Units 13-30* (War Department Education Manual EM 530), The United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies.
(国立民族学博物館所蔵)
- Chamberlain, B. H. (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*. London and Tokyo: Trubner.
- Chamberlain, B. H. (1889) *A Handbook of Colloquial Japanese*. Second Edition, In Kaiser, S. (ed.) (1994) *The Rediscovery of The Japanese Language Vol. 8*. Richmond: Curzon Press.
- Darian, S. G. (1972) *English as a Foreign Language*. Oklahoma, OK: University of Oklahoma Press.
- Hane, M. (1986) *Modern Japan: A Historical Survey*. Boulder: Westview Press.
- Hane, M. (1996) *Eastern Phoenix: Japan Since 1945*. Boulder: Westview Press.
- Henderson, H. G. (1943) *Handbook of Japanese Grammar*. Cambridge, Mass.: The Riverside Press.
- Howatt, A. P. R. (1984) *A History of English Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Imbrie, W. (1889) *Handbook of English-Japanese Etymology*, 2nd ed., 李長波編 (2010) 『近代日本語教科書選集』第11巻、クロスカルチャー出版.
- Joos, M. (1971) *Readings in Linguistics I The Development of Descriptive Linguistics in America 1925-56*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Jorden, E. H. with Chaplin, Hamako Ito (1963a) *Beginning Japanese Part 1*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jorden, E. H. with Chaplin, Hamako Ito (1963b) *Beginning Japanese Part 2*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jorden, E. H. with Noda, Mari (1987a) *Japanese: The Spoken Language Part 1*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jorden, E. H. with Noda, Mari (1987b) *Japanese: The Spoken Language Part 2*. New Haven and London: Yale University Press.
- Maruyama, M., translated by Hane, M. (1974) *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Miller, R. A. (1970) *Bernard Bloch on Japanese*. New Haven and London: Yale University Press.
【この日本語訳が、ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳 (1974a、1974b) である。】
- Naganuma, N. (1958a) *Naganuma's Basic Japanese Course*. Tokyo: Kaitakusha Pub. Co..
- Naganuma, N. (1958b) *Grammar and Glossary Accompanying Naganuma's Basic Japanese Course*. Tokyo: Chofusha.
- Parrott, T. M. (1938) *Shakespeare Twenty-three Plays and the Sonnets* (War Department Education Manual EM 130), The United States Armed Forces Institute.
- Sansom, G. B. (1928) *Historical Grammar of Japanese*. Oxford: The Clarendon Press.
- Shibatani, M. (1990) *The Languages of Japan*. New York and Sydney: Cambridge University Press.
- Stern, H. H. (1983) *Fundamental Concepts of Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Suski, P. M. (1942) *Conjugation of Japanese Verbs*. South Pasadena: P. D. and Ione Perkins.
- Suski, P. M. (2002) *Japanese Verbs Super Review*. New Jersey: Research & Education Association, Reprinted Edition of Suski (1942).

Unknown (1945) *Spoken Japanese: A Manual and Key for Your Spoken Language Course*. New York: H. Holt.

Yamagiwa, J. K. (1942) *Modern Conversational Japanese*. New York and London: Mc Graw-Hill Book Company.

(Spoken Language Series)

Bloomfield, L. (1944-1945) *Spoken Dutch Book One*. New York: H. Holt.

Bloomfield, L. and Petrova, L. (1945) *Spoken Russian Book Two*. New York: H. Holt.

Cioffari, V. (1946) *Spoken Italian Book One*. New York: H. Holt.

Cornyn, W. S. (1945) *Spoken Burmese Book One*. New York: H. Holt.

Dearden, J. & Karin Stig-Nielsen (1945) *Spoken Danish Book One*. New York: H. Holt.

Dyen, I. (1945) *Spoken Malay Book One*. New York: H. Holt.

Haas, M. R. & Heng R. Subhanka (1945) *Spoken Thai Book One*. Silver Spring, Md.: H. Holt.

Haugen, E. (1947) *Spoken Norwegian Book One*. New York: H. Holt.

Hockett, C. F. & Chao Ying Fang (1944) *Spoken Chinese Book One*. New York: H. Holt.

Hockett, C. F. & Chao Ying Fang (1944) *Spoken Chinese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 506), The United States Armed Forces Institute.

Hoenigswald, H. (1945) *Spoken Hindustani Book One*. New York: H. Holt.

Kahane, H. & R. L. Ward (1946) *Spoken Greek Book Two*. New York: H. Holt.

Lesnin, M and Luba Petrova (1945) *Spoken Russian Book One*. New York: H. Holt.

Lukoff, F. (1945) *Spoken Korean Book One*. New York: H. Holt.

Mcquown, N. A. & Sadi Koylan (1944) *Spoken Turkish Book One*. New York: H. Holt.

Reno, M. F. & Vincenzo Cioffari (1944) *Spoken Portuguese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 512), The United States Armed Forces Institute.

Reno, M. F. & Vincenzo Cioffari (1946) *Spoken Portuguese Book One*. New York: H. Holt.

Sebeok, T. A. (1945) *Spoken Hungarian Book One*. New York: H. Holt.

Trevino, S. N. (1944) *Spoken Spanish Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 509), The United States Armed Forces Institute.

Trevino, S. N. (1945) *Spoken Spanish Book One*. New York: H. Holt.

(以上Spoken Language Series)

浅野鶴子 (1972) 「入門期の教授法—文型をいかに積み上げるか—」『日本語教育指導参考書3 日本語教授法の諸問題』文化庁、pp.61-134。

荒井正道 (1973) 「語学のレコード・テープ スペイン語編」『言語生活』No.261 6月号、筑摩書房、pp.57-62。

有田佳代子 (2009) 「パーマーのオーラル・メソッド受容についての一考察—「実用」の語学教育をめぐって—」『一橋大学留学生センター紀要』第12号、pp.27-39。

池田葉採子 (2012) 「Bernard Blochの活用論」金城学院大学大学院文学研究科国文学専攻提出

修士論文

- 池田葉採子 (2013) 「B.Blochの活用論の成立—影響を与えた先駆者たち—」『金城学院大学論集』人文科学編 第9巻第2号、金城学院大学、pp.170-201。
- 池田葉採子 (2014a) 「Bernard Blochが聞いた日本語—母音の無声化と脱落に焦点をあてて—」『金城学院大学論集』人文科学編 第10巻第2号、金城学院大学、pp.143-152。
- 池田葉採子 (2014b) 「Bernard Blochの*Spoken Japanese*に関する研究—その成立の時代背景—」『金城学院大学論集』人文科学編 第11巻第1号、金城学院大学、pp.154-192。
- 池田葉採子 (2016) 「バーナード・ブロックの*Spoken Japanese*付属レコードに関する研究」『日本研究』第52集、国際日本文化研究センター、pp.101-135。
- 石田敏子 (1988) 『[改訂新版]日本語教授法』大修館書店。
- NHK放送文化研究所編 (1998) 『NHK日本語発音アクセント辞典』新版、日本放送出版協会。
- 太田朗 (1956) 「常識と学問」『英語学と英語教育をめぐって』ELEC出版部。
- 奥津敬一郎 (1964a) 「「ダ」で終る文のノミナリゼーション—展成文法への試み—」『国語学』第56集、国語学会、pp. 74-86。
- 奥津敬一郎 (1964b) 「「の」のいろいろ」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院、pp.238-253。
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版。
- 金沢朱美 (2008) 「馬場辰猪 “An Elementary Grammar of the Japanese Language” —動詞分類の特徴ならびに出現背景についての考察を中心に—」『日中学術雑誌』第2巻1号、日中学術交流振興学会、pp.64-77。
- 川上夔 (1977) 『日本語音声概説』桜楓社。
- 河路由佳 (2011) 「展示資料概説」『戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育—長沼直兄の仕事を中心に—』東京外国語大学附属図書館第12回特別展示。
(http://www.tufs.ac.jp/blog/is/g/news/tenji_booklet_23.pdfより2015年11月、ダウンロード)。
- 金田一春彦 (1955) 「日本語 Ⅲ. 文法」『世界言語概説 下巻』研究社辞書部、pp.160-199。
- 倉田喜弘 (1979) 『日本レコード文化史』東京書籍。
- 言語文化研究所 (1998a) 『ハナシコトバ』(上)(日本語教育資料叢書 復刻シリーズ第二回) 言語文化研究所。
- 言語文化研究所 (1998b) 『ハナシコトバ』(下)(日本語教育資料叢書 復刻シリーズ第二回) 言語文化研究所。
- 言語文化研究所 (1998c) 『日本語教科用ハナシコトバ学習指導書』(下)(日本語教育資料叢書 復刻シリーズ第二回) 言語文化研究所。
- 小出詞子 (1972) 「日本語教育について」『日本語教育指導参考書3 日本語教授法の諸問題』文化庁、pp.219-274。
- 国語学会国語学辞典編集委員会編 (1956) 『国語学辞典』東京堂。
- コロムビア50年史編集委員会編 (1961) 『コロムビア50年史』日本コロムビア。
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』厚生閣。
- 佐久間鼎 (1943) 『日本語の言語理論的研究』三省堂。
- 佐久間鼎 (1956) 『現代日本語法の研究』厚生閣。

- 佐久間鼎（1963）『日本音声学』風間書房。
- 桜井隆（1992）「日本語教育レコード略史 並びに日本語教育学会・国立国語研究所所蔵日本語教育レコード目録」『東京大学留学生センター紀要』第2号、東京大学、pp.37-71。
- 佐藤喜代治（1966）「日本文法の研究法」『国語学』第66集、pp.1-12。
- 佐野泰彦（1973）「語学のレコード・テープ ポルトガル語編」『言語生活』No. 264 9月号、筑摩書房、pp.97-101。
- 鈴木忍（1972）「文型・文法事項の指導」『日本語教育指導参考書3 日本語教授法の諸問題』文化庁、pp.135-218。
- 関正昭（1997）『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク。
- 関正昭・平高史也編（1997）『日本語教育史』アルク。
- 高梨健吉・安倍勇・金口儀明（1963）『不死鳥英文法ライブラリ第3巻H・E・パーマー J・H・グラタン、P・ガレー』南雲堂。
- 高見澤孟（2005）「E. H. ジョーデン女史の日本語教育への貢献」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第32号、昭和女子大学、pp.1-13。
- 高見澤孟（2006）「日本語教育史（7）米国国内における日本語教育」『学苑・人間文化学科特集』No.785、昭和女子大学、pp.77-87。
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』第Ⅰ巻、くろしお出版。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻、くろしお出版。
- 東海大学留学生教育センター編（2005）『日本語教育法概論』東海大学出版会。
- 時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店。
- 名古屋大学日本語教育研究グループ編（1988）『現代日本語コース中級Ⅰ』名古屋大学出版会。
- 日本語教育学会（2003）『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』凡人社。
- 野田尚史（2001）「うなぎ文という幻想—省略と「だ」の新しい研究を目指して」『国文学 解釈と教材の研究』46号、学灯社、pp.51-57。
- 野村二郎（1973）「語学のレコード・テープ フランス語編」『言語生活』No.258 3月号、筑摩書房、pp.80-83。
- ハーバード・パッシン著、加瀬英明訳（1981）『米陸軍日本語学校 日本との出会い』ティビーエス・ブリタニカ。
- 橋本進吉（1948a）『新文典別記口語篇』富山房。
- 橋本進吉（1948b）『國語法研究』橋本進吉博士著作集第二冊、岩波書店。
- 長谷川恒雄（1991）「戦前日本国内の日本語教育」『講座日本語と日本語教育15 日本語教育の歴史』明治書院、pp.38-76。
- 服部四郎（1960）『言語学の方法』岩波書店。
- 藤原雅憲（2010）「記述文法と教育文法の間—「の」と格闘したBlochに倣いて—」『平成22年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集』日本語教育学会、pp.53-56。
- 文化庁（1971）『日本語教育指導参考書：音声と音声教育』財務相印刷局。
- 前川喜久雄（1998）「母音の無声化」『日本語の音声・音韻（上）』明治書院、pp.135-153。
- 松崎寛・河野俊之（2010）『日本語教育能力検定試験に合格するための音声23』、アルク。
- 松下大三郎（1906）『漢譯口語階梯』誠之堂書房。（李長波編（2010）『近代日本語教科書選集』

- 第7巻、クロスカルチャー出版)。
- 松下大三郎 (1961) 『標準日本口語法』 白帝社。(松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』 の復刻版)。
- 松本信廣 (1933) 「Japan, A Short Cultural History, by G. B. Sansom, London, 1931」
『史学』 Vol.11、No.4、三田史学会、pp.180-181。
- 松宮彌平 (1936) 『日本語教授法』 日語文化学校。
- 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法 言葉遺篇』 帝国教育會出版部。
- 三尾砂 (1948) 『國語法文章論』 三省堂出版。
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版。
- 三上章 (1972) 『続・現代語法序説』 くろしお出版。
- 水谷修 (1973) 「語学のレコード・テープ 日本語編」『言語生活』 No.256 1月号、筑摩書房、pp.68-73。
- 森清 (1991) 「戦前在日米国大使館の日本語教育」『講座日本語と日本語教育15 日本語教育の歴史』 明治書院、pp.77-85。
- 山下秀雄 (1995) 「現代日本語教育の源流をたずねて (i) —教科書・教授法の関係、音声言語・談話構造への着目など」『日本語教育研究』 第30巻、言語文化研究所、pp.87-118。
- 山下秀雄 (1998) 「現代日本語教育の源流をたずねて[続編] (iii) —日本語教育振興会と『ハナシコトバ』の時代的背景」『日本語教育研究』 第36巻、言語文化研究所、pp.1-39。
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館。
- 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』 關西專賣。
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館。
- ロイ・A・ミラー著、林栄一監訳 (1975) 『ブロック日本語論考』 研究社。
- ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳 (1974a) 「バーナード・ブロックと日本語研究 (上)」『言語』 第22号、大修館書店、pp.52-65。
- ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳 (1974b) 「バーナード・ブロックと日本語研究 (下)」『言語』 第23号、大修館書店、pp.146-155。

Web Site

- Knox College Website : http://department.knox.edu/news_events/2003/x6196.html (2015年4月20日アクセス)
- Yale大学HP : <http://ling.yale.edu/history/leonard-bloomfield> (2016年10月15日アクセス)
- 南カリフォルニア大学図書館のHP :
<http://www.usc.edu/libraries/archives/arc/libraries/eastasian/china/SuskiCollection.html> (2011年11月22日アクセス)
- Hendersonの略歴 : http://en.wikipedia.org/wiki/Harold_Gould_Henderson (2016年10月15日アクセス)
- Haiku Society of AmericaのHP : <http://www.hsa-haiku.org/> (2016年10月15日アクセス)

音声資料

Bloch, B. & Jorden, E. H. (1972) *Spoken Japanese Book One*. New York: Spoken Language Servicesの付属カセットテープ (国際日本文化研究センター所蔵)。

Jorden, E. H. (1963) *Beginning Japanese Part I*. New Haven and London: Yale University Press.の付属カセットテープ

日本語教育学会 (2003) 『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』 凡人社。

テープ1 (1) コロムビア33000 神保格《発音とアクセント》

A 〈日本語のアクセントと言葉調子 (上)〉

(6) コロムビア33350 国際日本語協会編《レコードによる日本語の学習

JAPANESE LANGUAGE STUDY COURSE》

A 〈日本語の発音 (一) Pronunciation Exercise i . The Japanese Vowels〉

B 〈日本語の発音 (二) Pronunciation Key Words ii . The Japanese Syllabary〉

テープ2 (24) コロムビア33646 文部省内日本語教育振興会監修

《ハナシコトバ》

A 〈ハナシコトバ (下一)〉

B 〈ハナシコトバ (下二)〉

テープ3 (25) コロムビア33647 文部省内日本語教育振興会監修

《ハナシコトバ》

A 〈ハナシコトバ (下三)〉

B 〈ハナシコトバ (下四)〉

名古屋大学日本語教育研究グループ編 (2002) *A Course in Modern Japanese [Revised Edition] Volume One*. 名古屋大学出版会の付属CD。

付記

音声資料は、レコードタイトルを《 》、A・B面のタイトルを〈 〉で示した。ただし具体的なタイトルがない、または不明のものについては、単に付属カセットテープ・CDと記した。